

令和4年度
文部科学省委託調査

**令和4年度
WWLコンソーシアム構築支援事業
におけるEBPMに向けたデータ収集・
分析、効果検証等のための調査研究**

調査報告書

令和5年3月

株式会社 リベルタス・コンサルティング

目次

第1章 調査概要	1
1-1 調査目的	1
1-2 調査内容	2
第2章 カリキュラム開発拠点校・拠点校へのアンケート調査	3
2-1 調査概要	3
2-2 回答校の属性	4
2-3 AL ネットワークの形成・実施体制	5
2-4 カリキュラムの研究開発・実践	8
2-5 WWL コンソーシアム構築支援事業の成果	27
2-6 管理機関の活動	33
2-7 まとめ	36
第3章 カリキュラム開発拠点校生徒へのアンケート調査	37
3-1 調査概要	37
3-2 WWL 事業について	38
3-3 日本に関する考え	47
3-4 学校生活について	49
3-5 高校卒業後の進路について	55
3-6 WWL 事業参加生徒の成長の状況	60
3-7 生徒の2年間の成長の状況	72
3-8 熱心度の変化とその要因	83
3-9 各能力と学校成績との関係	91
3-10 まとめ	92
第4章 カリキュラム開発拠点校教員へのアンケート調査	94
4-1 調査概要	94
4-2 WWL 事業への関わり	98
4-3 SGH（スーパーグローバルハイスクール）指定校での勤務	106
4-4 SGH 事業と比較した際の WWL 事業の違い	107
4-5 まとめ	108

第5章 卒業生へのアンケート調査	109
5-1 調査概要.....	109
5-2 高校時代の生活.....	110
5-3 高校時代のSGH事業やWWL事業の経験.....	114
5-4 高校卒業時の考えや行動について.....	116
5-5 高校卒業後から現在までについて.....	121
5-6 現在の生活とWWL事業.....	129
5-7 現在の自身の考えや行動について.....	132
5-8 高校時代に身に付けた力と大学生活の関係.....	135
5-9 まとめ.....	142
第6章 カリキュラム開発拠点校ヒアリング	144
6-1 事例紹介.....	144
6-2 カリキュラム開発・実施のポイント.....	169
第7章 まとめ	181
7-1 WWLコンソーシアム構築支援事業の各取組の実施状況.....	181
7-2 WWLコンソーシアム構築支援事業を通じた生徒の成長度.....	181
7-3 生徒の成長を促す要因.....	182
7-4 課題等.....	183

第1章 調査概要

本調査研究は、文部科学省からの委託を受けて実施したものである。調査概要は、以下のとおり。

1-1 調査目的

社会の大きな変革として Society 5.0 が訪れようとする中、我が国の新たな社会を牽引する人材の育成が求められており、平成 30 年 6 月に文部科学省「Society 5.0 に向けた人材育成に係る大臣懇談会」においてまとめられた「Society 5.0 に向けた人材育成～社会が変わる、学びが変わる～」の中で、新たな時代に向けた学びの変革、取り組むべき施策 (Society 5.0 に向けたリーディング・プロジェクト) の一つとして、文理両方を学ぶ高大接続改革に基づく、WWL (ワールド・ワイド・ラーニング) コンソーシアム (以下「WWL コンソーシアム」という。) の創設が提案された。

WWL コンソーシアムは、高度かつ多様な科目内容を、生徒個人の興味・関心・特性に応じて履修可能とする高校生の学習プログラムの開発と実践を担うものとして想定されており、将来的に、高校生 6 万人あたり 1 か所を目安に、各都道府県で国立、公立及び私立の高等学校等を拠点校として整備し、全ての高校生が選抜を経てオンライン・オフラインで参加することを可能とする仕組みを持つことが目指されている。

WWL コンソーシアム構築支援事業 (以下「WWL 事業」という。) では、Society 5.0 において共通して求められる力 (①文章や情報を正確に読み解き対話する力、②科学的に思考・吟味し活用する力、③価値を見つけ生み出す感性と力、好奇心・探究力等) を基盤として、将来、新たな社会を牽引し、世界で活躍出来るビジョンや資質・能力を有したイノベータイブなグローバル人材を育成するため、高等学校等と国内外の大学、企業、国際機関等が協働し、テーマを通じた高校生国際会議の開催等、高校生へ高度な学びを提供する仕組み「アドバンスト・ラーニング・ネットワーク」(以下「AL ネットワーク」という。) を形成した拠点校を全国に配置することで、将来的に、WWL コンソーシアムへと繋げることを目的としている。

本調査研究においては、WWL 事業の各事業拠点校の管理機関内に設置された AL ネットワーク運営組織における政策効果検証 (測定) と評価、その成果の普及を行うとともに、併せて、成果効果の測定に重要な関連を持つ情報や統計等を活用した EBPM を推進し、政策

の有効性を高め、国民の行政への信頼確保に資する機能を果たすことを目指す。

1-2 調査内容

WWL 事業のカリキュラム開発拠点校及び管理機関にご協力頂き、下記の調査を実施した。

調査名		対象
拠点校アンケート		令和元年度指定拠点校 7 校
		カリキュラム開発拠点校 23 校
生徒アンケート	WWL 事業参加生徒	拠点校において WWL 事業に参加している全生徒 約 18,000 名
	WWL 事業非参加生徒	拠点校で WWL 事業に参加していない生徒 6 校
教員アンケート		拠点校 30 校の教員全員
卒業生アンケート		WWL 事業・SGH 事業の卒業生を輩出している 拠点校のうち 19 校
拠点校ヒアリング		拠点校のうち令和 2 年度指定校 12 校

第2章 カリキュラム開発拠点校・拠点校へのアンケート調査

2-1 調査概要

全カリキュラム開発拠点校・拠点校へアンケートを実施し、各取組みの達成状況のデータ収集及び効果を明らかにした。

2-1-1 調査対象

拠点校 30 校（令和元年度 10 校、令和 2 年度 12 校、令和 3 年度 6 校、令和 4 年度 2 校）。

2-1-2 調査方法

e メールによる調査票の発送及び回答票回収

2-1-3 調査時期

令和 4 年 12 月 19 日～令和 5 年 1 月 30 日

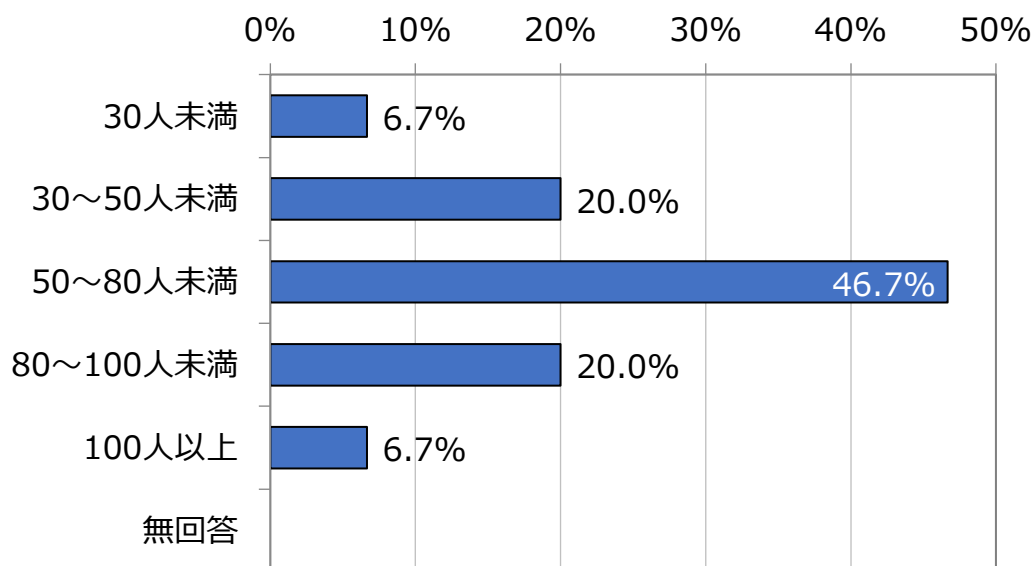
2-1-4 回収状況

30 件（回収率 100%）

2-2 回答校の属性

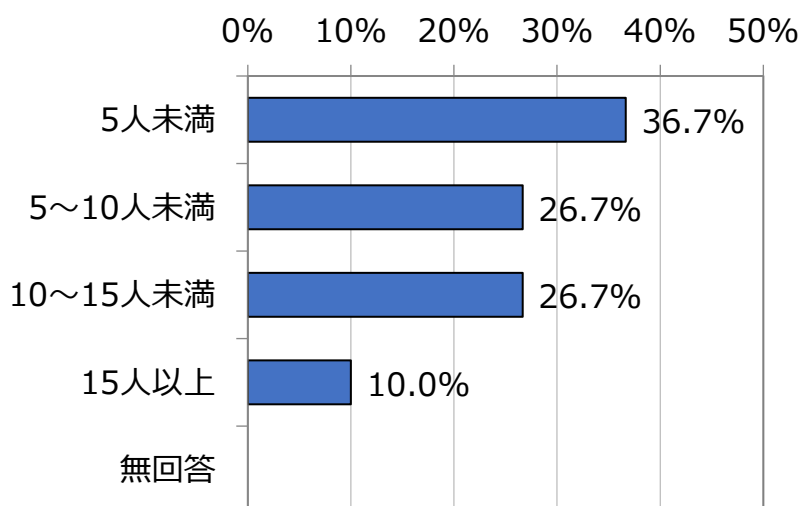
2-2-1 全教員数

図表 2-1 全教員数 (n=30)



2-2-2 WWL 事業の主担当となっている教員数

図表 2-2 WWL 事業の主担当となっている教員数 (n=30)

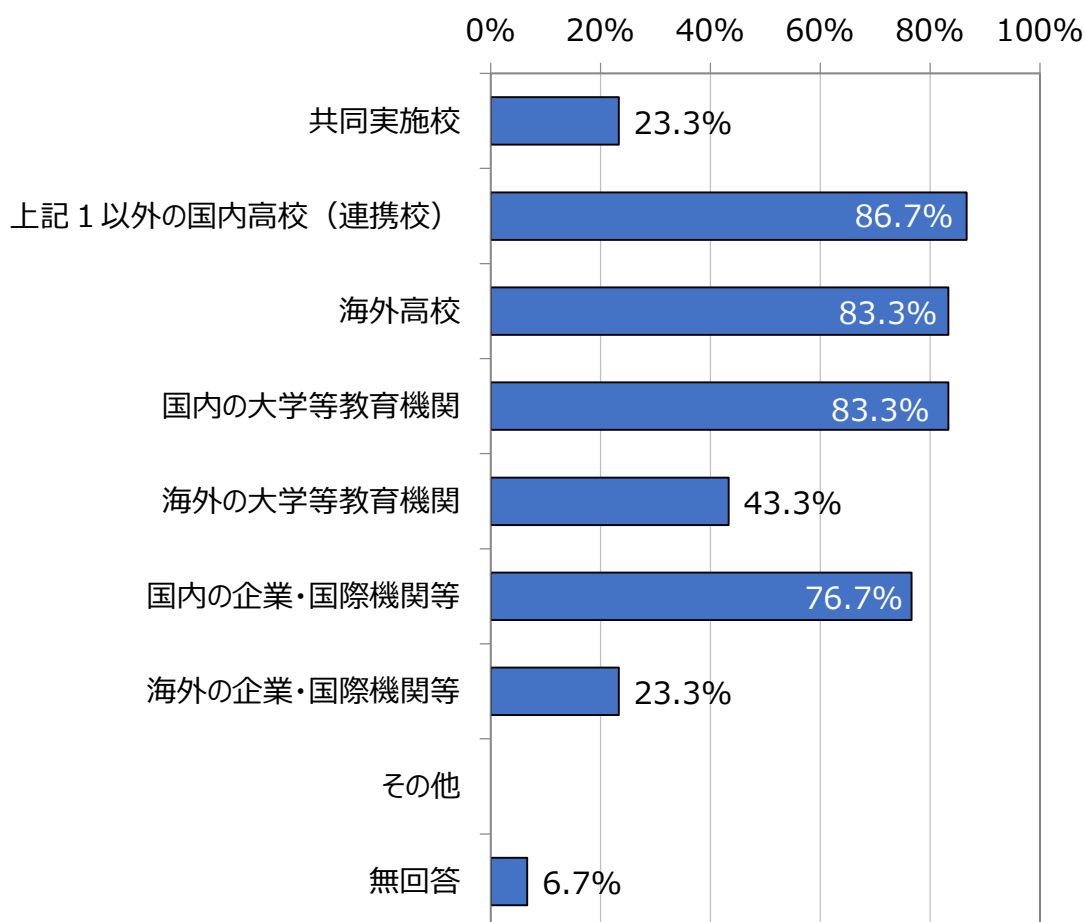


2-3 AL ネットワークの形成・実施体制

2-3-1 AL ネットワークに参加している機関

- AL ネットワークの参加機関は、「共同実施校以外の国内高校（連携校）」「国内の大学等教育機関」の割合が高い。
- 30 ネットワークの総計で「共同実施校」は 14、「共同実施校以外の国内高校（連携校）」が 255、「国内の企業・国際機関等」が 158、「海外高校」が 116、「国内の大学等高等教育機関」が 83、参加している。

図表 2-3 AL ネットワークに参加している機関（複数回答）（n=30）



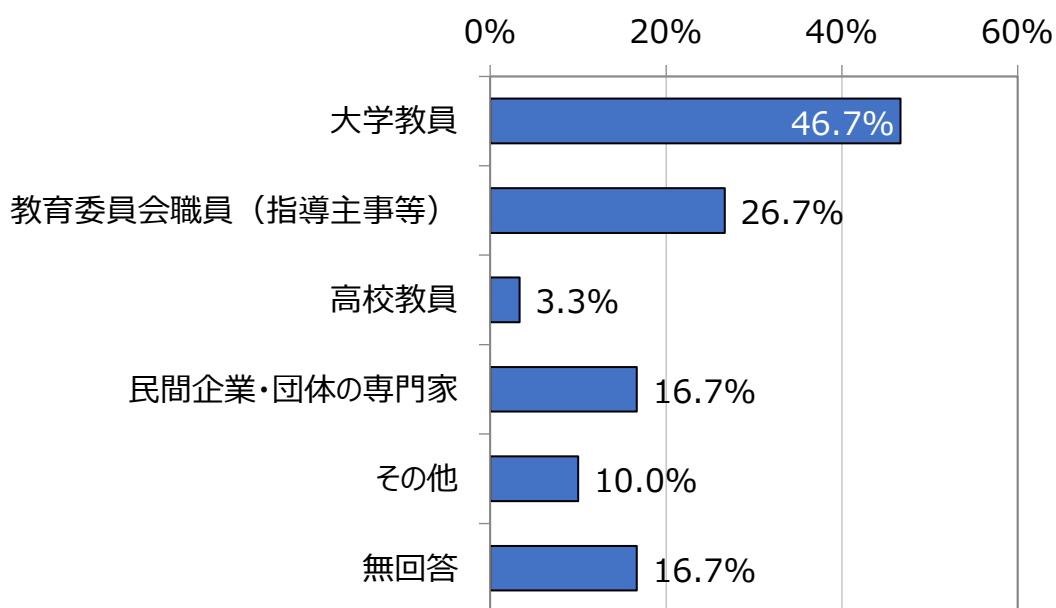
図表 2-4 参加している機関数（30 ネットワークの合計）

機関数	共同実施校	国内高校 (連携校)	海外高校	国内の大学等 高等教育機関	海外の大学等 高等教育機関	国内の企業・ 国際機関等	海外の企業・ 国際機関等	その他
合計	14	255	116	83	28	158	14	0

2-3-2 AL ネットワークのカリキュラムアドバイザー

- カリキュラムアドバイザーの属性は、「大学教員」が 46.7%と最も割合が高く、次が「教育委員会職員（指導主事等）」で 26.7%。
- 人数ベースは、「大学教員」が最も多く、30 ネットワークの総計で 31 人、次いで「教育委員会職員（指導主事等）」で 13 人、「民間企業・団体の専門家」が 7 人。

図表 2-5 AL ネットワークのカリキュラムアドバイザー（複数回答）（n=30）



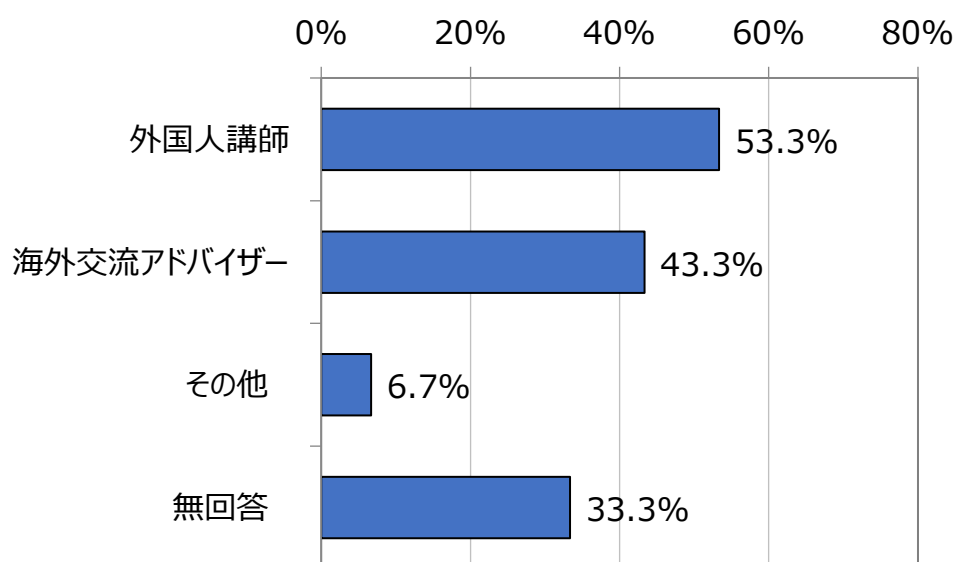
図表 2-6 カリキュラムアドバイザーの人数（30 ネットワークの合計）

カリキュラムアドバイザー	大学教員	教育委員会職員（指導主事等）	高校教員	民間企業・団体の専門家	その他
合計	31	13	2	7	3

2-3-3 WWL 事業に関わる外国人講師及び海外交流アドバイザー

- WWL 事業に関わる割合は「外国人講師」が 53.3%、「海外交流アドバイザー」が 43.3%である。
- 総人数は「外国人講師」が多く 52 人、「海外交流アドバイザー」は 17 人。

図表 2-7 WWL 事業に関わる外国人講師及び海外交流アドバイザー
(複数回答) (n=30)



図表 2-8 外国人講師及び海外交流アドバイザーの人数 (30 ネットワークの合計)

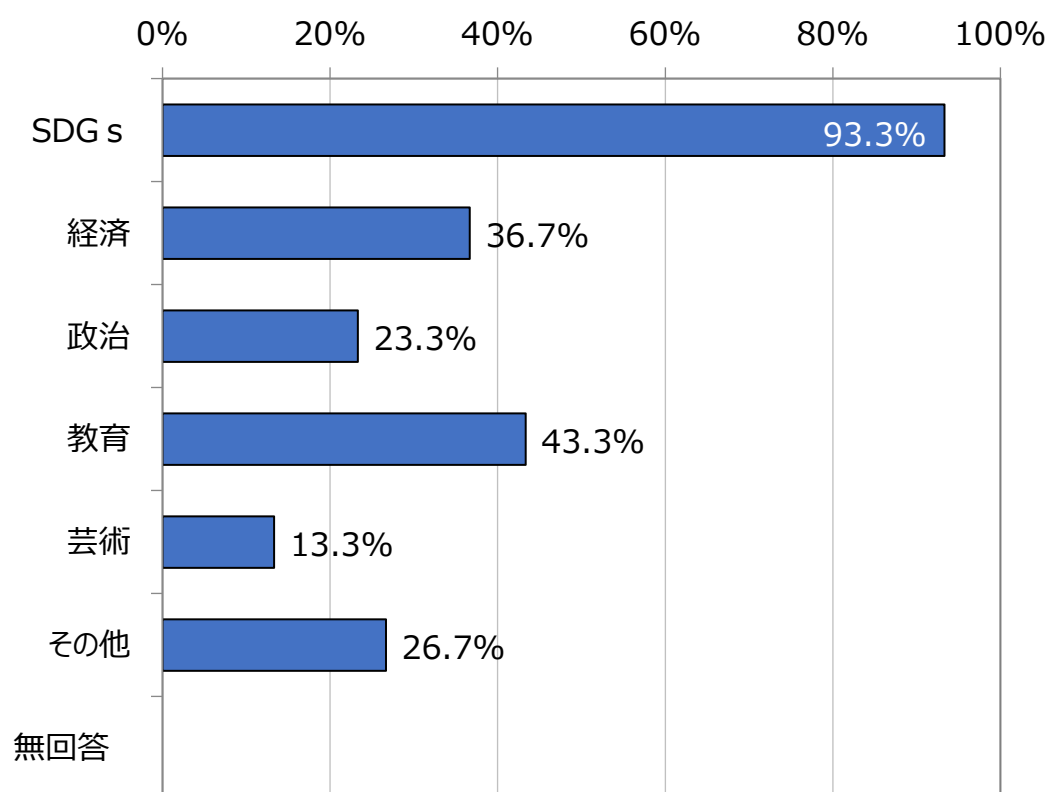
外国人講師等	外国人講師	海外交流アドバイザー	その他
合計	52	17	3

2-4 カリキュラムの研究開発・実践

2-4-1 カリキュラム開発において設定していたテーマの分野

- カリキュラム開発で設定したテーマで最も割合が高いものは「SDGs」で、93.3%の拠点校がテーマとして設定していた。

図表 2-9 カリキュラム開発において設定していたテーマの分野（複数回答）（n=30）

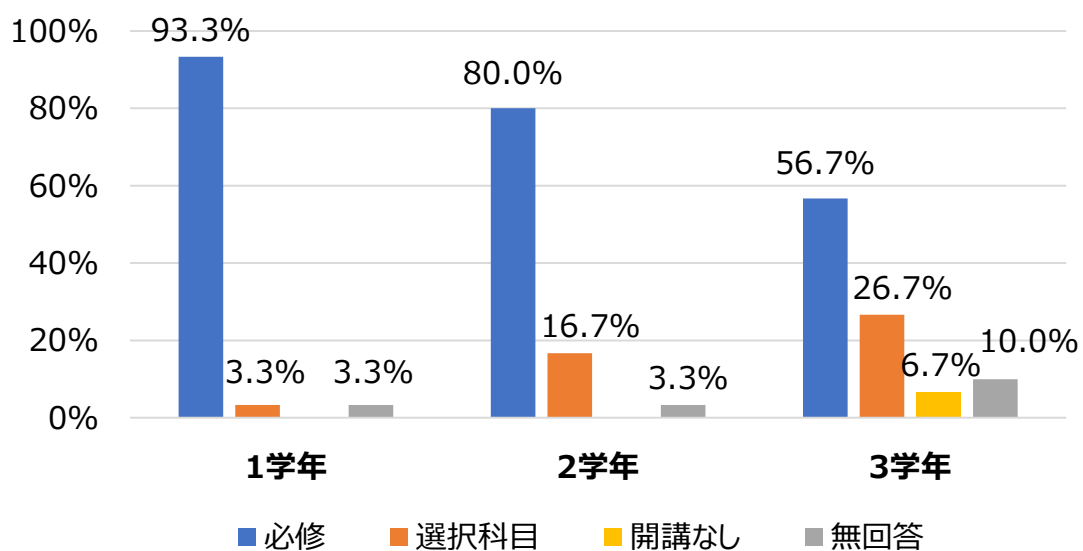


2-4-2 探究型学習

(1)各学年の科目の種別

- 探究型学習の実施方法についてみていく。
- 1学年では「必修」の割合が高いが、学年が上がるにつれて割合は下がり、「選択科目」の割合が増加する。

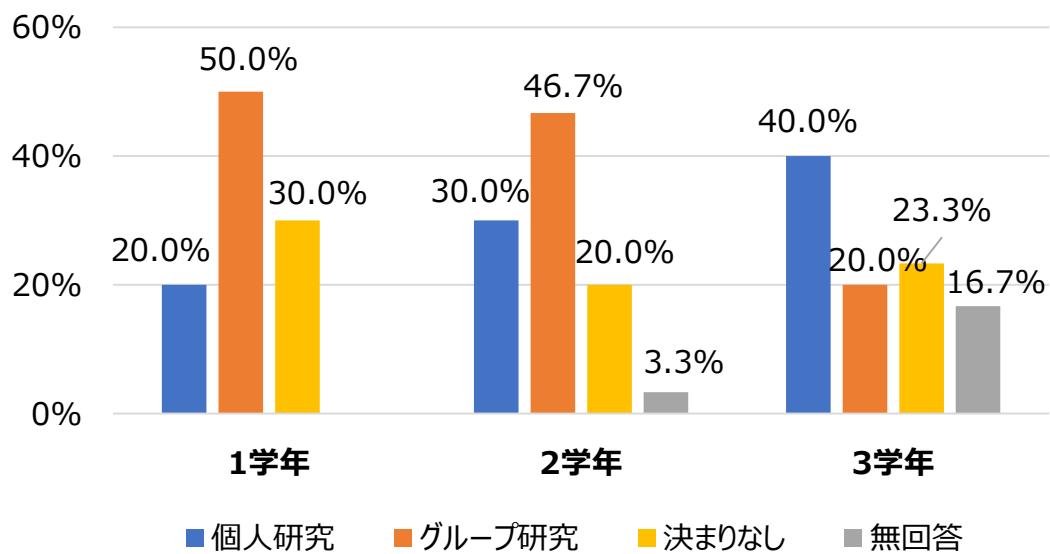
図表 2-10 探究型学習の各学年の科目の種別 (n=30)



(2)各学年の主な活動の単位

- 1、2 学年では「グループ研究」の割合が高いが、3 学年では「個人研究」の割合が高くなる。

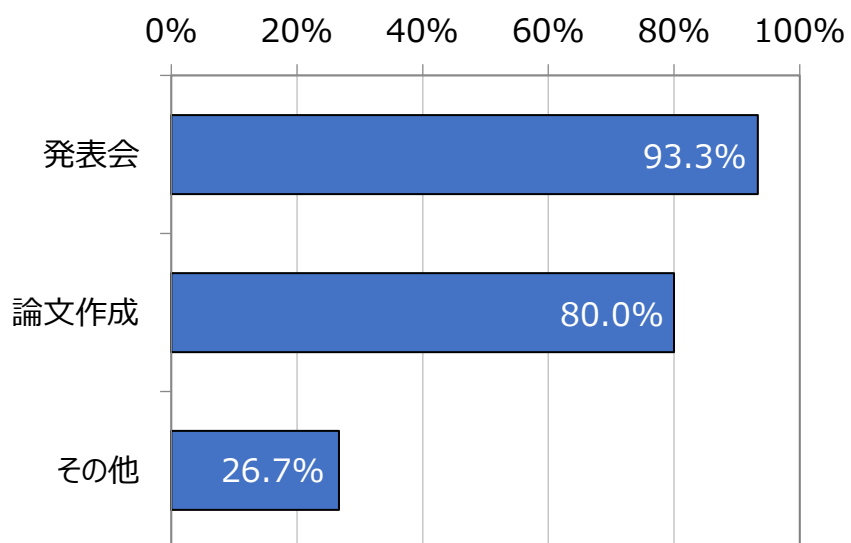
図表 2-11 探究型学習の各学年の主な活動の単位 (n=30)



(3)成果の取りまとめ方

- 「発表会」で成果の取りまとめを行った学校が9割以上である。

図表 2-12 成果の取りまとめ方（複数回答）（n=30）



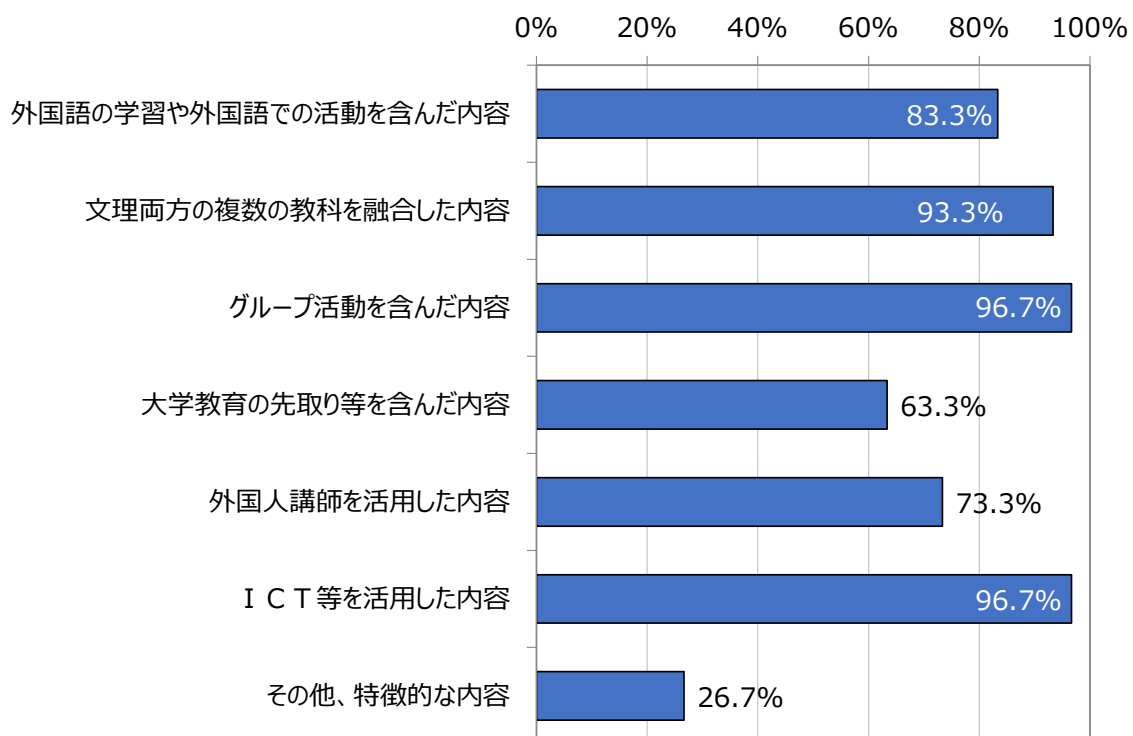
図表 2-13 成果の取りまとめ方（30 ネットワークの合計）

成果の取りまとめ	発表会	論文作成	その他
合計	28	24	8

(4)探究型学習の内容

- 探究型学習は、8～9割の学校が「グループ活動を含んだ内容」「ICT等を活用した内容」「文理両方の複数の教科を融合した内容」「外国語の学習や外国語での活動を含んだ内容」としている。

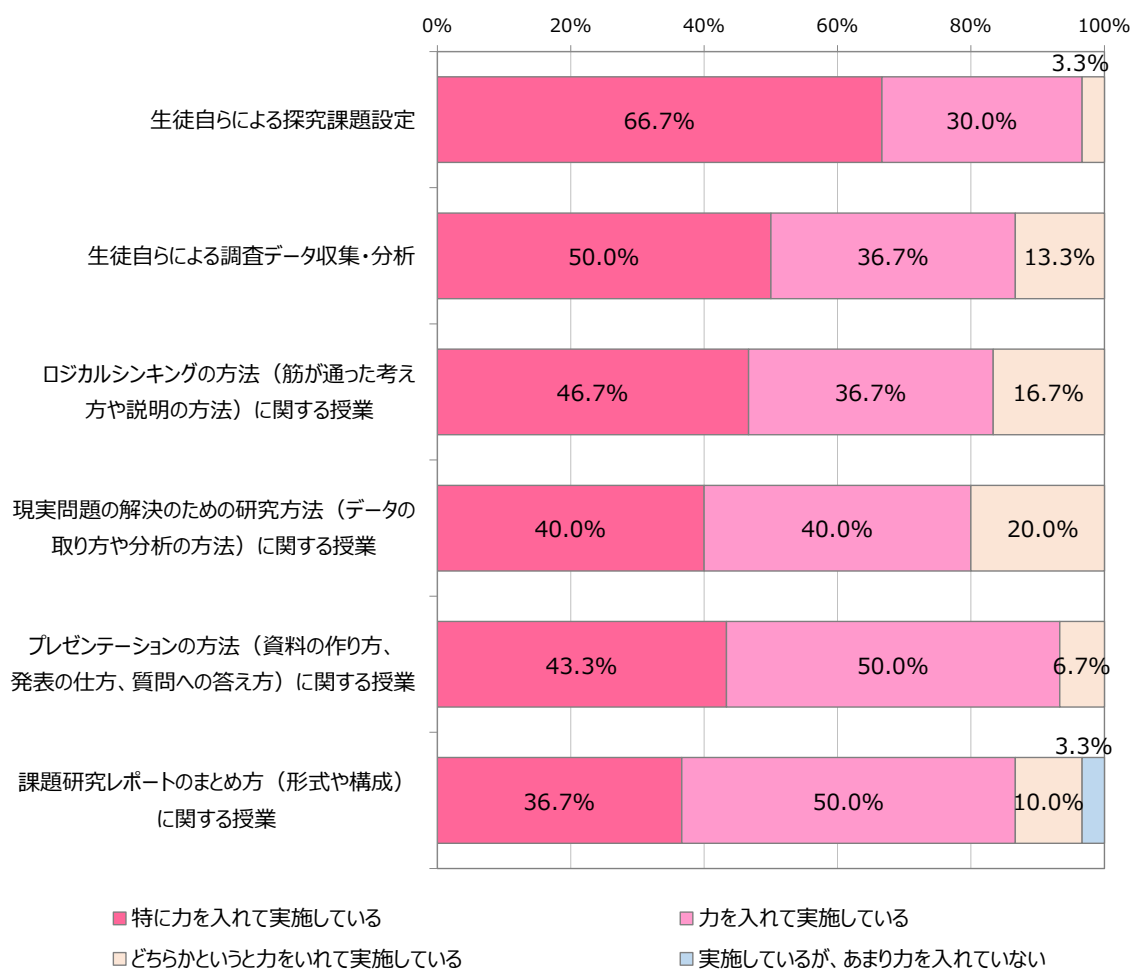
図表 2-14 探究型学習の内容 (n=30)



(5) 探究型学習の実施度合い

- 探究型学習についての各項目は、いずれの学校もほとんどの項目が「力を入れて実施している（特に力を入れて実施している+力を入れて実施している）」と回答。
- 「生徒自らによる探究課題設定」では、6割以上の学校が「特に力を入れて実施している」と回答した。

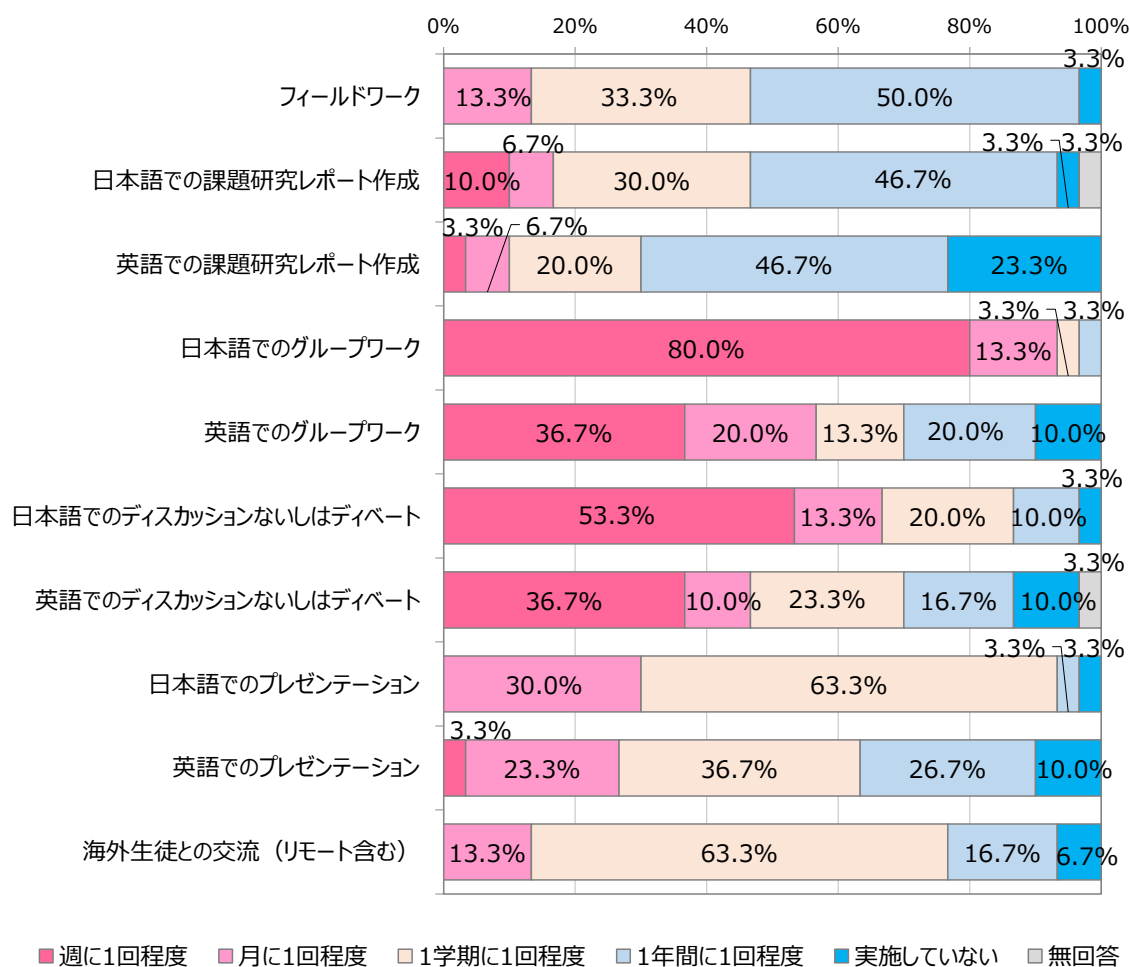
図表 2-15 探究型学習の実施度合い (n=30)



(6) 探究型学習の実施頻度

- 探究型学習の実施頻度については、「日本語でのグループワーク」は、8割の学校が、「週に1回程度」実施している。

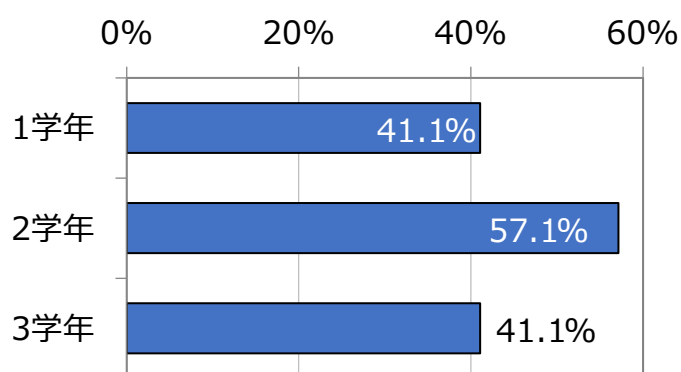
図表 2-16 探究型学習の実施頻度 (n=30)



2-4-3 外国語や文理両方の複数教科を融合した内容の教科・科目

- 外国語や文理両方の複数教科を融合した内容の教科・科目は、30校で56科目設定されている。
- 学年別では、第2学年の科目がやや多い。
- 56科目のうち、約6割以上の科目は、生徒全員が受講対象になっている。

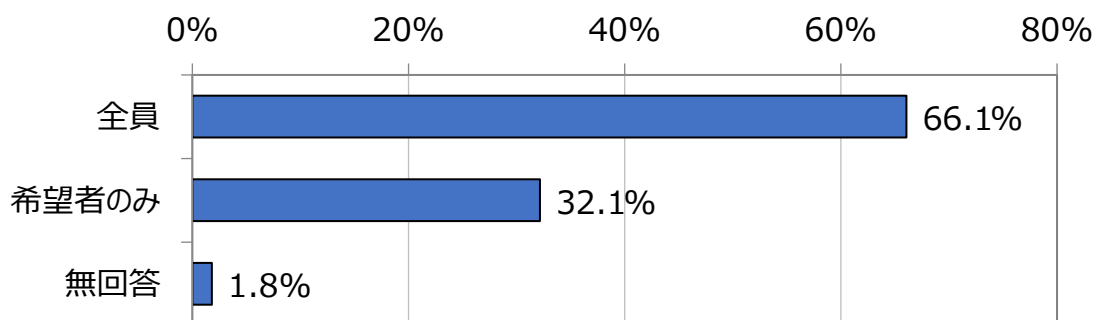
図表 2-17 対象学年（複数回答）（n=56）



図表 2-18 各学年の単位数

単位数	1学年 (n=23)	2学年 (n=32)	3学年 (n=23)
平均	1.67	1.98	2.04

図表 2-19 受講者（n=56）



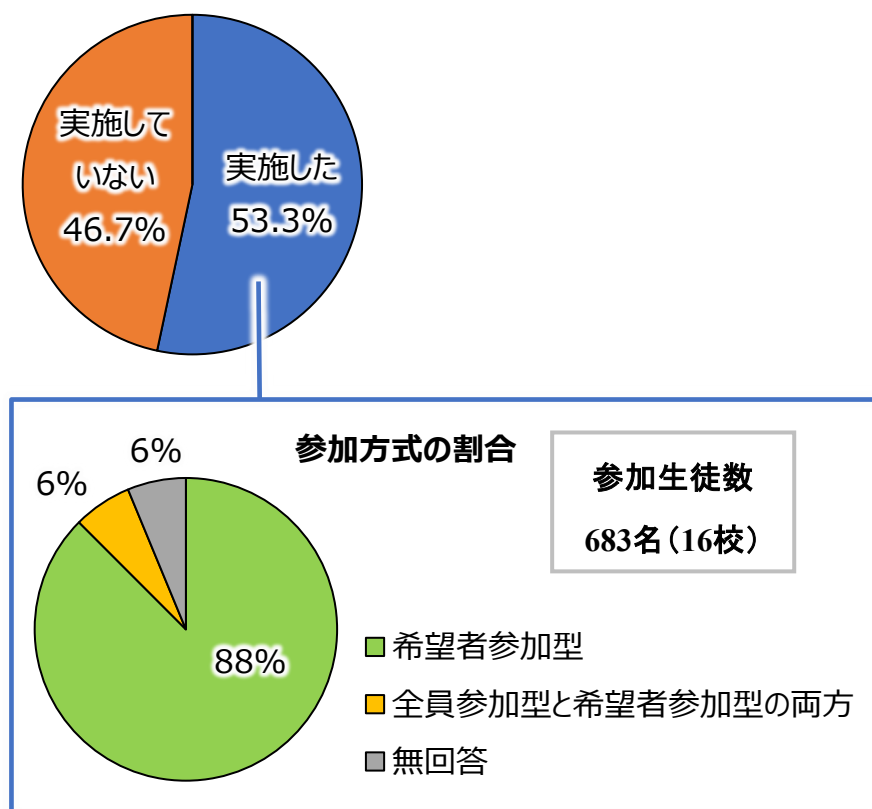
2-4-4 短期・長期留学及び海外研修等

(1)実施状況

- 令和4年度、短期・長期留学及び海外研修等を実施した拠点校は16校で、53.3%だった。
- 令和4年度、短期・長期留学及び海外研修等を実施した拠点校16校のうち、88%が「希望者参加型」だった。16校の合計参加生徒数は683名だった。

図表 2-20 短期・長期留学及び海外研修等の実施状況

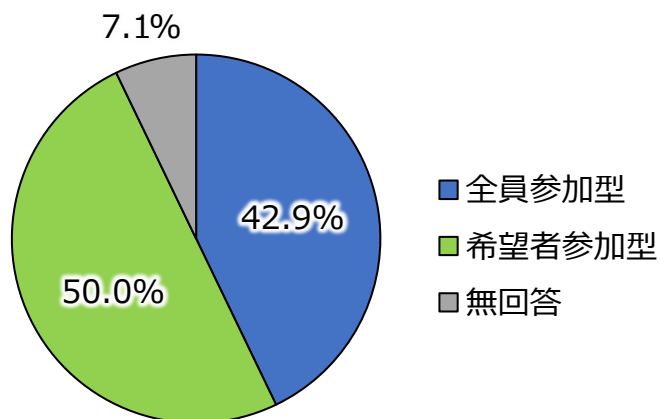
令和4年度の実施の有無 (n=30)



(2)従来計画していた短期・長期留学及び海外研修等

- 令和4年度、従来計画していた短期・長期留学及び海外研修等を実施しなかった拠点校14校のうち、42.9%が全員参加型の授業だった。

図表 2-21 従来計画していた短期・長期留学及び海外研修等の参加方法 (n=14)

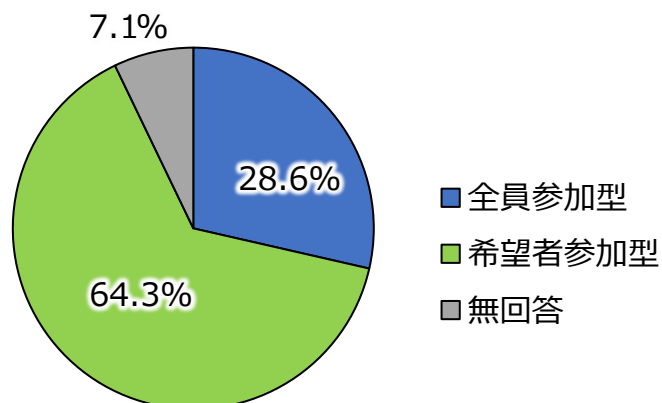


(3)コロナ禍等を受けて実施した短期・長期留学及び海外研修等の代替プログラム

- コロナ禍等を受けて実施した短期・長期留学及び海外研修等の代替プログラムで、全員参加型の授業は28.6%となっている。

図表 2-22 コロナ禍等を受けて実施した短期・長期留学及び海外研修等の

代替プログラムの参加方法 (n=14)

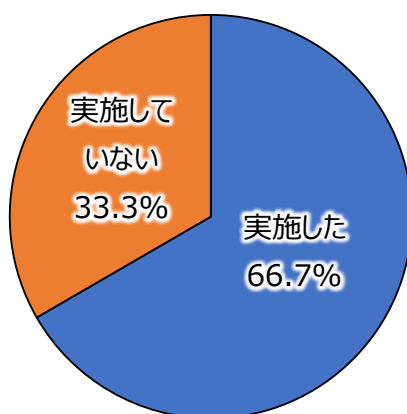


2-4-5 高校生国際会議

(1)高校生国際会議の実施状況

- 令和4年度、高校生国際会議を実施した拠点校は20校で、66.7%だった。10校は実施しなかった。

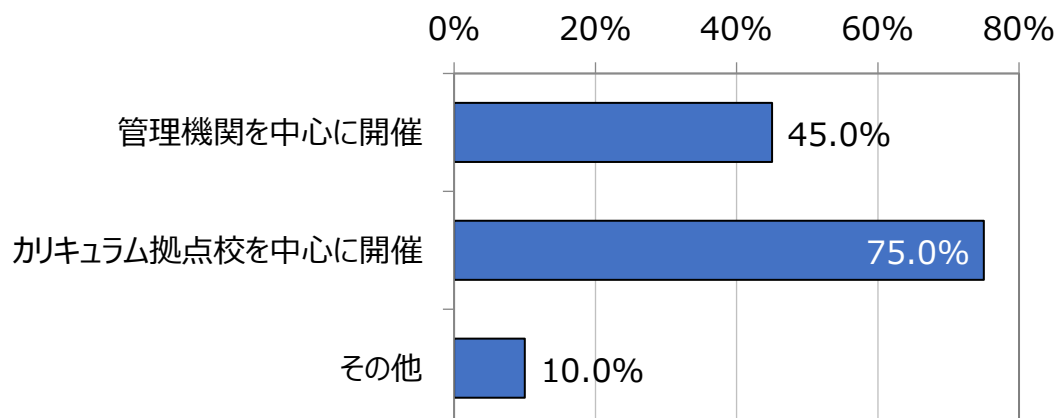
図表 2-23 高校生国際会議の実施状況 (n=30)



(2)開催方法

- 高校生国際会議の開催方法は、「カリキュラム拠点校を中心に開催」が75.0%、「管理機関を中心に開催」が45.0%である。

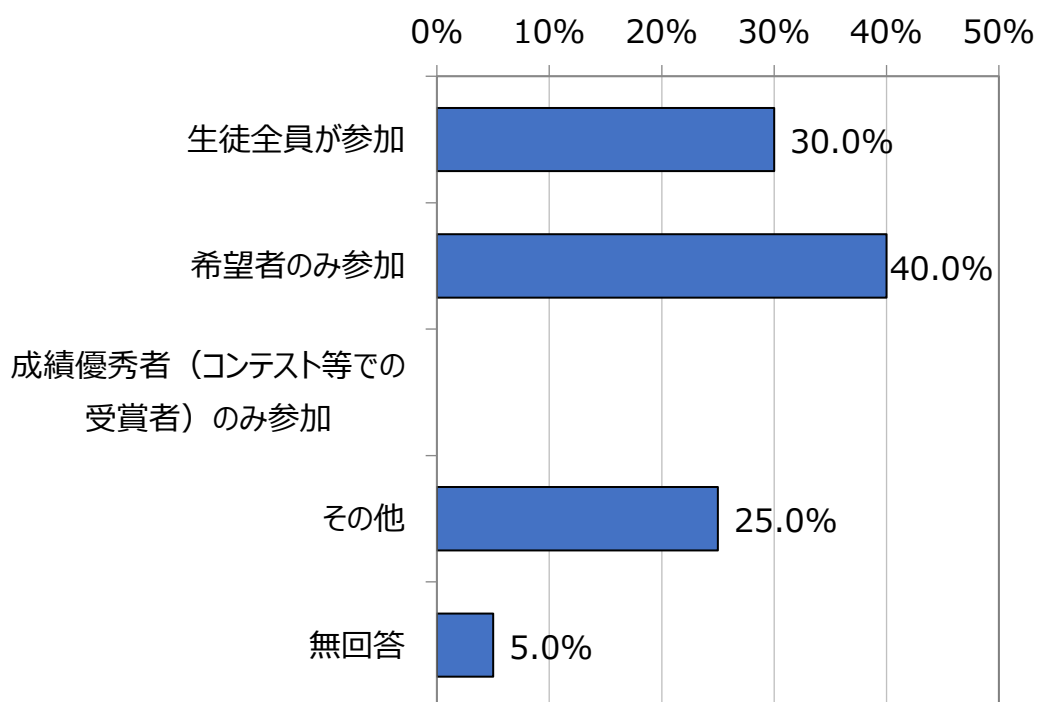
図表 2-24 高校生国際会議の開催方法 (n=20)



(3)カリキュラム開発拠点校における高校生国際会議の位置づけ

- 高校生国際会議は、「希望者のみ参加」型が 40.0%、「生徒全員が参加」型が 30.0% である。

図表 2-25 カリキュラム開発拠点校における高校生国際会議の位置づけ (n=20)



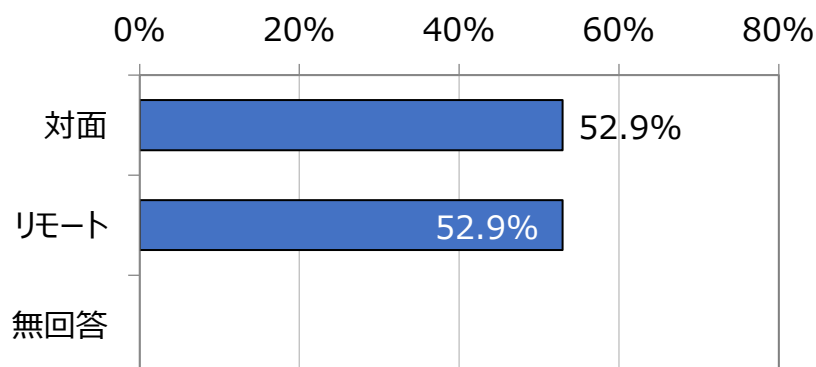
(4)高校生国際会議の実施状況

- 高校生国際会議は、令和4年度、30ネットワークの合計で17回開催された。
- 延べ286校、拠点校生徒1,801名、拠点校以外の国内生徒1,135名、海外生徒539名が参加した。

図表 2-26 参加状況 (30 ネットワーク 17 回の合計値)

	平均参加国数	参加学校数	参加生徒数 (拠点校)	参加生徒数 (拠点校以外)	参加生徒数 (海外)
合計	14.53	286	1,801	1,135	539

図表 2-27 参加方法 (n=17)

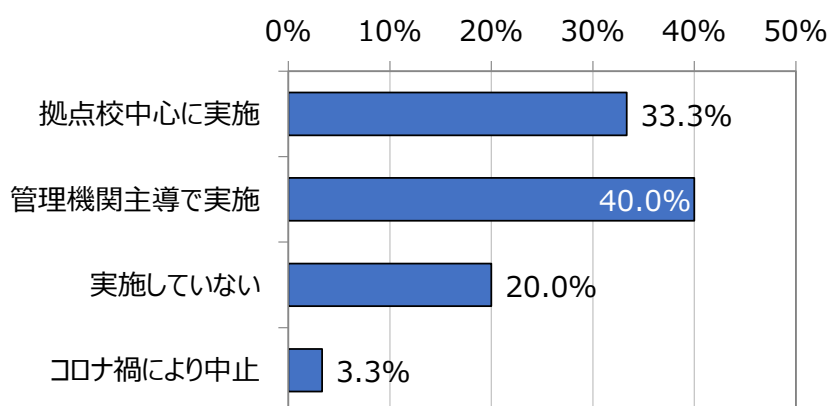


2-4-6 高大連携による大学教育の先取り履修に関する取組みの実施状況

(1)取組みの実施の有無

- 高大連携による大学教育の先取り履修については、40.0%が「管理機関主導で実施」している。

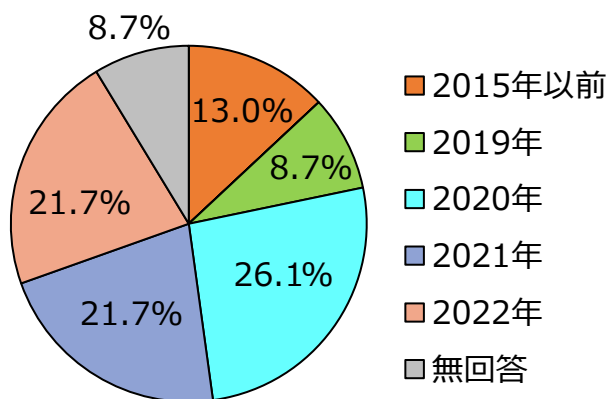
図表 2-28 実施の有無 (n=30)



(2)取組みの開始時期

- 高大連携による大学教育の先取り履修を「実施」もしくは「コロナ禍により中止」した 23 校のうち、7 割以上が 4 年以内に取り組みを開始した。

図表 2-29 取組みの開始時期 (n=23)



(3)大学との連携状況

- 高大連携による大学教育の先取り履修を実施している学校が連携している大学の合計数は35校だった。また、授業数は87だった。

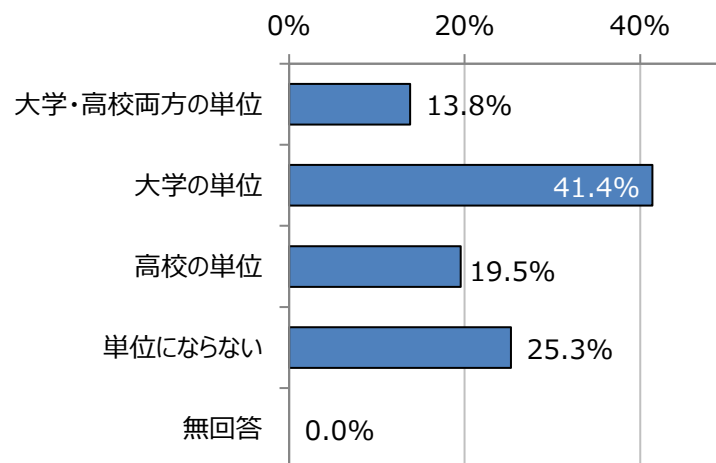
図表 2-30 大学との連携状況

高大連携	大学数 (n=22)	授業数 (n=21)
合計	35	87

(4)単位化の状況

- 87授業のうち、「大学・高校両方の単位」になる授業が13.8%、「大学の単位」になる授業が41.4%、「高校の単位」になる授業が19.5%となっている。

図表 2-31 単位化の状況 (n=87)



図表 2-32 令和4年度の参加者数 (n=87)

令和4年度	参加者数	単位取得人数
合計	3,617	434

2-4-7 WWL 事業の各活動を通じて実施した取組み状況

- WWL 事業の各活動を通じて実施した取組み状況は、下記のとおり。
- 令和4年度はコロナ禍の影響が減り、海外との直接の交流が増えている。

図表 2-33 海外研修

海外研修	実施回数	渡航日数計
合計	97	4341
令和元年度 (n=10)	23	319
令和2年度 (n=22)	5	100
令和3年度 (n=28)	7	265
令和4年度 (n=30)	62	3657

図表 2-34 留学生受入

留学生受入	受入人数	うち対象人数	留学元 国・地域数
合計	141	98	112
令和元年度 (n=10)	41	20	25
令和2年度 (n=22)	19	18	18
令和3年度 (n=28)	22	20	22
令和4年度 (n=30)	59	40	47

図表 2-35 帰国子女受入

帰国子女	受入人数	うち対象人数	帰国前 国・地域数
合計	1828	973	272
令和元年度 (n=10)	224	224	43
令和2年度 (n=22)	255	235	69
令和3年度 (n=28)	259	259	56
令和4年度 (n=30)	1090	255	104

図表 2-36 短期訪問

短期訪問	受けた回数	国・地域数
合計	34	30
令和元年度 (n=10)	19	18
令和2年度 (n=22)	0	0
令和3年度 (n=28)	1	1
令和4年度 (n=30)	14	11

図表 2-37 テレビ会議等リモートによる国外の学生との交流及び所在国・地域数

リモート交流	国・地域数
合計	261
令和元年度 (n=10)	6
令和2年度 (n=22)	58
令和3年度 (n=28)	86
令和4年度 (n=30)	111

図表 2-38 フィールドワーク

フィールドワーク	国内		国外	
	回数	日数	回数	日数
合計	605	433	71	361
令和元年度 (n=10)	34	75	33	232
令和2年度 (n=22)	43	57	12	21
令和3年度 (n=28)	105	139	7	9
令和4年度 (n=30)	423	162	19	99

図表 2-39 英語による生徒の成果発表回数

英語による成果 発表回数	校内	校外	海外
合計	809	241	82
令和元年度 (n=10)	253	32	18
令和2年度 (n=22)	219	44	15
令和3年度 (n=28)	228	93	35
令和4年度 (n=30)	109	72	14

図表 2-40 取組みの一環として主催した国際会議の回数、開催日数(高校生国際会議含む)

主催した国際 会議回数	回数	開催日数
合計	75	93
令和元年度 (n=10)	18	3
令和2年度 (n=22)	13	20
令和3年度 (n=28)	21	32
令和4年度 (n=30)	23	38

図表 2-41 連携校との交流回数

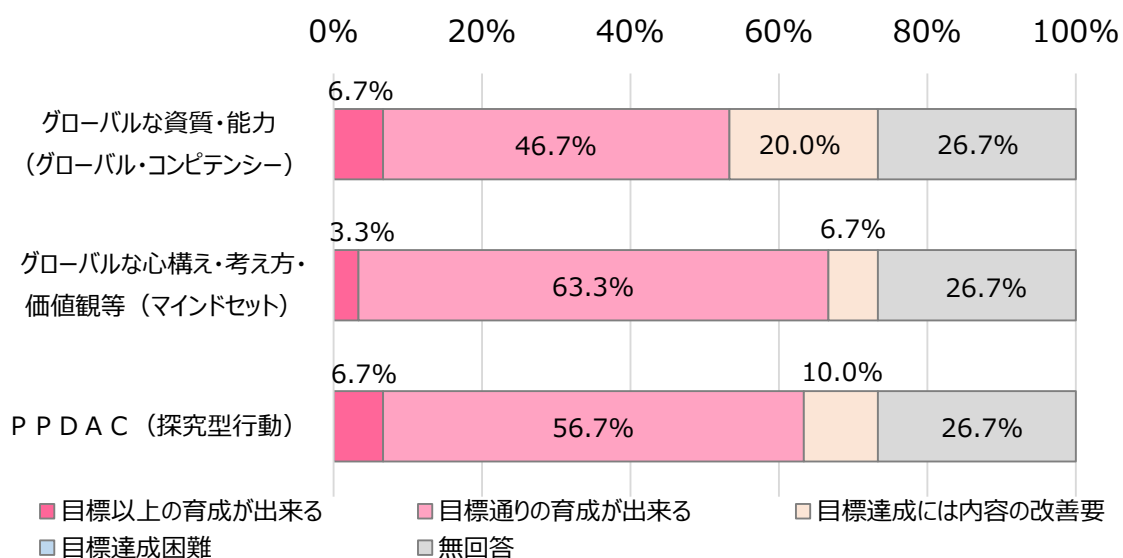
連携校との 交流回数	国内	国外
合計	329	222
令和元年度 (n=10)	19	23
令和2年度 (n=22)	75	42
令和3年度 (n=28)	104	72
令和4年度 (n=30)	131	85

2-5 WWL コンソーシアム構築支援事業の成果

2-5-1 育成項目の開発・実践したカリキュラムによる達成度

- WWL コンソーシアム構築支援事業の育成項目について、開発・実践したカリキュラムによる達成度をきいたところ、「グローバルな心構え・考え方・価値観等（マインドセット）」の割合が最も高く、6割以上だった。

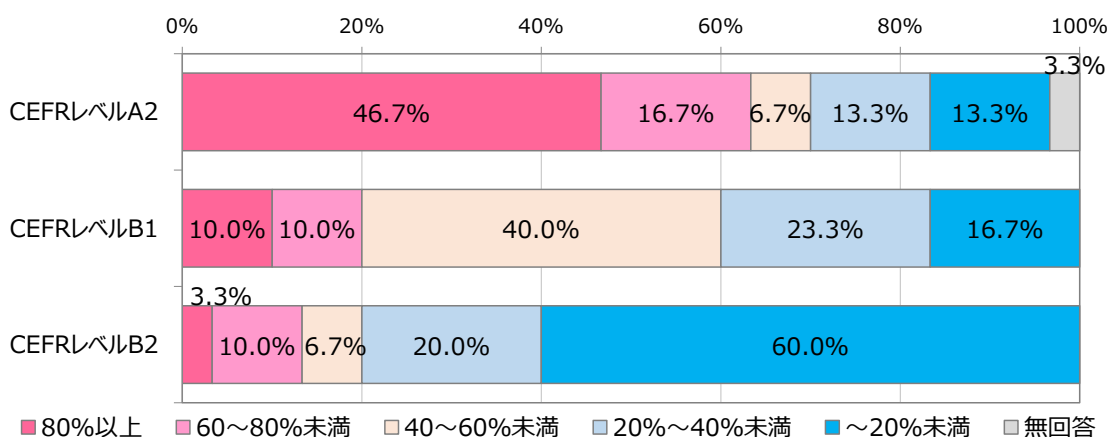
図表 2-42 開発・実践したカリキュラムによる達成度 (n=30)



2-5-2 生徒の CEFR レベル

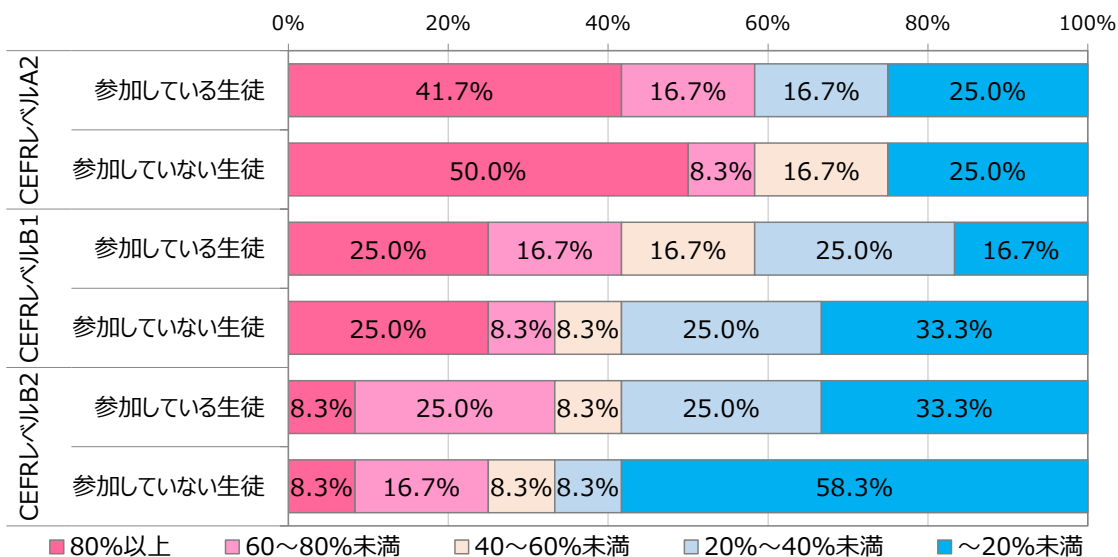
- 生徒の CEFR レベルをみると、CEFR レベル「A2」達成者の割合が「80%以上」と回答した拠点校は、46.7%となっている。

図表 2-43 生徒の CEFR レベル (n=30)



図表 2-44 生徒の CEFR レベル

(参加している生徒・参加していない生徒の比較) (n=12)



2-5-3 WWL 事業に参加した生徒の海外大学への進学者

- 令和5年1月時点で、WWL 事業に参加した生徒の海外大学への進学者数は52名となっている。地域・分野は、下記のとおり。

図表 2-45 地域別進学者数 (n=30)

地域別	
進学者数	合計
アジア (日本以外)	13
中東	0
ヨーロッパ	5
アフリカ	0
北米	27
中南米	0
オセアニア	8
その他	0
合計	53

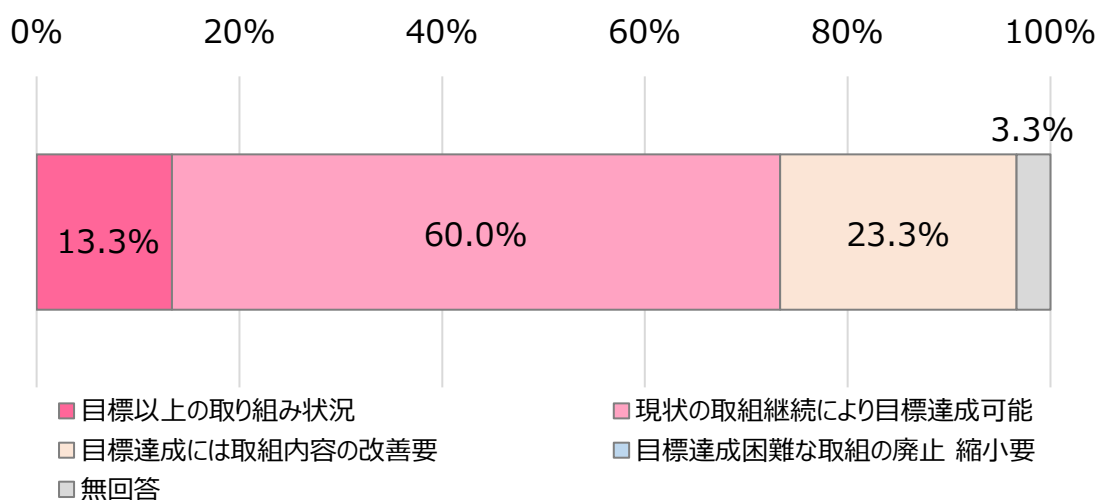
図表 2-46 分野別進学者数 (n=30)

分野別	
進学者数	合計
文学・史学・哲学・心理関係学部	4
海外文化・国際コミュニケーション等 を含む人文学関係学部	24
教育関係学部	2
法学・政治学関係学部	2
商学・経済学関係学部	11
社会学・社会事業関係学部	4
理工学関係学部	2
農学関係	1
医学・薬学・看護学など 保健関係学部	9
芸術関係学部	1
その他	8
合計	68

2-5-4 カリキュラムの研究開発・実践における本年度の自己評価

- 拠点校のカリキュラムの研究開発・実践における令和4年度の自己評価をみると、60.0%の拠点校において「現状の取組継続により目標達成可能」と回答している。

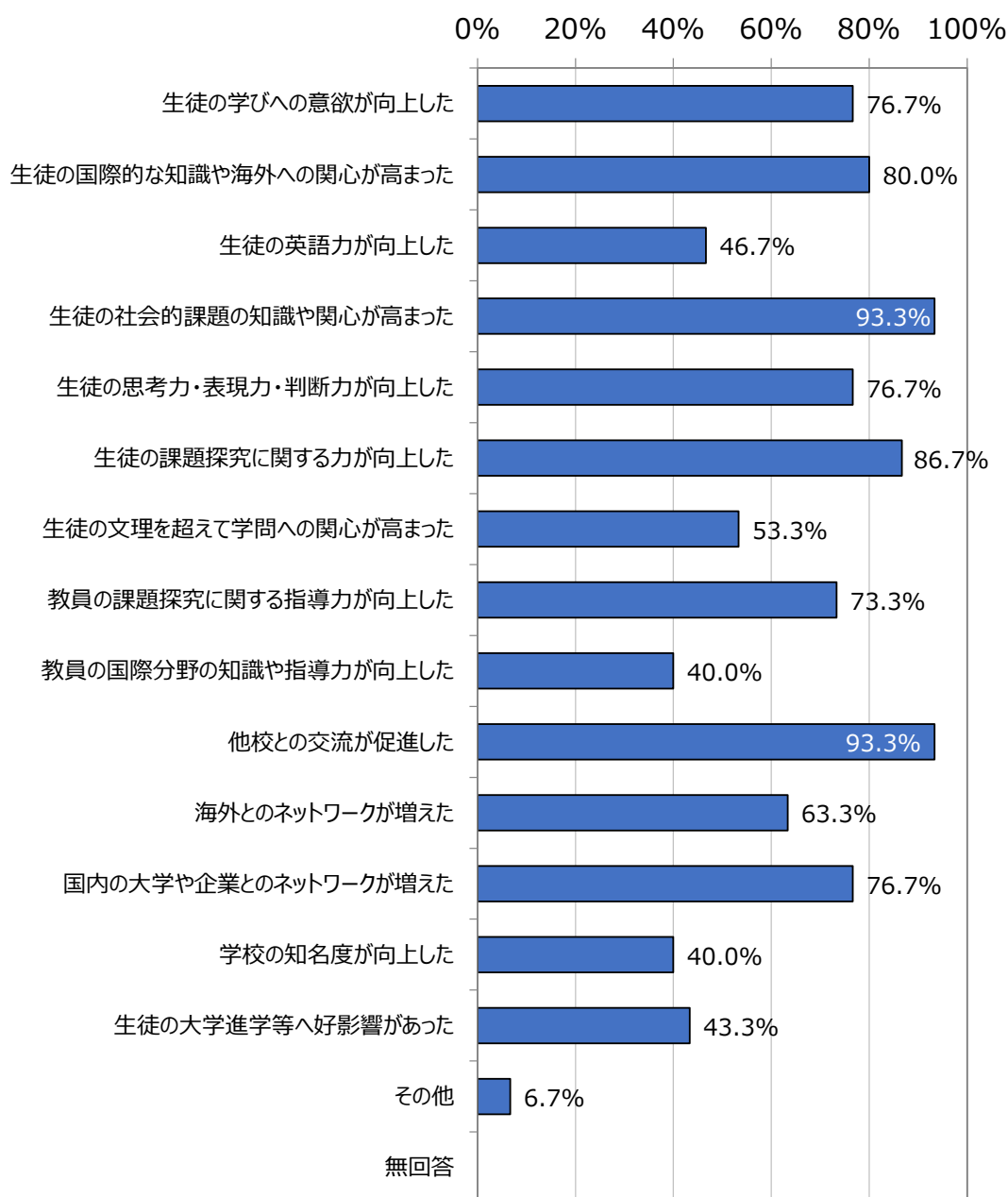
図表 2-47 カリキュラムの研究開発・実践における本年度の自己評価 (n=30)



2-5-5 WWL 事業の実施による学校への影響や変化

- WWL 事業の実施による学校への影響や変化については「生徒の社会的課題の知識や関心が高まった (93.3%)」「他校との交流が促進した (93.3%)」「生徒の課題探究に関する力が向上した (86.7%)」「生徒の国際的な知識や海外への関心が高まった (80.0%)」など多くの項目が挙げられている。

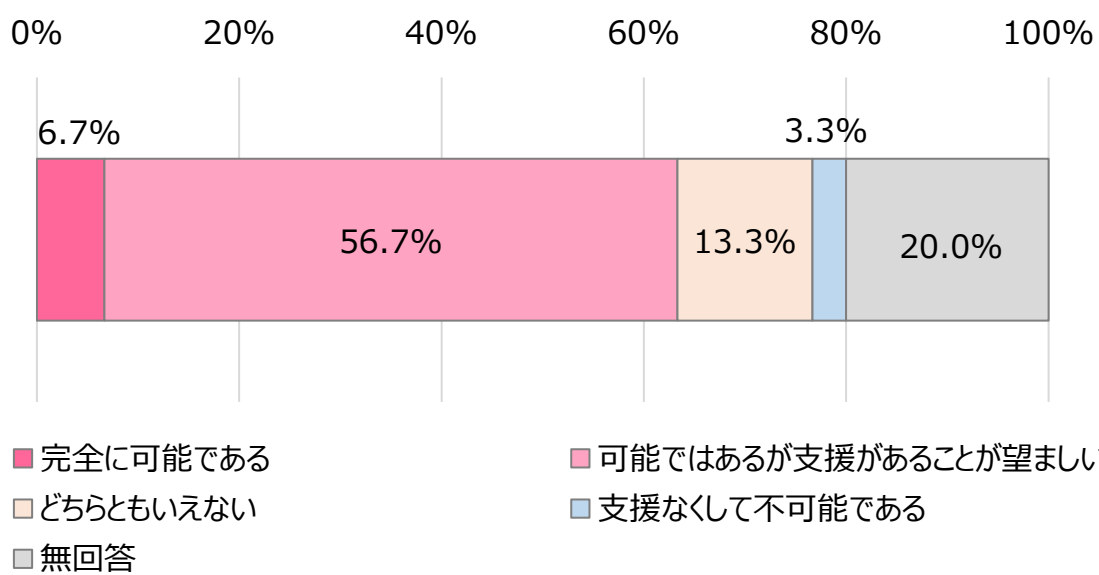
図表 2-48 WWL 事業の実施による学校への影響や変化 (複数回答) (n=30)



2-5-6 事業終了後の自走継続の可否

- カリキュラム開発拠点校に、WWL 事業終了後の自走継続の可否をきいたところ、56.7%が「可能ではあるが支援があることが望ましい」と回答。

図表 2-49 事業終了後の自走継続の可否 (n=30)



2-6 管理機関の活動

2-6-1 運営指導委員会の年間開催回数

- 管理機関による運営指導委員会の年間開催回数は、下記のとおり。

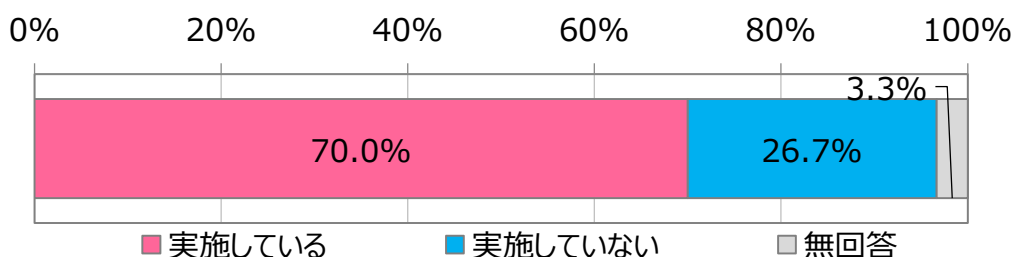
図表 2-50 運営指導委員会の年間平均開催回数

運営指導委員会 年間開催回数	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度
平均	1.80	1.55	1.75	1.79

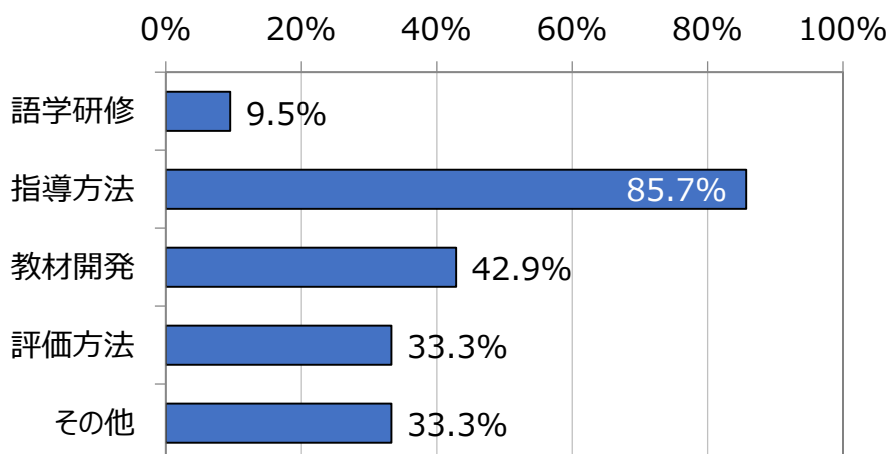
2-6-2 教職員育成の研修・セミナー等の実施状況

- 70.0%の管理機関が、教職員育成の研修・セミナー等を実施している。実施内容は、「指導方法」の割合が85.7%と高い。

図表 2-51 教職員育成の研修・セミナー等の実施の有無 (n=30)



図表 2-52 教職員育成の研修・セミナー等の実施内容 (複数回答) (n=21)



図表 2-53 教職員育成の研修・セミナー等の年間実施回数 (総計)

研修等の 年間実施回数	令和元年度 (n=10)	令和2年度 (n=22)	令和3年度 (n=28)	令和4年度 (n=30)
合計	82	92	125	180

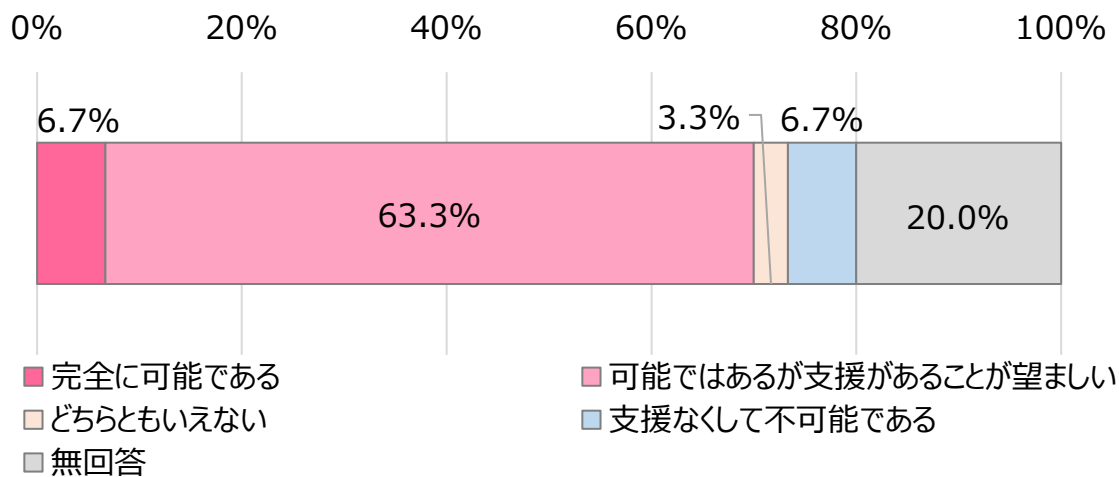
図表 2-54 教職員育成の研修・セミナー等の総参加者数 (総計)

研修等の 年間参加者数	令和元年度 (n=10)	令和2年度 (n=22)	令和3年度 (n=28)	令和4年度 (n=30)
合計	1,967	2,475	1,861	4,561

2-6-3 事業終了後、自走による継続の可否

□ 管理機関に、WWL 事業終了後の自走継続の可否をきいたところ、63.3%が「可能ではあるが支援があることが望ましい」と回答。

図表 2-55 事業終了後、自走による継続の可否 (n=30)



2-7 まとめ

カリキュラム開発拠点校・拠点校アンケートより、令和4年度のWWL事業の実績、成果として次のようなことが明らかになった。

- ・探究型学習：1・2年次は半数の学校がグループ学習を実施（残りは個人か個人・グループ自由選択）、9割以上の学校が「発表会」を開催。8～9割の学校が「グループ活動を含んだ内容」「ICT等を活用した内容」「文理両方の複数の教科を融合した内容」「外国語の学習や外国語での活動を含んだ内容」として実施。また、半数以上の学校が「生徒自らによる探究課題設定」に特に力を入れて実施。
- ・外国語や文理両方の複数教科を融合した教科・科目：30校で56科目設定。
- ・短期・長期留学及び海外研修等：令和4年度は30校中16校が再開、合計参加生徒数は683名。このうち88%の学校が「希望者参加型」。
- ・高校生国際会議：全体の75%が「カリキュラム拠点校を中心に開催」し、希望者参加型が4割、全員参加型が3割となっている。令和4年度は、30ネットワーク合計で17回開催し、延べ286校、拠点校生徒1,801名、拠点校以外の国内生徒1,135名、海外生徒539名が参加。
- ・高大連携による大学教育の先取り履修：23ネットワークが実施し、連携大学数35校、授業数87であった。87授業のうち、「大学・高校両方の単位」になる授業が13.8%、「大学の単位」になる授業が41.4%、「高校の単位」になる授業が19.5%であり、計434名が単位を取得。

また、活動を通じて、30のALネットワークには、総計で「共同実施校」14、「共同実施校以外の国内高校（連携校）」255、「国内の企業・国際機関等」158、「海外高校」116、「国内の大学等高等教育機関」83が参加している。

カリキュラム開発拠点校の自己評価では、グローバル・マインドセットは66.6%、グローバル・コンピテンシーは53.4%、PPDACは63.4%の学校が目標以上・目標通りの育成ができていると認識している。また、WWL事業の実施により8割以上の学校が「生徒の社会的課題の知識や関心が高まった」「他校との交流が促進した」「生徒の課題探究に関する力が向上した」「生徒の国際的な知識や海外への関心が高まった」と認識している。

さらに、WWL事業に参加した生徒の52名が海外大学へ進学（令和5年1月時点）。

第3章 カリキュラム開発拠点校生徒へのアンケート調査

3-1 調査概要

3-1-1 調査対象

拠点校 30 校（令和元年度 10 校、令和 2 年度 12 校、令和 3 年度 6 校、令和 4 年度 2 校）
において WWL 事業に参加している全生徒約 18,000 名。

3-1-2 調査方法

Web アンケート

3-1-3 調査時期

第 1 回：令和 4 年 6 月 1 日～令和 3 年 6 月 24 日

第 2 回：令和 4 年 12 月 19 日～令和 5 年 1 月 23 日

3-1-4 有効回答数

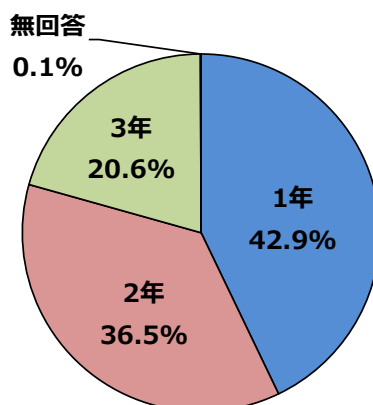
第 1 回：15,183 件

第 2 回：14,131 件

なお、本報告書では、主に第 2 回アンケートの結果を中心に紹介する。

3-1-5 回答者属性

図表 3-1 学年 (n=14,131)

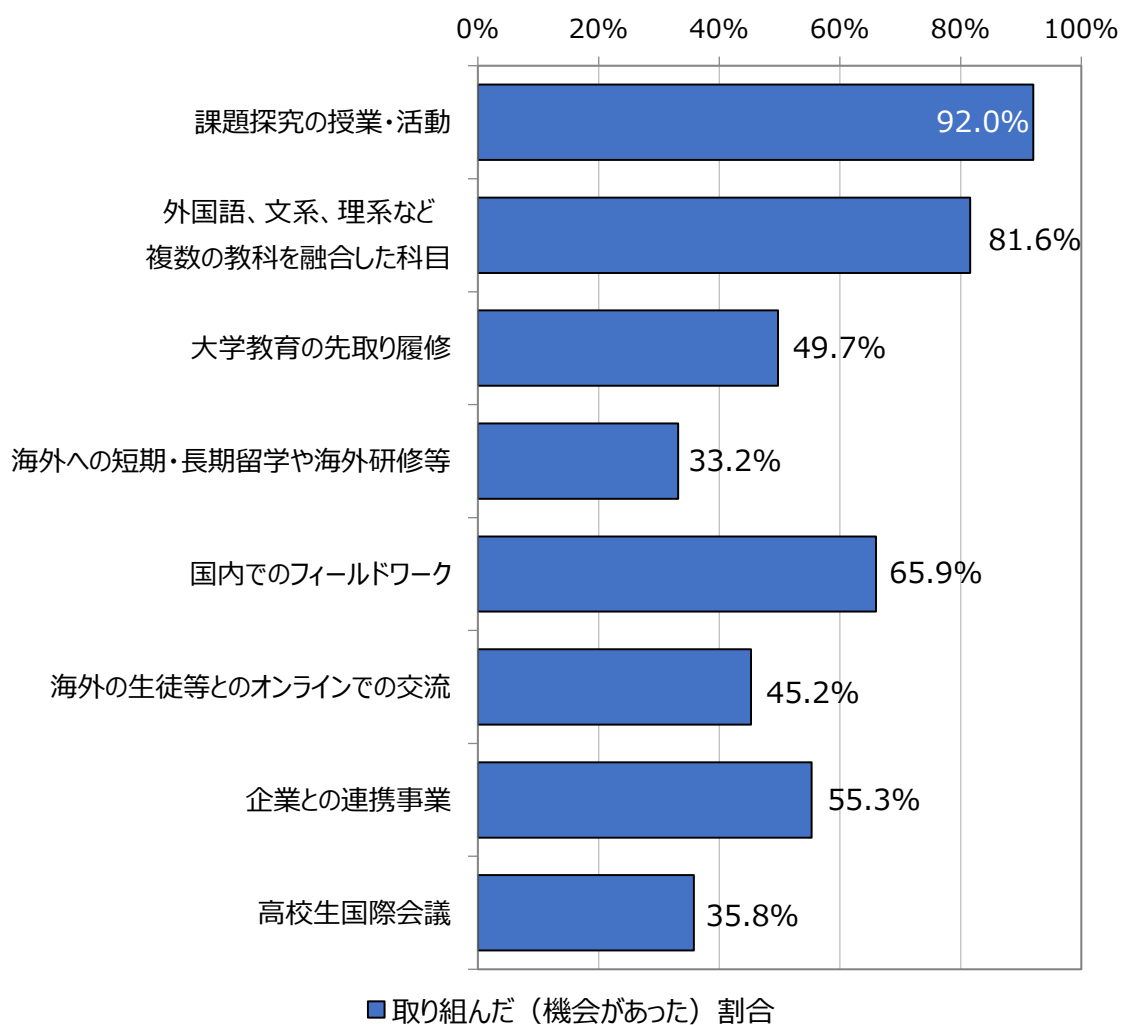


3-2 WWL 事業について

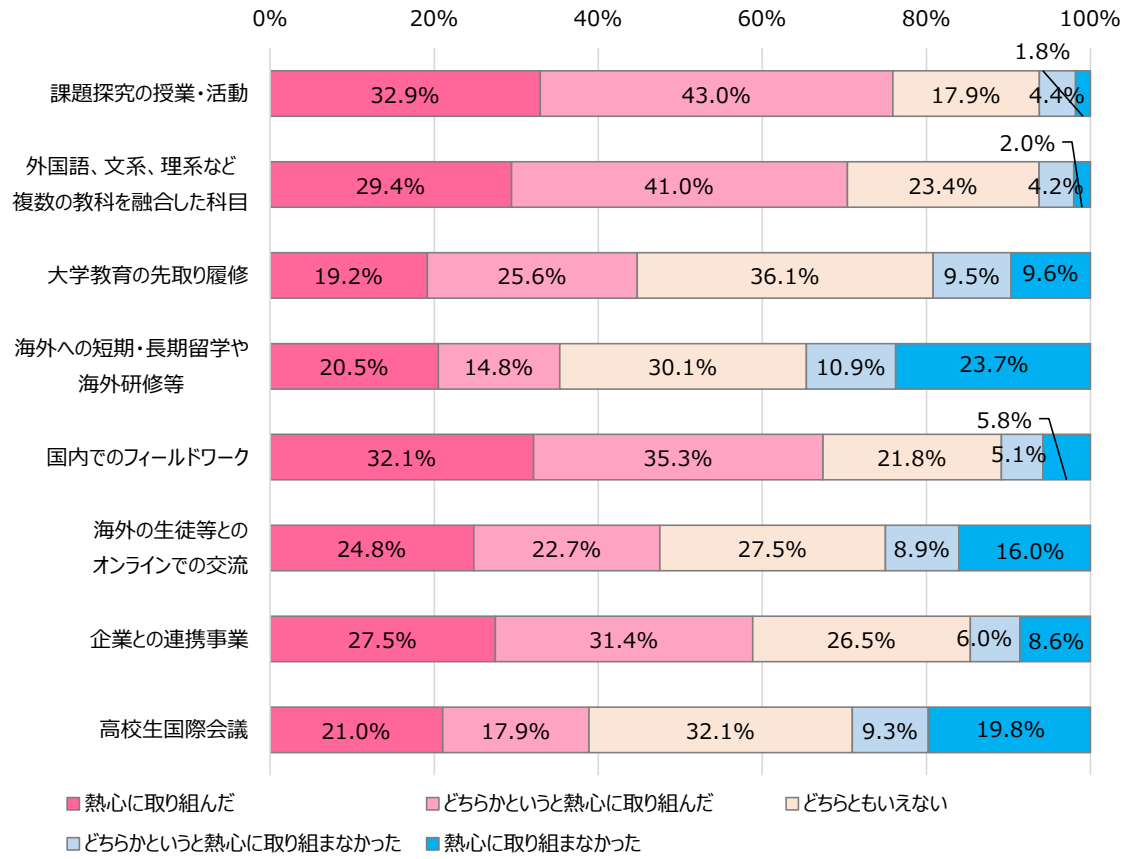
3-2-1 WWL 事業の活動の熱心度

- 「課題探究の授業・活動」「外国語、文系、理系など複数の教科を融合した科目」は、ほとんどの生徒が取り組んだと回答している。
- 取り組んだ活動のうち、「課題探究の授業・活動」「外国語、文系、理系など複数の教科を融合した科目」「国内でのフィールドワーク」「企業との連携事業」の順に、熱心に取り組んだ割合が高い。

図表 3-2 WWL 事業の活動に取り組んだ割合（複数回答）



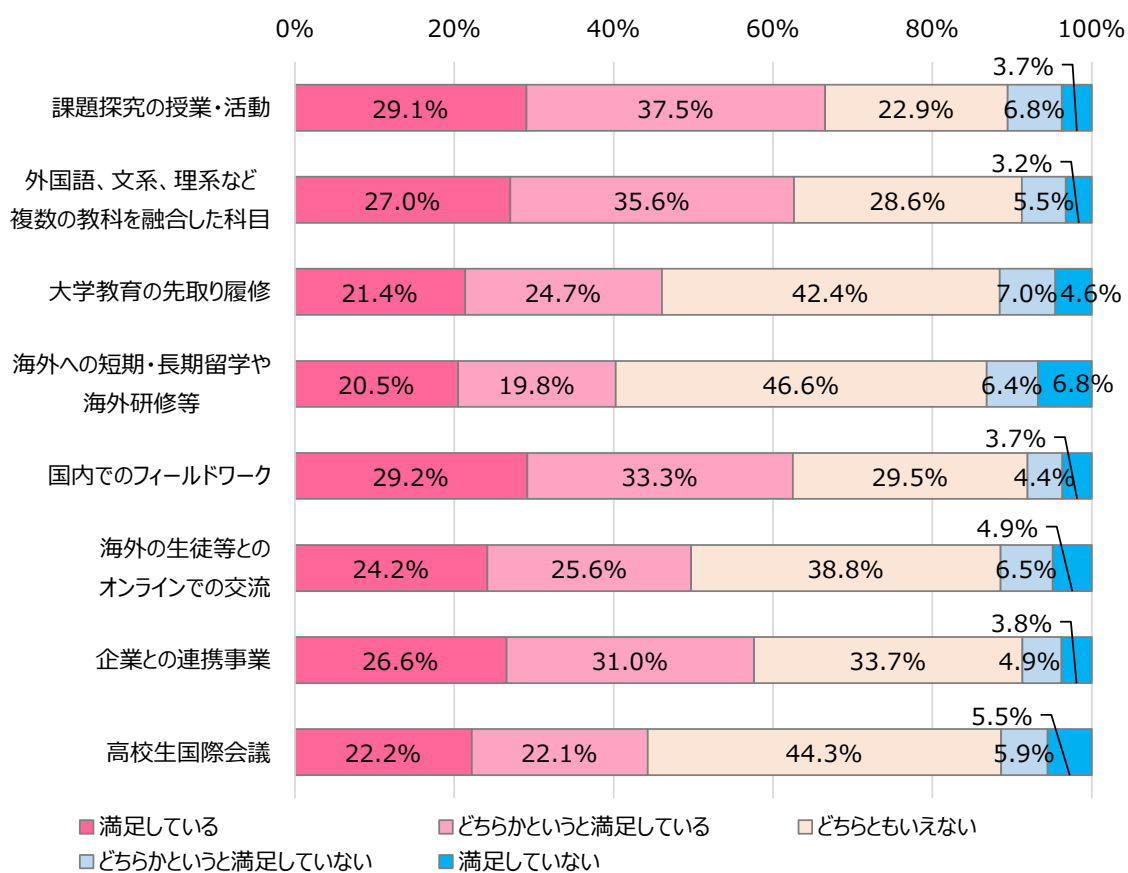
図表 3-3 WWL 事業の活動の熱心度（機会があったもののみ）



3-2-2 WWL 事業の活動の満足度

□ 参加した活動のうち、「課題探究の授業・活動」「外国語、文系、理系など複数の教科を融合した科目」「国内でのフィールドワーク」は「満足している（満足している＋どちらかという満足している）」割合が6割を超え高い。

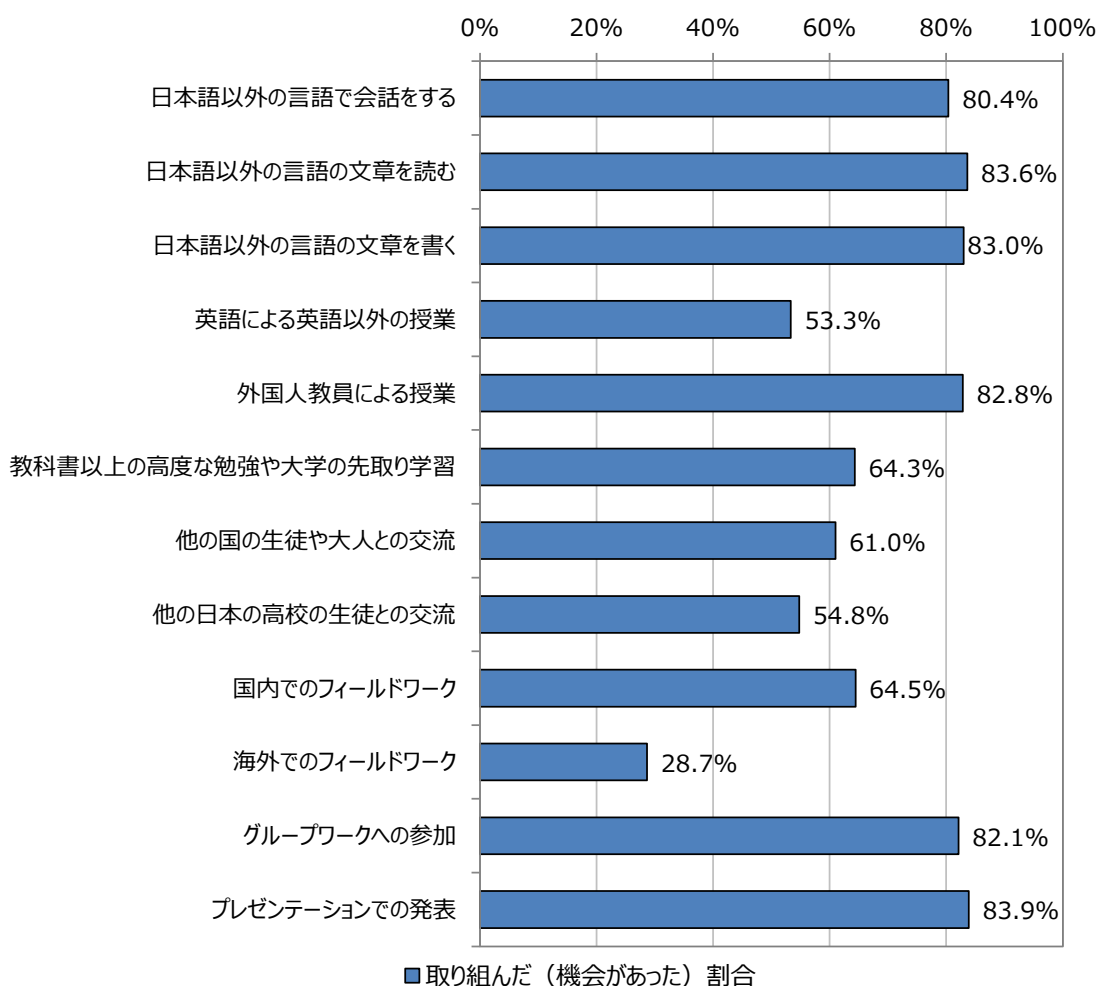
図表 3-4 WWL 事業の活動の満足度（機会があったもののみ）



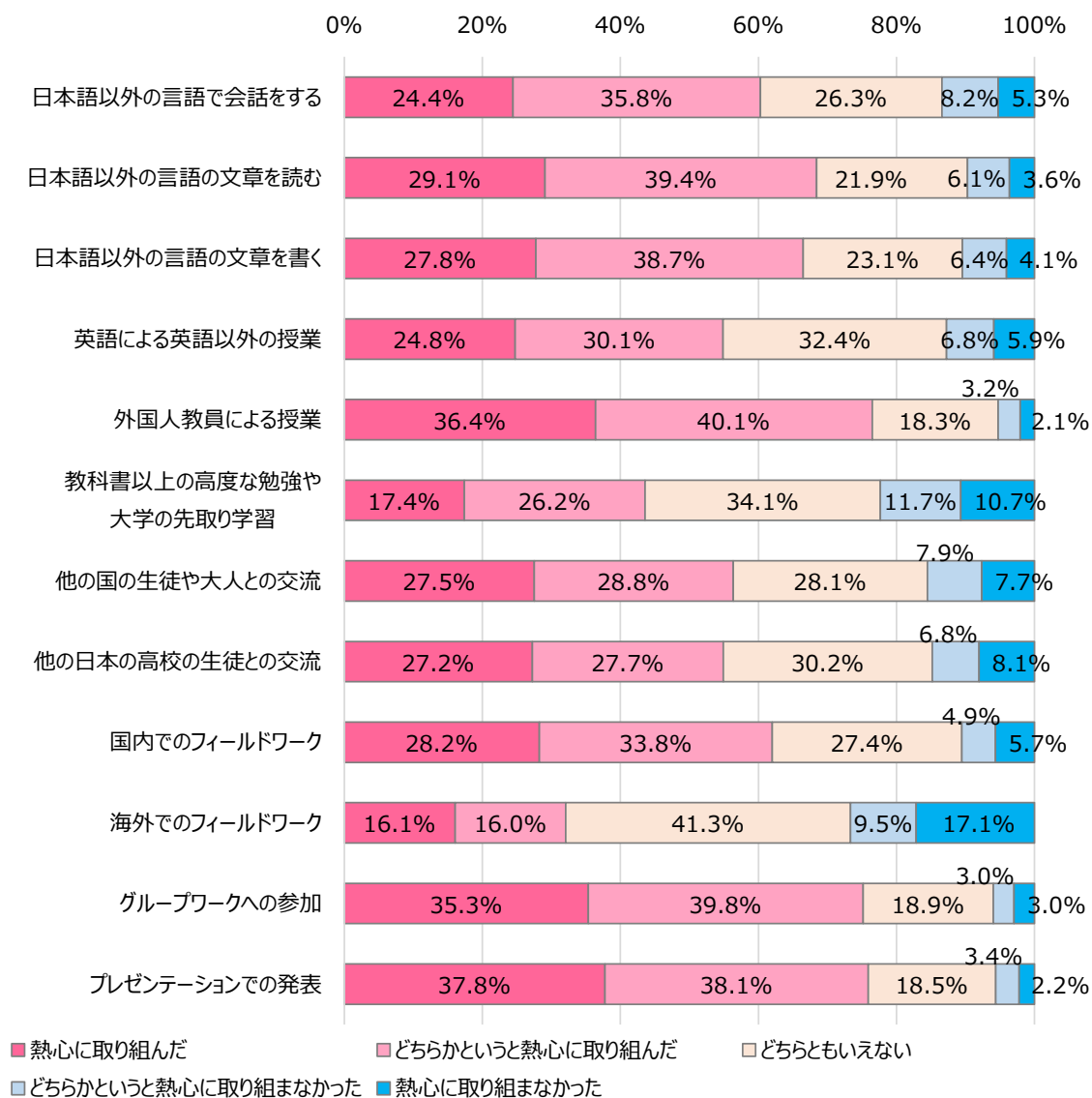
3-2-3 WWL 事業の取組みの熱心度

- 「外国人教員による授業」「グループワークへの参加」「プレゼンテーションでの発表」は取り組む機会が多く、熱心を実施している割合も高い。「日本語以外の言語」で話す・読む・書くについても8割以上が実施。
- コロナ禍の影響もあり「海外でのフィールドワーク」は取り組んでいる割合が低い。

図表 3-5 WWL 事業の取組みの機会（複数回答）（n=14,131）



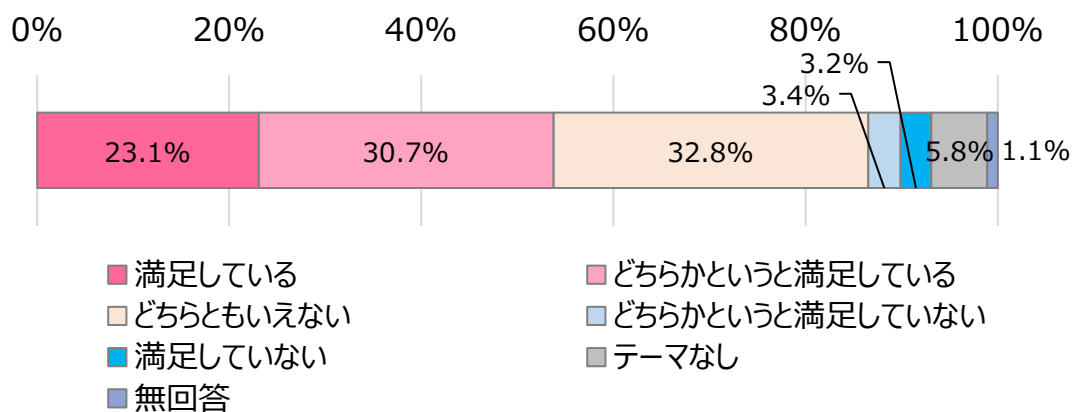
図表 3-6 WWL 事業の取組みの熱心度（機会があったもののみ）



3-2-4 WWL 事業テーマの満足度

- WWL 事業のテーマについて、5 割以上の生徒が「満足している（満足している＋どちらかという満足している）」と回答している。

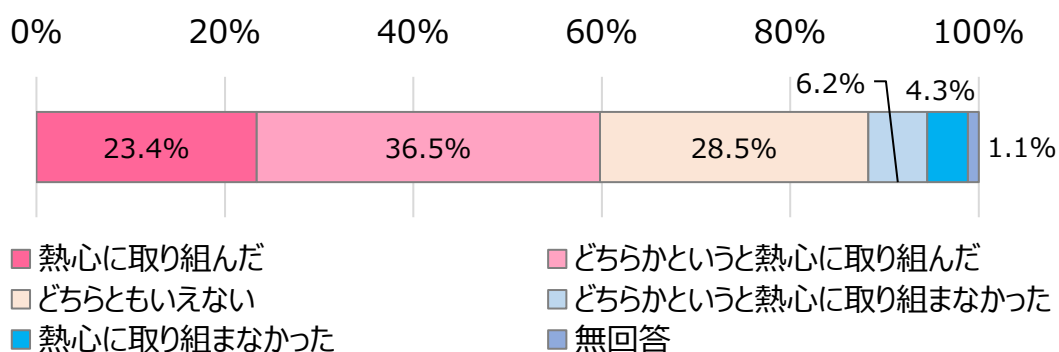
図表 3-7 WWL 事業テーマの満足度 (n=14,131)



3-2-5 WWL 総合熱心度

- 総合的にみて WWL 事業に熱心に取り組んだかをきいたところ、59.9%の生徒が「熱心に取り組んだ（熱心に取り組んだ+どちらかという熱心に取り組んだ）」と回答。

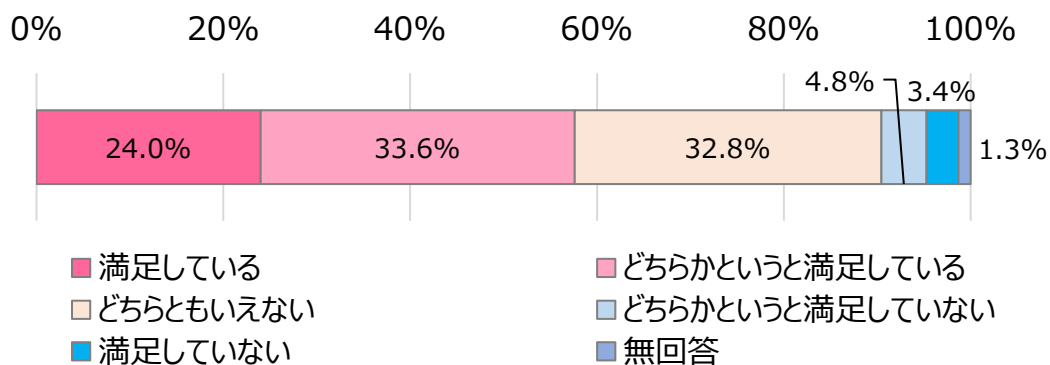
図表 3-8 WWL 総合熱心度 (n=14,131)



3-2-6 WWL 総合満足度

- 総合的にみて WWL 事業に満足しているかをきいたところ、57.6%の生徒が「満足している（満足している+どちらかという満足している）」と回答。

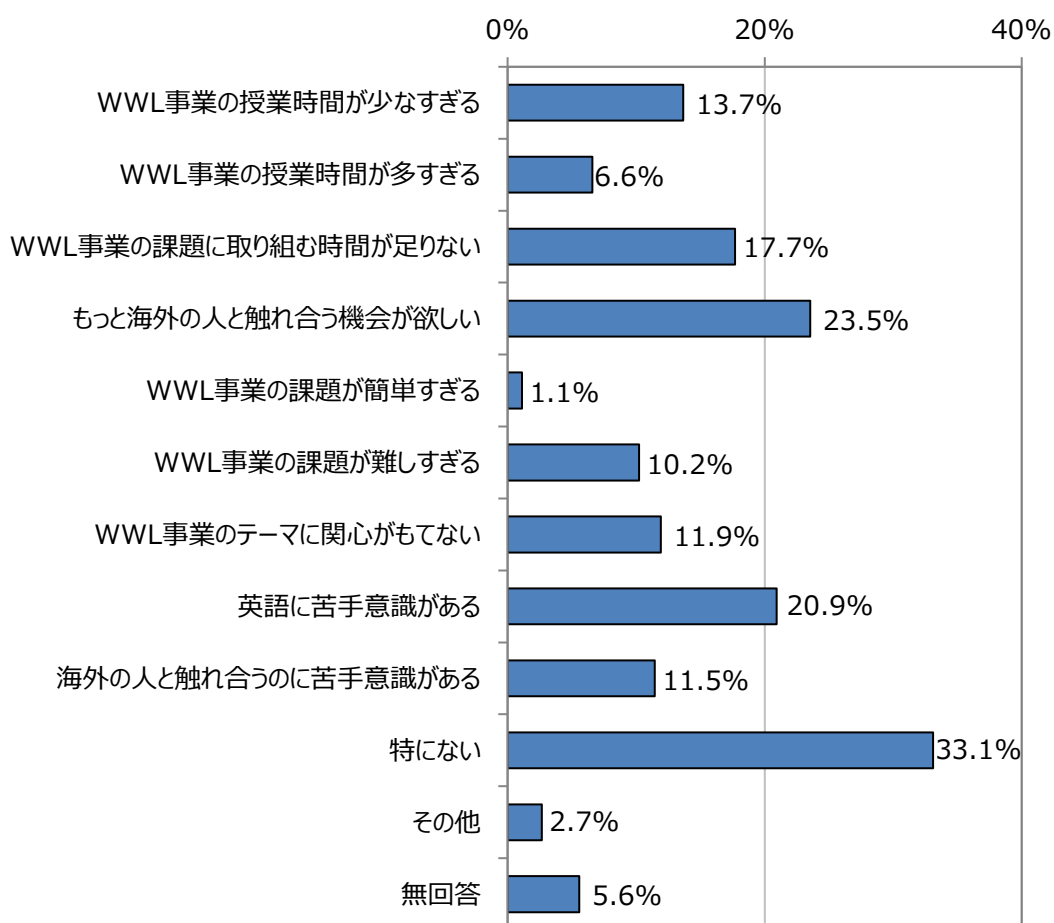
図表 3-9 WWL 総合満足度 (n=14,131)



3-2-7 WWL 事業の問題点・困っていること

- WWL 事業の問題点・困っていることについては、「特にない」が 33.1%と最も割合が高く、次いで「もっと海外の人と触れ合う機会が欲しい」が 23.5%、「英語に苦手意識がある」が 20.9%と続く。

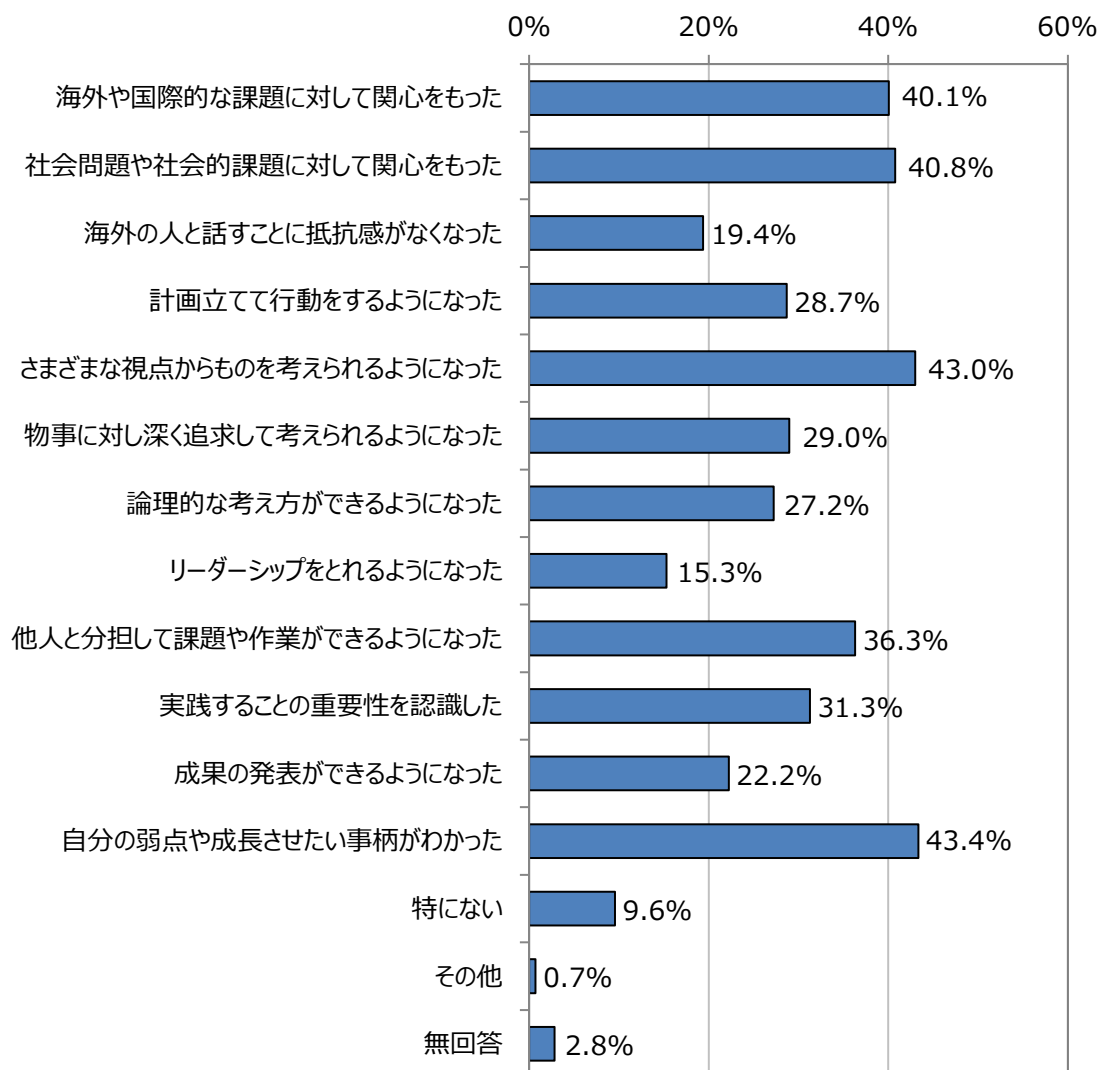
図表 3-10 WWL 事業の問題点・困っていること（複数回答）（n=14,131）



3-2-8 高校生活を通じて身についたこと・成長したこと

□ WWL 事業を含め高校生活を通じて身についたこと・成長したことについてきいたところ、「海外や国際的な課題に対して関心を持った」「社会問題や社会的課題に対して関心を持った」「さまざまな視点からものを考えられるようになった」「自分の弱点や成長させたい事柄がわかった」などが4割以上と、WWL 事業等を通じて生徒の世界や視野が広がっている様子が伺える。

図表 3-11 高校生活を通じて身についたこと・成長したこと（複数回答）（n=14,131）

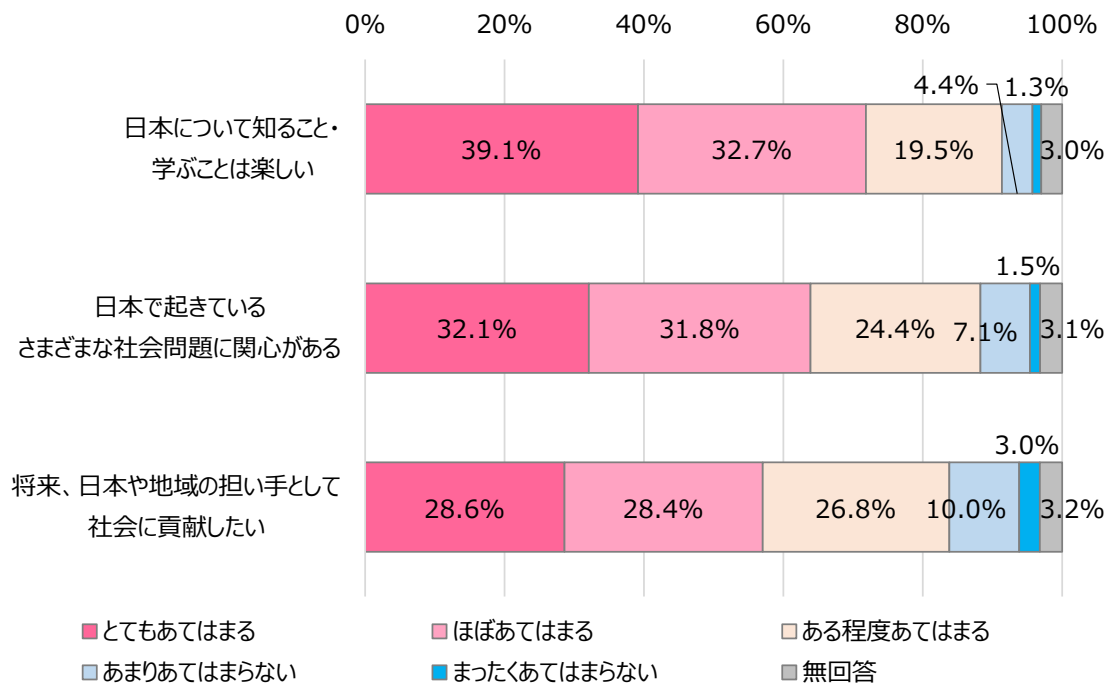


3-3 日本に関する考え

3-3-1 日本への関心

- 日本への関心についてきいたところ、9割が「日本について知ること・学ぶことは楽しい」に「あてはまる（とてもあてはまる+ほぼあてはまる+ある程度あてはまる）」と回答。他の2項目でも8割以上が「あてはまる（とてもあてはまる+ほぼあてはまる+ある程度あてはまる）」と回答。

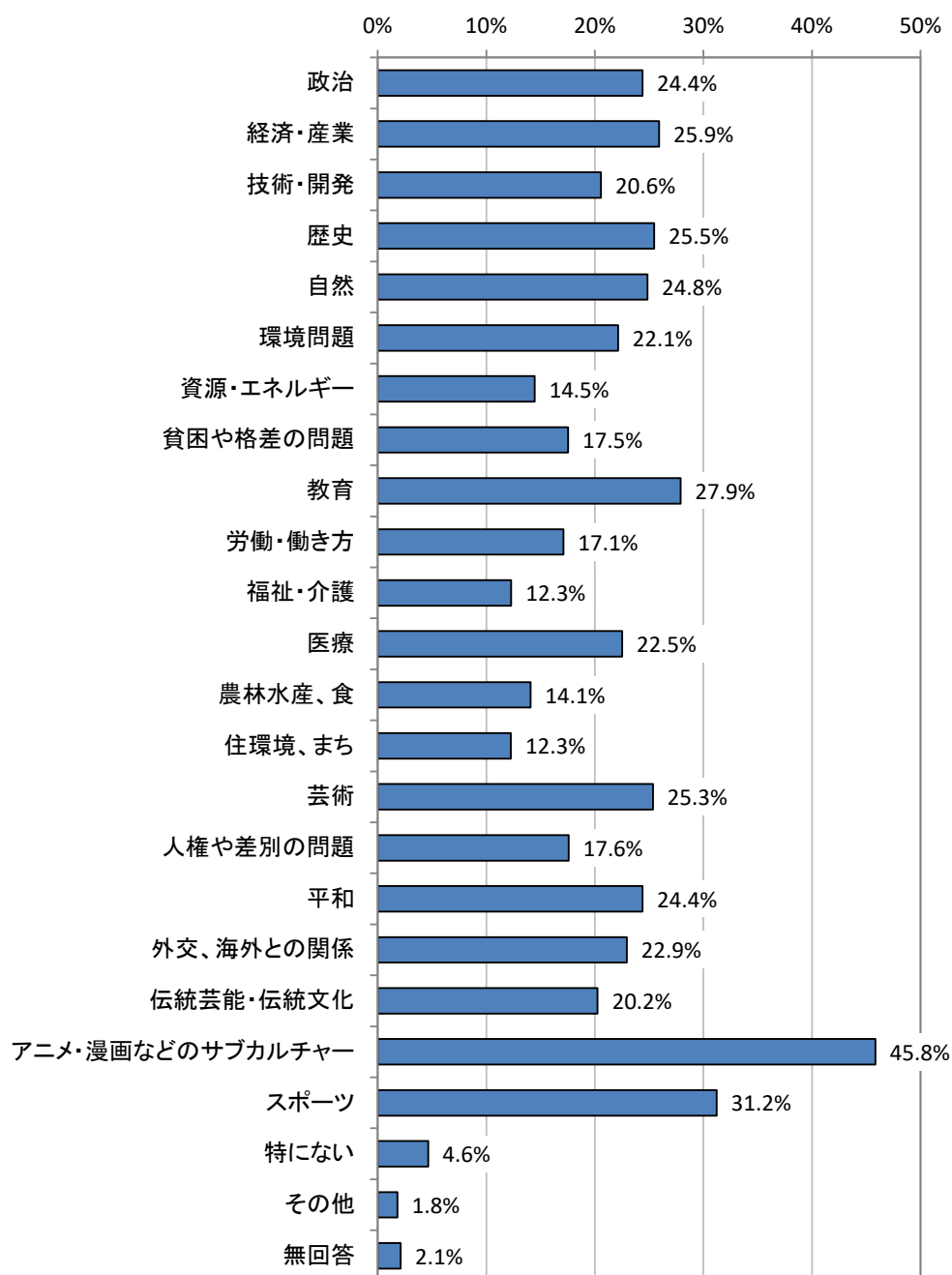
図表 3-12 日本への関心 (n=14,131)



3-3-2 関心がある分野

□ 日本について関心がある分野についてきいたところ、「アニメ・漫画などのサブカルチャー」が45.8%と最も割合が高く、次いで「スポーツ」が31.2%、「教育」が27.9%と続く。

図表 3-13 関心がある分野 (n=14,131)

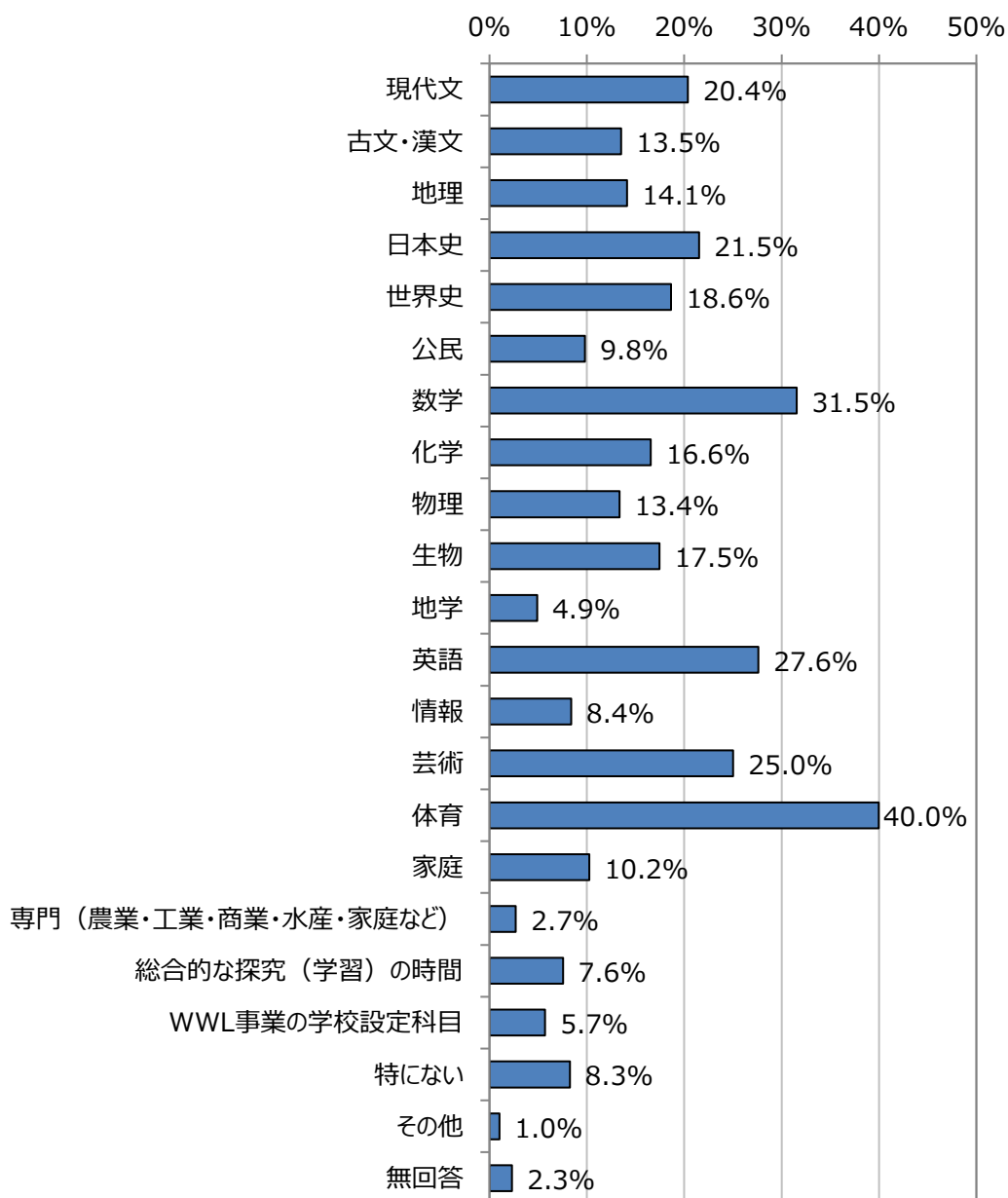


3-4 学校生活について

3-4-1 好きな科目

□ 好きな科目については、「体育」(40.0%)、「数学」(31.5%)、「英語」(27.6%)の割合が高い。

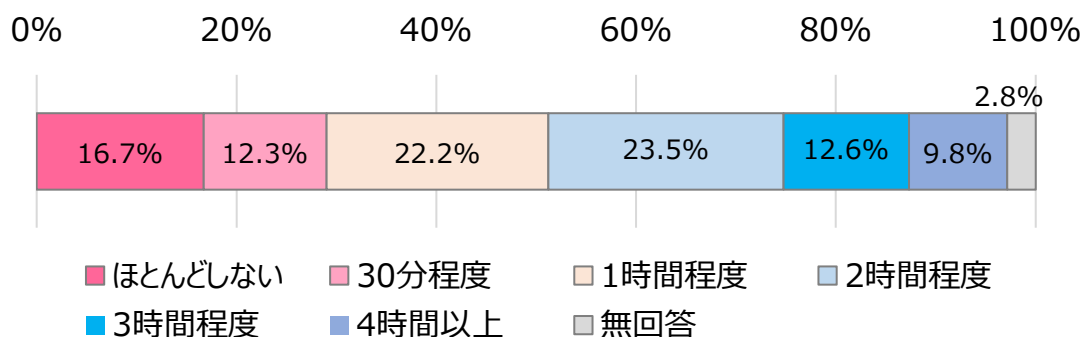
図表 3-14 好きな科目（複数回答）（n=14,131）



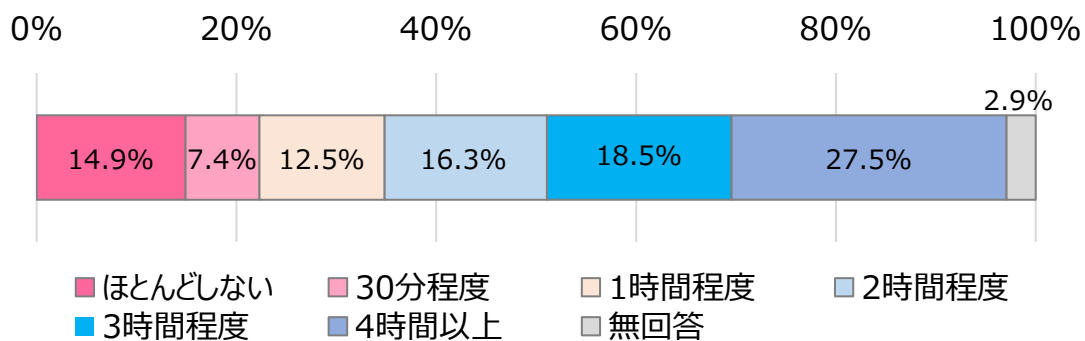
3-4-2 1日の勉強時間

- 1日の勉強時間は、平日は「2時間程度」が23.5%、「1時間程度」が22.2%である。
- 土日は「4時間以上」が27.5%、「3時間」が18.5%である。

図表 3-15 1日の勉強時間（平日）（n=14,131）



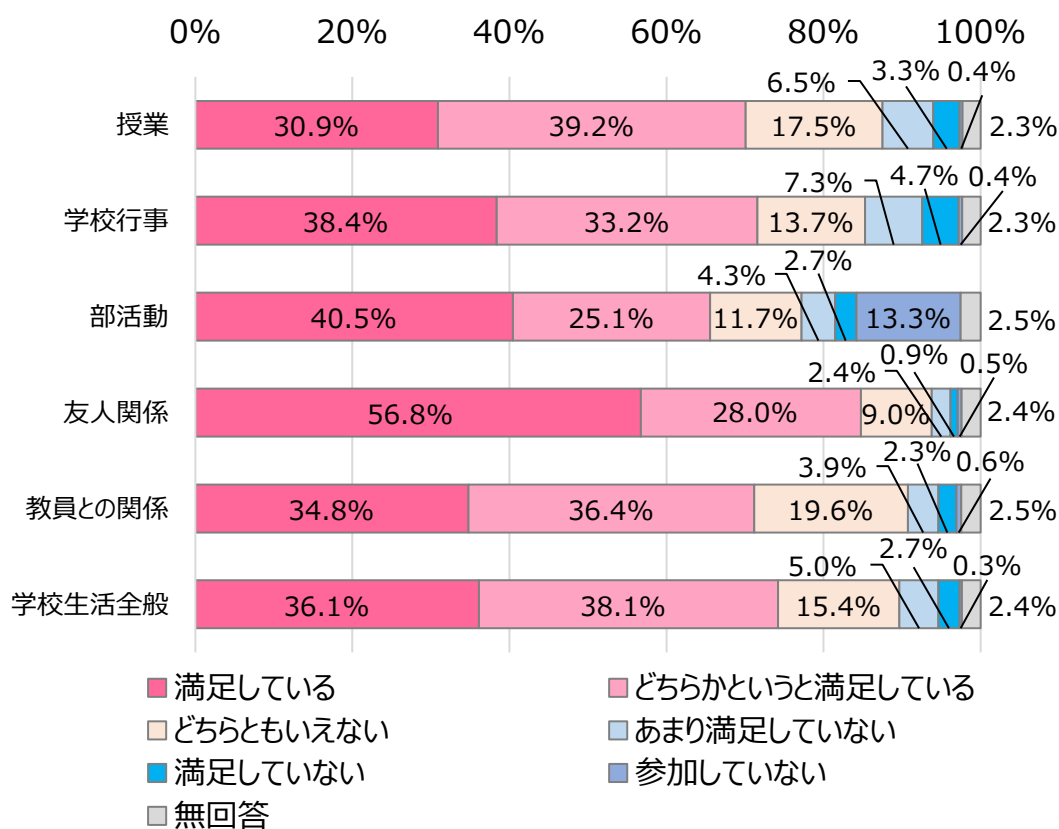
図表 3-16 1日の勉強時間（土日）（n=14,131）



3-4-3 学校生活への満足度

- 学校生活への満足度は、いずれの項目も「満足している（満足している+どちらかという満足している）」が6~8割と高い。特に、「友人関係」については84.8%が満足している。

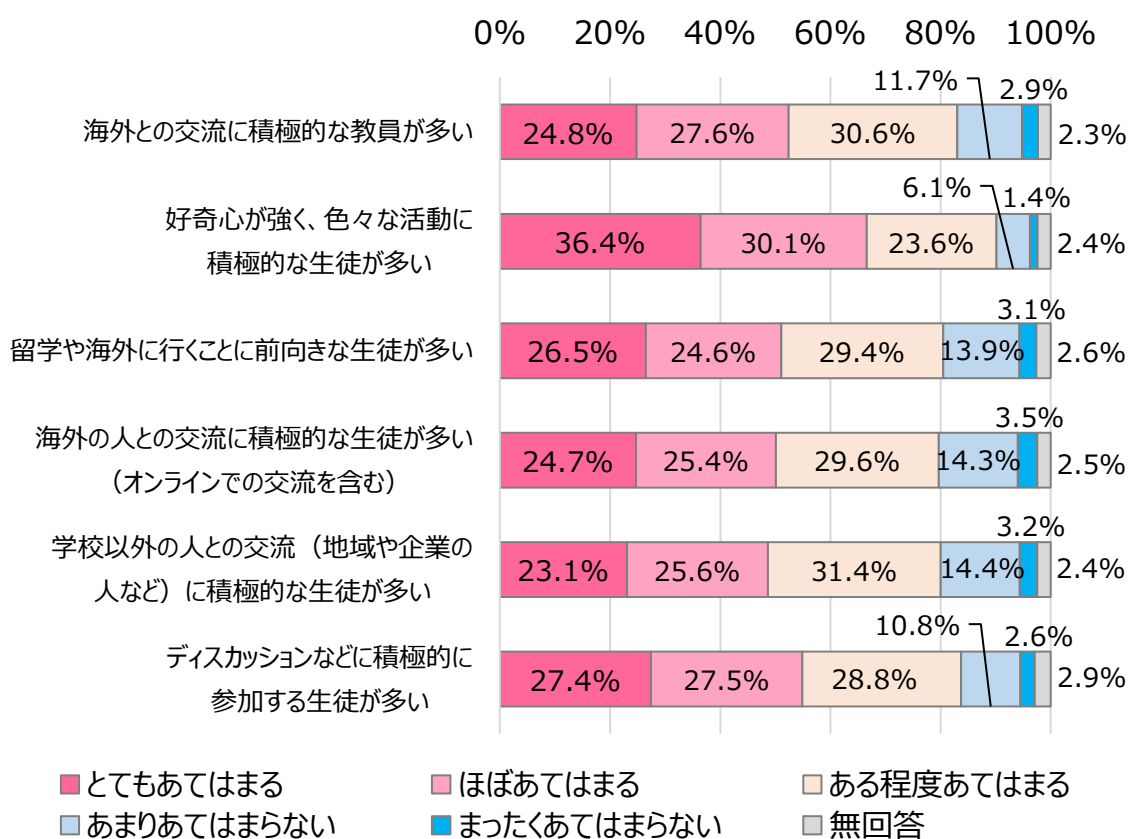
図表 3-17 学校生活への満足度 (n=14,131)



3-4-4 学校及び周囲の生徒について

- 学校及び周囲の生徒については、「好奇心が強く、色々な活動に積極的な生徒が多い」に「とてもあてはまる」と回答した割合が 36.4%と高い。

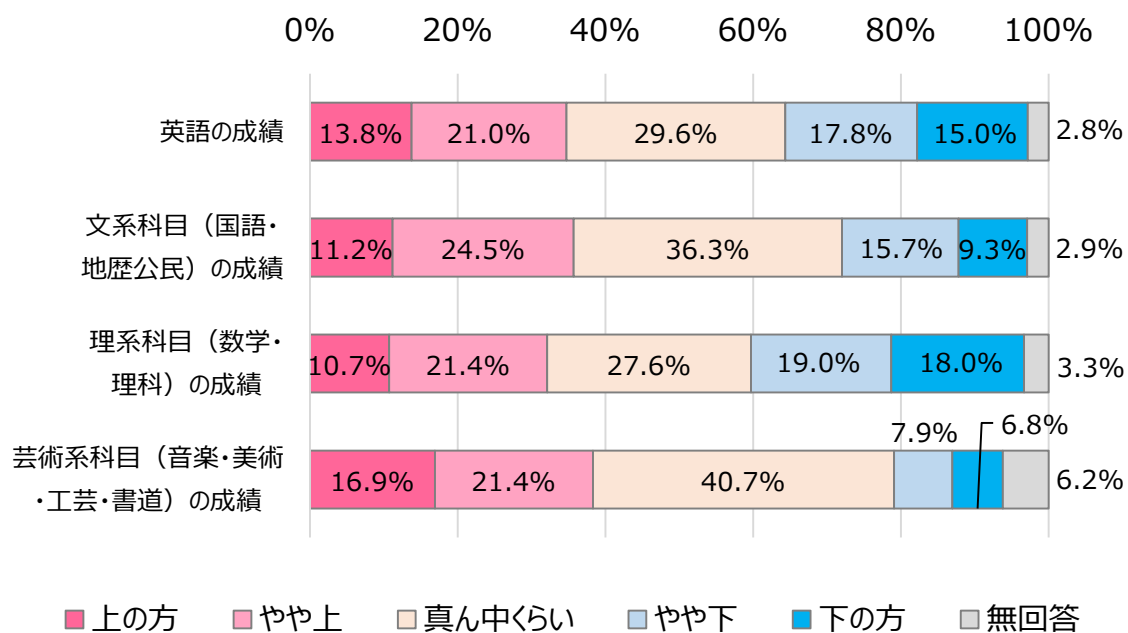
図表 3-18 学校及び周囲の生徒について (n=14,131)



3-4-5 学校の成績について

- 学校の成績については、下記のとおり。「理系科目（数学・理科）の成績」について、「下（やや下+下の方）」と回答した割合が、他と比べて高い。

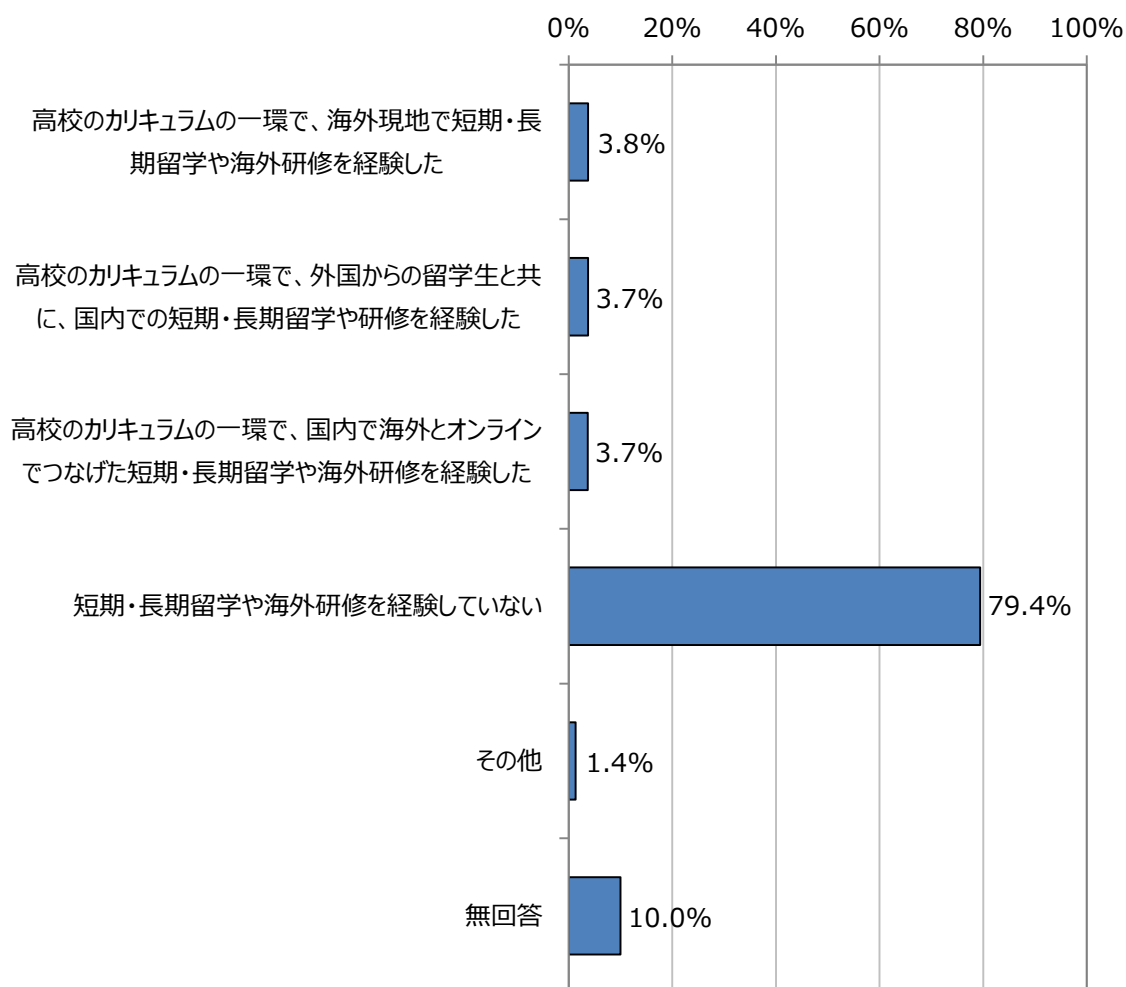
図表 3-19 学校の成績 (n=14,131)



3-4-6 海外研修経験

- 海外研修経験については、コロナ禍の影響もあり、79.4%の生徒が「短期・長期留学や海外研修を経験していない」と回答している。

図表 3-20 海外研修経験 (n=14,131)

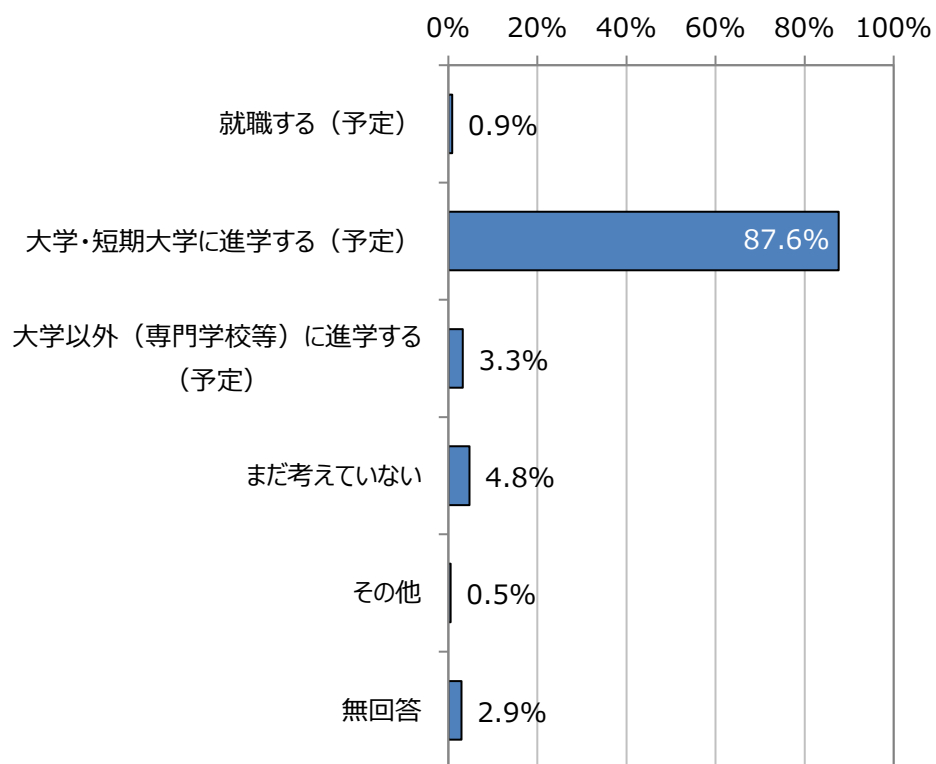


3-5 高校卒業後の進路について

3-5-1 高校卒業後の進路

- 高校卒業後の進路は、87.6%の生徒が「大学・短期大学に進学する（予定）」と回答している。

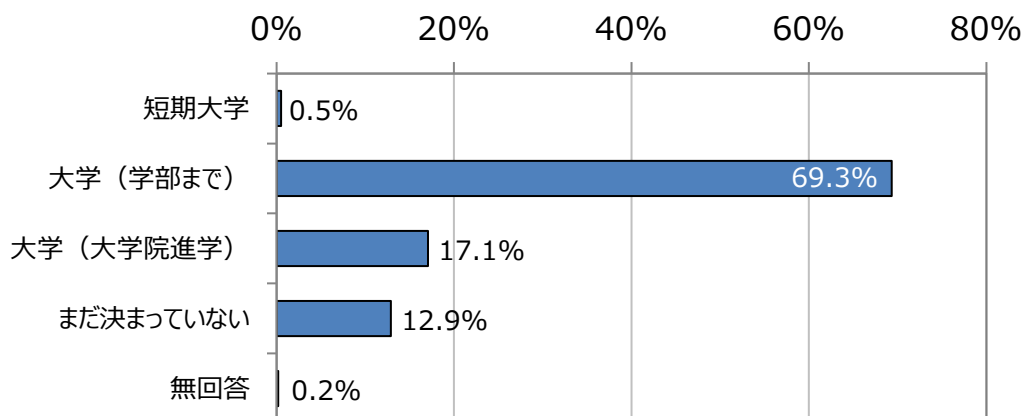
図表 3-21 高校卒業後の進路 (n=14,131)



3-5-2 目指している最終学歴

- 大学・短期大学に進学予定者に、目指している最終学歴をきいたところ、「大学(学部まで)」が69.3%と最も割合が高い。

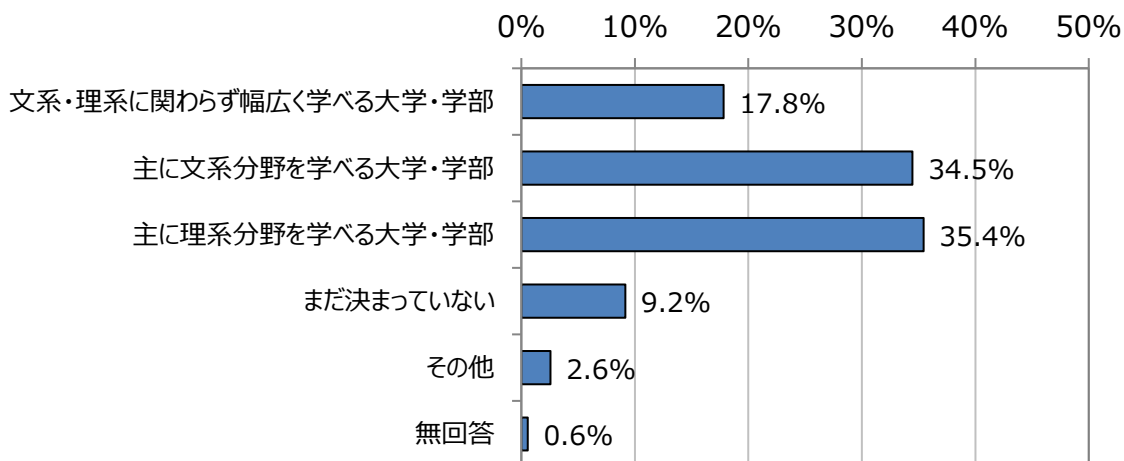
図表 3-22 目指している最終学歴 (n=12,381 : 大学・短期大学に進学する(予定)のみ)



3-5-3 目指している進学先

- 大学・短期大学に進学予定者に、目指している進学先をきいたところ、「主に文系分野を学べる大学・学部」「主に理系分野を学べる大学・学部」がそれぞれ3割以上であった。

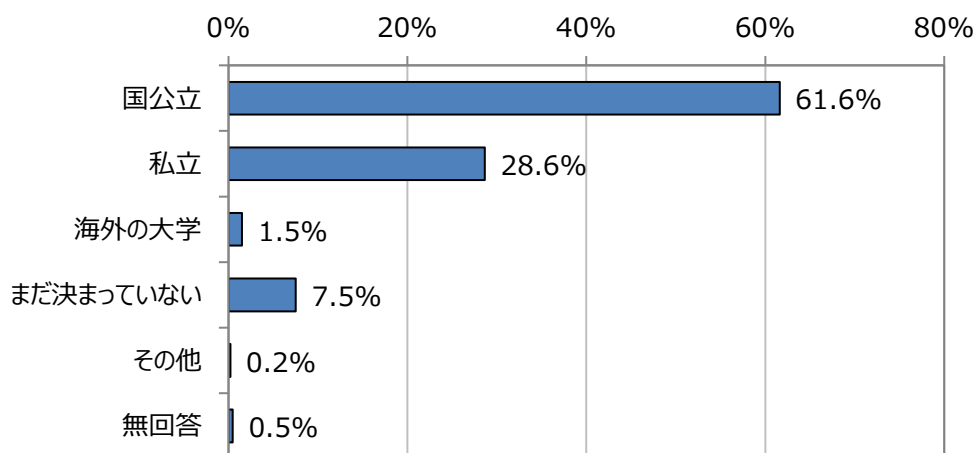
図表 3-23 目指している進学先 (n=12,381 : 大学・短期大学に進学する(予定)のみ)



3-5-4 第一志望の進学先

- 大学・短期大学に進学予定者に、第一志望の進学先をきいたところ、61.6%が「国公立」を志望している。

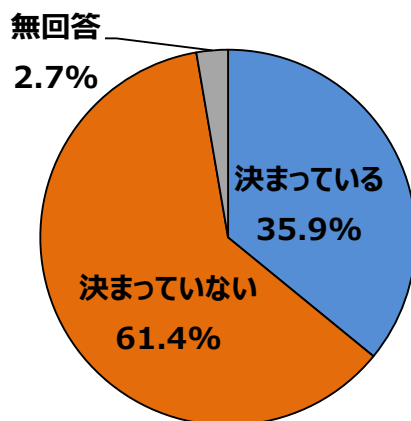
図表 3-24 第一志望の進学先 (n=12,381 : 大学・短期大学に進学する (予定) のみ)



3-5-5 将来なりたい職業

- 将来なりたい職業が決まっているかきいたところ、35.9%が「決まっている」と回答した。

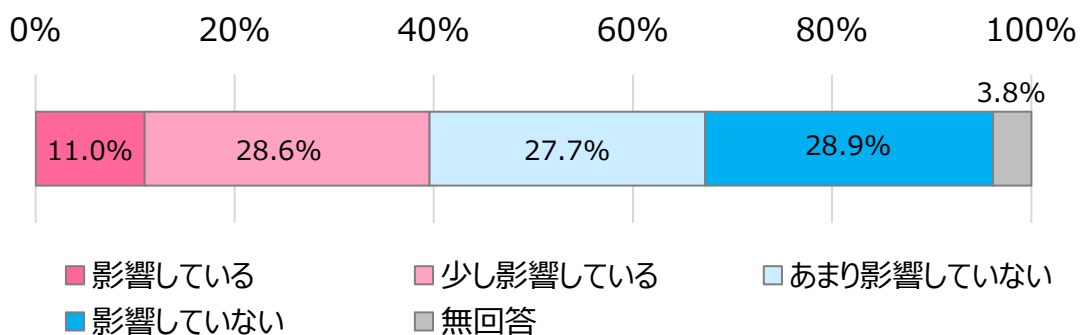
図表 3-25 将来なりたい職業 (n=14,131)



3-5-6 高校卒業後の進路選択やなりたい職業へのWWL事業の経験による影響

- 高校卒業後の進路選択や将来なりたい職業について、WWL事業での経験は、影響しているかきいたところ、39.6%の生徒が「影響している（影響している+少し影響している）」と回答した。

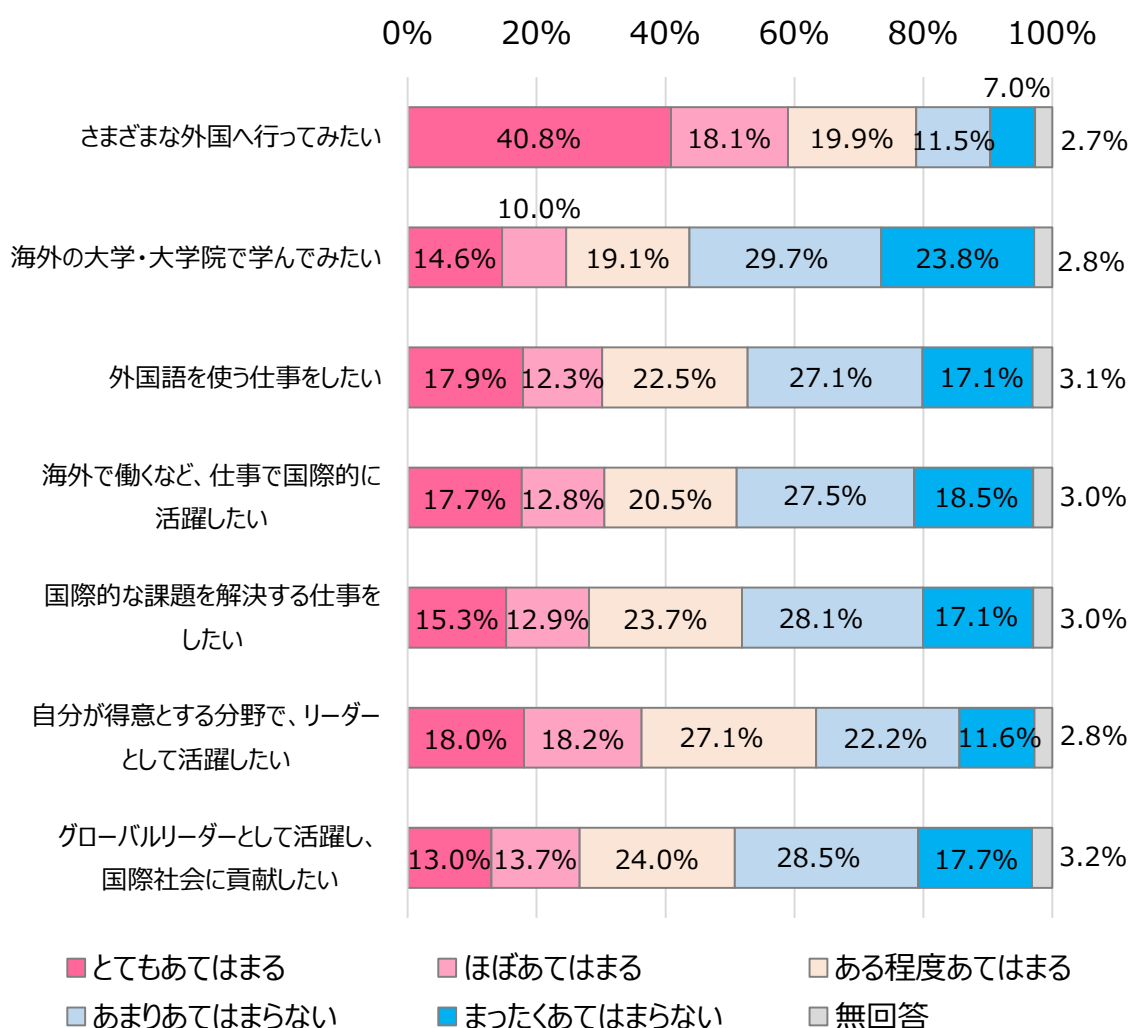
図表 3-26 高校卒業後の進路選択やなりたい職業へのWWL事業の経験による影響 (n=14,131)



3-5-7 将来の希望

□ 将来の希望について聞いたところ、78.8%の生徒が「さまざまな外国へ行ってみたい（とてもあてはまる+ほぼあてはまる+ある程度あてはまる）」と回答。

図表 3-27 将来の希望 (n=14,131)



3-6 WWL 事業参加生徒の成長の状況

3-6-1 分析の枠組み

- WWL 事業の成果目標として、「グローバルなマインドセット」「グローバルな資質・能力（グローバル・コンピテンシー）」「PPDAC(探究型行動)」が挙げられている。
- 生徒アンケートにおける下記項目により、WWL 事業参加生徒のこれらの項目の達成度を分析した。

図表 3-28 分析フレーム

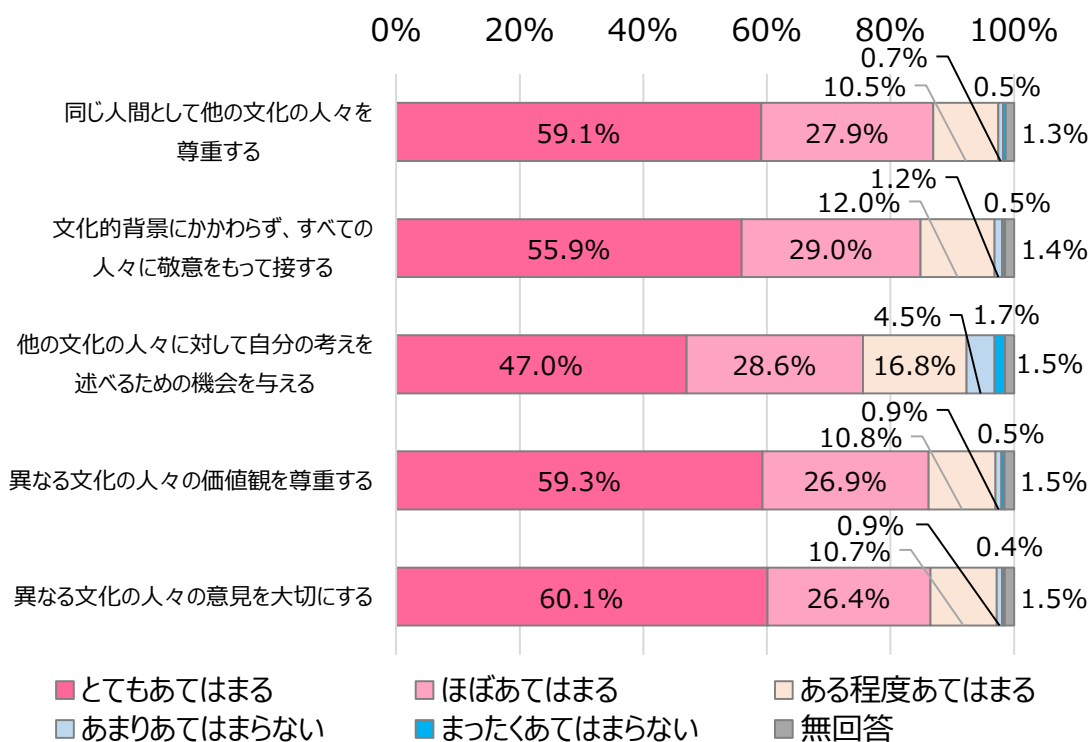
	グローバル コンピテンス (他文化の人々の尊重)	グローバル コンピテンス (グローバル思考)	異文化対応 コンピテンシー	外国語リテラシー	PPDACスキル
出典	OECD-PISA2018	OECD-PISA2018	筑波大学SGH事業調査	-	筑波大学SGH事業調査
質問文	次のようなことは、あなたにどのくらいあてはまりますか。(5段階)	次のようなことは、あなたにどのくらいあてはまりますか。(4段階)	あなたは、文化の違いから生じる、困った(困惑した)出来事(例えば、出会った外国人との言葉の壁、ジェスチャー・生活習慣・価値観の違い)に直面した際、その解決のため、以下に挙げる行動をとれると思いますか。(6段階)	次のことは、あなたにどのくらいあてはまりますか。(5段階)	あなたは、学校のグループワークや総合的な探究(学習)の時間での課題を解くときに、次のようなことができますか。(6段階)
選択肢	同じ人間として他の文化の人々を尊重する	自分自身を地球市民として考えている	必要ならば、最初に決めたことを変える	外国のさまざまな異文化に触れることは楽しい	さまざまな問題について、基礎となる知識を学習することができる
	文化的背景にかかわらず、すべての人々に敬意をもって接する	世界の一部の人が暮らしている劣悪な条件について、何かしなければと責任を感じる	自分と異なる立場の人の価値観を尊重する	日本語以外の本やインターネットを読むことができる	問題の重要度の根拠を見つけることができる
	他の文化の人々に対して自分の考えを述べるための機会を与える	自分の行動は他の国の人々に影響を与えることができると考えている	複数の視点から問題の原因を考える	外国の人と日本語以外の言語で会話ができる	生じている問題について、知識や経験を通して説明できる
	異なる文化の人々の価値観を尊重する	劣悪な職場環境で従業員を働かせていることで知られている企業の商品を買わないことは正しい	複数の選択肢を考える	英語でメールや文章が書ける	問題の原因を挙げ、重要度をまとめることができる
	異なる文化の人々の意見を大切ににする	世界の問題について、自分は何かできる	相手が意見を述べやすいように心がける	社会問題などについて英語でディスカッションできる	問題解決に向けて仮説を立てることができる
		地球環境について、気にかけることは重要である	相手との協力関係を築くように心がける		問題解決に合ったデータや情報を選択できる
			反対意見にも耳を傾ける		集めたデータや情報の正確さがわかる
					分析した結果から、重要な結論を導き出すことができる
					提案を適切にプレゼンテーションできる
				自分の発表に対する質問に適切に回答できる	

3-6-2 各項目の実態

(1) グローバルコンピテンス (他文化の人々の尊重)

□ グローバルコンピテンス (他文化の人々の尊重) については、いずれの項目も、「あてはまる (とてもあてはまる+ほぼあてはまる+ある程度あてはまる)」の割合が9割を超えている。

図表 3-29 グローバルコンピテンス (他文化の人々の尊重) (n=14,131)



図表 3-30 グローバルコンピテンス（他文化の人々の尊重）

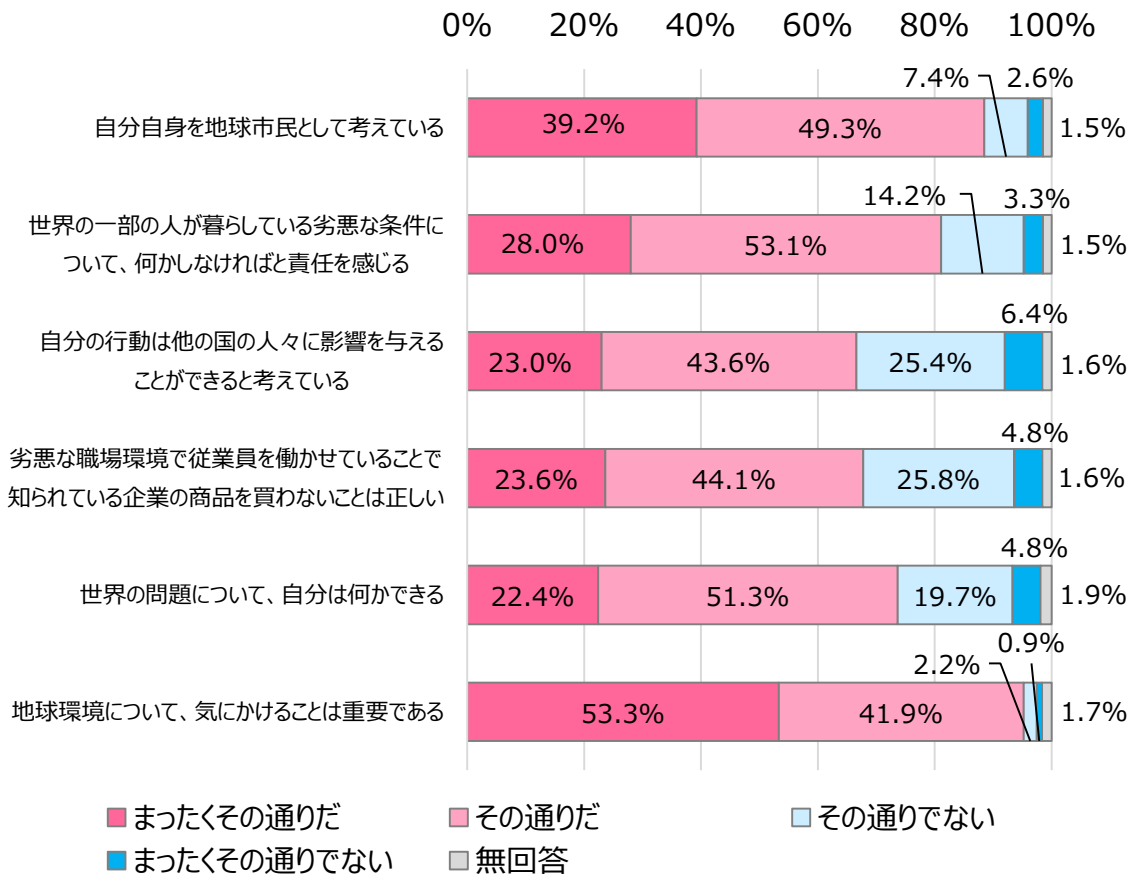
「とてもあてはまる＋ほぼあてはまる＋ある程度あてはまる」の合計と平均

「とてもあてはまる＋ほぼあてはまる＋ある程度あてはまる」	合計
同じ人間として他の文化の人々を尊重する	97.5%
文化的背景にかかわらず、すべての人々に敬意をもって接する	96.8%
他の文化の人々に対して自分の考えを述べるための機会を与える	92.3%
異なる文化の人々の価値観を尊重する	97.0%
異なる文化の人々の意見を大切にする	97.2%
平均	96.2%

(2) グローバルコンピテンス (グローバル思考)

□ グローバルコンピテンス (グローバル思考) については、「地球環境について、気にかけることは重要である」に「その通りだ (まったくその通りだ+その通りだ)」と回答した割合は、95.2%と高い。次いで「自分自身を地球市民として考えている」が 88.5%となっている。

図表 3-31 グローバルコンピテンス (グローバル思考) (n=14,131)



図表 3-32 グローバルコンピテンス（グローバル思考）

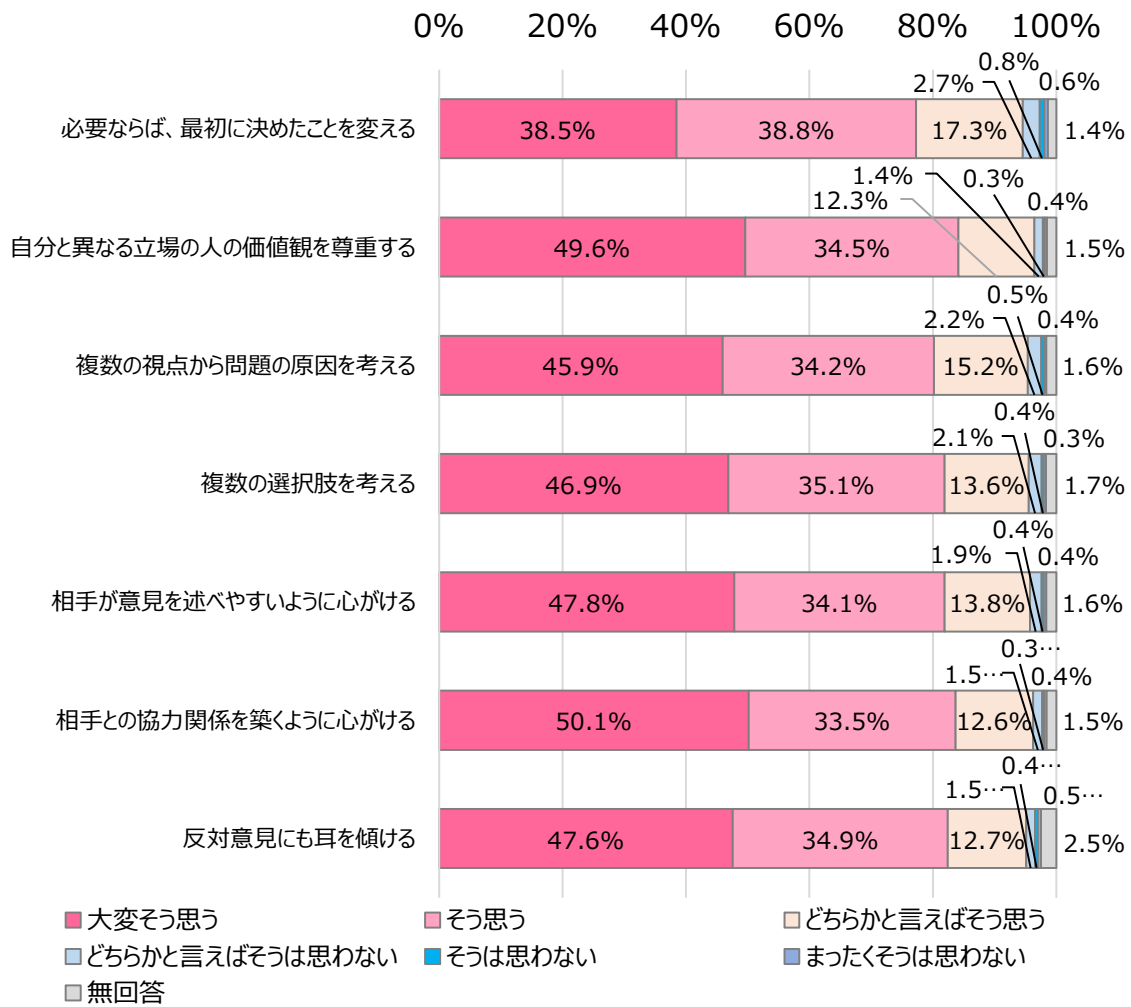
「まったくその通りだ+その通りだ」の合計と平均

「全くその通りだ+その通りだ」	合計
自分自身を地球市民として考えている	88.5%
世界の一部分の人が暮らしている劣悪な条件について、何かしなければと責任を感じる	81.1%
自分の行動は他の国の人々に影響を与えることができると考えている	66.6%
劣悪な職場環境で従業員を働かせていることで知られている企業の商品を買わないことは正しい	67.8%
世界の問題について、自分は何かできる	73.6%
地球環境について、気にかけることは重要である	95.2%
平均	78.8%

(3)異文化対応コンピテンシー

□ 異文化対応コンピテンシーについては、いずれの項目も 9 割を超えて「そう思う(大変そう思う+そう思う+どちらかと言えばそう思う)」と回答している。

図表 3-33 異文化対応コンピテンシー (n=14,131)



図表 3-34 異文化対応コンピテンシー

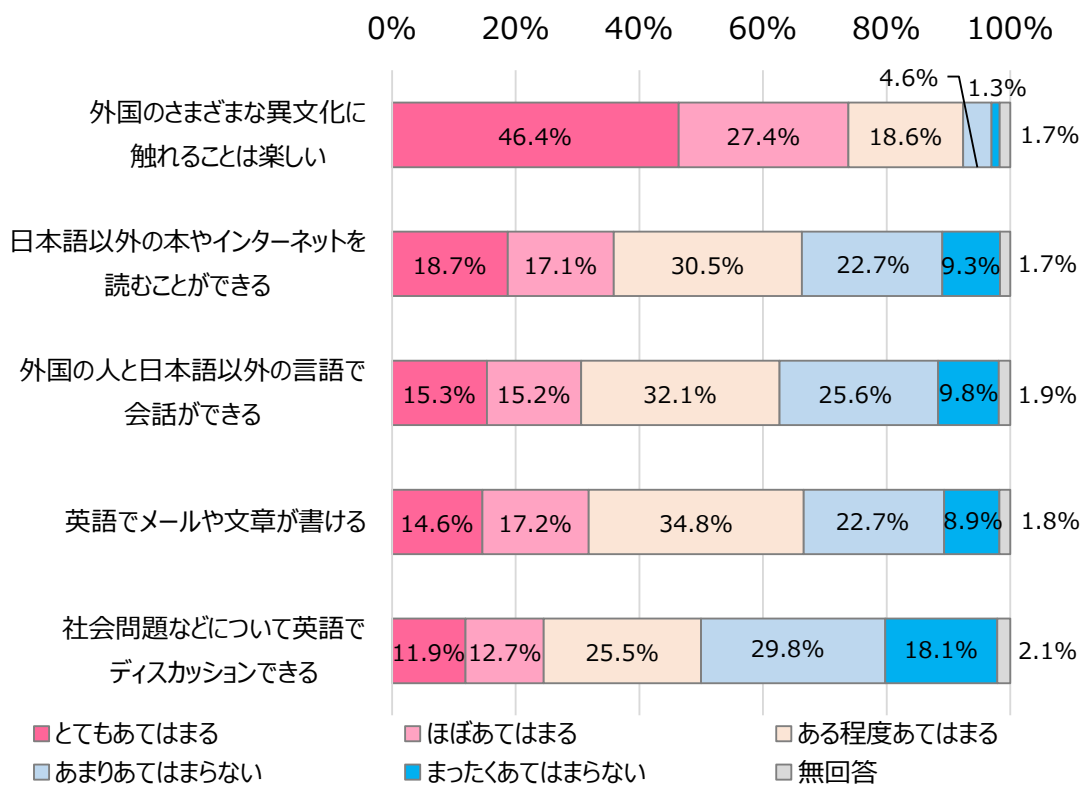
「大変そう思う+そう思う+どちらかと言えばそう思う」の合計と平均

「大変そう思う+そう思う+どちらかと言えばそう思う」	合計
必要ならば、最初に決めたことを変える	94.6%
自分と異なる立場の人の価値観を尊重する	96.5%
複数の視点から問題の原因を考える	95.4%
複数の選択肢を考える	95.5%
相手が意見を述べやすいように心がける	95.7%
相手との協力関係を築くように心がける	96.2%
反対意見にも耳を傾ける	95.1%
平均	95.6%

(4)外国語リテラシー

- 外国語リテラシーについては、「外国のさまざまな異文化に触れることは楽しい」に「あてはまる（とてもあてはまる＋ほぼあてはまる＋ある程度あてはまる）」と回答した割合が 92.4%と高い。
- その他の項目については 6 割程度にとどまり、「社会問題などについて英語でディスカッションできる」は、50.1%となっている。

図表 3-35 外国語リテラシー (n=14,131)



図表 3-36 外国語リテラシー (n=14,131)

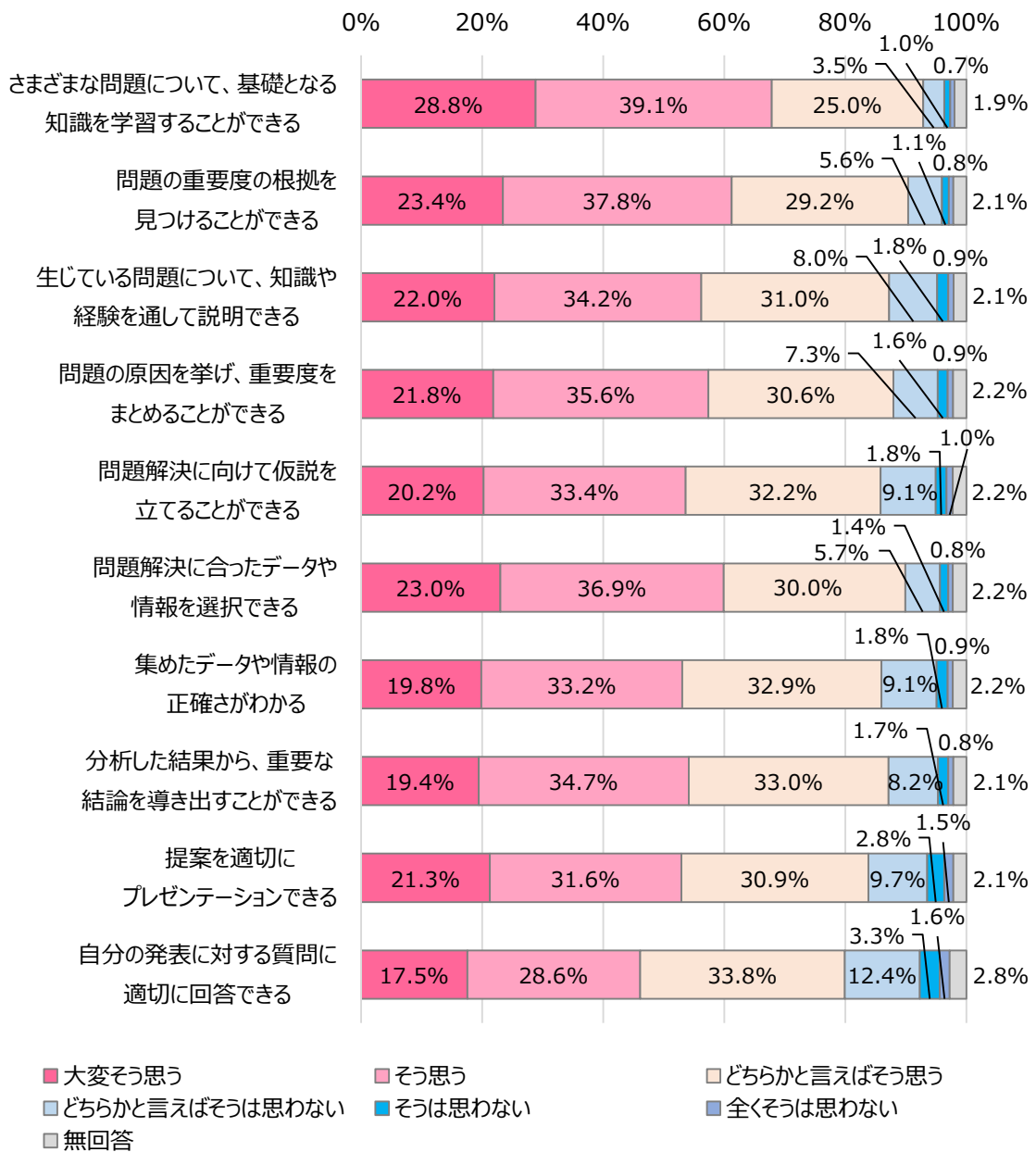
「とてもあてはまる+ほぼあてはまる+ある程度あてはまる」の合計と平均

「とてもあてはまる+ほぼあてはまる+ある程度あてはまる」	合計
外国のさまざまな異文化に触れることは楽しい	92.4%
日本語以外の本やインターネットを読むことができる	66.3%
外国の人と日本語以外の言語で会話ができる	62.7%
英語でメールや文章が書ける	66.6%
社会問題などについて英語でディスカッションできる	50.0%
平均	67.6%

(5) PPDAC スキル

□ PPDAC スキルについては、「さまざまな問題について、基礎となる知識を学習することができる」「問題の重要度の根拠を見つけることができる」に、「そう思う（大変そう思う＋そう思う＋どちらかと言えばそう思う）」と回答した割合は 9 割を超えて高い。

図表 3-37 PPDAC スキル (n=14,131)



図表 3-38 PPDAC スキル

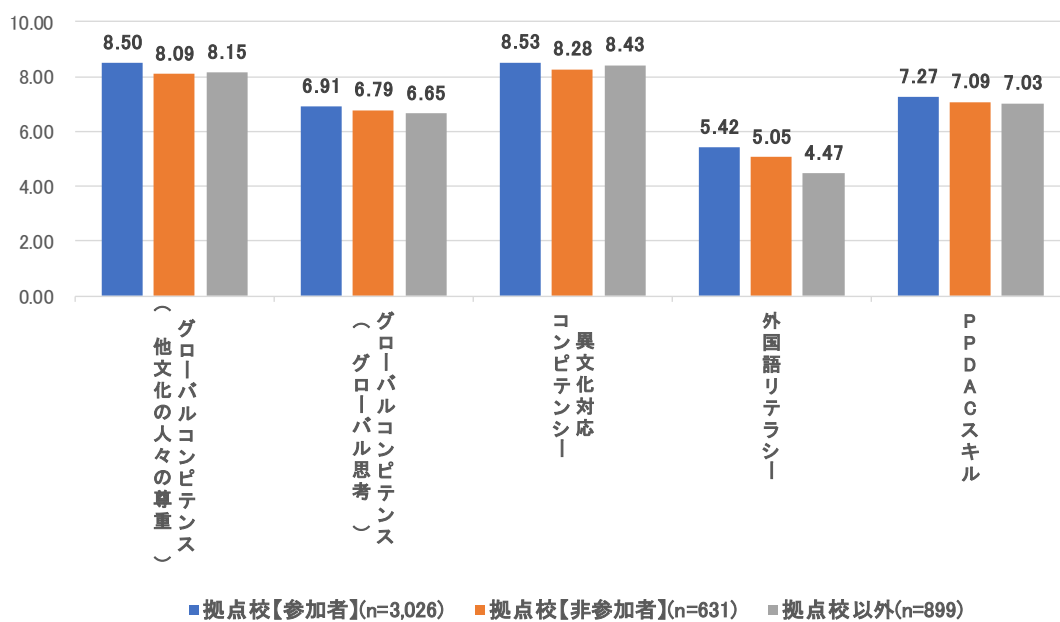
「大変そう思う+そう思う+どちらかと言えばそう思う」の合計と平均

「大変そう思う+そう思う+どちらかと言えばそう思う」	合計
さまざまな問題について、基礎となる知識を学習することができる	92.9%
問題の重要度の根拠を見つけることができる	90.4%
生じている問題について、知識や経験を通して説明できる	87.2%
問題の原因を挙げ、重要度をまとめることができる	88.0%
問題解決に向けて仮説を立てることができる	85.8%
問題解決に合ったデータや情報を選択できる	89.9%
集めたデータや情報の正確さがわかる	86.0%
分析した結果から、重要な結論を導き出すことができる	87.1%
提案を適切にプレゼンテーションできる	83.8%
自分の発表に対する質問に適切に回答できる	79.9%
平均	87.1%

3-6-3 WWL 事業参加者以外との比較

- WWL 事業参加者と参加者以外（拠点校で WWL 事業に参加していない生徒、拠点校（公立校）のある地域の拠点校以外の公立高校）の 5 項目の比較を行った。
- 前ページまでの 5 つの項目を 0～10 点で点数化して比較を行う。学年は 2 年生を対象とした。
- その結果、いずれの項目も WWL 事業参加者が高くなっている。特に、「外国語リテラシー」の差が大きい。

図表 3-39 5 つの項目の比較

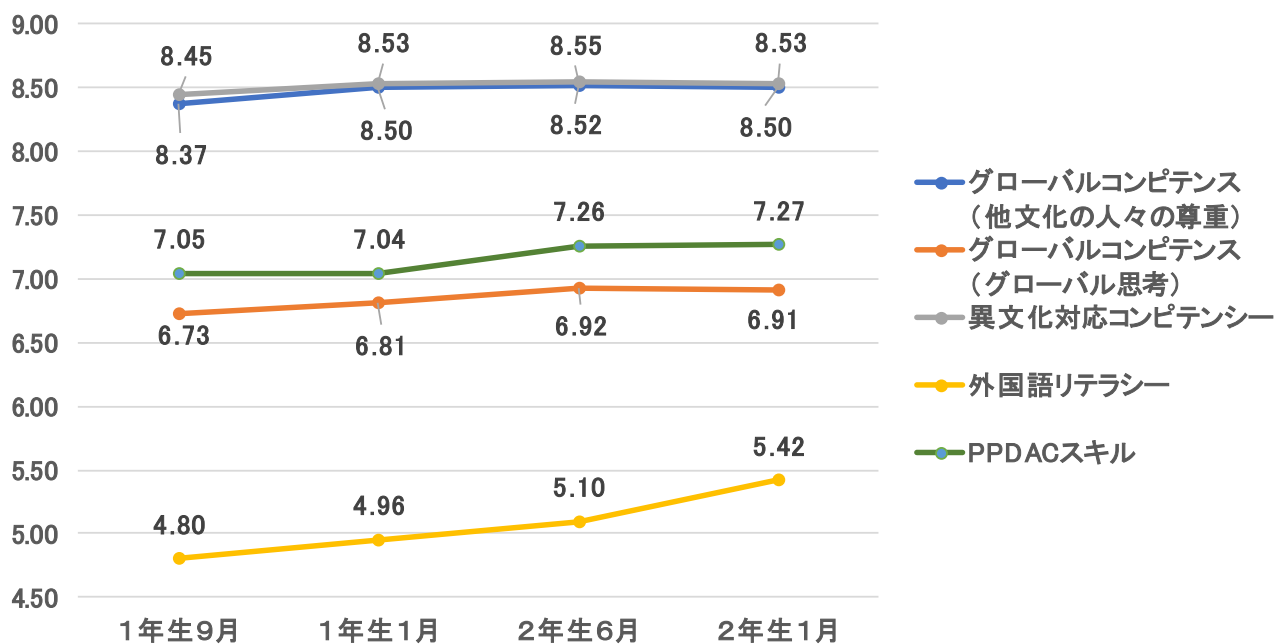


3-7 生徒の2年間の成長の状況

3-7-1 2年間の変化

- 本節では、生徒アンケートを4回とも回答した今年度2年生を対象に、前節の5項目の成長度を分析する。
- 前ページの5つの項目を0~10点で点数化し、1年生から2年生にかけての変化をみた。その結果、いずれの項目も、1年生9月と比較して2年生1月の方がわずかではあるが点数が高く、2年間での成長がみられる。
- 特に「外国語リテラシー」については4回の調査で着実に上昇している。また、「PPDACスキル」については、1年から2年生にかけて点数が上昇している。

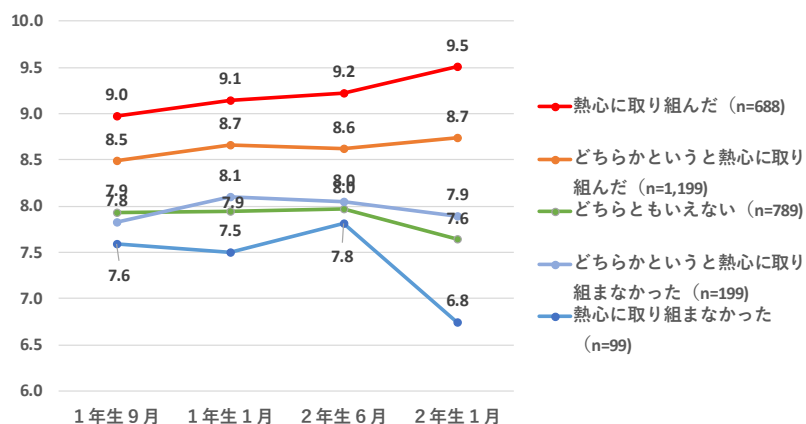
図表 3-40 5つの項目の変化（アンケート4回参加2年生 n=3,026）



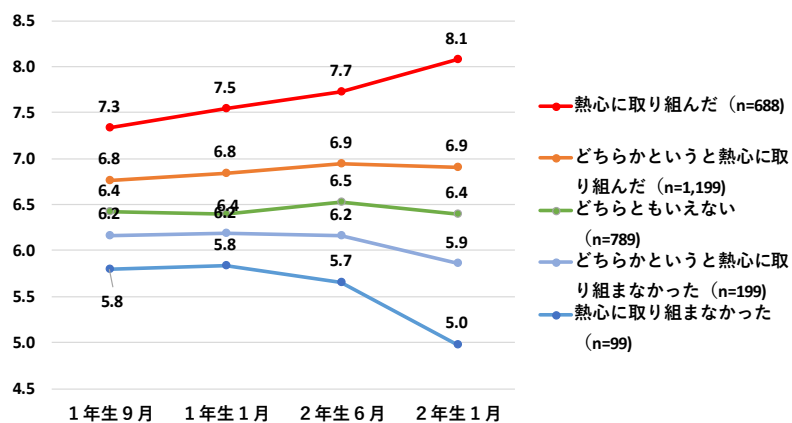
3-7-2 熱心度との関係

- WWL 事業の総合熱心度（5 段階）別に、5 つの項目の 4 時点での比較を行った。
- 結果、「熱心に取り組んだ」生徒は、1 年生から 2 年生にかけて 5 つの項目の点数が高くなっている。
- 一方、「どちらともいえない」「どちらかという熱心に取り組まなかった」「熱心に取り組んでいなかった」生徒は 1 年から 2 年にかけて点数が横ばいか低下している。
- 昨年度の結果でもみられたが、WWL 事業への取組の熱心度合いで、2 年間で生徒の成長に大きな差が生じている。特に、熱心に取り組んだ生徒は、2 年生の後半での能力の伸びが大きい。

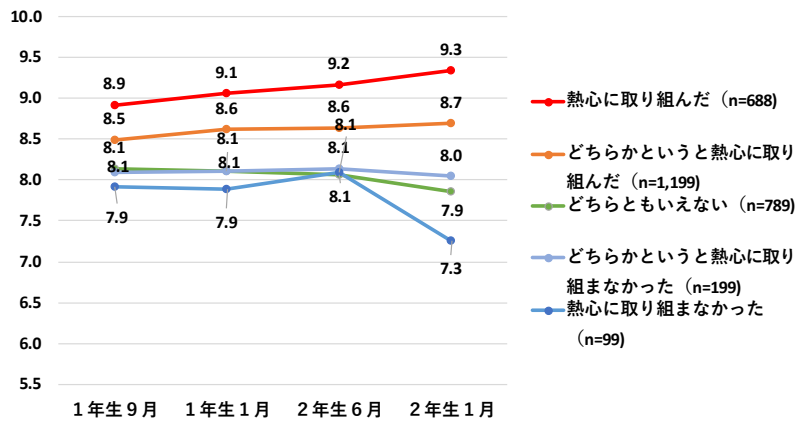
図表 3-41 グローバルコンピテンス（他文化の人々の尊重）（2 年生）



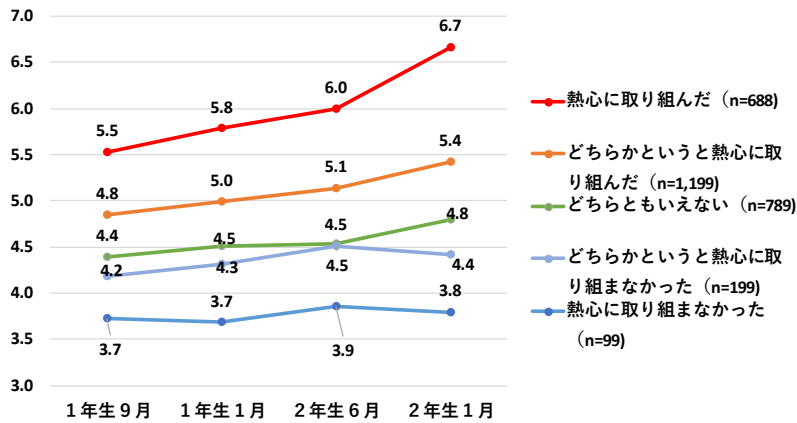
図表 3-42 グローバルコンピテンス（グローバル思考）（2 年生）



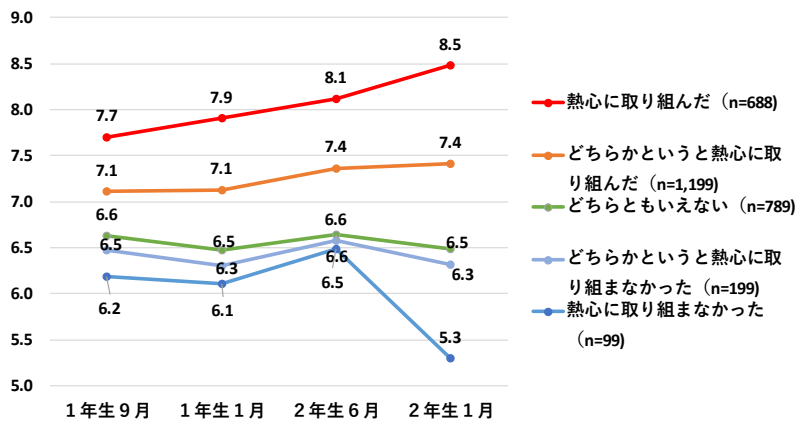
図表 3-43 異文化対応コンピテンシー (2年生)



図表 3-44 外国語リテラシー (2年生)

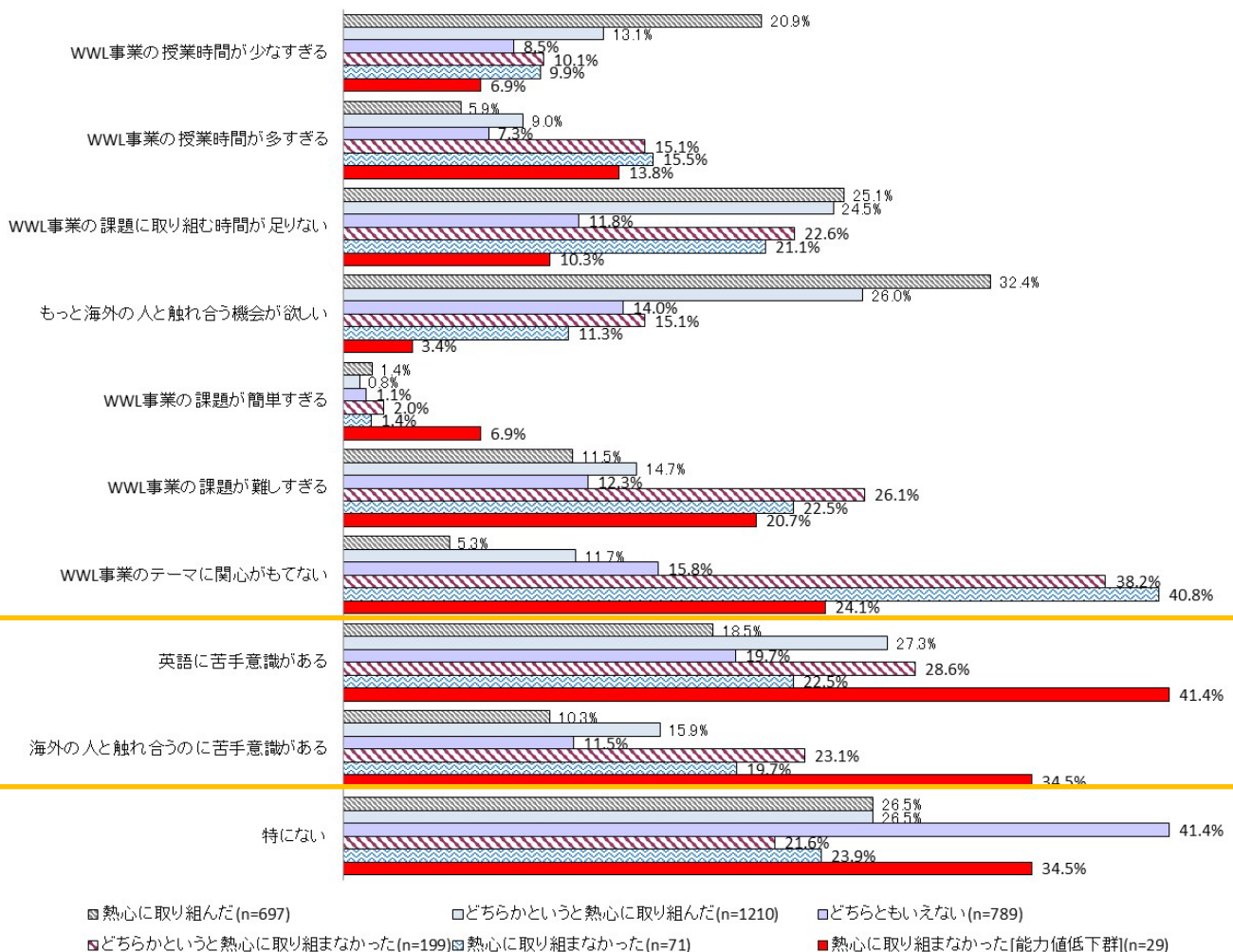


図表 3-45 PPDACスキル (2年生)

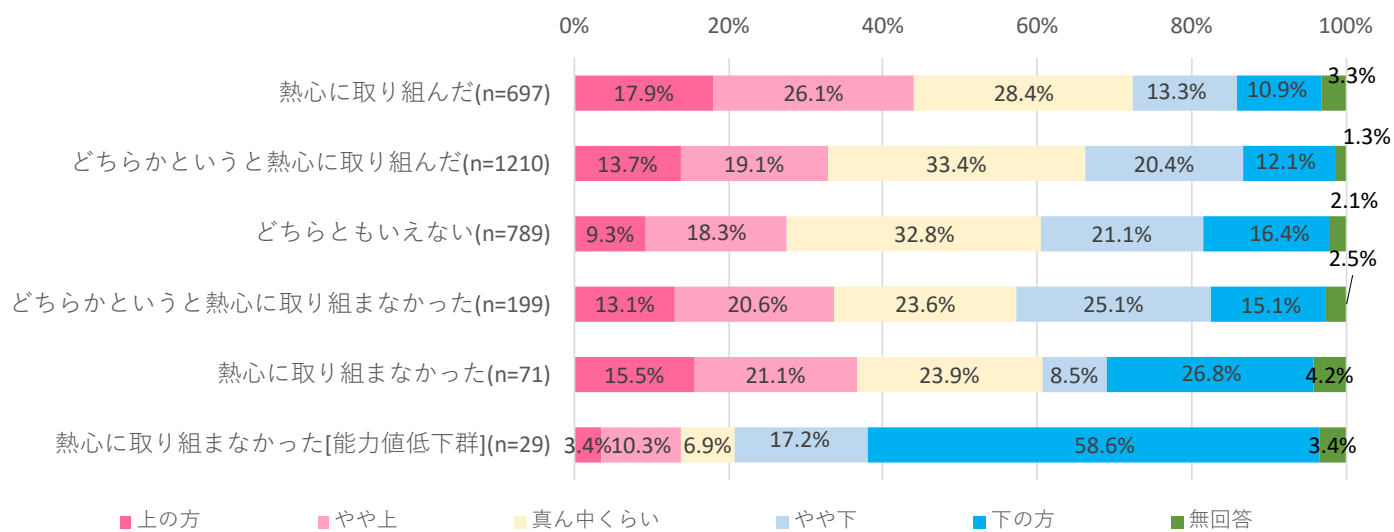


□ なお、「熱心に取り組んでいなかった」生徒の能力の低下について、詳細にみたところ、一部の生徒（29 サンプル）での大きな点数の低下が全体に影響を及ぼしていた。大きく能力が低下した対象群は、「英語に苦手意識がある」「海外の人と触れ合うのに苦手意識がある」「英語の成績が低い」といった特徴がみられた。全体の割合としては小さいが、英語の苦手意識がきっかけで活動に参加できずに、（周りの生徒との比較から）自信を失ってしまう生徒も存在する可能性がある。

図表 3-46 熱心度別 WWL 事業の問題点や困っていること（2 年生）



図表 3-47 熱心度別 英語の成績 (2年生)



3-7-3 WWL 事業の取組内容との関係

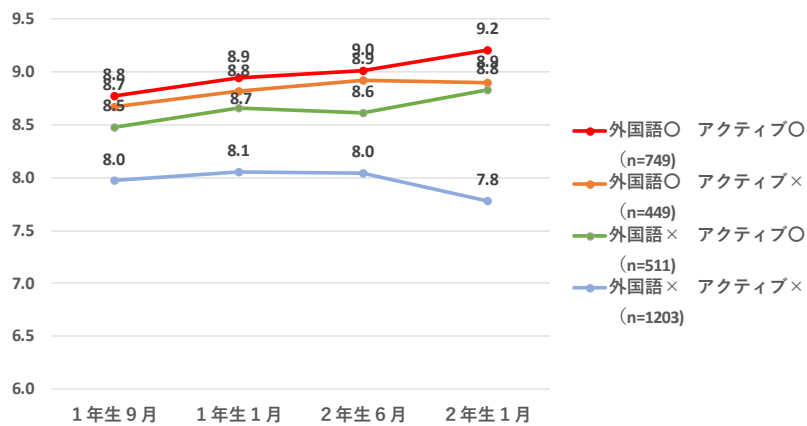
(1)分析枠組み

- 次に、WWL 事業のどの取組が、生徒のどの能力の成長に影響するかを分析する。
WWL 事業の取組のうち、全生徒の取組機会が多い項目について取り上げ、取組の熱心度と 5 つの項目の変化の関係をみる。
- 外国語活動に関する 4 つの取り組みを「外国語に関する取組」とし、その熱心度で 2 分類した。
- フィールドワーク、グループワーク、プレゼンテーションを「アクティブラーニングに関する取組」とし、その熱心度で 2 分類した。
- 2 分類×2 分類=計 4 分類で、5 つの能力項目の変化をみる。

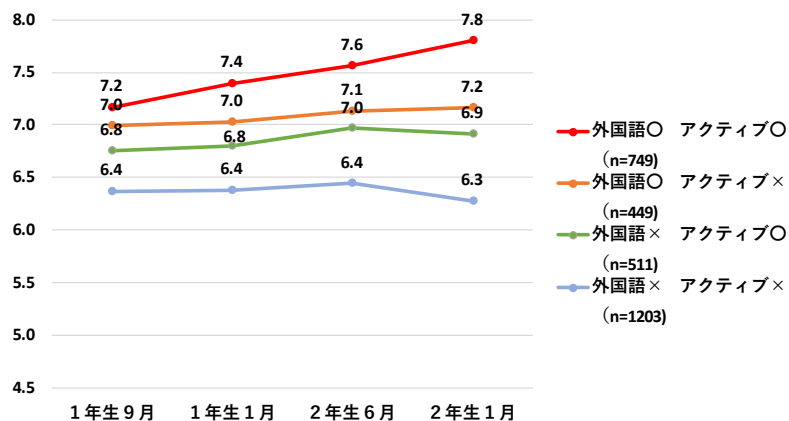
(2)取組内容別の成長度

- 生徒の「外国語に関する取組」「アクティブラーニングに関する取組」の熱心度別に、4時点での5項目の比較を行った。結果、各取組に熱心な方が、5項目の能力は伸びている。
- 特に、「グローバル思考」については、「外国語に関する取組」「アクティブラーニングに関する取組」の両方を熱心に取り組むことで大きな成長につながっている。
- 「外国語リテラシー」は、「外国語に関する取組」を熱心に取り組んでいると伸びている。「PPDACスキル」は、「アクティブラーニングに関する取組」を熱心に取り組んでいると伸びている。

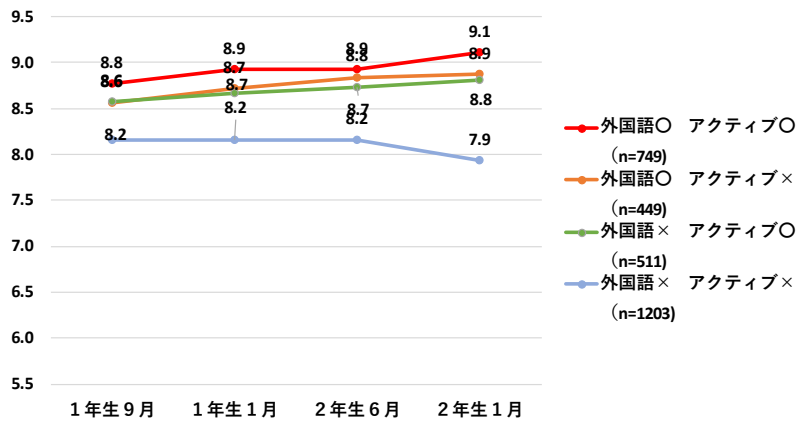
図表 3-48 グローバルコンピテンス（他文化の人々の尊重）（2年生）



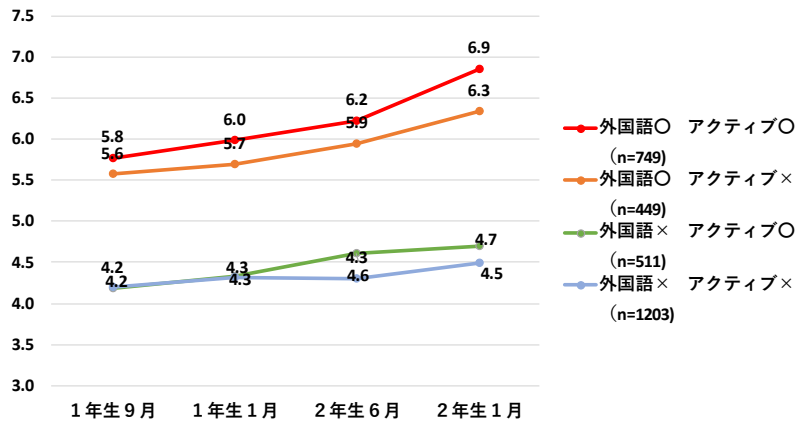
図表 3-49 グローバルコンピテンス（グローバル思考）（2年生）



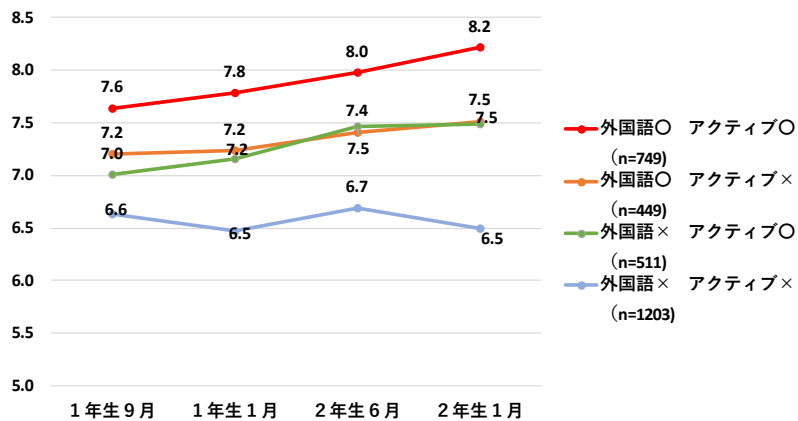
図表 3-50 異文化対応コンピテンシー (2年生)



図表 3-51 外国語リテラシー (2年生)



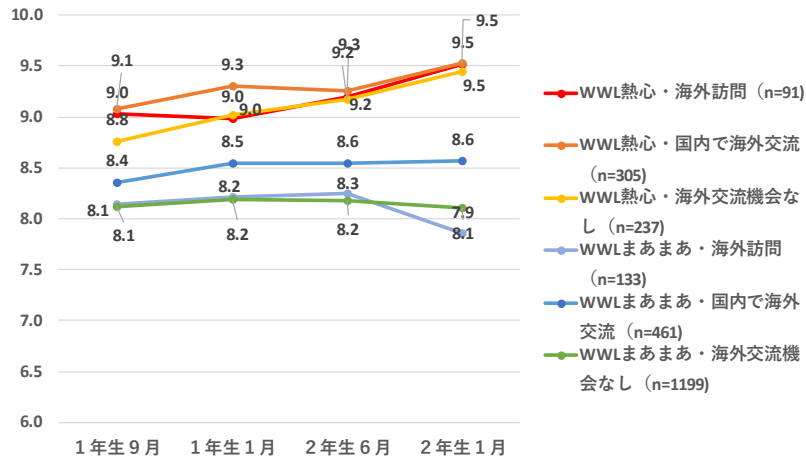
図表 3-52 PPDACスキル (2年生)



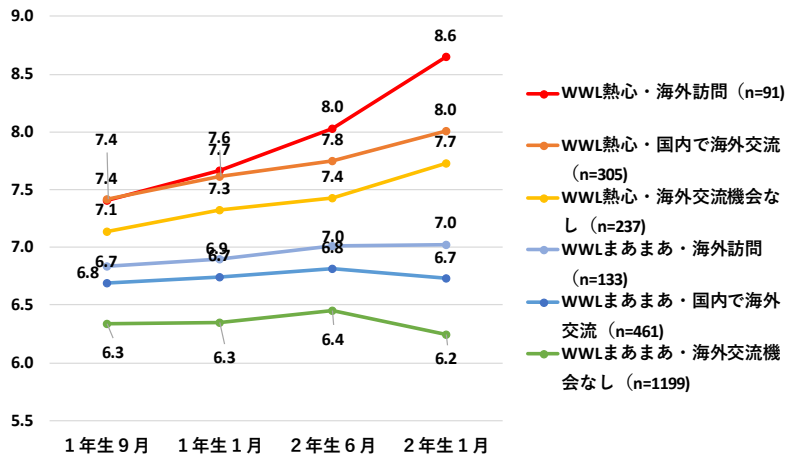
3-7-4 海外体験の有無と成長の関係

- 令和4年度では一部の学校で、WWL事業における海外研修等が再開された。そこで、「海外訪問あり」「国内で海外交流」「海外交流なし」の3区分で、能力との関係を見る。なお、能力の伸びに影響を与える「WWL事業の熱心度」で2分類し、 $3 \times 2 = 6$ 分類で分析を行った。
- その結果、能力の伸びは、全体的に「WWL事業に熱心」な生徒がそうでない生徒より高くなっている。各項目の成長には、WWL事業に熱心に取り組むことが大前提といえる。
- その中で、「WWL事業に熱心で、かつ海外訪問をした」生徒は、訪問していない生徒よりも、特に「グローバル思考」「外国語リテラシー」が2年生の後半（おそらく海外訪問前後）に高く伸びている。この2項目の成長には、海外での実体験が有効だと推察される。
- 特に「外国語リテラシー」については、WWL事業に熱心でなくても、「WWL熱心・海外交流なし」の生徒より伸びが大きい。海外訪問が、能力獲得への影響が強いことがうかがえる。

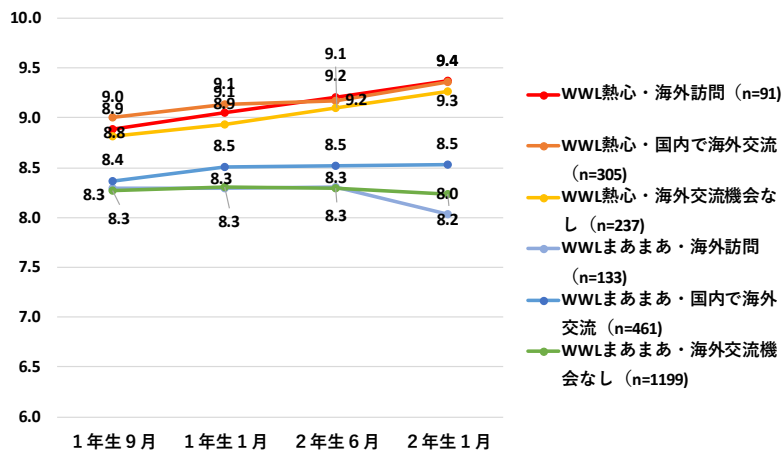
図表 3-53 グローバルコンピテンス（他文化の人々の尊重）（2年生）



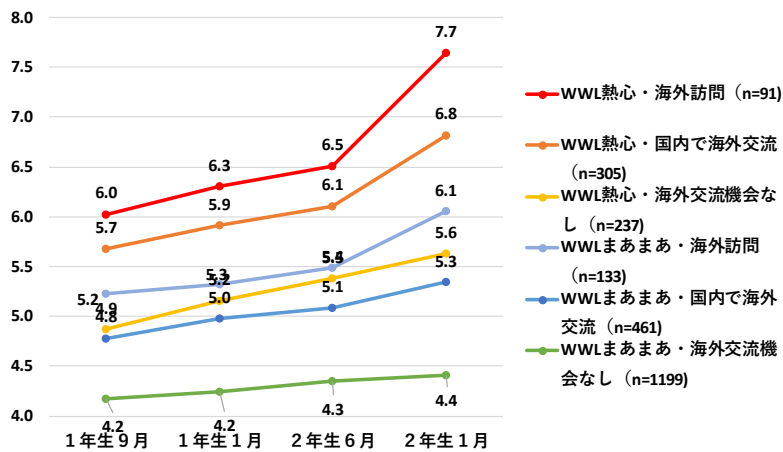
図表 3-54 グローバルコンピテンス（グローバル思考）（2年生）



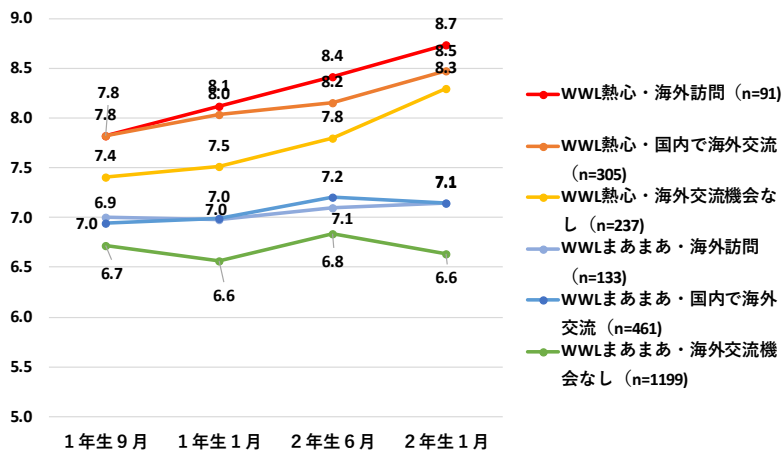
図表 3-55 異文化対応コンピテンシー (2年生)



図表 3-56 外国語リテラシー (2年生)



図表 3-57 PPDAC スキル (2年生)



3-8 熱心度の変化とその要因

3-8-1 概要

- 生徒の WWL 事業への熱心度を高めるにはどうしたらいいかを分析するため、1 年生 1 月から 2 年生 1 月にかけての WWL 事業への熱心さにより生徒を分類し、その特徴をみる。
- 分類結果は下記の通り。特に 1 年から 2 年生にかけて熱心度が高くなった「より熱心になった（どちらかという熱心⇒熱心）」「熱心になった（どちらともいえない以下⇒どちらかという熱心以上）」を中心に分析を行う。

図表 3-58 WWL 事業への熱心度による分類 (2 年生)

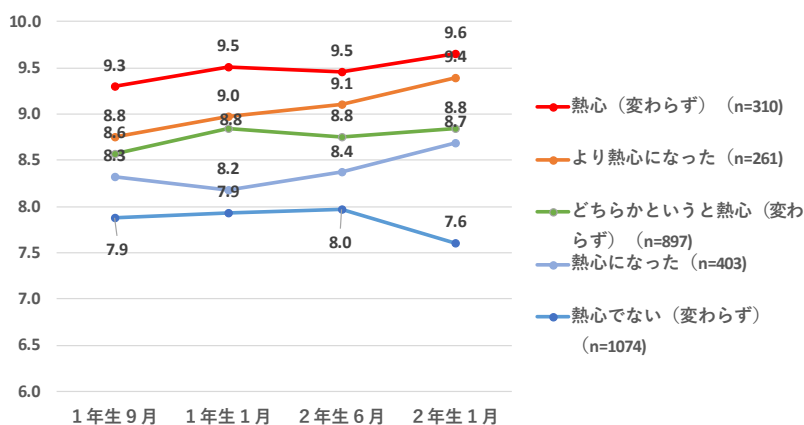
		2 年生 1 月					
		全体	熱心に取り組んだ	どちらかという熱心に取り組んだ	どちらともいえない	どちらかという熱心に取り組まなかった	熱心に取り組まなかった
1 年 生 1 月	全体	2976 (100.0%)	690 (23.2%)	1201 (40.4%)	787 (26.4%)	199 (6.7%)	99 (3.3%)
	熱心に取り組んだ	609 (100.0%)	316 (51.9%)	226 (37.1%)	50 (8.2%)	10 (1.6%)	7 (1.1%)
	どちらかという熱心に取り組んだ	1292 (100.0%)	264 (20.4%)	680 (52.6%)	268 (20.7%)	63 (4.9%)	17 (1.3%)
	どちらともいえない	807 (100.0%)	87 (10.8%)	248 (30.7%)	362 (44.9%)	78 (9.7%)	32 (4.0%)
	どちらかという熱心に取り組まなかった	188 (100.0%)	20 (10.6%)	38 (20.2%)	69 (36.7%)	40 (21.3%)	21 (11.2%)
	熱心に取り組まなかった	80 (100.0%)	3 (3.8%)	9 (11.3%)	38 (47.5%)	8 (10.0%)	22 (27.5%)

	熱心(変わらず)
	より熱心になった
	どちらかという熱心(変わらず)
	熱心になった
	熱心でない(変わらず)

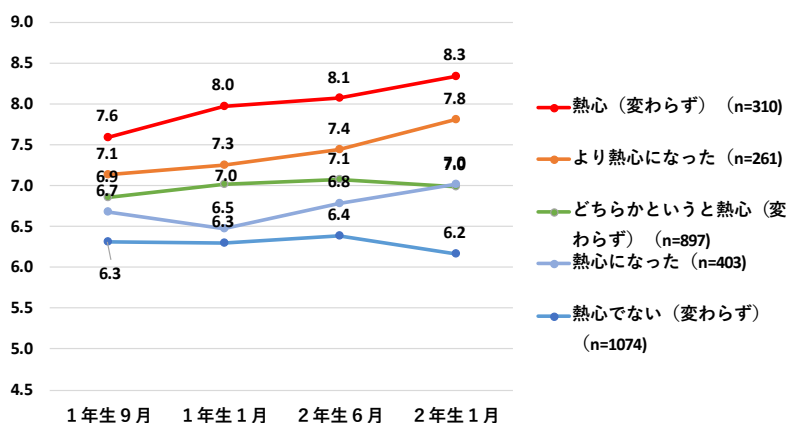
3-8-2 能力項目との関係

- 1年生から2年生にかけてのWWL事業への熱心さの変化と能力の変化の関係をみる。
- 1年生から2年生にかけて熱心になった生徒は、各能力項目も大きく伸びている。1年生から変わらず熱心な生徒は元の能力も高く、かつ能力も高いため点数的には追いつかないが、「より熱心になった(どちらかという熱心⇒熱心)」「熱心になった(どちらともいえない以下⇒どちらかという熱心以上)」が伸び率は高い。

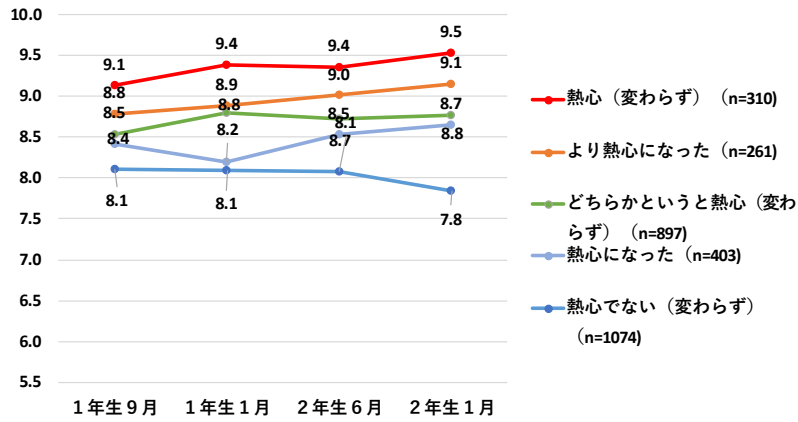
図表 3-59 グローバルコンピテンス (他文化の人々の尊重) (2年生)



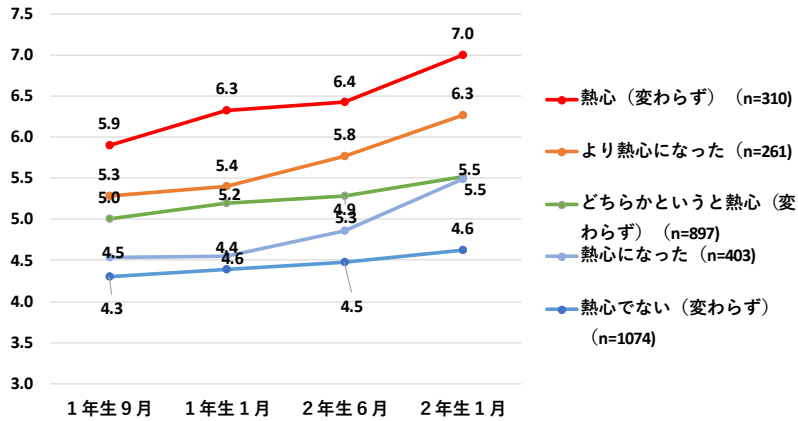
図表 3-60 グローバルコンピテンス (グローバル思考) (2年生)



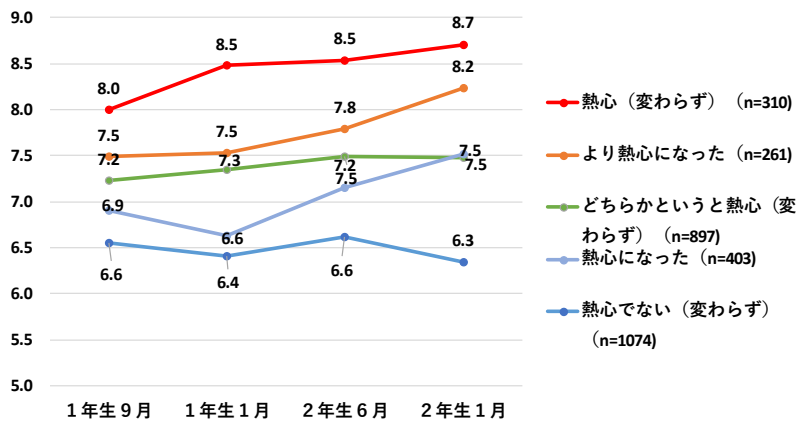
図表 3-61 異文化対応コンピテンシー (2年生)



図表 3-62 外国語リテラシー (2年生)



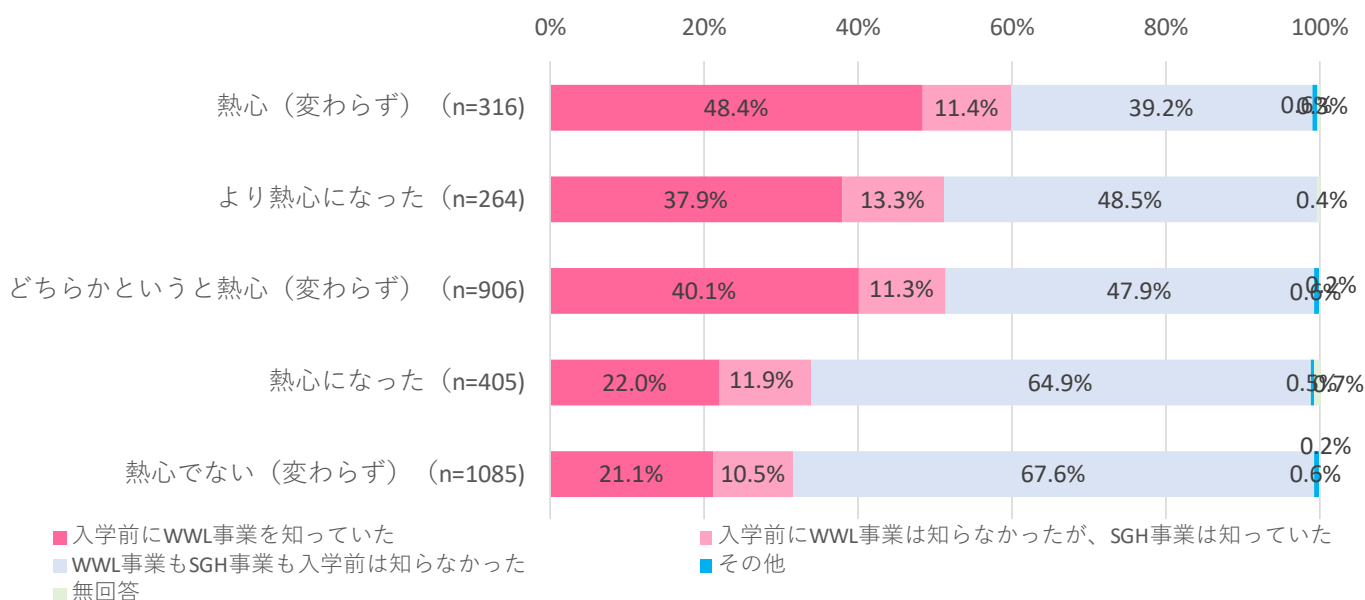
図表 3-63 PPDACスキル (2年生)



3-8-3 WWL 事業を知ったタイミング

- WWL 事業への熱心さの変化と WWL 事業を知った時期の関係をみる。
- 1 年生時に熱心だった生徒（「熱心（変わらず）」「より熱心になった」「どちらかという熱心」）は、入学時点から半数以上が WWL 事業、あるいは SGH 事業を知っていた。入学前から WWL 事業等に関心があり、1 年時から熱心に活動している生徒が多いことがうかがえる。
- 一方で、「熱心になった（どちらともいえない以下⇒どちらかという熱心以上）」「熱心でない（変わらず）」の 1 年生時では熱心でなかった生徒は、入学段階では 7 割近くの生徒が WWL 事業を知らなかった。
- 1 年生の段階から熱心に生徒が活動を行うためには、入学段階から情報提供を行い、関心をもって入学してもらうことも重要だといえる。

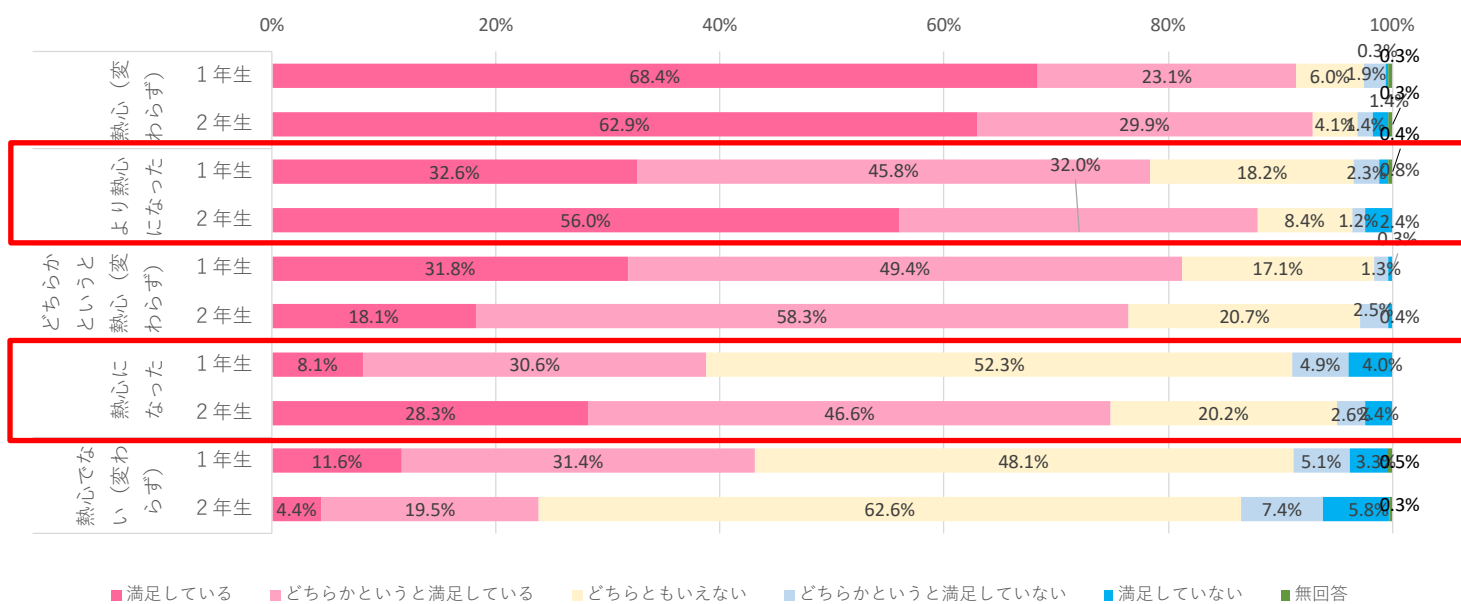
図表 3-64 WWL 事業を知った時期（2 年生）



3-8-4 WWL 事業のテーマとの関係

- WWL 事業への熱心さの変化と WWL 事業のテーマの満足度の関係を見る。
- 1 年生から 2 年生にかけて熱心になった生徒（「より熱心になった（どちらかという熱心⇒熱心）」「熱心になった（どちらともいえない以下⇒どちらかという熱心以上）」）は、1 年生より 2 年生の時のほうが、テーマへの満足度が高い。特に、「熱心になった」生徒は、40 ポイント近く満足度があがっており、WWL 事業への関心が強くなったことがうかがえる。

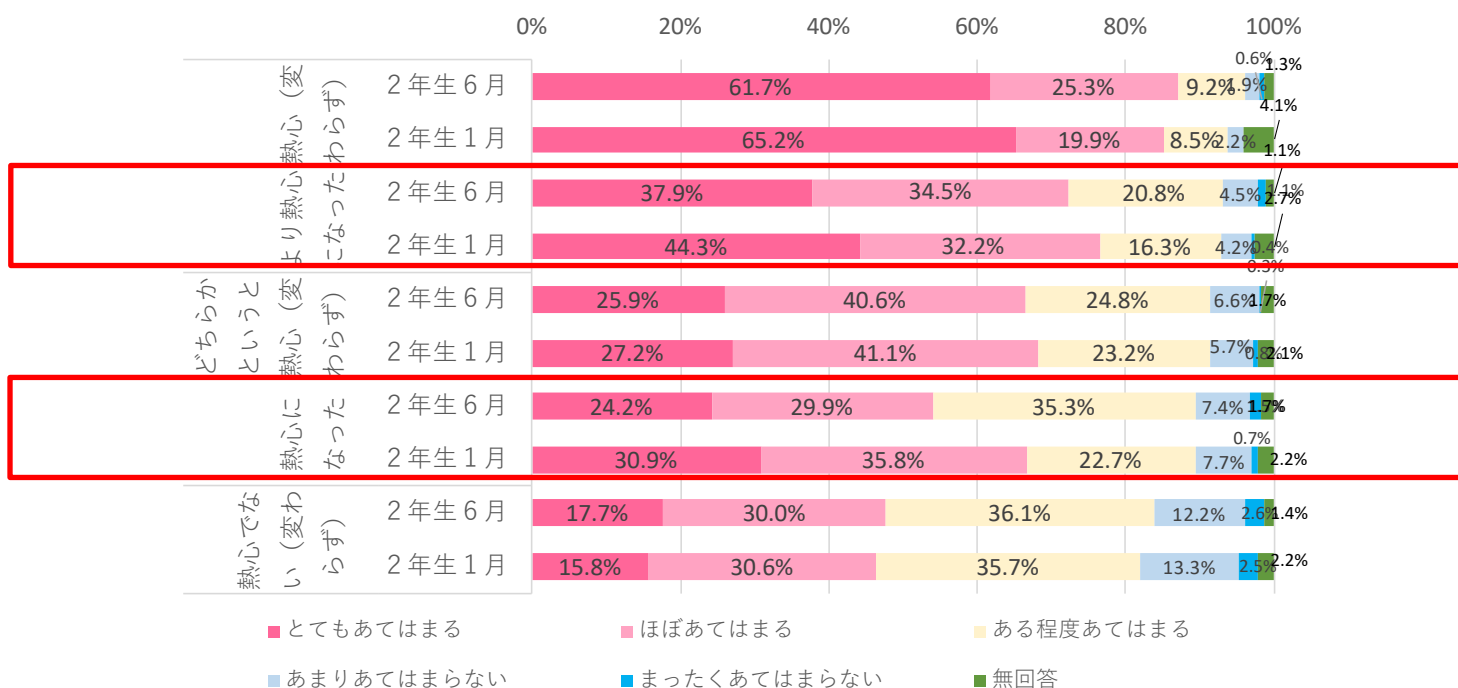
図表 3-65 WWL 事業のテーマの満足度（2 年生）



3-8-5 社会問題への関心度

- WWL 事業への熱心さの変化と日本の社会問題への関心度をみる。
- 1年生から2年生にかけて「熱心になった（どちらともいえない以下⇒どちらかという熱心以上）」生徒は、2年生の6月より1月の時の方が、日本の社会問題に対して関心度が高まっている。

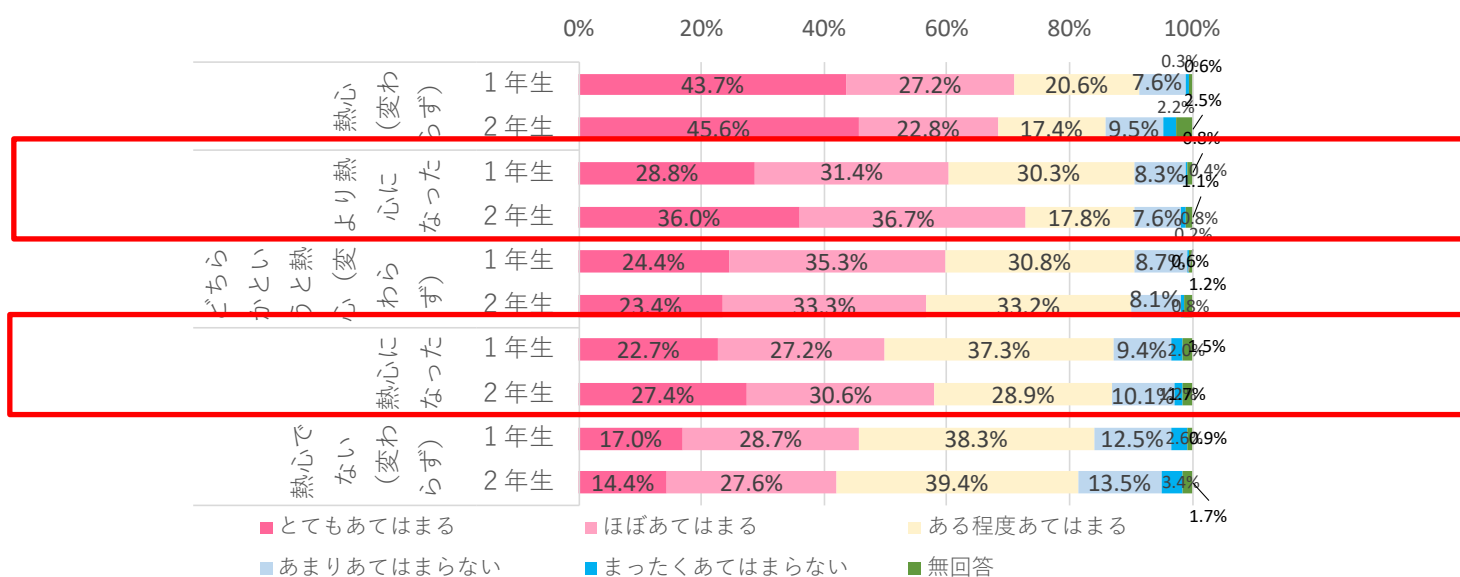
図表 3-66 日本で起きているさまざまな社会問題に関心がある（2年生）



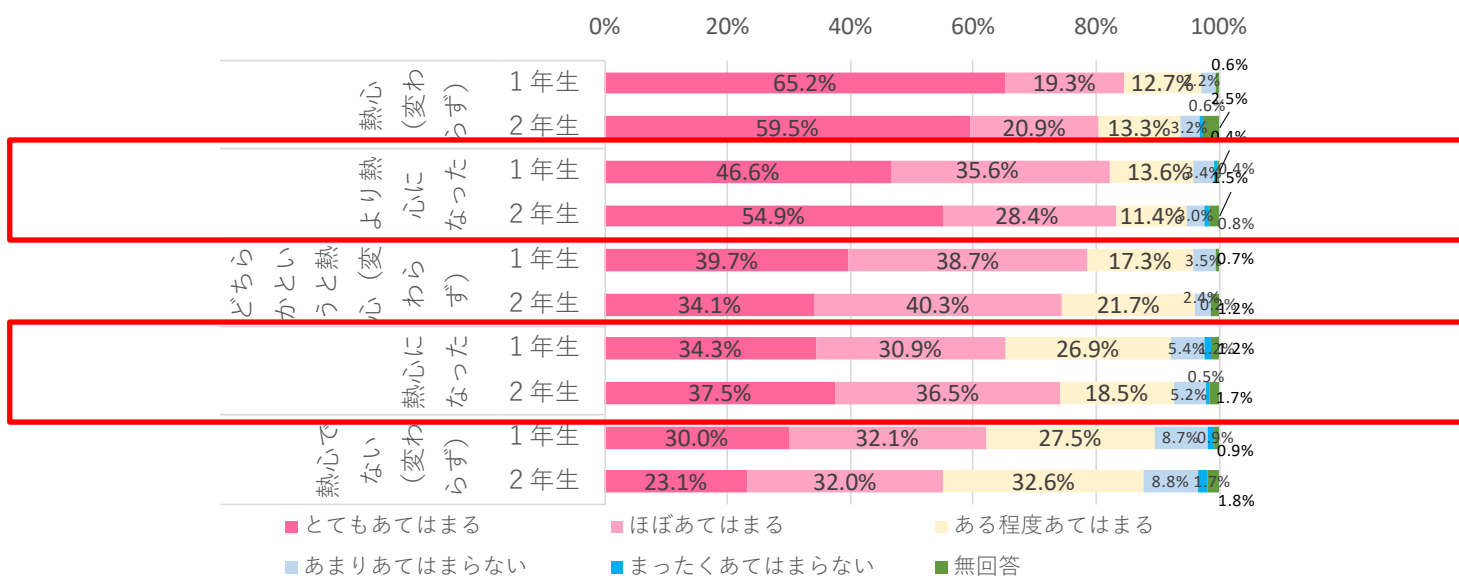
3-8-6 学校の周りへの満足度

- WWL 事業への熱心さの変化と学校の満足度との関係を見る。
- 1 年生から 2 年生にかけて熱心になった生徒は、「海外との交流に積極的な教員が多い」に「あてはまる」割合が高くなっている。
- 「好奇心が強く、色々な活動に積極的な生徒が多い」は、1 年生から 2 年生にかけて熱心になった生徒は、やや「満足している」の割合が高くなっている。

図表 3-67 海外との交流に積極的な教員が多い (2 年生)



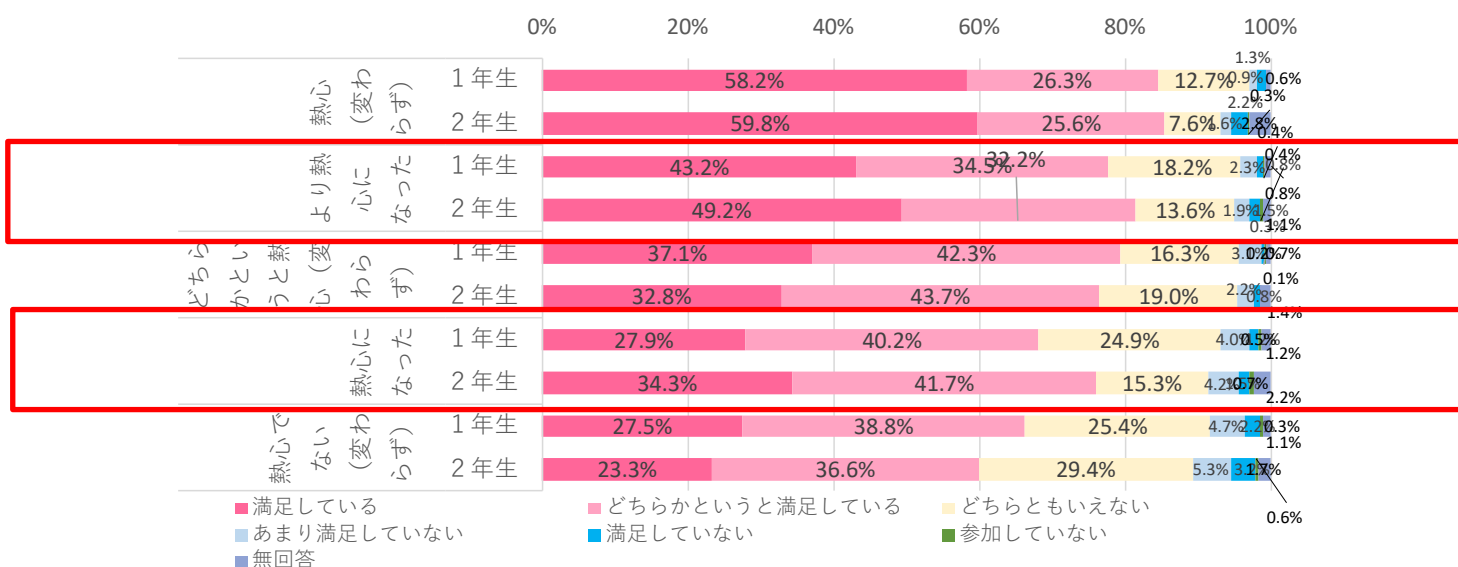
図表 3-68 好奇心が強く、色々な活動に積極的な生徒が多い (2 年生)



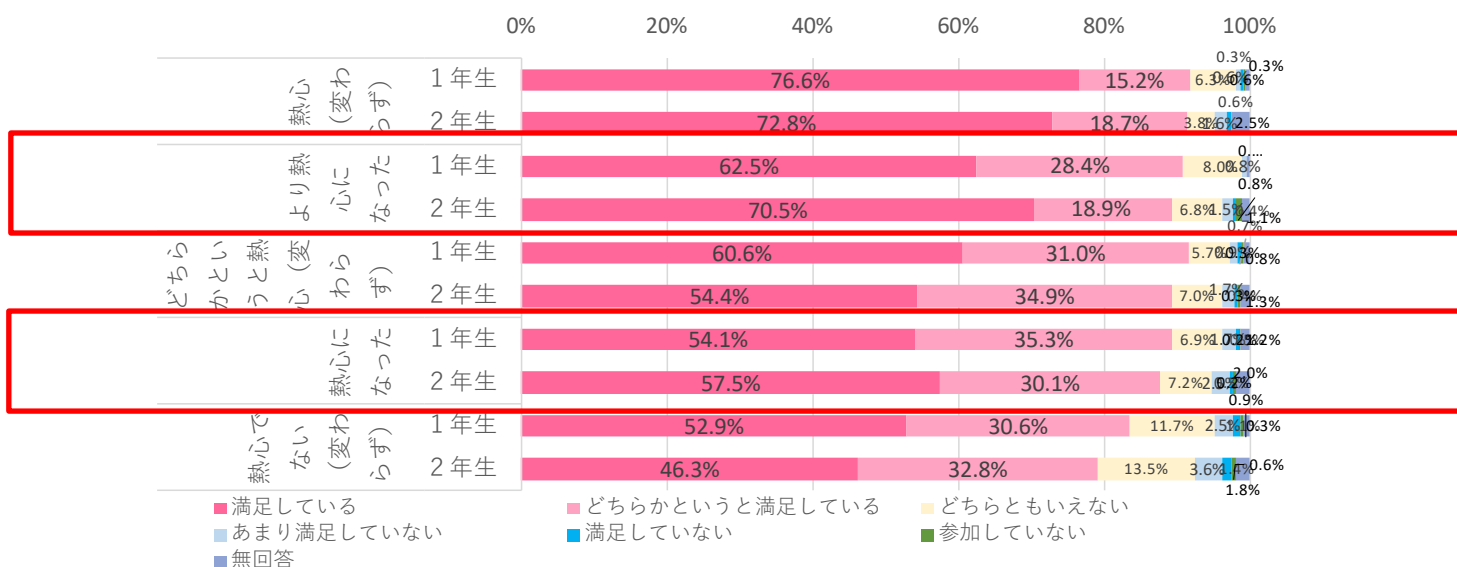
3-8-7 学校の周りへの評価

- ❑ WWL 事業への熱心さの変化と周りへの評価との関係を見る。
- ❑ 1年生から2年生にかけて「熱心になった（どちらともいえない以下⇒どちらかという熱心以上）」生徒は、1年生から2年生にかけて教員への満足度がやや高まっている。
- ❑ 友人関係は、1年生から2年生にかけて熱心になった生徒は、やや「満足している」

図表 3-69 教員との関係 (2年生)



図表 3-70 友人関係 (2年生)



3-9 各能力と学校成績との関係

- 各能力と学校成績との相関関係をみた。その結果、5つの能力は能力同士、4分野の成績は成績同士で相関が高い。一方で、各能力と成績の間には緩やかな相関関係がみられた。
- 中でも、英語と外国語リテラシーの相関係数は高い。一方で、数学理科の成績は、各能力との相関関係は低めである。
- これらの結果から、WWL事業で育成を目指している能力は、(語学リテラシーなどで共通項はあるものの)いわゆる教科教育で学び育む認知能力とは、別の軸で育成・評価されるべき能力だということがわかる。

図表 3-71 学校成績と各能力の相関関係

	英語	国語社会	数学理科	芸術	多文化の人々の尊重	グローバル思考	異文化対応コンピテンシー	外国語リテラシー	PPDAC
英語		.580**	.483**	.248**	.138**	.171**	.148**	.371**	.180**
国語社会	.580**		.366**	.315**	.134**	.079**	.142**	.135**	.170**
数学理科	.483**	.366**		.190**	0.010	0.031	.042*	.058**	.092**
芸術	.248**	.315**	.190**		.136**	.123**	.142**	.094**	.111**
多文化の人々の尊重	.138**	.134**	0.010	.136**		.483**	.711**	.330**	.502**
グローバル思考	.171**	.079**	0.031	.123**	.483**		.520**	.467**	.532**
異文化対応コンピテンシー	.148**	.142**	.042*	.142**	.711**	.520**		.326**	.570**
外国語リテラシー	.371**	.135**	.058**	.094**	.330**	.467**	.326**		.517**
PPDAC	.180**	.170**	.092**	.111**	.502**	.532**	.570**	.517**	

** 相関係数は 1% 水準で有意 (両側)。

* 相関係数は 5% 水準で有意 (両側)。

3-10 まとめ

生徒アンケートからは、以下のようなことが明らかになった。

<活動状況>

- ・「課題探究の授業・活動」「外国語、文系、理系など複数の教科を融合した科目」「国内でのフィールドワーク」は、参加率が高く、熱心度・満足度も高い。取り組み内容としては、「外国人教員による授業」「グループワークへの参加」「プレゼンテーションでの発表」は取り組む機会が多く、熱心に実施している割合も高い。
- ・総合的にみて、6割近くの生徒がWWL事業に熱心に取り組み、満足している。
- ・4割以上の生徒が「海外や国際的な課題に対して関心を持った」「社会問題や社会的課題に対して関心を持った」「さまざまな視点からものを考えられるようになった」「自分の弱点や成長させたい事柄がわかった」と回答。
- ・2割の生徒が「もっと海外の人と触れ合う機会が欲しい」と考える一方、2割の生徒は「英語に苦手意識がある」。

<成長状況>

- ・WWL事業の成果目標である「グローバルなマインドセット」「グローバルな資質・能力（グローバル・コンピテンシー）」「PPDAC(探究型行動)」の育成について達成状況を確認した。グローバルなマインドセットのうち「他文化の人々の尊重」は項目平均96.2%、「グローバル思考」は項目平均78.8%の生徒が達成。グローバルな資質・能力のうち「異文化対応コンピテンシー」は項目平均95.6%の生徒が、外国語リテラシーは項目平均67.6%の生徒が達成している。PPDACは項目平均87.1%の生徒が達成している。
- ・この5項目について2年間の成長度をみると、いずれの項目も1年生と比較して2年生後半の点数が高く、2年間での成長がみられる。特に「外国語リテラシー」については4回の調査で着実に上昇している。また、「PPDACスキル」については、1年生から2年生にかけて点数が上昇している。

<活動と成長の関係>

- ・WWL事業の熱心度別にみると、熱心度が高いほど5項目の点数は高い。また、熱心度で、2年間で生徒の成長に大きな差が生じている。熱心に活動した生徒は、2年生の後半

での伸びが大きい。

- ・取り組み内容別に比較すると、「外国語リテラシー」は、「外国語に関する取組」を熱心に取り組んでいると伸びている。「PPDAC スキル」は、「アクティブラーニングに関する取組」を熱心に取り組んでいると伸びている。一方で、「グローバル思考」は、「外国語に関する取組」「アクティブラーニングに関する取組」の両方を熱心に取り組むことで大きな成長につながっている。成果目標の能力の育成には、バランスよい活動の実施が重要だといえる。
- ・また、「海外訪問」の能力への影響を見ると、特に「グローバル思考」「外国語リテラシー」の伸びと関係していた。特に「外国語リテラシー」の影響は強い。ただし、全体的には、「WWL 事業に熱心」な生徒がそうでない生徒より伸びが大きいので、まずは WWL 事業に熱心に取り組むことが大前提といえる。
- ・なお、WWL 事業で育成を目指している「イノベーティブなグローバル人材」に求められる能力は、語学リテラシーなどで共通項はあるものの、いわゆる教科教育で学び育む認知能力とは、別の軸で育成・評価される能力だということが明らかになった。これまでの学校教育に加えて、WWL 事業を行うことが、本事業の目的であるイノベーティブなグローバル人材の育成につながるといえる。

<活動に熱心になる背景>

- ・どのような生徒が WWL 事業へ熱心になるのかをみた。まず、1 年生から WWL 事業に熱心だった生徒は、入学時点から半数以上が WWL 事業・SGH 事業を知って入学している。入学前からの動機付けも重要だということがわかる。
- ・1 年生から 2 年生にかけて熱心になった生徒については、「WWL 事業の活動テーマ」「日本の社会問題への関心度」など探究活動等の課題に関する内容と、教員への満足度・評価（海外との交流に積極的な教員が多い）も、1 年生から 2 年生にかけて高まっている。WWL 事業への熱心度を高める方法としては、活動テーマ（社会課題）への関心を高めること、教師への信頼度を高めることが（それだけが要因ではないといえるが）きっかけとなる可能性がある。

第4章 カリキュラム開発拠点校教員へのアンケート調査

4-1 調査概要

4-1-1 調査対象

カリキュラム開発拠点校 30 校に勤務する全教員 1,920 名

4-1-2 調査方法

Web アンケート

4-1-3 調査時期

令和 4 年 12 月 19 日～令和 5 年 1 月 23 日

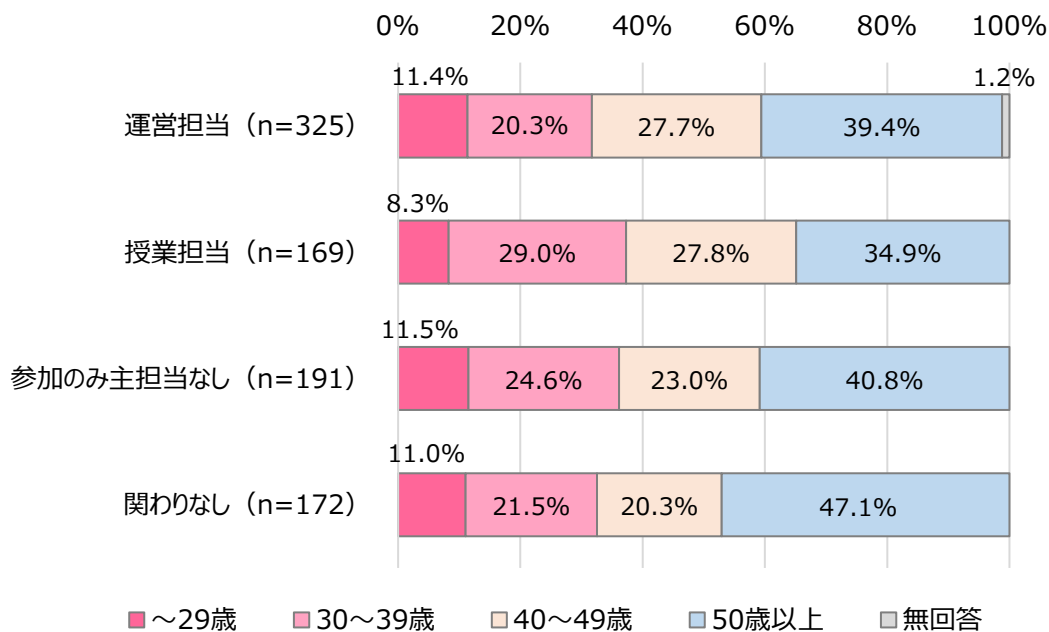
4-1-4 回収状況

903 件 (回収率 47.0%)

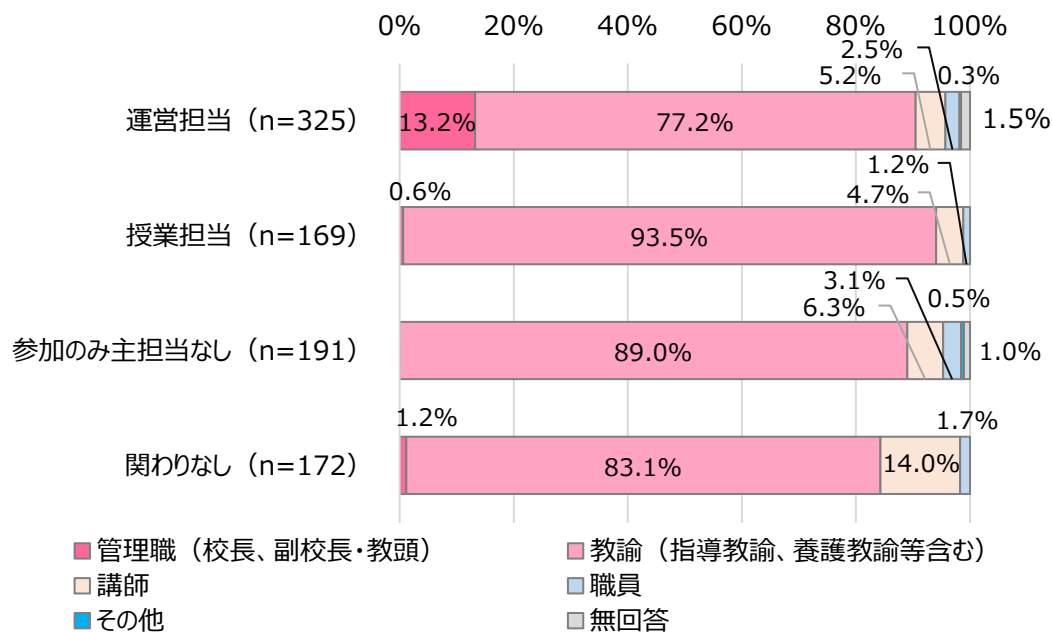
なお、本報告書では、回答者を「運営担当」「授業担当」「参加のみ主担当なし」「関わりなし」に分けて分析した。

4-1-5 回答者属性

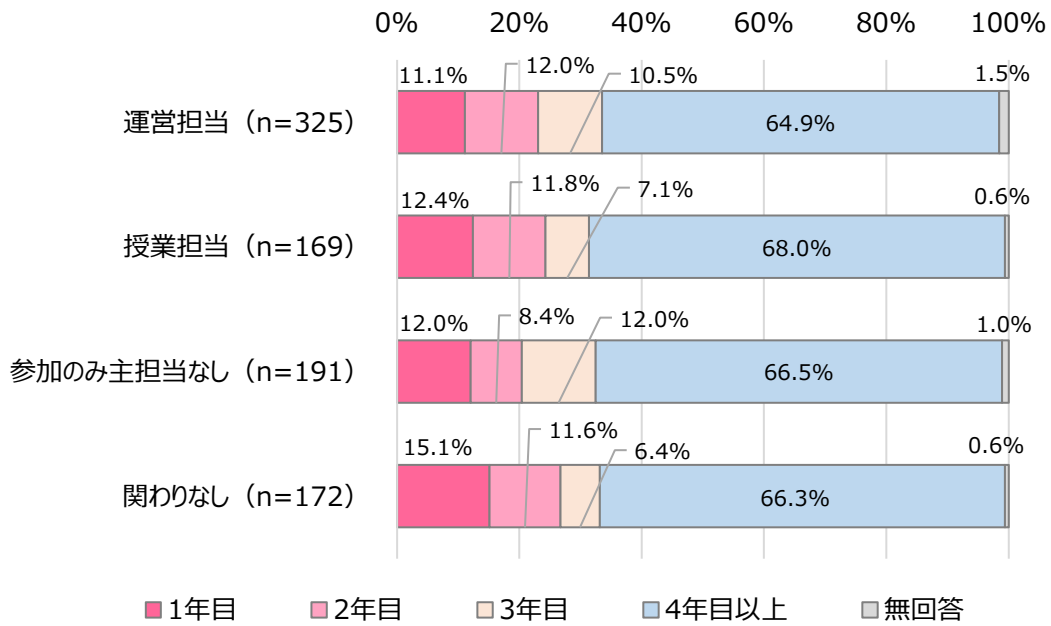
図表 4-1 年齢



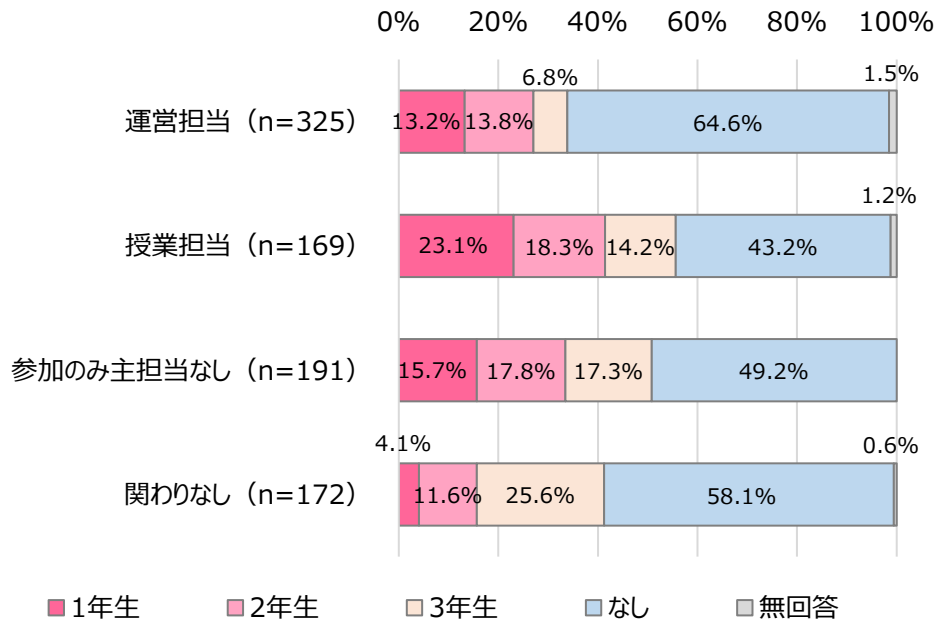
図表 4-2 職名



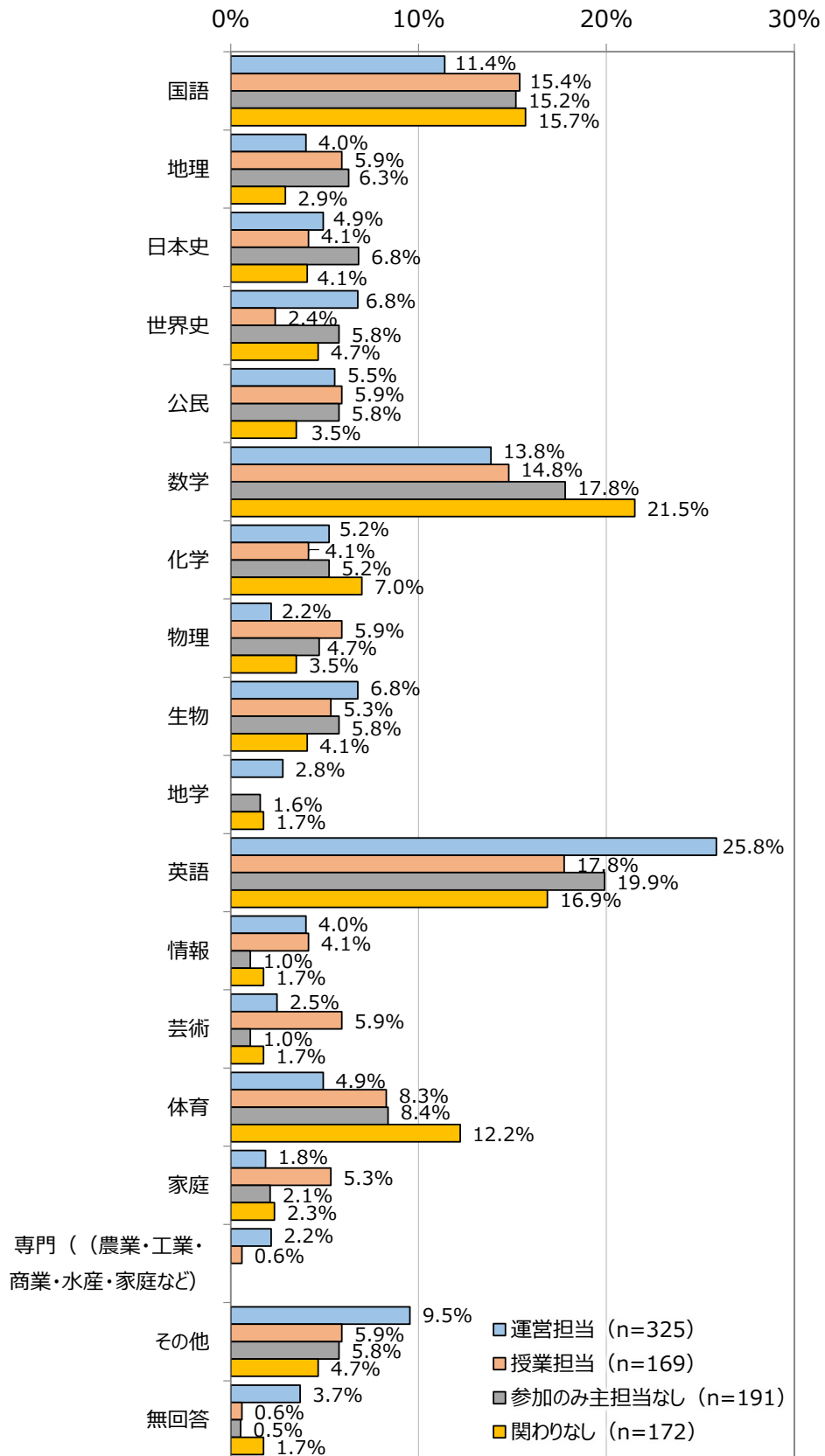
図表 4-3 現在校の勤務期間



図表 4-4 学級担任の有無



図表 4-5 担当教科

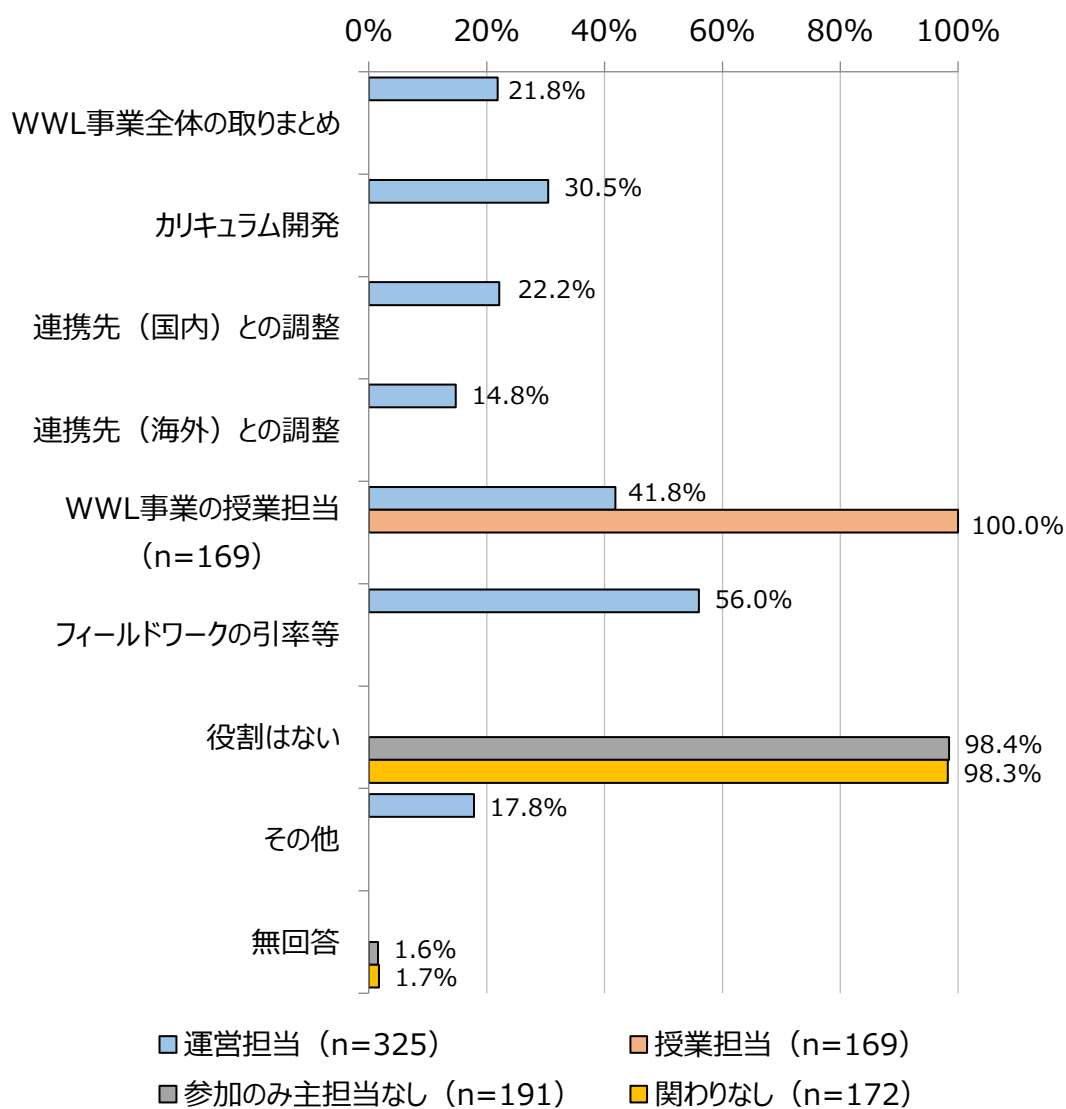


4-2 WWL 事業への関わり

4-2-1 WWL 事業における役割

- WWL 事業における役割については、「運営担当」は「フィールドワークの引率等」を担当する割合が 56.0%と最も高く、次いで「WWL 事業の授業担当」が 41.8%、「カリキュラム開発」が 30.5%となっている。

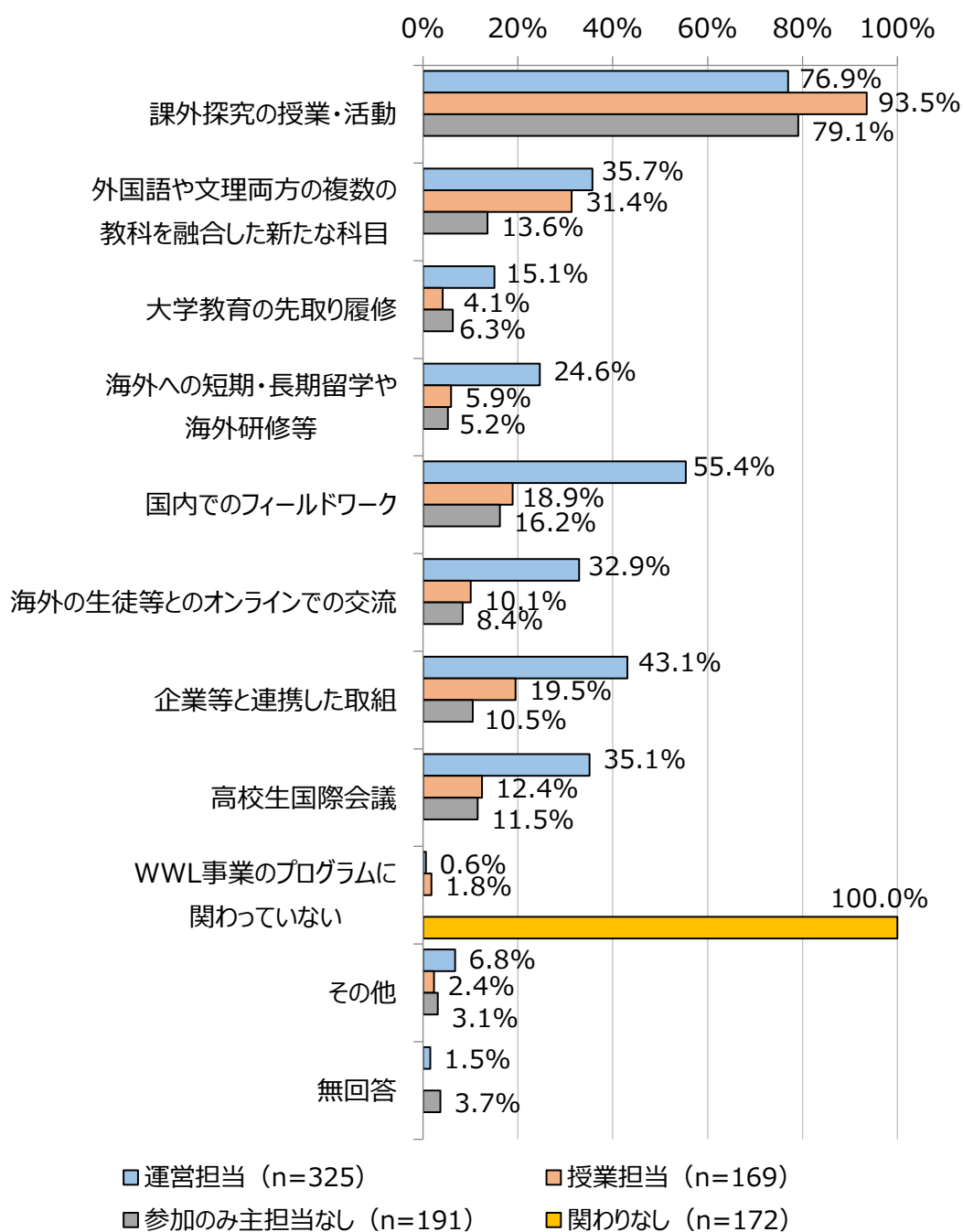
図表 4-6 WWL 事業における役割（複数回答）



4-2-2 WWL 事業において関わったプログラム

- WWL 事業において関わったプログラムは、下記のとおり。WWL 事業に明確な担当がなくても、「課外探究の授業・活動」で関わった教員が多いことがわかる。

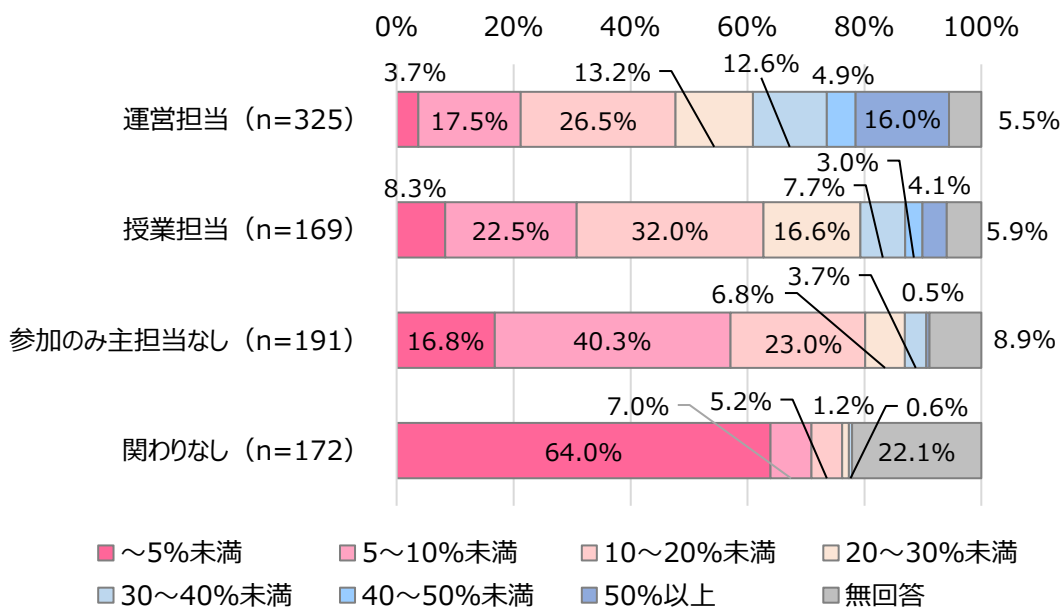
図表 4-7 WWL 事業において関わったプログラム（複数回答）



4-2-3 業務時間全体に占める WWL 事業の割合

- 運営担当の教員ほど業務時間全体に占める割合が高い。「50%以上」と回答した教員も 16.0%存在する。授業担当の職員は「10~20%」の割合が最も多い。
- 参加のみ主担当なし、関わりなしの教員は、「10%未満」の回答割合が 50%以上を占めている。

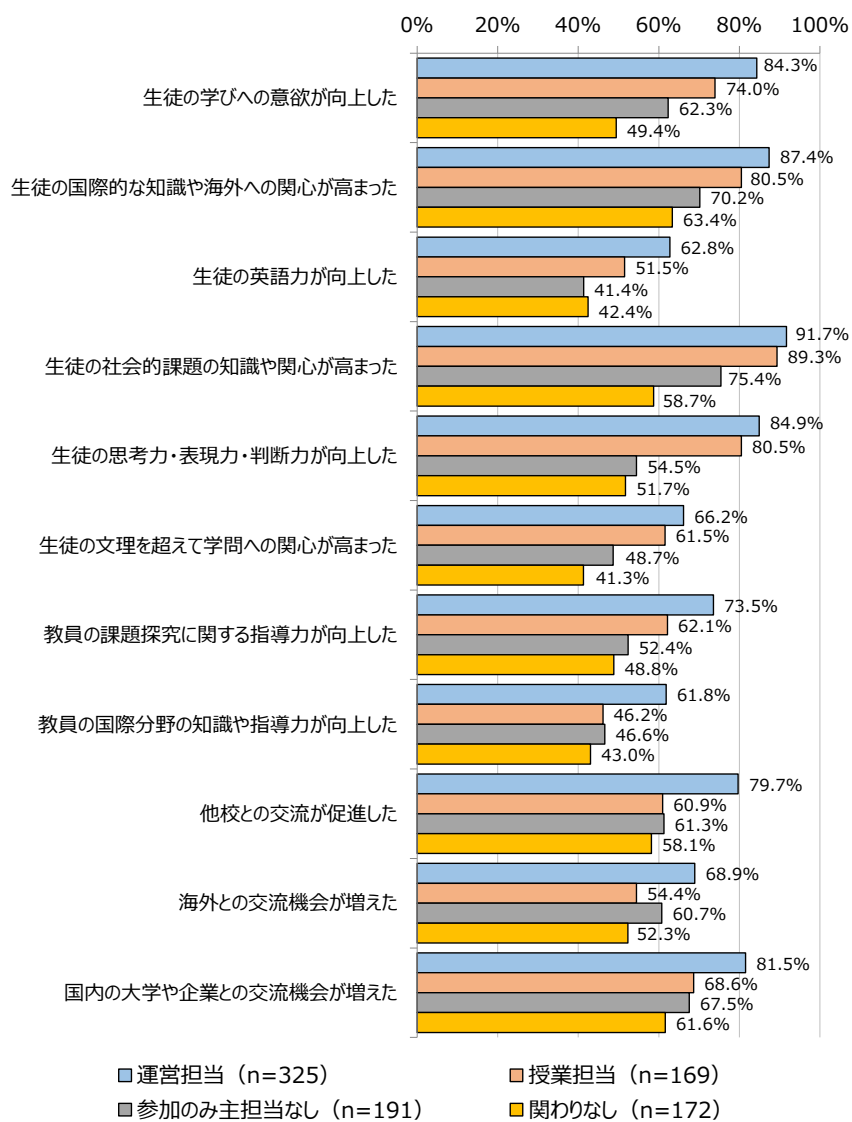
図表 4-8 業務時間全体に占める WWL 事業の割合



4-2-4 学校への影響や変化

- WWL 事業の学校への影響や変化について「あてはまる（あてはまる＋どちらかというにあてはまる）」と回答した割合をみる。
- 「生徒の社会的課題の知識や関心が高まった」と回答した割合が最も高く、「運営担当」の教員は 91.7%、授業担当の教員は 89.3%となっている。「運営担当」「授業担当」はその他、生徒の成長に関する多くの項目で割合が高い。
- 一方、「国内の大学の企業との交流機会が増えた」など交流や教員の指導力に関する項目は、「運営担当」が他と比べてあてはまる割合が高い。

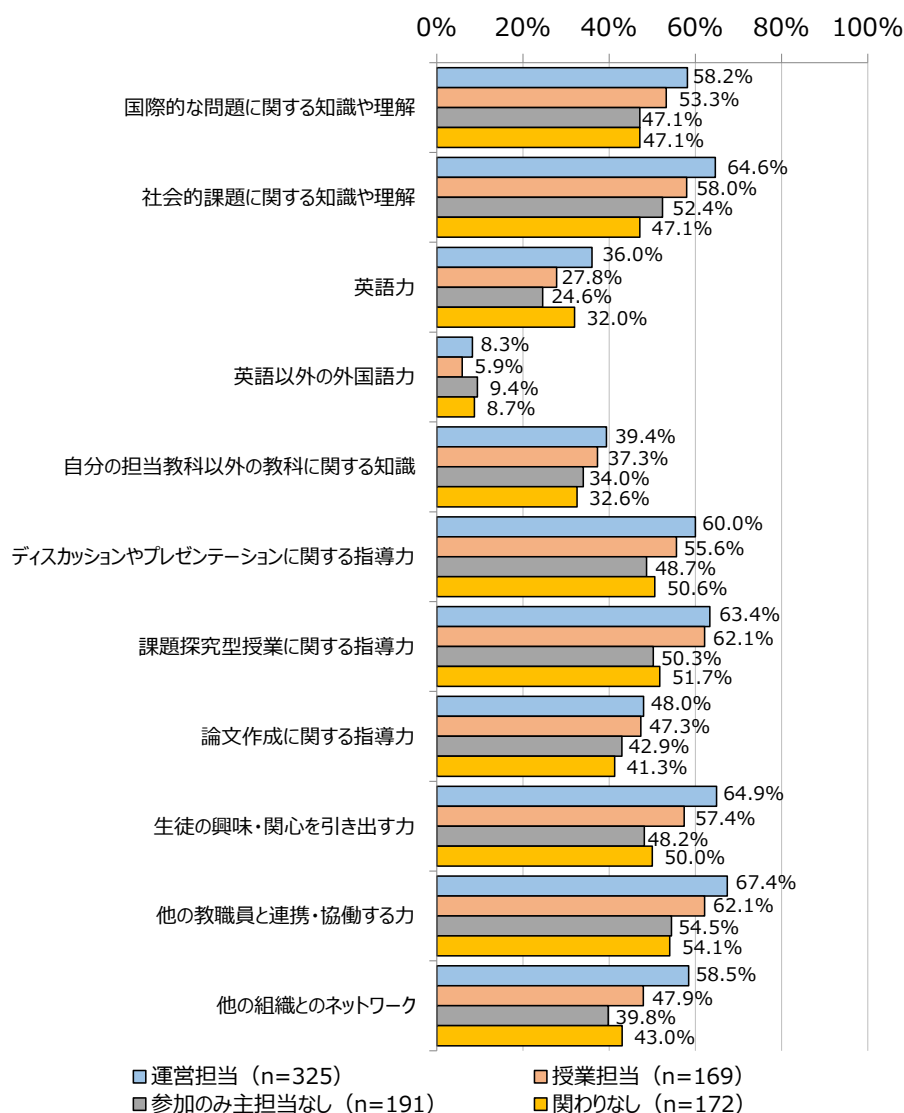
図表 4-9 学校への影響や変化（「あてはまる」＋「どちらかというにあてはまる」の割合）



4-2-5 指導にあたっての資質や能力

- 指導にあたって必要だと感じる資質や能力は、WWL 事業に運営担当・授業担当として参加した教員は、「社会的課題に関する知識や理解」「課題探究型授業に関する指導力」「生徒の興味・関心を引き出す力」「他の教員と連携・協働する力」を必要とする割合が高い。関わりのない教員においては、これらの項目は必ずしも高くなく、WWL 担当と担当していない教員でギャップがあることが分かる。
- 「他の組織とのネットワーク」については、運営担当の教員のみが割合が高い。

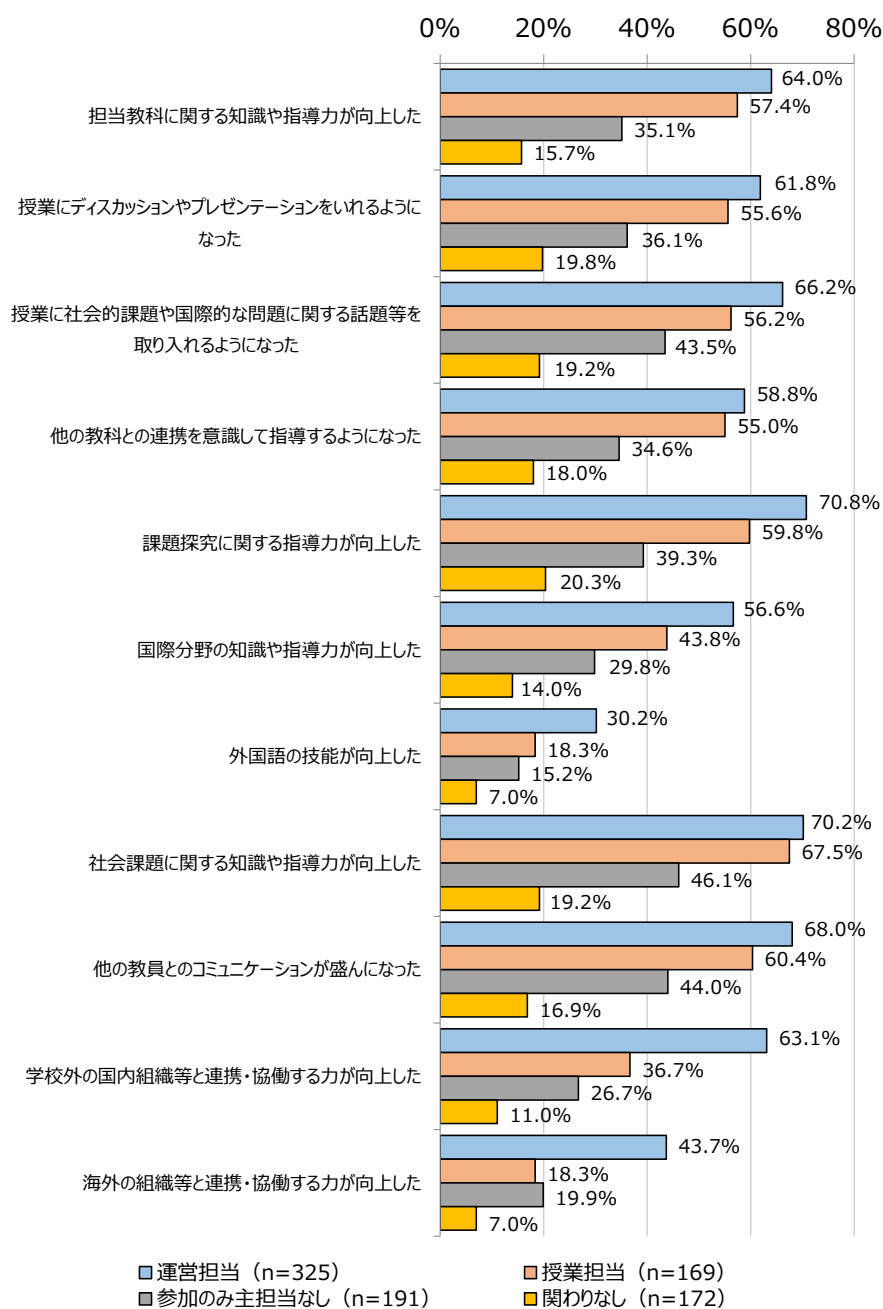
図表 4-10 指導にあたっての資質や能力（「あてはまる」の割合）



4-2-6 WWL 事業による自身への影響や変化

□ WWL 事業による自身への影響や変化について、運営担当・授業担当の教員は、多くの項目で「あてはまる（あてはまる+どちらかというにあてはまる）」と回答する割合が高い。「学校外の国内組織等と連携・協働する力が向上した」等は、運営担当の教員があてはまる割合が高い。

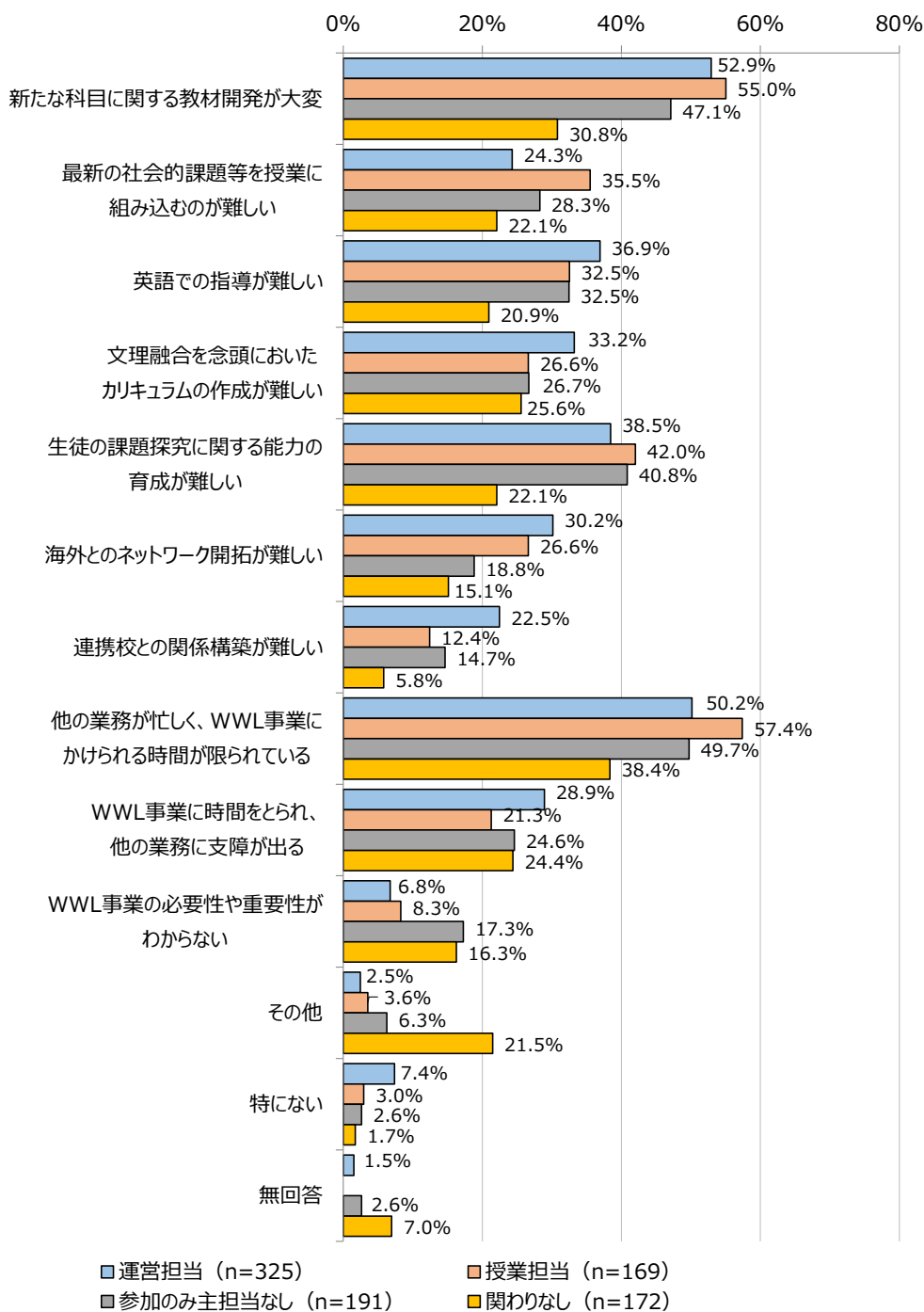
図表 4-11 自身への影響や変化（「あてはまる」+「どちらかというにあてはまる」の割合）



4-2-7 WWL 事業の課題や問題点

- 「新たな科目に関する教材開発が大変」「他の業務が忙しく、WWL 事業にかけられる時間が限られている」を課題・問題点と認識している割合が高く、運営担当・授業担当の教員の回答は 5 割を超えている。

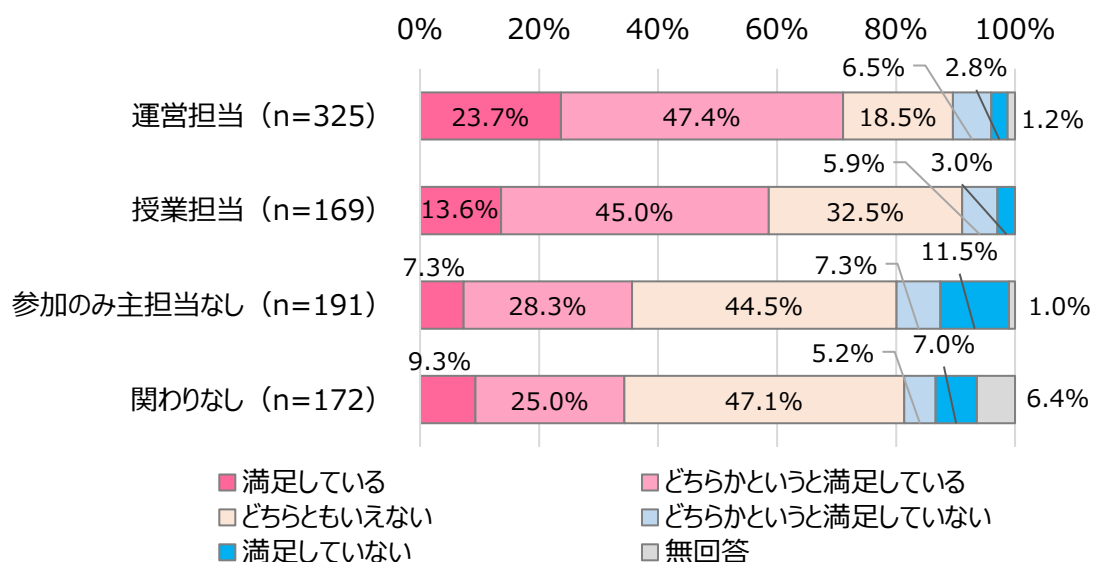
図表 4-12 WWL 事業の課題や問題点（複数回答）



4-2-8 WWL 事業への満足度

- WWL 事業への満足度については、運営担当の教員では「満足している（満足している+どちらかという満足している）」の割合が 71.1%となっている。授業担当の教員では 58.6%となっている。
- 参加のみ主担当なし、関わりなしの教員は「どちらともいえない」の割合が高い。

図表 4-13 WWL 事業への満足度

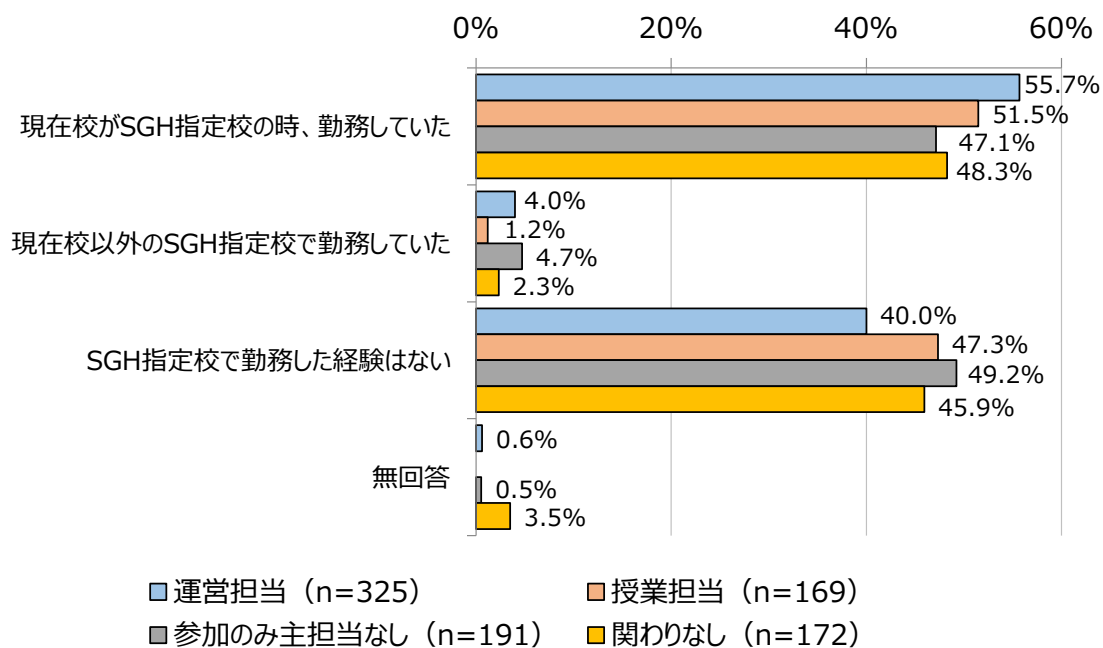


4-3 SGH（スーパーグローバルハイスクール）指定校での勤務

4-3-1 スーパーグローバルハイスクールでの勤務経験

- 5割程度の教員は、現在校がSGH指定校の時に勤務経験がある。運営担当の教員は、その割合が高い。

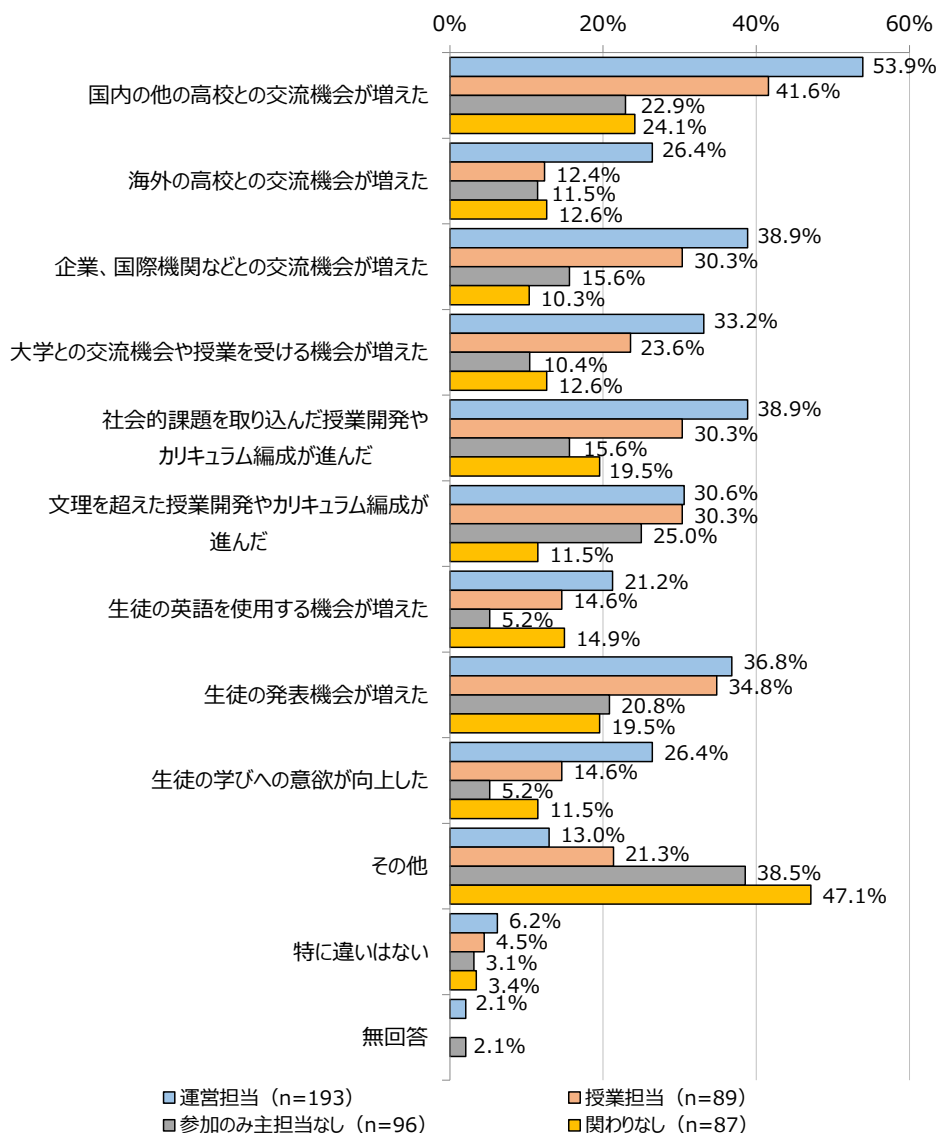
図表 4-14 スーパーグローバルハイスクールでの勤務経験（複数回答）



4-4 SGH 事業と比較した際の WWL 事業の違い

- 運営担当・授業担当の教員からみて、SGH 事業と WWL 事業の違いとして「国内の他の高校との交流機会が増えた」「企業、国際機関などとの交流機会が増えた」「社会的課題を取り込んだ授業開発やカリキュラム編成が進んだ」等の割合が高い。
- これらの項目は、参加のみ主担当無し、関わりなしの教員では必ずしも割合が高くなく、WWL 事業の関わりの薄い教員は、SGH 事業との違いを認識していない可能性がある。

図表 4-15 SGH 事業と比較した際の WWL 事業の違い
(複数回答：SGH 指定校での勤務経験ありのみ)



4-5 まとめ

教員については、WWL 事業に役割を持って参加したかどうかで、生徒・学校の変化、指導に当たって必要な資質・能力、自身の変化等に関する認識が異なっていた。「生徒の社会的課題の知識や関心が高まった」「生徒の国際的な知識や海外への関心が高まった」などの変化を感じている。また、「課題探究に関する指導力が向上した」など多くの項目で変化を感じている。WWL 事業への満足度についても 6~7 割と高くなっている。

さらに、WWL 事業の参加について、運営担当の教員と授業担当の教員においても違いがみられる。運営担当は、生徒の変化に加えて、「国内の大学や企業との交流機会が増えた」など学校の他機関との交流が盛んになったことを感じている。また、必要な能力として「他の組織とのネットワーク」をあげており、自身についても「他校等と連携・協働する力が向上した」等を上げている。SGH 事業と WWL 事業の違いとして「国内の他の高校との交流機会が増えた」「企業、国際機関などとの交流機会が増えた」等があげられており、WWL 事業の運営には、学校外のネットワーク構築力が重要な要素となっていることがわかる。

一方で、「新たな科目に関する教材開発が大変」「他の業務が忙しく、WWL 事業にかけられる時間が限られている」を課題・問題点と認識している教員の割合が高く、特に運営担当・授業担当の教員の回答は 5 割を超えている。働き方改革を意識しつつ WWL 事業を行うことは課題といえる。

第5章 卒業生へのアンケート調査

5-1 調査概要

5-1-1 調査対象

WWL 事業・SGH 事業の卒業生を輩出している拠点校のうち 19 校の卒業生

5-1-2 調査方法

郵送・メール配布、Web による回答

5-1-3 調査時期

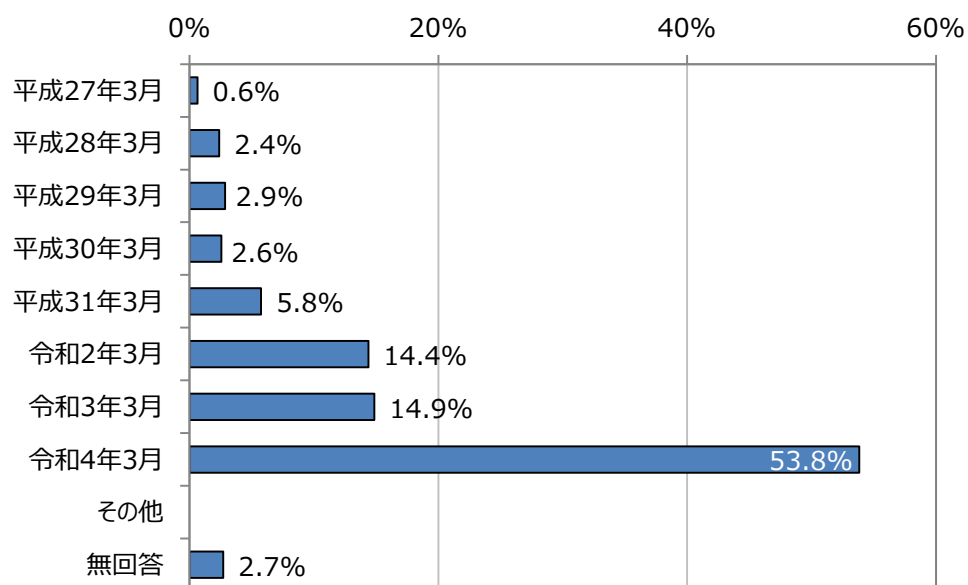
令和 5 年 1 月 10 日～令和 5 年 2 月 27 日

5-1-4 回収状況

626 件

5-1-5 回答者属性

図表 5-1 卒業年次 (n=626)

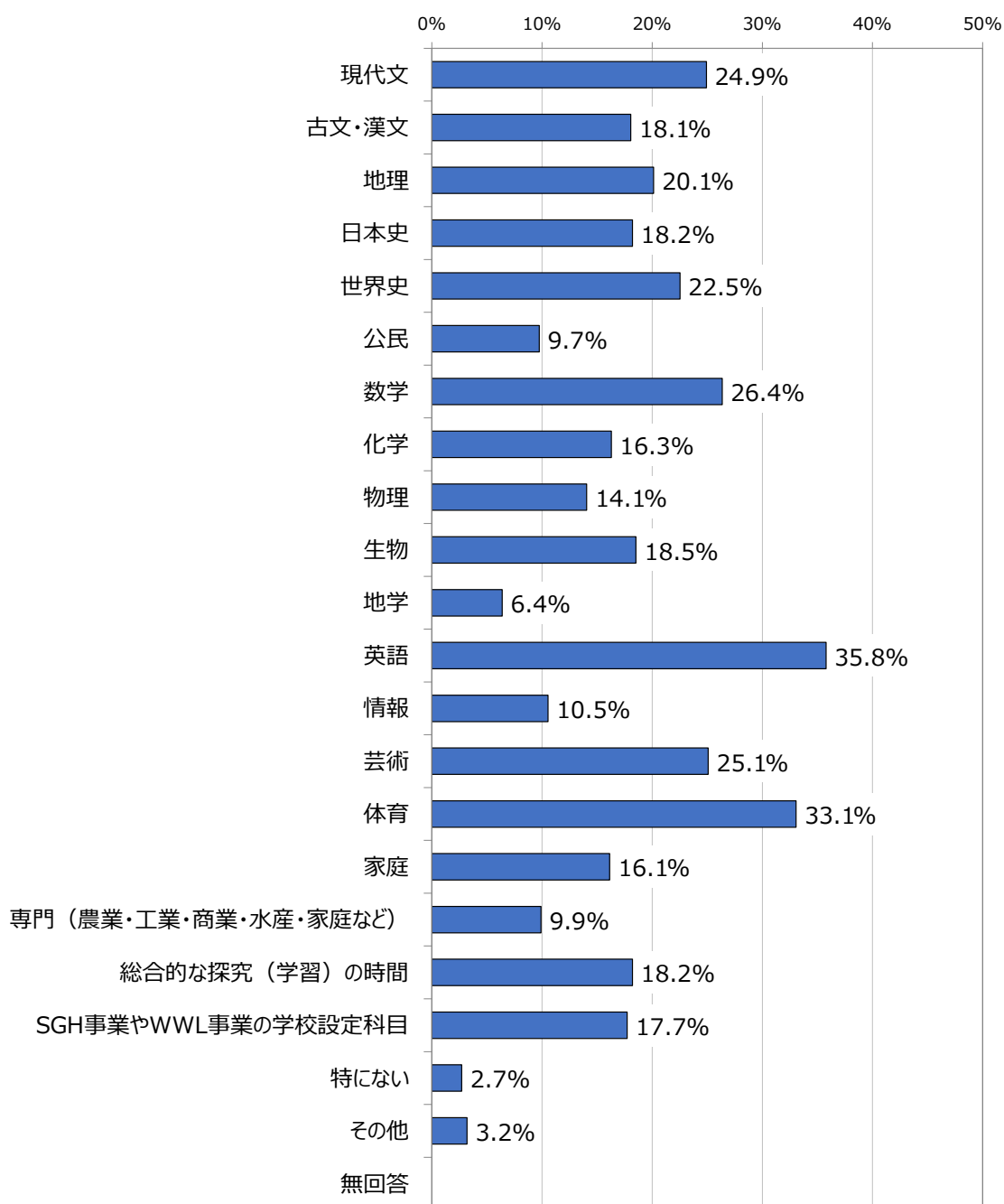


5-2 高校時代の生活

5-2-1 好きだった科目

□ 最も割合が高いのは「英語」で 35.8%。次いで「体育」が 33.1%、「数学」が 26.4%と続く。

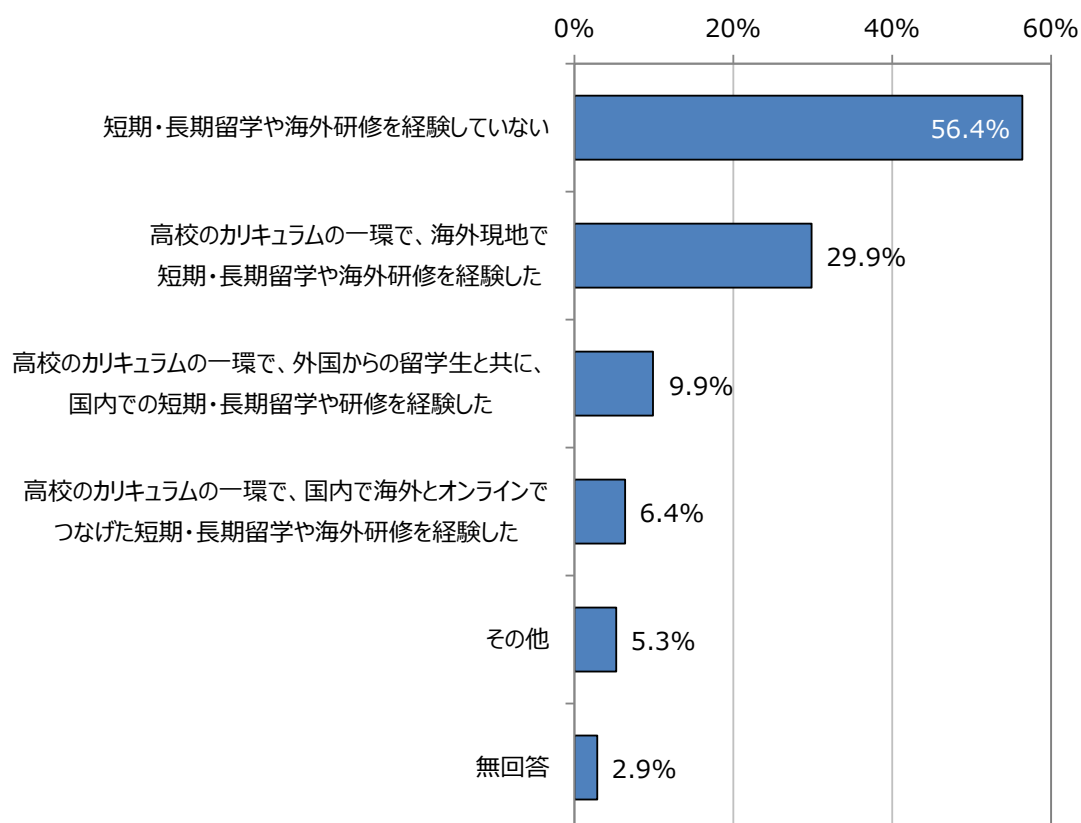
図表 5-2 好きだった科目（複数回答）（n=626）



5-2-2 短期・長期留学や海外研修の経験

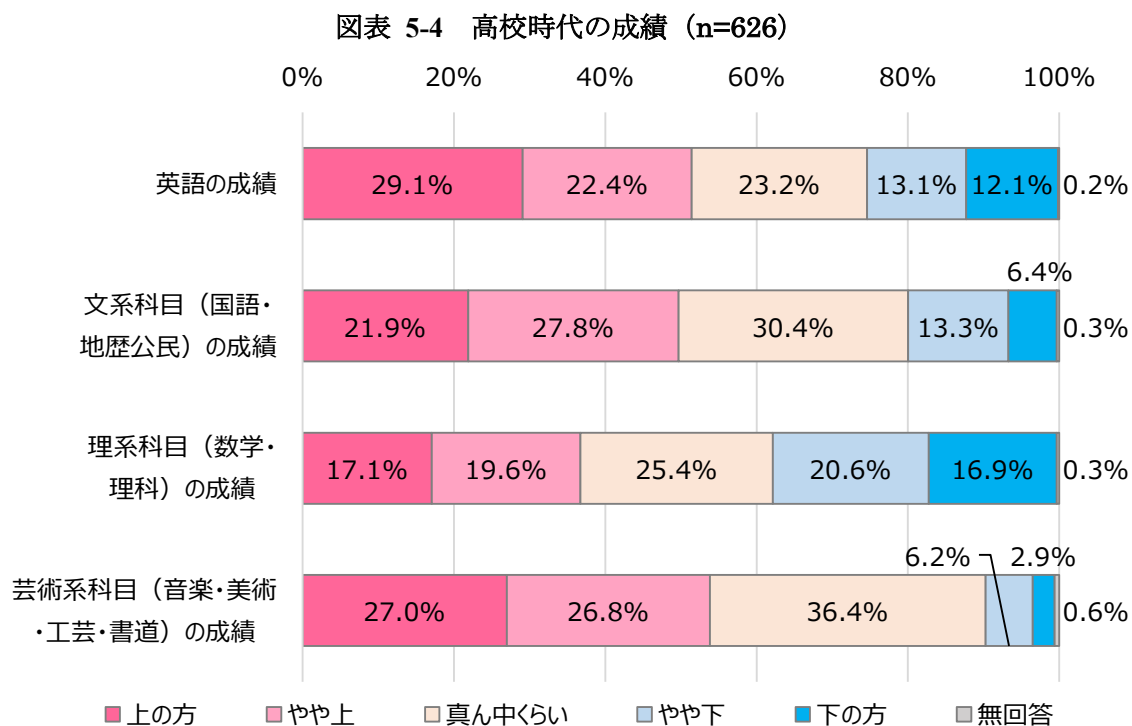
- 留学経験や海外研修の経験については、「経験していない」と回答した割合が 56.4% と最も割合が高く、次いで「高校のカリキュラムの一環で、海外現地で短期・長期留学や海外研修を経験した」が 29.9%である。

図表 5-3 短期・長期留学や海外研修の経験 (n=626)



5-2-3 高校時代の成績

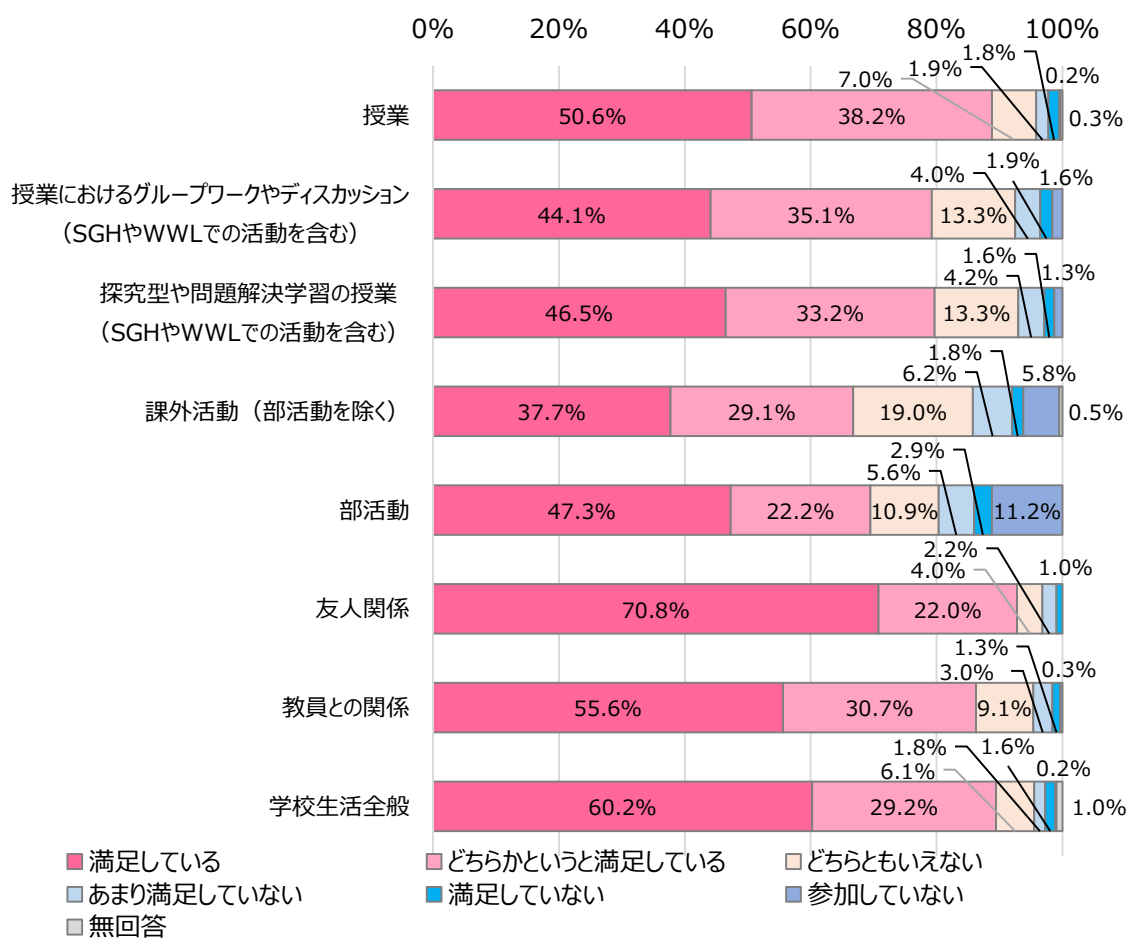
- 高校時代の成績については、「上の方」と回答した割合が英語の成績は 29.1%、芸術系科目では 27.0%と、他の科目と比べて高い。



5-2-4 高校生活の事柄における満足度

□ 高校生活の事柄における満足度については、「授業」「友人関係」「教員との関係」「学校生活全般」が「満足している」が5割を超えて高い。

図表 5-5 高校生活の事柄における満足度 (n=626)

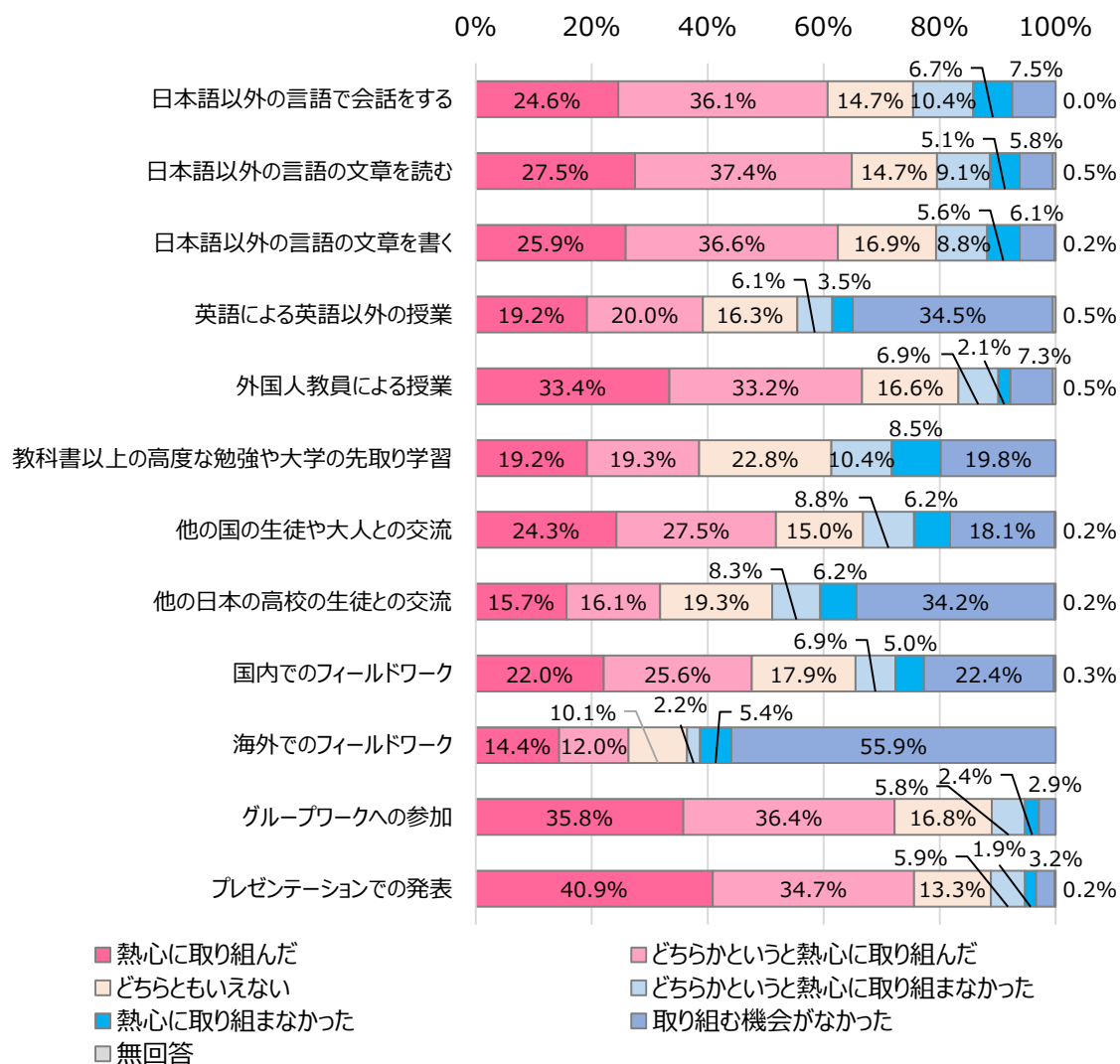


5-3 高校時代の SGH 事業や WWL 事業の経験

5-3-1 各活動への熱心さ

- 「熱心に取り組んだ（熱心に取り組んだ+どちらかという熱心に取り組んだ）」と回答したのが多い活動は、「プレゼンテーションでの発表」「グループワークへの参加」「外国人教員による授業」の順である。
- 「海外でのフィールドワーク」は、「取り組む機会がなかった」が 5 割以上となっている。

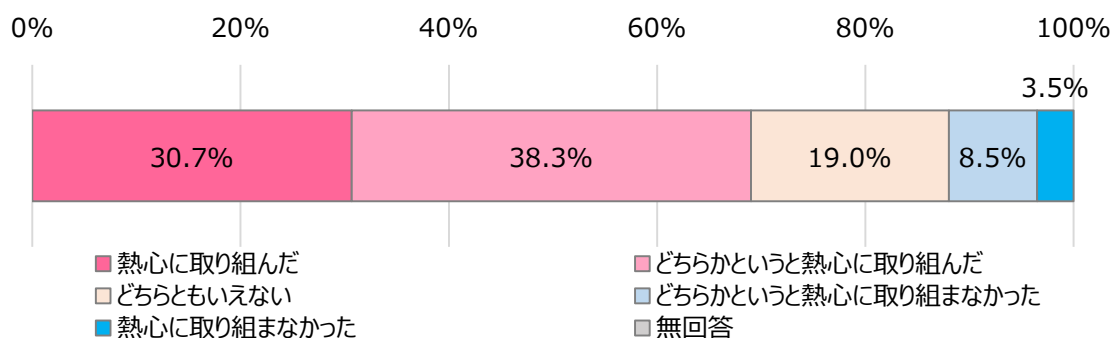
図表 5-6 各活動への熱心さ (n=626)



5-3-2 総合的にみた高校時代の各事業への熱心さ

□ SGH 事業・WWL 事業について、卒業生は、6 割以上が「熱心に取り組んだ（熱心に取り組んだ+どちらかという熱心に取り組んだ）」と回答している。

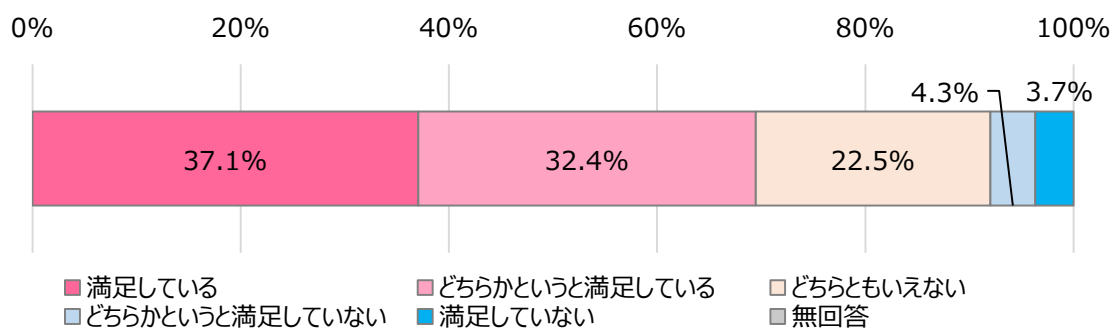
図表 5-7 総合的にみた高校時代の各事業への熱心さ (n=626)



5-3-3 総合的にみた高校時代の各事業への満足度

□ SGH 事業・WWL 事業について、卒業生は 6 割以上が「満足している（満足している+どちらかという満足している）」と回答している。

図表 5-8 総合的にみた高校時代の各事業への満足度 (n=626)

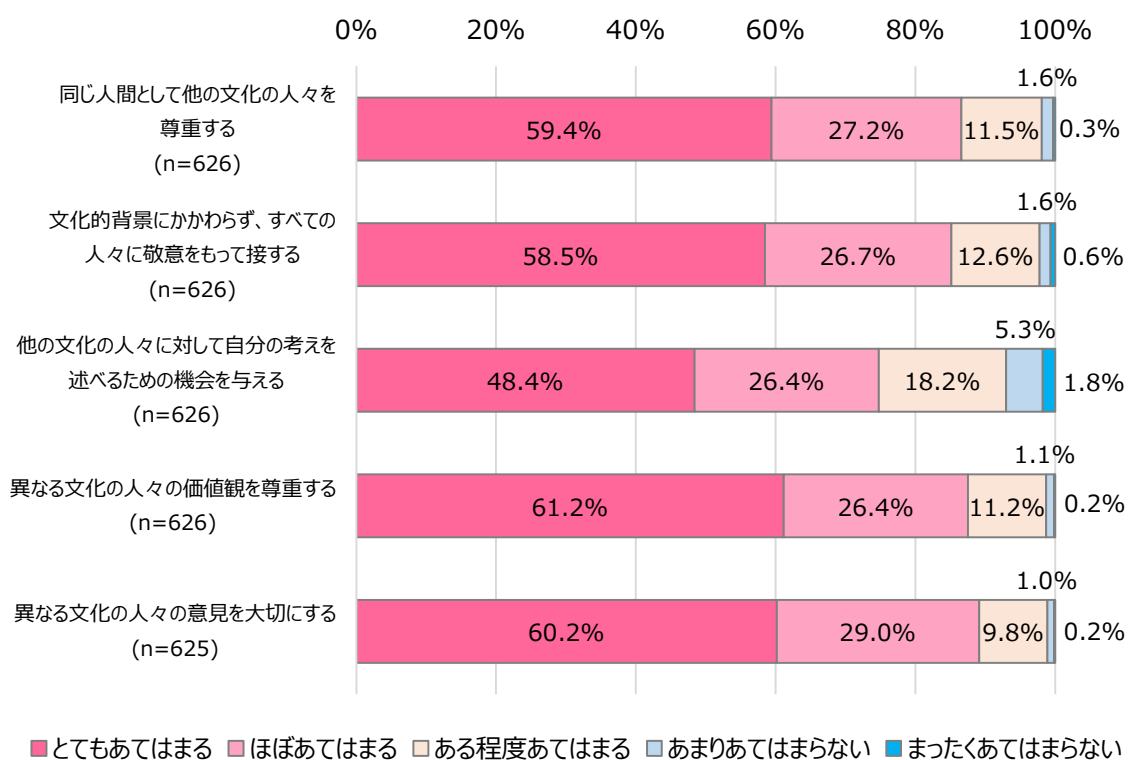


5-4 高校卒業時の考えや行動について

5-4-1 グローバルコンピテンス（他文化の人々の尊重）

□ グローバルコンピテンス（他文化の人々の尊重）については、「他の文化の人々に対して自分の考えを述べるための機会を与える」を除き、「あてはまる（とてもあてはまる+あてはまる）」の割合が8割以上となっている。「他の文化の人々に対して自分の考えを述べるための機会を与える」についても、7割以上があてはまると回答している。

図表 5-9 グローバルコンピテンス（他文化の人々の尊重）

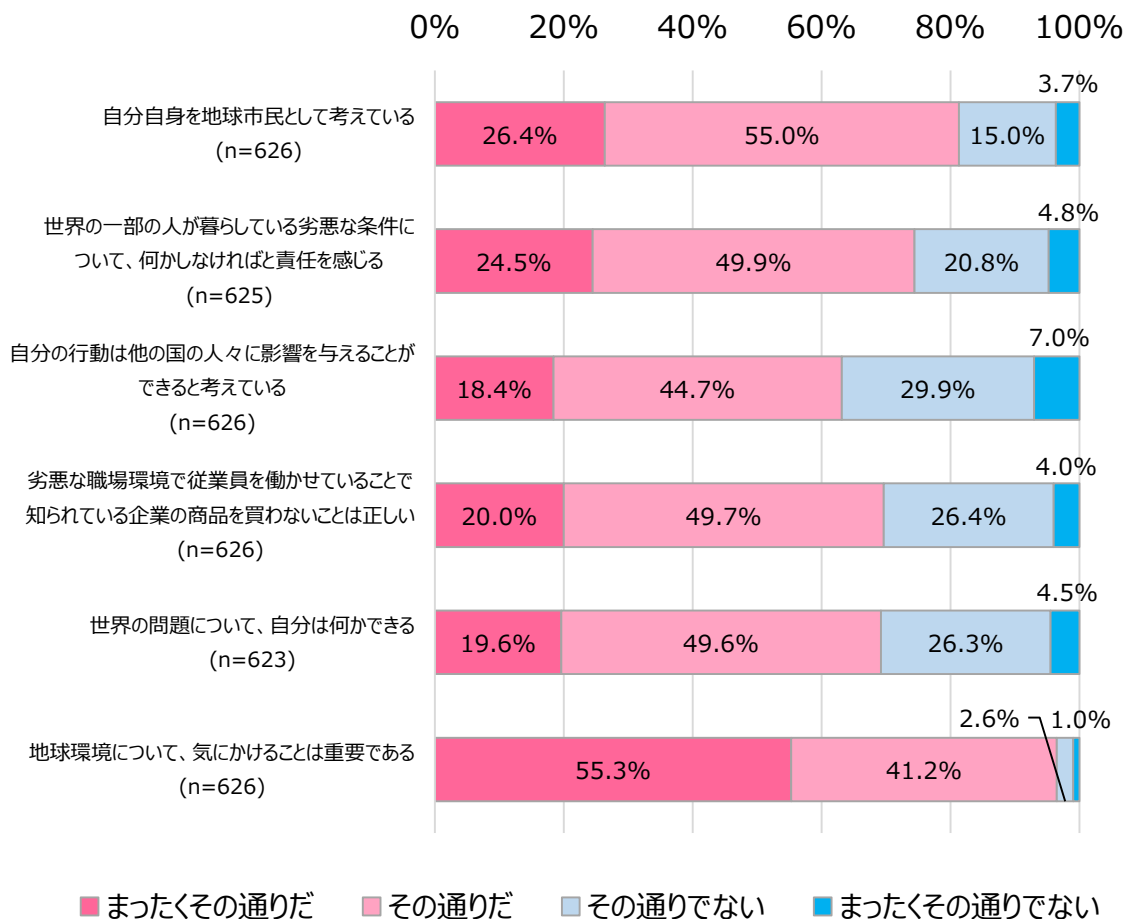


※無回答は除外

5-4-2 グローバルコンピテンス（グローバル思考）

- グローバルコンピテンス（グローバル思考）については、「地球環境について、気にかけることは重要である」に「その通りだ（まったくその通りだ+その通りだ）」と回答する割合が9割以上と高い。次いで「自分自身を地球市民として考えている」「世界の一部の人が暮らしている劣悪な条件について、何かしなければと責任を感じる」が続く。

図表 5-10 グローバルコンピテンス（グローバル思考）

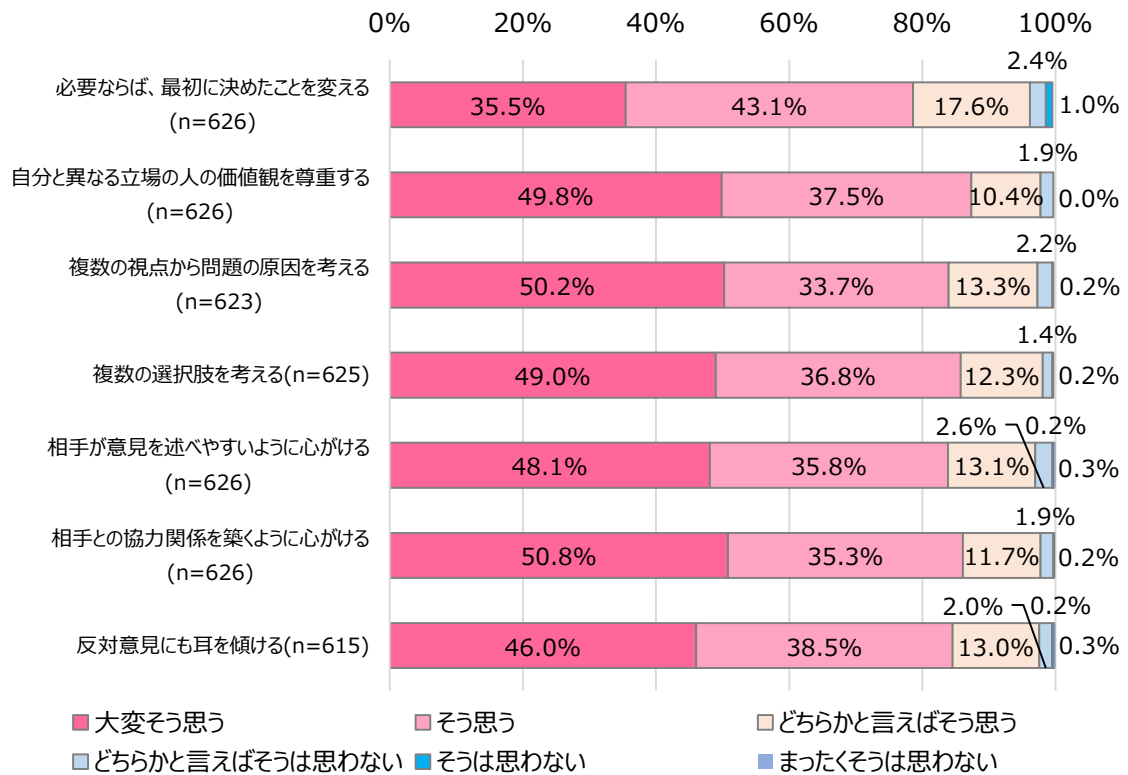


※無回答は除外

5-4-3 異文化対応コンピテンシー

□ 異文化対応コンピテンシーについては、いずれの項目も 9 割を超えて「そう思う（大変そう思う+そう思う+どちらかと言えばそう思う）」と回答している。

図表 5-11 異文化対応コンピテンシー

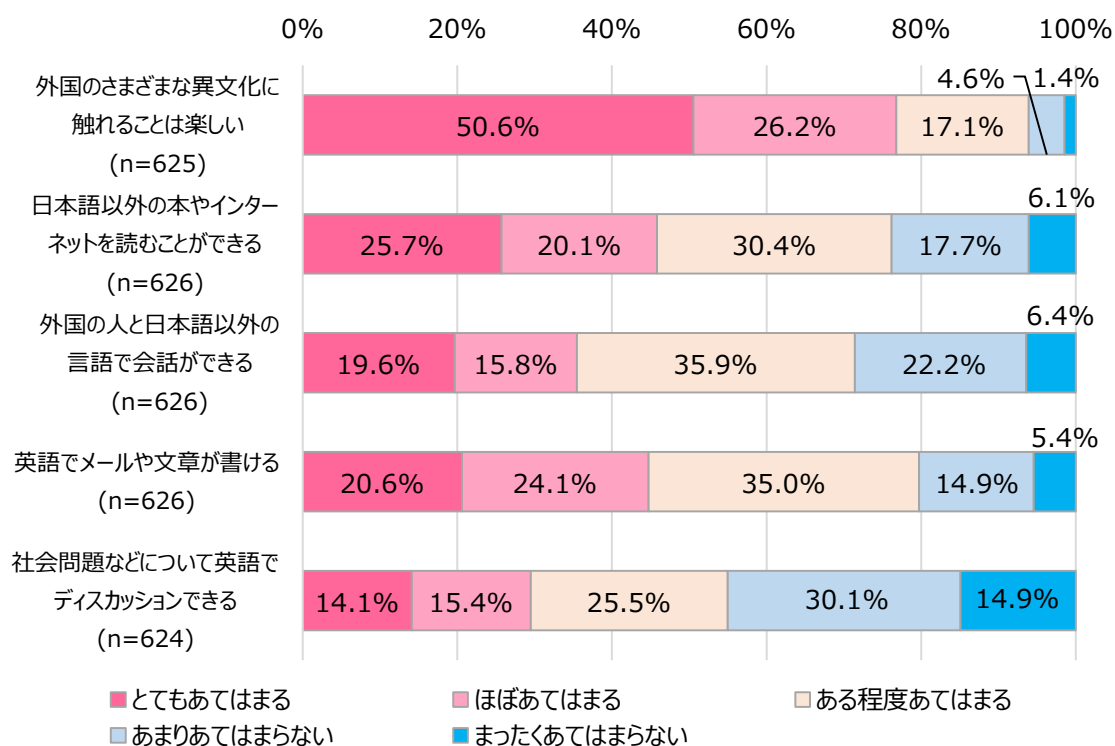


※無回答は除外

5-4-4 外国語リテラシー

- 外国語リテラシーについては、「外国のさまざまな異文化に触れることは楽しい」に「あてはまる（とてもあてはまる＋ほぼあてはまる＋ある程度あてはまる）」と回答した割合が9割以上となっている。
- 一方で、「社会問題などについて英語でディスカッションできる」は、6割弱に留まっている。

図表 5-12 外国語リテラシー

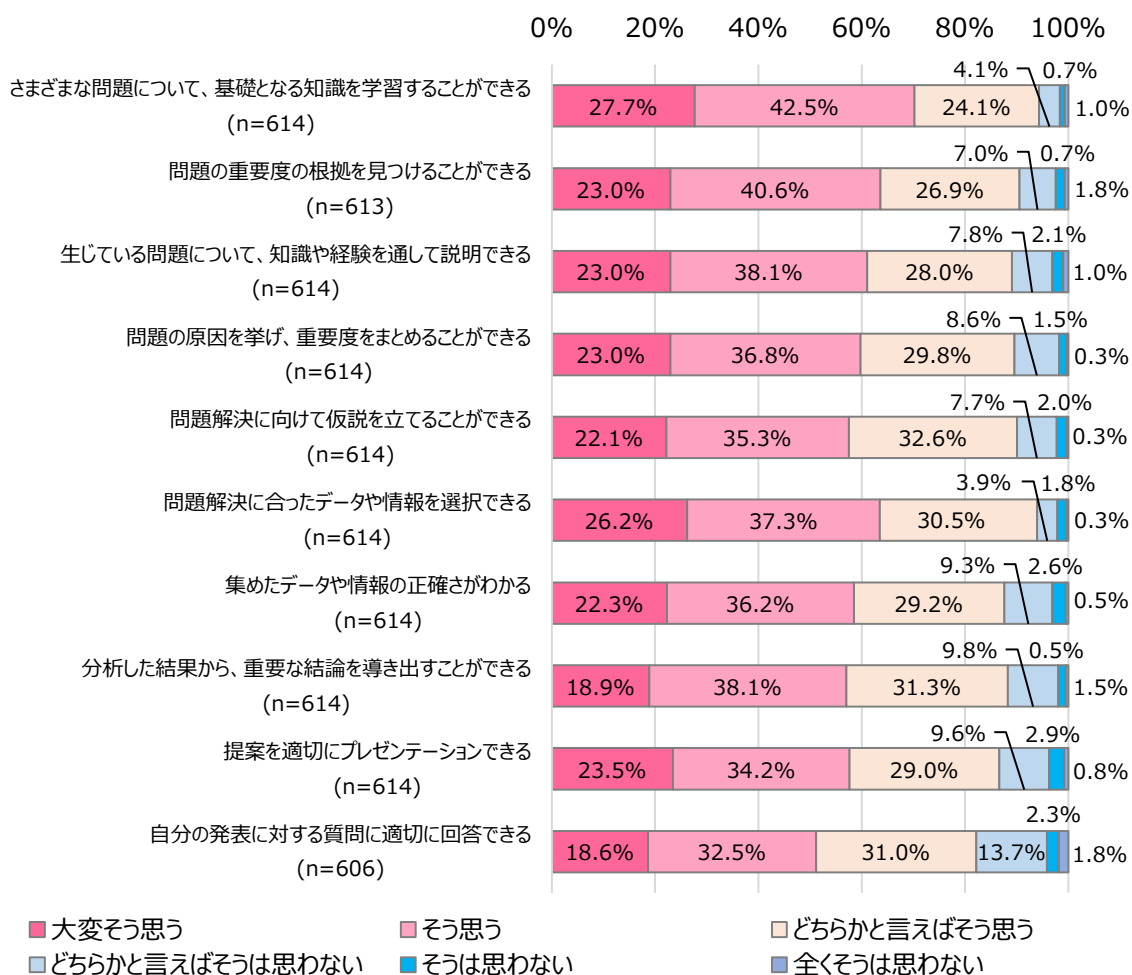


※無回答は除外

5-4-5 PPDAC スキル

□ PPDAC スキルについては、「さまざまな問題について、基礎となる知識を学習することができる」「問題の重要度の根拠を見つけることができる」「問題解決に向けて仮説を立てることができる」「問題解決に合ったデータや情報を選択できる」に「そう思う（大変そう思う＋そう思う＋どちらかと言えばそう思う）」の割合が 9 割と高い。

図表 5-13 PPDAC スキル



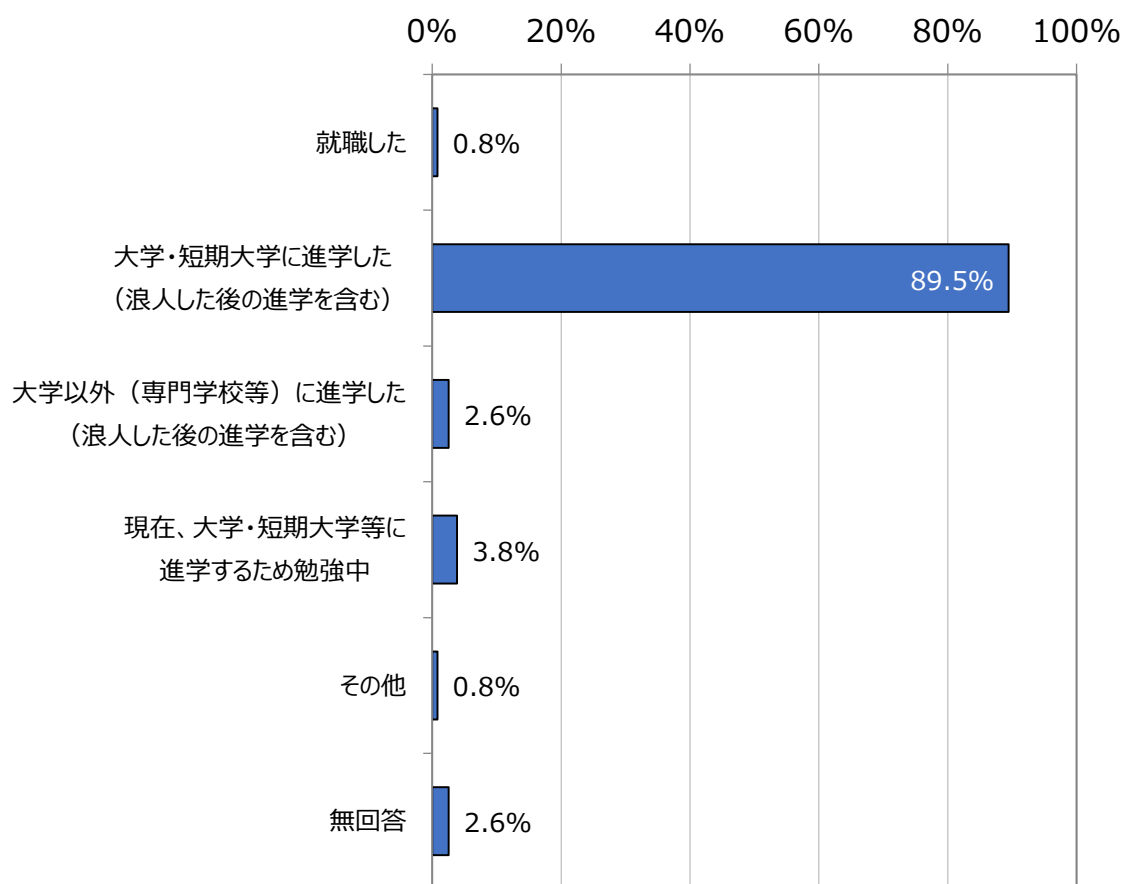
※無回答は除外

5-5 高校卒業後から現在までについて

5-5-1 高校卒業後の進路

- 高校卒業後は「大学・短期大学に進学した」が最も割合が高く 89.5%である。

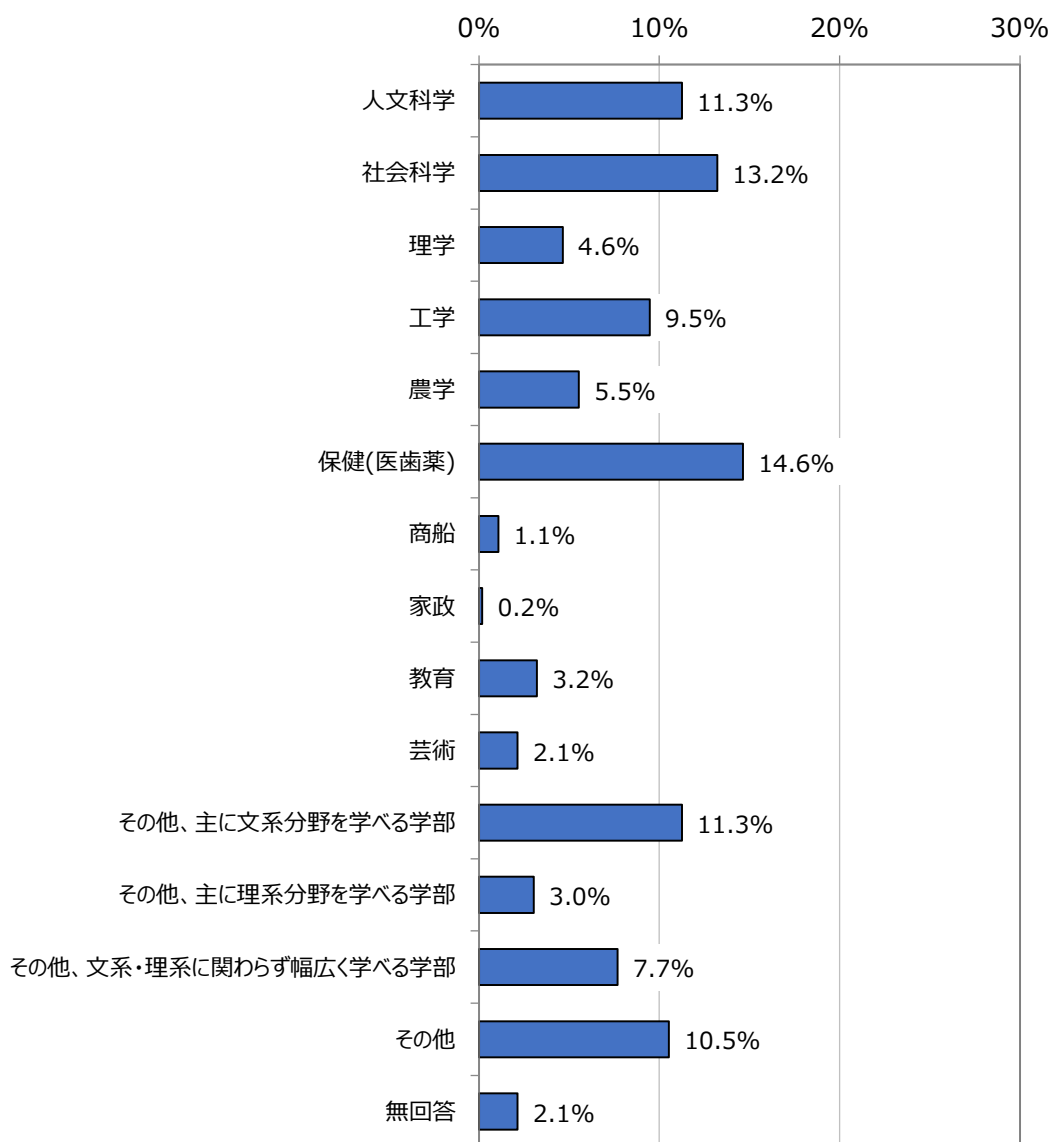
図表 5-14 高校卒業後の進路 (n=626)



5-5-2 高校卒業後に通った（通っている）大学等の学部

- 高校卒業後に通った（通っている）大学等の学部は、「保健（医歯薬）」が 14.6%。
「社会科学」が 13.2%と続く。

図表 5-15 高校卒業後に通った（通っている）大学等の学部（n=560）

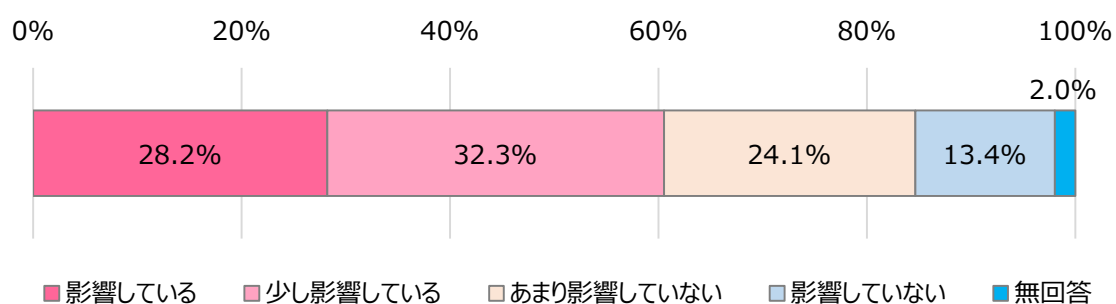


5-5-3 高校卒業後の大学の進路選択へのSGH事業及びWWL事業の経験による影響

□ SGH事業及びWWL事業の経験が高校卒業後の大学の進路選択へ「影響している（影響している＋少し影響している）」と回答した割合は60.5%となっている。

図表 5-16 高校卒業後の大学の進路選択へのSGH事業及びWWL事業の経験による影響

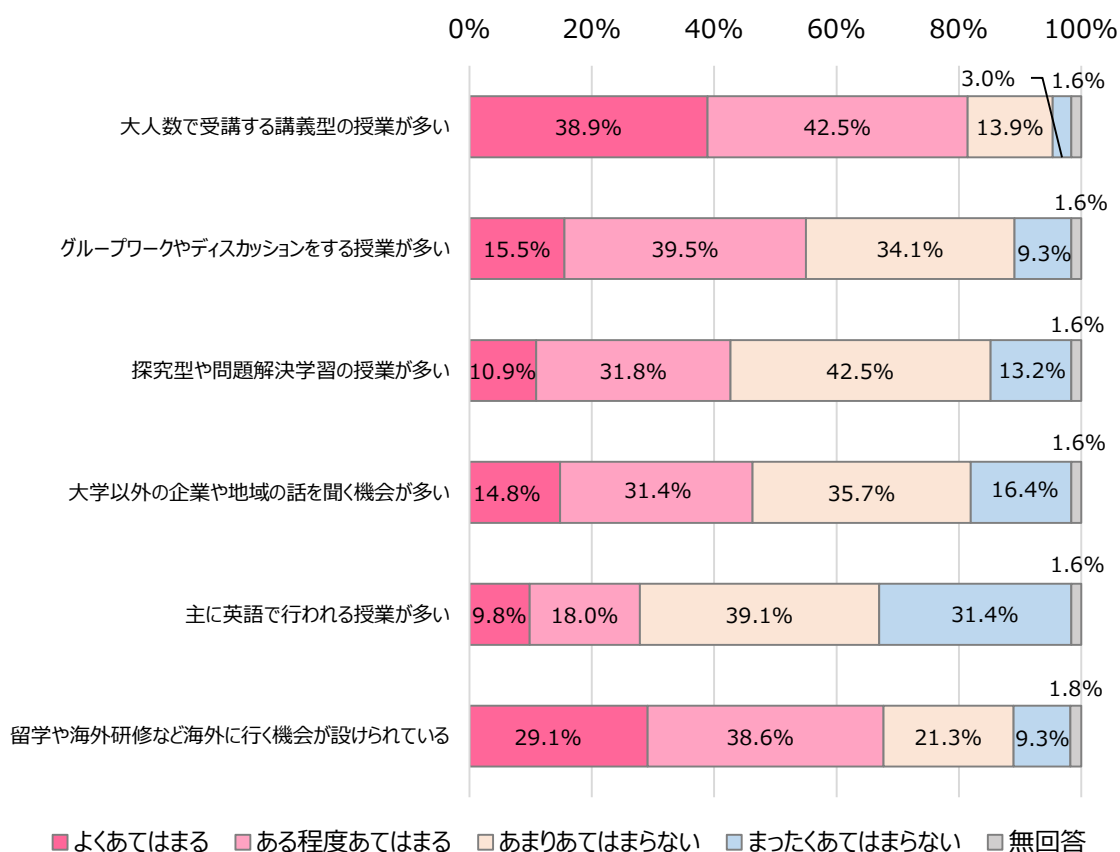
(n=560)



5-5-4 大学の授業について

- 大学の授業について「大人数で受講する講義型の授業が多い」に「あてはまる（よくあてはまる＋ある程度あてはまる）」と回答した割合が最も高く、81.4%となっている。
- また、「留学や海外研修など海外に行く機会が設けられている」にあてはまる割合は、67.7%と高い。
- 一方で「グループワークやディスカッションをする授業が多い」は55.0%、「探究型や問題解決学習の授業が多い」は42.7%と、必ずしもWWL事業で行っていたような授業形式の活動が行われているわけではない。

図表 5-17 大学の授業について (n=560)

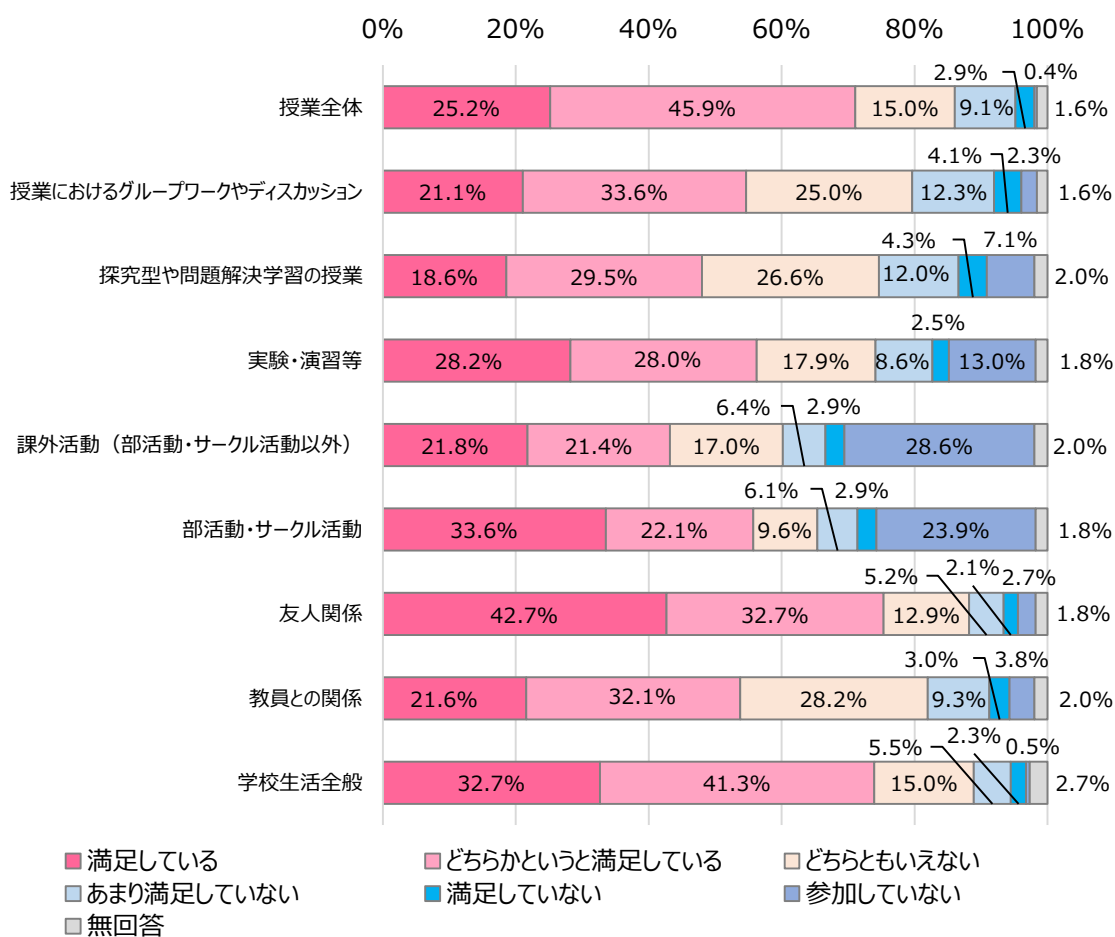


5-5-5 大学生活への満足度

(1)満足度

□ 大学生活への満足度の割合が高いのは「授業全体」「友人関係」「学校生活全般」で7割以上となっている。

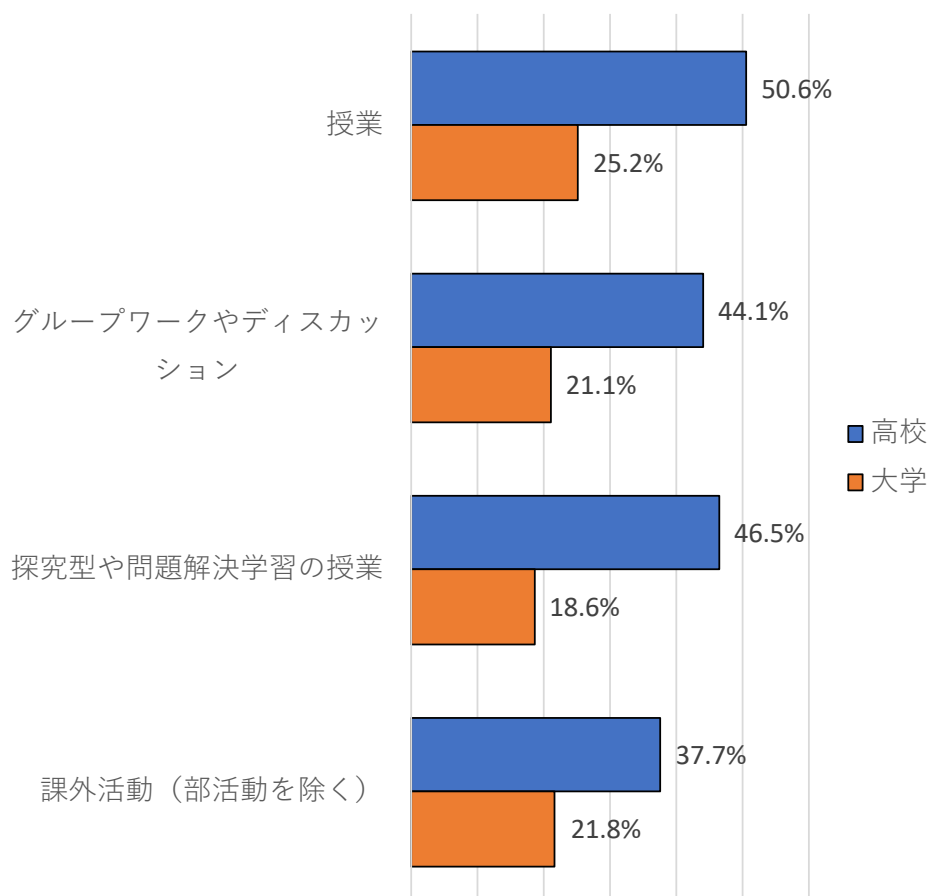
図表 5-18 大学生活への満足度 (n=560)



(2)高校時代との比較

- 授業内容等について、高校時代と大学時代の満足度を比較したところ、全ての項目について高校時代の方が、満足度が高かった。

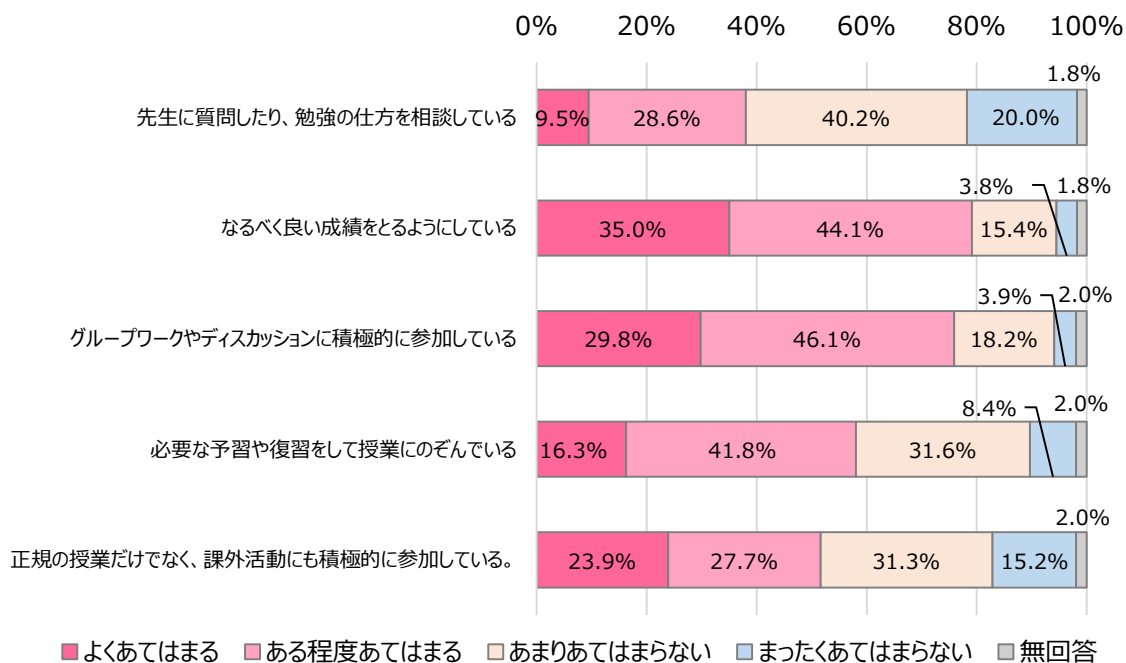
図表 5-19 学校生活の満足度（「満足している」割合）



5-5-6 大学の授業等に対する自身の取組み方

□ 大学の授業等に対する自身の取組み方については、「なるべくいい成績をとるようにしている」「グループワークやディスカッションに積極的に参加している」に「あてはまる（よくあてはまる＋ある程度あてはまる）」と回答した割合が高く、7割以上となっている。

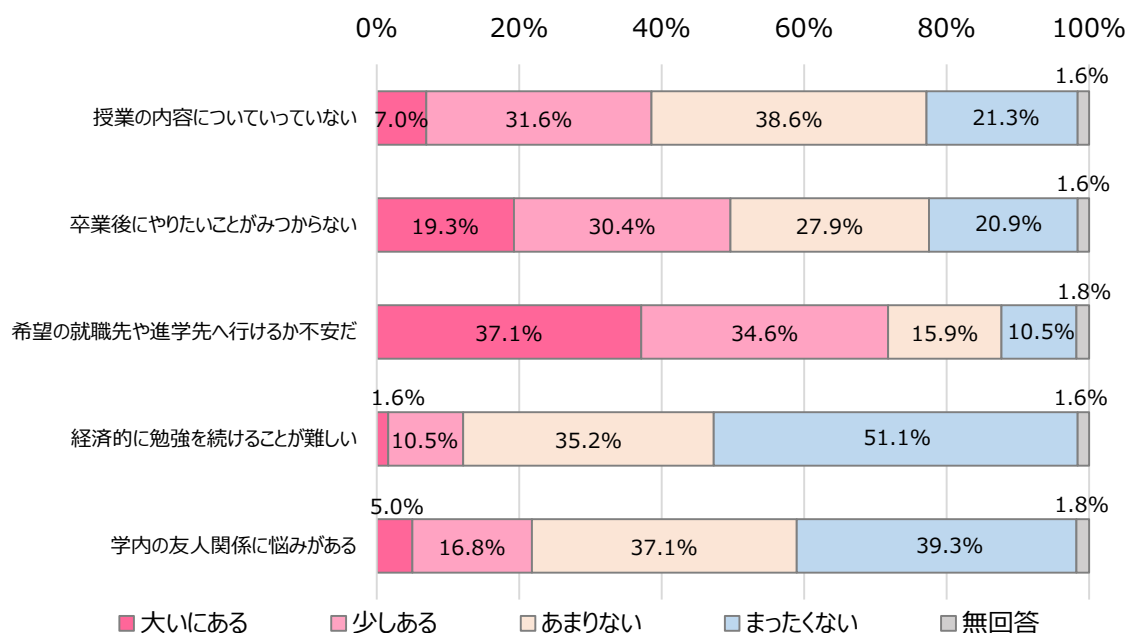
図表 5-20 大学の授業等に対する自身の取組み方 (n=560)



5-5-7 大学生活を送る上での不安や悩み

□ 大学生活を送る上での不安や悩みについて「希望の就職先や進学先へ行けるか不安だ」に「ある(大いにある+少しある)」と回答した割合が最も高く、71.7%となっている。「ない(あまりない+まったくない)」と回答した割合が高いのは、「経済的に勉強を続けることが難しい(86.3%)」次いで「学内の友人関係に悩みがある(76.4%)」となっている。

図表 5-21 大学生活を送る上での不安や悩み (n=560)

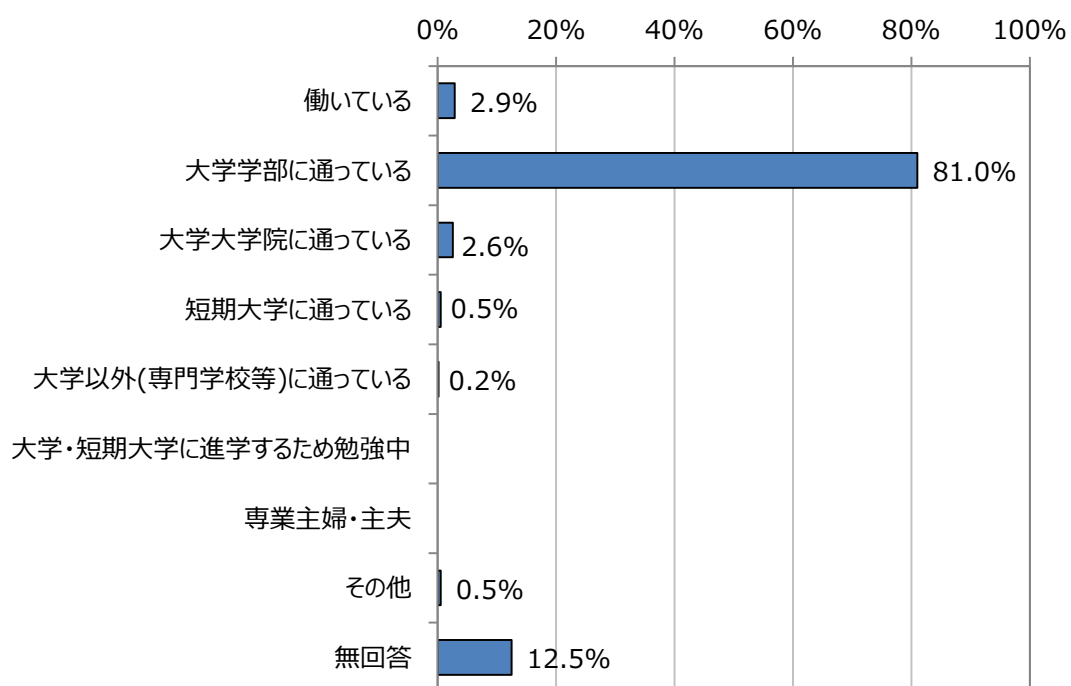


5-6 現在の生活とWWL事業

5-6-1 現在の状況

□ 現在、「大学学部に通っている」が81.0%と最も割合が高い。

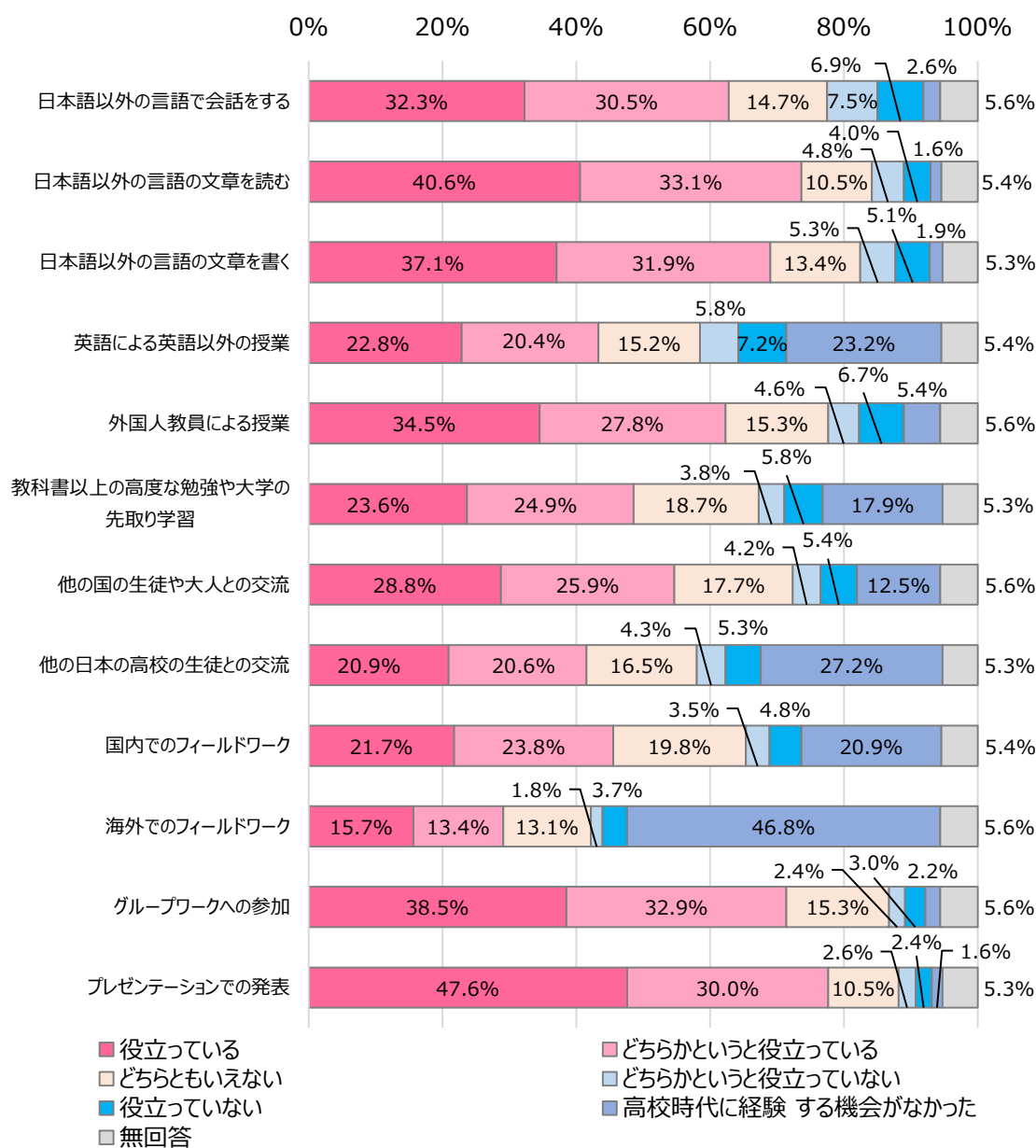
図表 5-22 現在の状況 (n=626)



5-6-2 現在の生活に役立っている高校時代の経験

- 高校時代の経験が現在の生活に役立っているかどうかについては、「日本語以外の言語の文章を読む」「グループワークへの参加」「プレゼンテーションでの発表」が役立っている割合が高い。

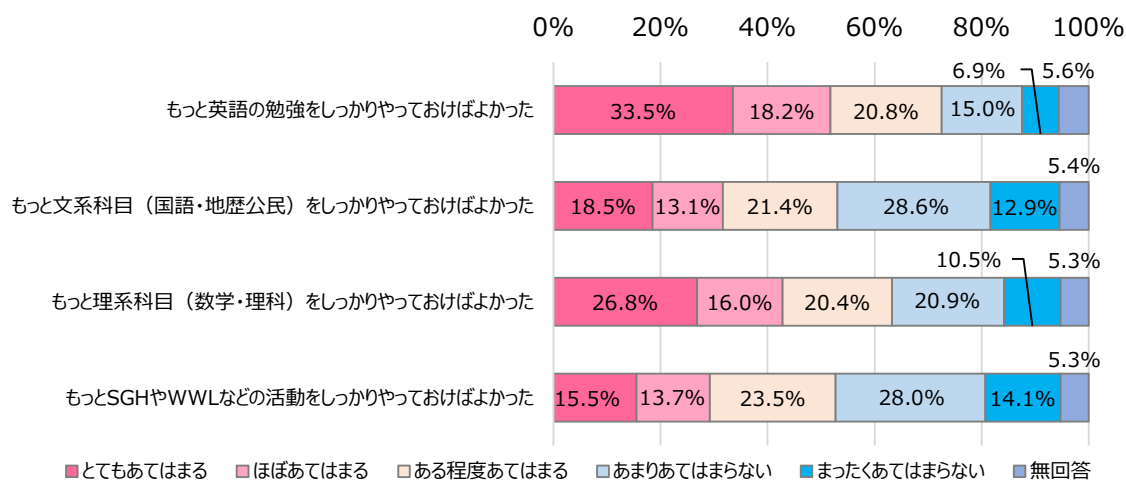
図表 5-23 現在の生活に役立っている高校時代の経験 (n=626)



5-6-3 高校時代を振り返っての自身の考え

- 高校時代を振り返って「もっと英語の勉強をしっかりとっておけばよかった」に「あてはまる（とてもあてはまる＋ほぼあてはまる＋ある程度あてはまる）」と回答した割合が72.5%と最も高く、次いで「もっと理系科目（数学・理科）をしっかりとっておけばよかった」と回答した割合が63.2%である。

図表 5-24 高校時代を振り返っての自身の考え (n=560)

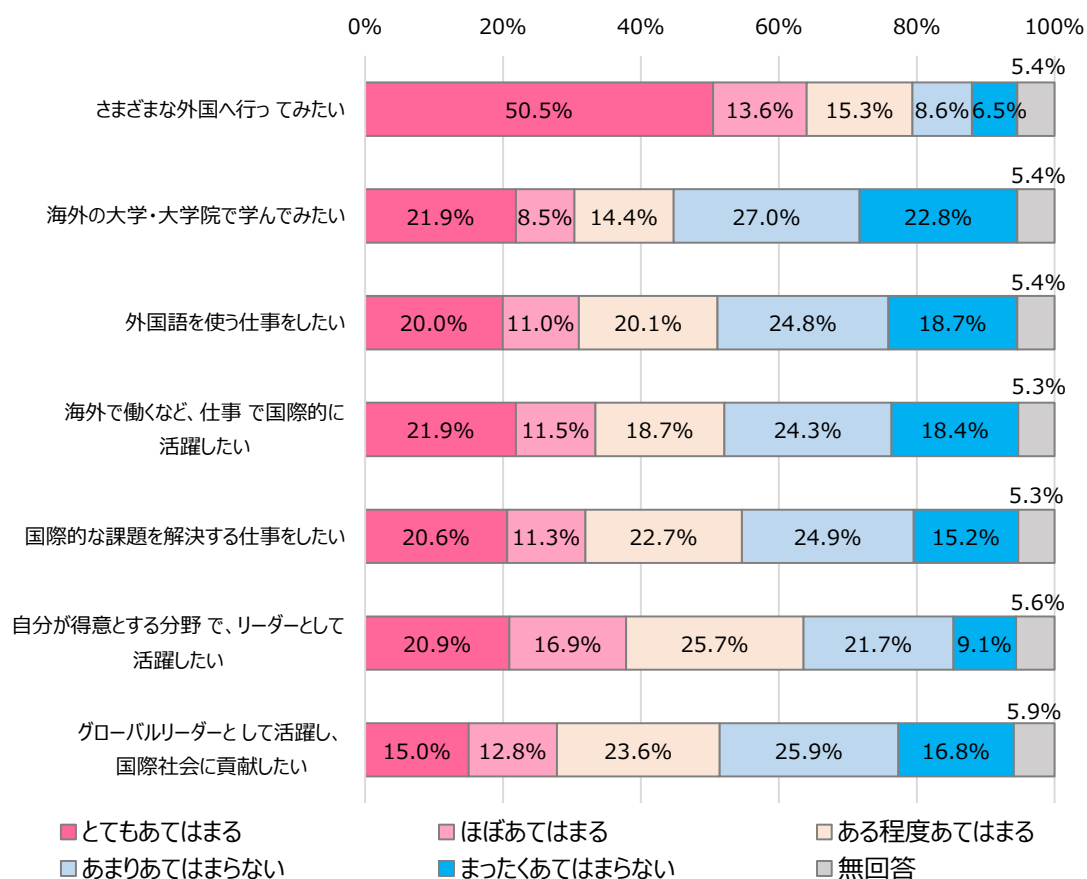


5-7 現在の自身の考えや行動について

5-7-1 将来の希望

- 現在の自身の考えとして「さまざまな外国へ行ってみたい」に「あてはまる（とてもあてはまる+ほぼあてはまる+ある程度あてはまる）」と回答した割合が 79.4% と最も高く、次いで「自分が得意とする分野で、リーダーとして活躍したい」の割合が高い。

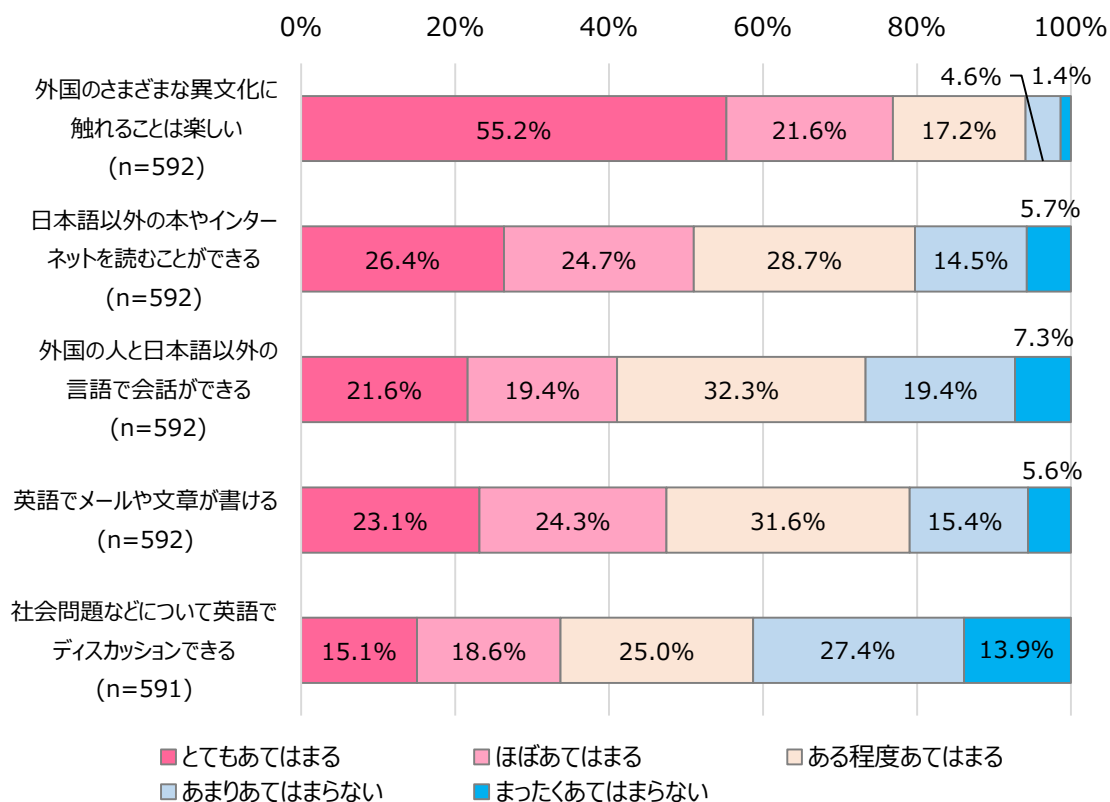
図表 5-25 将来の希望 (n=626)



5-7-2 外国語リテラシー

- 「外国のさまざまな異文化に触れることは楽しい」に「あてはまる（とてもあてはまる＋ほぼあてはまる＋ある程度あてはまる）」と回答した割合が最も高く、9割以上となっている。
- 「社会問題などについて英語でディスカッションできる」に「あてはまる（とてもあてはまる＋ほぼあてはまる＋ある程度あてはまる）」と回答した割合は約5割だが、その他の項目については7割以上となっている。

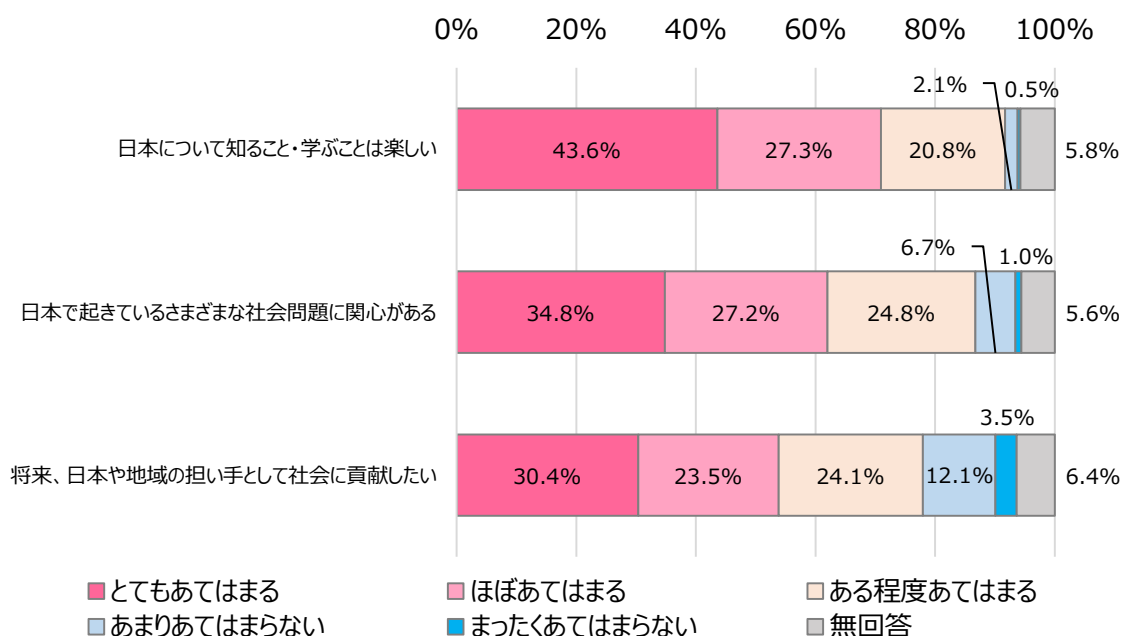
図表 5-26 外国語リテラシー (n=626)



5-7-3 日本への関心

- 日本への関心については、すべての項目で7割以上が「あてはまる（とてもあてはまる+ほぼあてはまる+ある程度あてはまる）」と回答した割合が高く、7割以上となっている。

図表 5-27 日本への関心 (n=560)

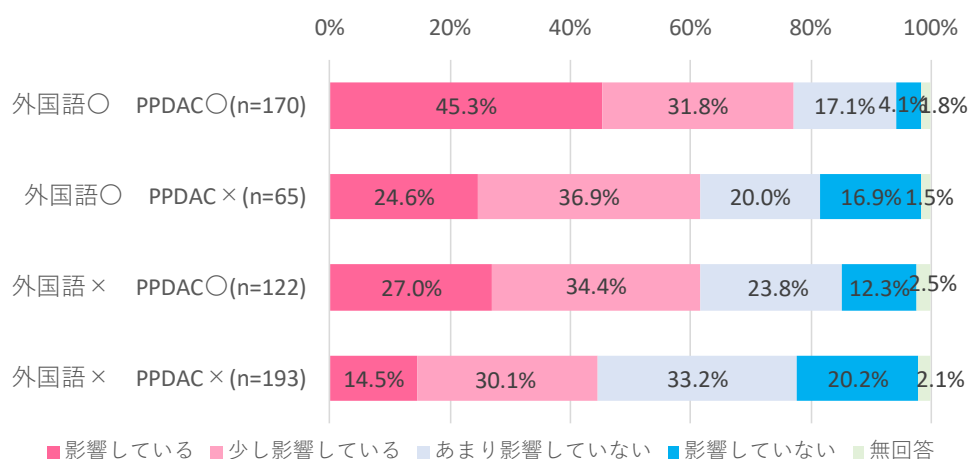


5-8 高校時代に身に付けた力と大学生活の関係

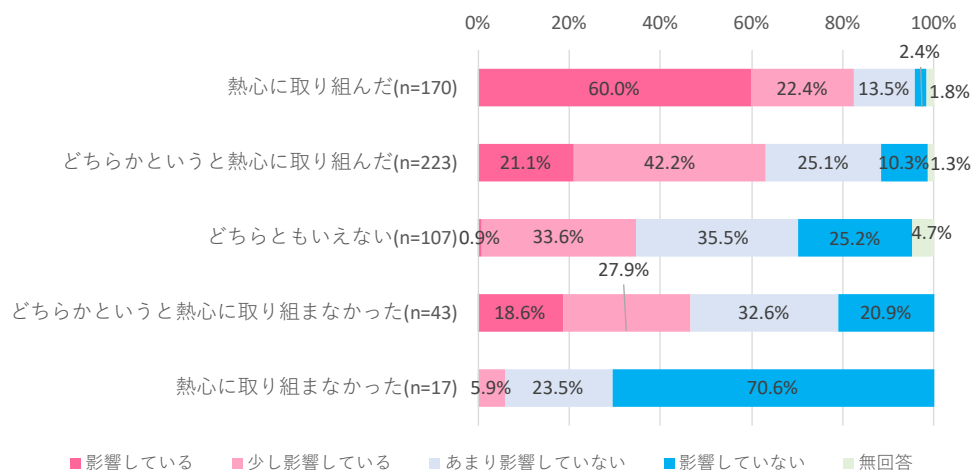
5-8-1 進路選択への影響

- 高校時代の WWL 事業の熱心度、高校時代に WWL 事業を通じて身に付けた力と大学生活の関係をみる。
- まず、高校卒業時に「外国語リテラシー」「PPDAC スキル」を身にしていたかどうかと、大学の進路選択時の WWL 事業の影響の関係をみる。その結果、WWL 事業の経験に影響をうけた進路選択をしている。
- なお、高校時代に WWL 事業に熱心に取り組んでいた生徒ほど、大学の進路選択時に WWL 事業の影響を受けている。

図表 5-28 高校で身に付けた能力状況別 大学の進路選択における WWL 事業の影響



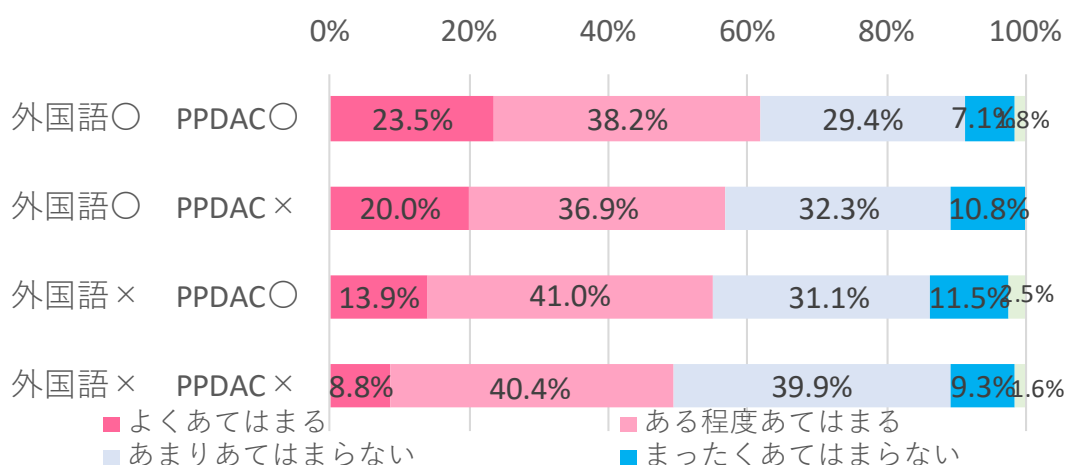
図表 5-29 WWL 事業熱心度別 大学の進路選択における WWL 事業の影響



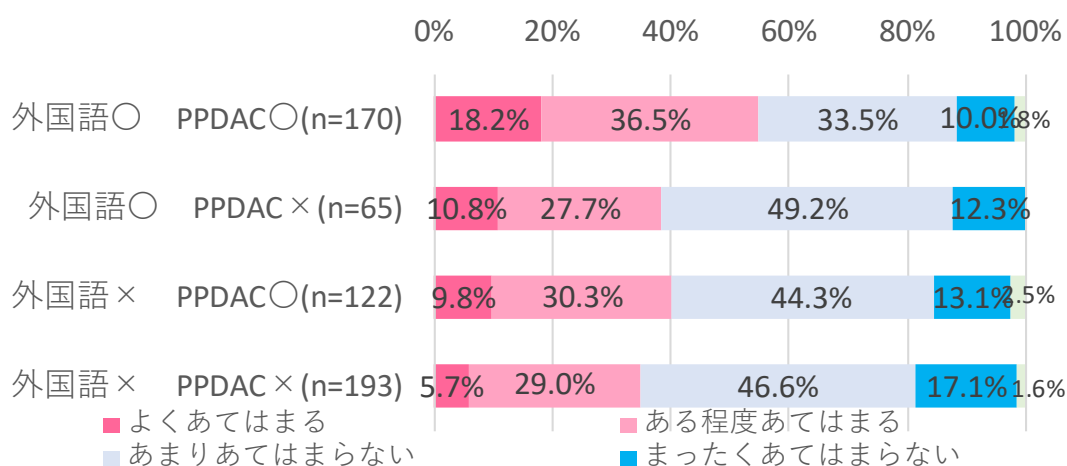
5-8-2 通っている大学の状況

- 高校時代に WWL 事業を通じて身に付けた力と大学の状況の関係をみる。
- 「外国語リテラシー」「PPDAC スキル」の両方を身に付けた卒業生は「探究型や問題解決学習の授業が多い」大学に通っている（通っていた）。

図表 5-30 高校で身に付けた能力状況別 グループワークやディスカッションをする授業が多い

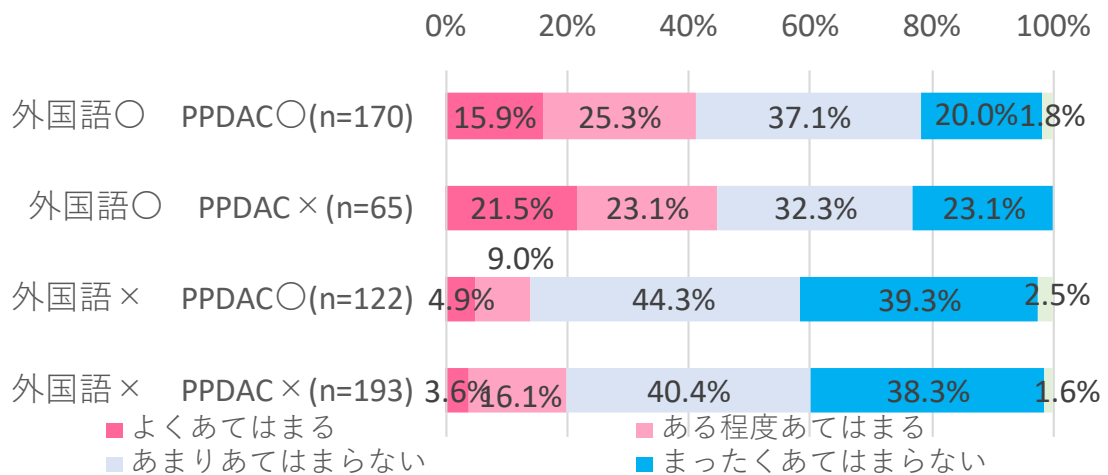


図表 5-31 高校で身に付けた能力状況別 探究型や問題解決学習の授業が多い

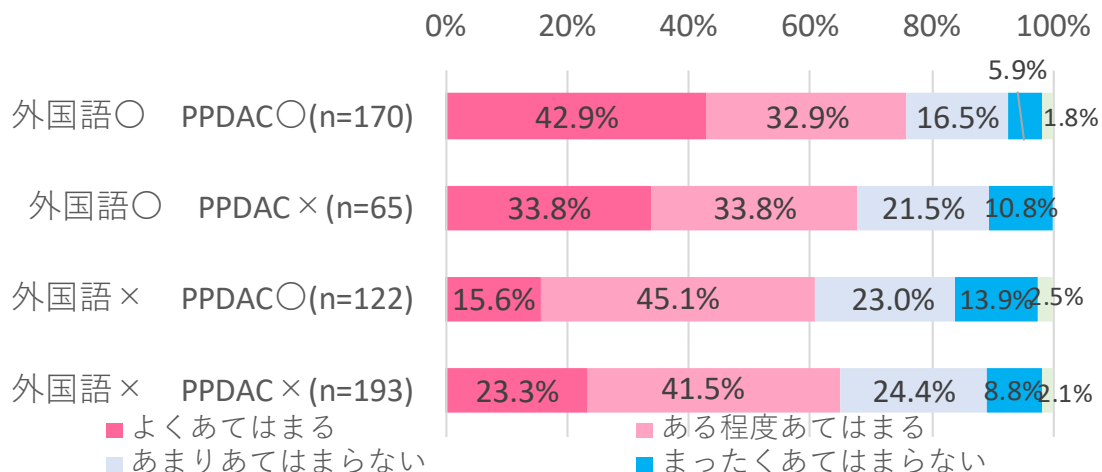


□ 「外国語リテラシー」を身に付けた卒業生は「主に英語で行われる授業が多い」「留学や海外研修など海外に行く機会が設けられている」大学に通っている（通っていた）。

図表 5-32 高校で身に付けた能力状況別 主に英語で行われる授業が多い



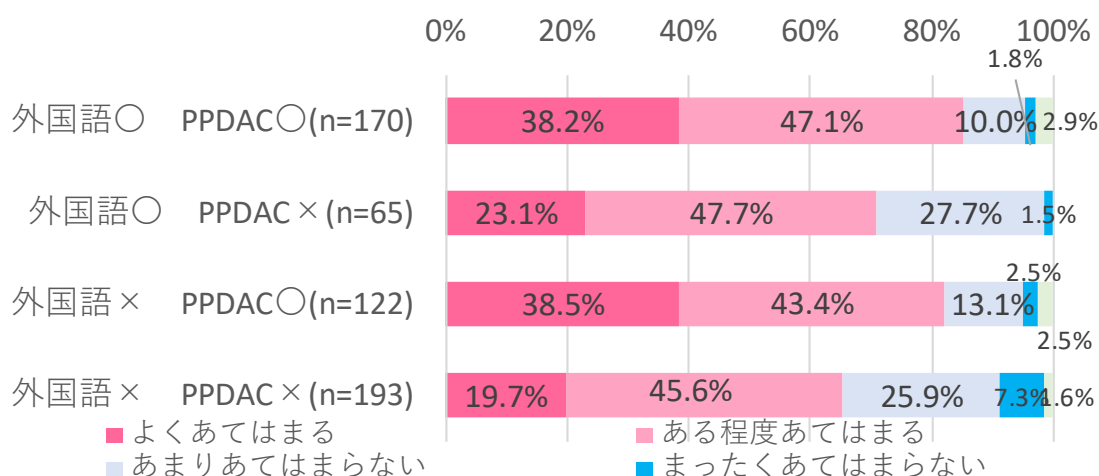
図表 5-33 高校で身に付けた能力状況別 留学や海外研修など海外に行く機会が設けられている



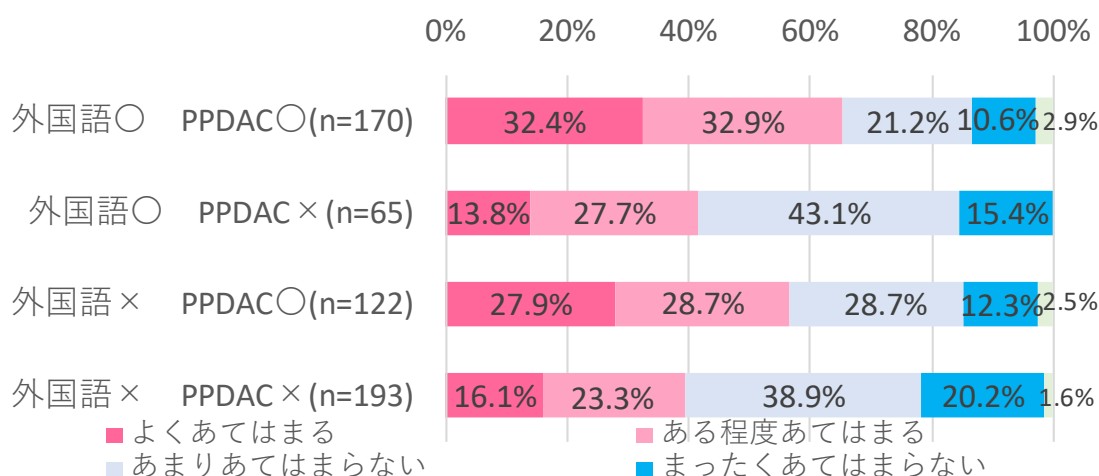
5-8-3 授業等への取り組み

□ 「PPDAC スキル」を身に付けた卒業生は、大学生活で「グループワークやディスカッションに積極的に参加している」「正規の授業だけでなく、課外活動にも積極的に参加している」割合が高い。

図表 5-34 高校で身に付けた能力状況別 グループワークやディスカッションに積極的に参加している



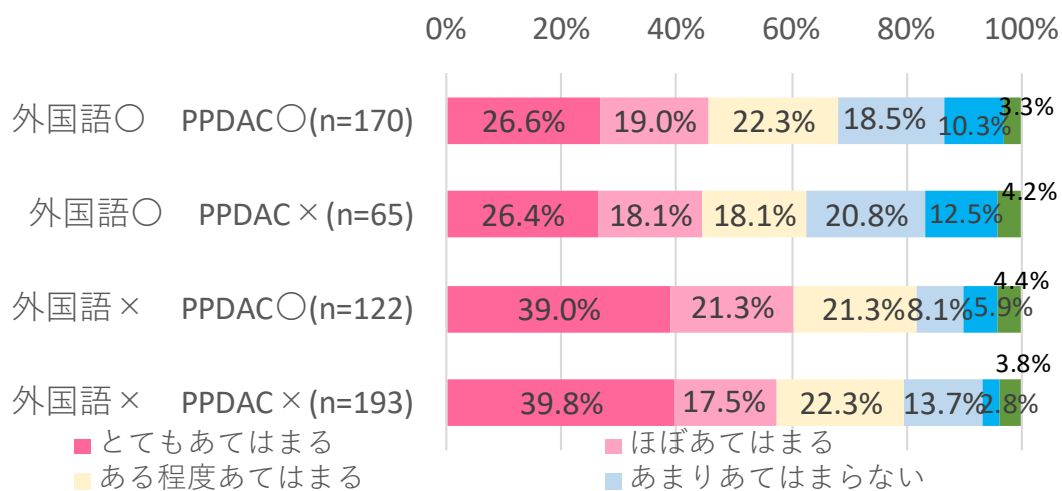
図表 5-35 高校で身に付けた能力状況別 正規の授業だけでなく、課外活動にも積極的に参加している



5-8-4 高校時代を振り返って

- 「外国語リテラシー」を身に付けていない卒業生は、高校時代を振り返って「もっと英語の勉強をしっかりとっておけばよかった」と思う割合が高い。

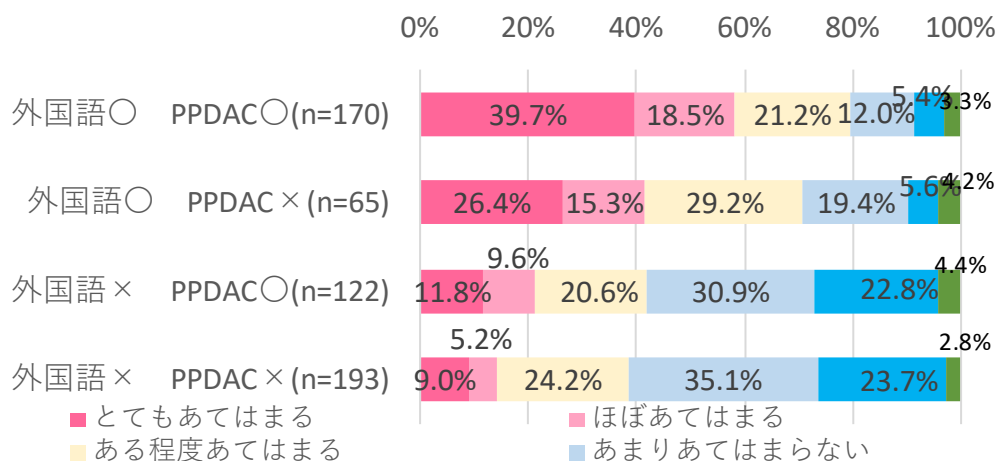
図表 5-36 高校で身に付けた能力状況別 もっと英語の勉強をしっかりとっておけばよかった



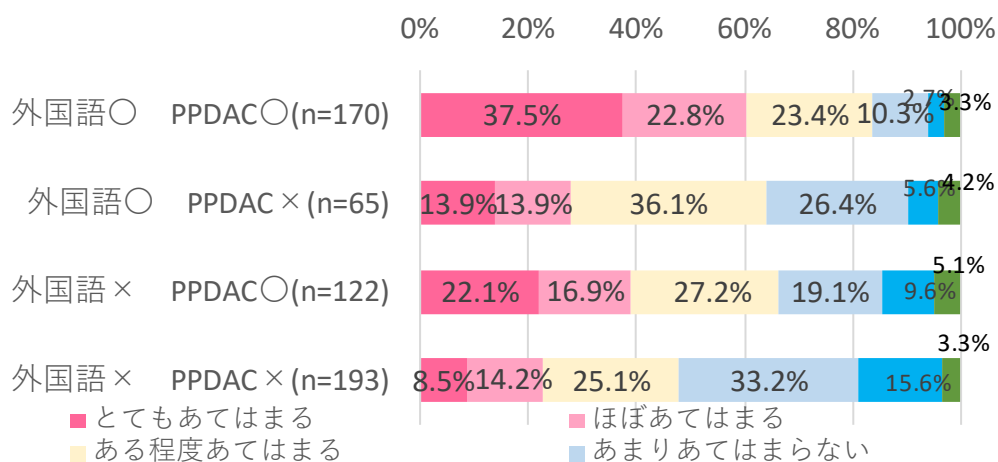
5-8-5 将来の希望

- 高校卒業時に「外国語リテラシー」を身に付けた卒業生は「国際的な課題を解決する仕事」、「PPDAC スキル」を身に付けた卒業生は「日本や地域の担い手として貢献」をしたい割合が高い。
- 一方で、「グローバル・リーダーとして活躍・貢献」は、「外国語リテラシー」「PPDAC スキル」の両方を身に付けた卒業生で割合が高い。
- 高校時代に身に付けた能力と将来の考えについても密接に関係している。

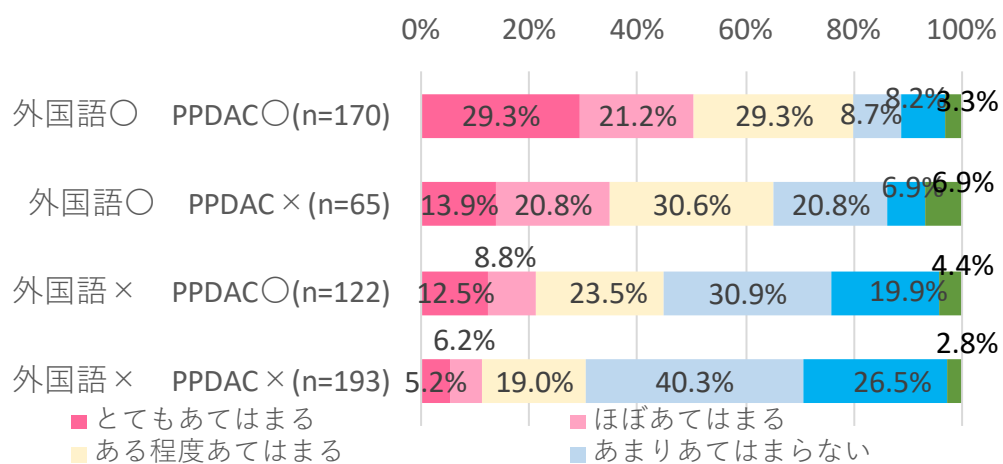
図表 5-37 高校で身に付けた能力状況別 国際的な課題を解決する仕事をしたい



図表 5-38 高校で身に付けた能力状況別 将来、日本や地域の担い手として社会に貢献したい



図表 5-39 高校で身に付けた能力状況別 グローバル・リーダーとして活躍し、国際社会に貢献したい



5-9 まとめ

WWL 事業に参加していた卒業生は、6割が WWL 事業の経験が大学の進路選択に「影響している」と回答しているなど、卒業生アンケート調査から WWL 事業が卒業後も、生徒に影響を与えていることが明らかになった。

大学の授業では、「留学や海外研修など海外に行く機会が設けられている」にあてはまる割合は、67.7%と高い。また、卒業生の7割以上が「グループワークやディスカッションに積極的に参加している」。さらに、高校時代の「日本語以外の言語の文章を読む」「グループワークへの参加」「プレゼンテーションでの発表」が現在でも役立っていると回答している。

一方、「グループワークやディスカッションをする授業が多い」は 55.0%、「探究型や問題解決学習の授業が多い」は 42.7%と、WWL 事業で行っていたような授業形式の活動は大学では半数程度の実施割合となっている。また、大学の授業の満足度については、「授業全体」「授業におけるグループワークやディスカッション」「探究型や問題解決学習の授業」など高校時代と比べて高くはない。高校時代に行われていた WWL 事業のような授業が、必ずしも大学で実施されているわけではないことが伺える。

ただし、WWL 事業を通じて身に付けた力と大学生活の関係をみると、WWL 事業で力を身に付けた学生ほど、その力を活かした進路選択をしていることがわかる。WWL 事業を通じて「外国語リテラシー」「PPDAC スキル」を身に付けている卒業生ほど、WWL 事業の経験が進路選択に影響していると回答している。さらに「外国語リテラシー」「PPDAC スキル」の両方を身に付けた卒業生は「探究型や問題解決学習の授業が多い」大学に通っている割合が高い。このほか、「外国語リテラシー」を身に付けた卒業生は「主に英語で行われる授業が多い」「留学や海外研修など海外に行く機会が設けられている」大学に通っている割合が高い。「PPDAC スキル」を身に付けた卒業生は、大学生活で「グループワークやディスカッションに積極的に参加している」「正規の授業だけでなく、課外活動にも積極的に参加している」割合が高い。

一方で、「外国語リテラシー」を身に付けていない卒業生は、高校時代を振り返って「英語の勉強をしっかりとっておけばよかった」と思う割合が高い。

加えて、高校時代に身に付けた能力と将来の考えについても密接に関係している。高校卒業時に「外国語リテラシー」を身に付けた卒業生は「国際的な課題を解決する仕事」、「PPDAC スキル」を身に付けた卒業生は「日本や地域の担い手として貢献」をしたい割合が高い。さらに、「グローバル・リーダーとして活躍・貢献したい」は、「外国語リテラシー」

「PPDAC スキル」の両方を身に付けた卒業生で割合が高い。

これらより、WWL 事業の経験は卒業後も役立っており、WWL 事業を通じて高校時代に身に付けた能力が、大学生活やその後のキャリアビジョンにも大きく影響していることがわかる。

第6章 カリキュラム開発拠点校ヒアリング

6-1 事例紹介

最終年度のカリキュラム開発拠点校（令和元年度カリキュラム開発拠点校 12 校）へのヒアリングを実施した。

カリキュラム開発拠点校は以下の一覧の通りである。

表 6-1 カリキュラム開発拠点校一覧表

所在地	設置者	学校名
東京都	私立	富士見丘高等学校
長野県	公立	長野県上田高等学校
京都府	公立	京都府立鳥羽高等学校
京都府	私立	同志社国際高等学校
大阪府	国立	大阪教育大学附属高等学校平野校舎
岡山県	公立	岡山県立岡山操山中学校・高等学校
広島県	国立	広島大学附属福山中学校・高等学校
愛媛県	国立	愛媛大学附属高等学校
福岡県	私立	中村学園女子高等学校
長崎県	公立	長崎県立長崎東中学校・高等学校
熊本県	公立	熊本県立熊本高等学校
宮崎県	公立	宮崎県立宮崎大宮高等学校

富士見丘高等学校 (管理機関:学校法人 富士見丘学園)

探究学習でデザイン思考を体得し、実際に校内外でアクション(行動)を起こすことを目指す。また、グループでの探究学習で協働を学び、新学習指導要領における3つの柱を育てる。

■探究型学習、フィールドワークの実施、海外交流の取組

富士見丘高等学校のWWL事業では、まず1年生のグローバルスタディ基礎で、慶應義塾大学大川教授との連携で探究の基礎としてデザイン思考を学ぶ。その上で、2年のグローバルスタディ演習では、ハワイ、マレーシア、台湾の3つに分かれ課題探究を行う。

◀1年生「グローバルスタディ基礎」▶

1年生の探究学習「グローバルスタディ基礎」では、慶應義塾大学大学院メディアデザイン科教授 大川恵子氏の指導の下、デザイン思考型の探究学習を行っている。生徒はデザイン思考を体得するために、まず「2030年、自分たちの身の回りはどう変化しているか」のテーマで未来を予想し、その上で未来を良くするためのアイデアを考える授業を実施している。このようなプロセスで、世界のグローバル・イシューについて学び、どのように課題解決へ向けたアプローチをするべきかを考える訓練を行う。また、生徒自らデザイン思考で課題解決を考えることで、「SDGsについて考えることは楽しい」という意識を持つこともねらっている。

グローバルスタディ基礎の指導には、大川教授以外にも、1年生の教員全員が関わっている。また、グローバルスタディ基礎以外の授業でも、その年の探究学習に合わせた社会課題を取り扱い、授業科目全体で探究学習に取り組む体制となっている。

◀1年次の海外交流・国内交流▶

1年生の探究学習「グローバルスタディ基礎」の授業は、大川教授の研究室の大学生約10名がファシリテートやプレゼンテーションのサポートに入る。大学生のうち半数は海外からの留学生であり、デザイン思考を学ぶだけでなく、英語で留学生とやり取りを行うなど海外交流の実践の場となる。

また、10月にはWWL連携校である池田学園池田高等学校(鹿児島県)を訪問し、互いの課題研究の報告・意見交換会を行っている。富士見丘高等学校の社会科学的なアプローチに対し、SSH校である池田高等学校から科学的な視点の意見を受ける機会となっている。



グローバルスタディ基礎の授業の様子
[出所]同校HP「教育の特色ー探究学習」
(URL : https://www.fujimigaoka.ac.jp/about/education/integrated#inte_free)

◀2年生「グローバルスタディ演習」▶

1年生時にデザイン思考型の探究を身に付けた上で、2年生の探究学習「グローバルスタディ演習」に取り組む。グローバルスタディ演習では、「観光・環境」を大きなテーマに、アメリカ(ハワイ)・台湾・マレーシアの3か国のチームに分かれ、各国の情勢を踏まえた探究テーマを設定し、グループで探究学習を行う。

グローバルスタディ演習の指導には、同校のWWL担当教員のほかに、各国の観光(ホスピタリティ・人種主義問題)や環境問題・地震等の災害問題に造詣の深い大学教授から、「観光・環境」の大きなテーマについて、知見の教示や探究するテーマの設定についてアドバイスを受けている。

3か国別の探究学習のテーマならび指導体制

	テーマ	海洋リゾート開発・海洋汚染・ホスピタリティ・観光における人種主義問題
ハワイ班	指導	ハワイ大学 都市・地域開発学部 教授ラッセル・ウエノ氏 (月1回のオンライン授業) 明海大学 ホスピタリティ・ツーリズム学部教授 神末 武彦氏 (サマースクールの開催)
	テーマ	災害(地震)・防災・地域社会
台湾班	指導	慶應義塾大学 環境情報学部 准教授 大木 聖子氏
	テーマ	環境問題・社会の発展と自然の共生
マレーシア班	指導	慶應義塾大学理工学部 教授 伊香賀 俊治氏 地球環境戦略研究機関 上席研究員 藤野 純一氏

グローバルスタディ演習では、探究だけでなく、仲間と協力し合う「協働」を学ぶことも目的とし、グループで探究学習を行っている。グループ内で作業を補完し合ったり、探究学習後に実際に課題解決のためのアクションを起こしたりと、グループに貢献することによって、新学習指導要領における3つの柱(学びに向かう力、人間性など/知識及び技能/思考力、判断力、表現力など)が育つと考えている。

探究学習を通じ実際にアクションを起こした事例もある。環境問題をテーマにしたマレーシア班のグループは、ペットボトル削減の観点から、自分たちの一番身近である学校にて、自販機を撤去しマイボトル用の浄水器の設置を学校に求め、実現している。

《2年次の海外交流・フィールドワーク》

新型コロナウイルス感染症が流行する以前、および令和4年度は、2年生時に「グローバルスタディ演習」の各対象国を訪問し、フィールドワーク、ならび、現地の高校生に向けて、各グループの探究学習を英語でプレゼンテーションを行った。

なお、令和2年度は、各フィールドワークにて訪問予定だった高等学校とのオンライン交流に変更した。

令和3年度は、台湾チームは東北、マレーシアチームは沖縄の国内フィールドワークに代替した。国内フィールドワークでも、当初設定した探究テーマに基づき調査し、地元企業など訪問している。ハワイチームは代替研修を行っていないが、ハワイ政府観光局の協力の上、ハワイ語での川柳コンテストを開催している。



マレーシア班のフィールドワーク（※SGH期の写真）
[出所]同校HP「教育の特色－探究学習」（URL：
https://www.fujimigaoka.ac.jp/about/education/integrated#inte_free）

■大学教育の先取り履修等、大学との連携

2年生の探究学習「グローバルスタディ演習」のハワイチームの探究学習では、ハワイ大学 都市・地域開発学部 教授 ラッセル・ウエノ氏による月1回のオンライン授業を実施している。

また、ウエノ教授が明海大学で客員教授を勤めていることから、夏にはウエノ教授と明海大学 ホスピタリティ・ツーリズム学部教授 神末 武彦氏の指導の下、サマースクールを開講し、全編英語で、観光と経済、ディスティネーション・マネジメント（観光のマネジメント）を学んでいる。この学習を通じ、明海大学の単位が取得できる。



ハワイ大学 ウエノ教授によるオンライン授業
[出所]同校HP「高2 グローバルスタディ演習が始まりました」（URL：
https://www.fujimigaoka.ac.jp/newslst/sgh/2022/20220510_30591.php）

■高校生国際会議等

令和3年度までは、以前より交流のある、WWL連携校の池田学園池田高等学校・沖縄尚学高等学校とオンライン会議を実施している。令和4年度は、フィールドワーク先の訪問予定校がオンラインにて参加し、富士見丘高等学校・池田高校の探究学習の発表と、各校を交えたディスカッションを実施。

《生徒の声》

～フィールドワークについて～

- ・私が富士見丘高等学校に入学した一番の理由は SGH（※2015年～2019年 SGH校）だった。受験期にパンフレットやHPを見て、フィールドワークに行き、実際に海外に行き本物を見て感じてという取組が魅力的だった。高校に入学するまで、大勢の前でプレゼンをする機会がなかったが、グローバルスタディや代替フィールドワークを通して、意外に自分でもできるんだと、自分もここまでできるんだという気付きができた。（2年生）
- ・ハワイ班の探究学習で、ハワイと日本を比較した際、同じ目標を目指していても、全然やり方が違うことが多いことに気付いた。世界中がSDGsなどの同じ目標を目指していても様々なやり方がある。世界各国のやり方についてもっと詳しく知れたらと思っている。（2年生）

長野県上田高等学校 (管理機関:長野県教育委員会)

SDGs を探究の大きなテーマに掲げる。1 年次に JICA のワークショップや外部の SDGs の取組など、様々な情報に触れ、1年かけて探究学習のテーマ設定を行うカリキュラムを開発している。

■探究型学習

長野県上田高等学校の探究型学習は、「グローバルスタディ (GS) I・II」の1・2年生の必修科目と、3年生の「グローバルスタディ (GS) III」の選択科目からなる。

1・2年生のGSは継続して行い、1年生の最後に探究学習の各自のテーマを設定、2年生で探究学習を行うカリキュラムとなっている。なお、探究学習は個人で行う。

探究学習の進め方はクラスの枠を払い、生徒約10名(1・2年生各5~6名)に対し教員一人が付く。校長・教頭を含めた全教員がGSに関わり、担当生徒の研究テーマの設定や進行状況について助言する等、学校全体で探究学習を進めている。なお、1年次は各クラスの学級担任もGSの授業を担当し、自分のクラスの生徒の学習状況を把握している。

2年生までの活動で探究学習へ関心の強まった生徒は、3年次にGSIIIを選択し、さらに探究を深める。

上田高校の探究学習カリキュラム

1 年生 「グローバルスタディ(GS) I」	必修科目。SDGs を学ぶことから始め、最後に2年次(GS II)で何を探究するかテーマ設定を行う。
2 年生 「グローバルスタディ(GS) II」	必修科目。1年生(GS I)で設定したテーマを元に探究学習を行う。 日本語で探究学習を行う「GS II J」と、探究学習のほかに海外研修の事前学習や英語のディスカッションを学ぶ「GS II E」に分かれる。
3 年生 「グローバルスタディ(GS) III」	選択科目。2年生までの探究活動をさらに深め、論文執筆などを行う。

《グローバルスタディ(GS) I》

同校では、探究学習のテーマ設定について、「SDGs」「グローバル課題またはローカル課題」と大きなテーマを定めており、1年次には生徒はそれに関連する研究テーマを各自設定する。

SDGsに関する探究学習を行うにあたり、グローバルスタディ (GS) Iでは、まず初めにSDGsを学ぶことから始める。JICA (国際協力機構) と共同した「国際理解ワークショップ」の実施や、地元企業や大学等を訪問または来校いただき、その企業・団体のSDGsに関する取組について学ぶ等、学校の中で学ぶだけでなく外部の情報にもいろいろと触れる時期となっている。

《グローバルスタディ(GS) II》

GS Iにて設定した各自の研究テーマについて、実際に探究学習を行う。探究学習を進めるにあたり、生徒は必要に応じて担当教員に複数回質問・相談をする。4月には設定した研究テーマについて担当教員に報告し、5月には情報収集の状況を確認する等、綿密に状況を共有することで、生徒自身にテーマ設定をさせながらも、設定のブレや進行の遅れがないよう、教員が助言している。

9月には中間報告会、2月には報告会を実施している。報告会は教室で行う。研究テーマのカテゴリごとに教室を分け、発表する時間帯を区切る。生徒は自分の発表時間に自分の研究について発表し、発表時間以外には、他の生徒の発表を聞く。生徒同士が互いの研究について触れることができる。特に、中間発表では、生徒が互いに質問したり意見し合うことで、その後の探究学習に向けた方針が固まる機会となっている。



2月の報告会の様子
[出所]同校HP「令和4年度GS報告会を行いました」(URL: <https://ueda-hs.d-emu.co.jp/wp/4029>)

■海外フィールドワーク・留学

上田高校の海外フィールドワークは、2年生全員参加の台湾研修旅行のほか、ヒューマン アクト イン マニラ、カンボジア井戸プロジェクト、ボストン スタディ プログラムの3種の希望制の研修プログラムを実施している。

《台湾研修旅行》

台湾研修旅行では、現地の高校生との交流、大学や学術機関を訪れてのフィールドワーク、B&S (Brothers & Sisters) プログラム研修の3種の取組を実施する。B&S プログラムで、現地の大学生と市内見学をしたり、高校訪問で、現地の高校生とディスカッションを行うなどして、英語でのコミュニケーション能力を育成する機会にもなっている。

《ヒューマン アクト イン マニラ/カンボジア井戸プロジェクト》

ヒューマン アクト イン マニラは、観光地化されていないフィリピンの街において、フィールドワークを行う。貧困問題・健康問題等の社会問題について実際に触れる機会となっている。

カンボジア井戸プロジェクトは、学ぶだけでなく行動を起こしたいと希望した生徒の有志により開始されたプロジェクトである。バザーや地元団体へのプレゼンテーション活動を通じて、実際にカンボジアに井戸を寄付するプロジェクトである。

ヒューマン アクト イン マニラやカンボジア井戸プロジェクトに参加する生徒は、探究学習でも関連するテーマを設定していることが多い。また、関連テーマではない生徒も、研修の参加を通じ本プロジェクトに関連するテーマに探究の課題を変えるなど、生徒に与える影響は大きいプログラムとなっている。



ヒューマン アクト イン マニラでのフィールドワークの様子
(※SGH 期の写真)

[出所]NGO 団体アイキャンブログ (URL : <https://blog.goo.ne.jp/icanmanilaoffice/e/9e9c81365f337b457d2fd3ac25353fed>)

《ボストン スタディ プログラム》

ボストン スタディ プログラムは、語学研修と学際的な学びを兼ねて、ボストンの現地大学や学術機関等を訪問するプログラムである。現地大学では見学や講義の受講だけでなく、現地大学の教授に対してプレゼンテーションを行う機会も設けており、教授からプレゼンテーションに対するアドバイスや指導を受けることができる。

《コロナ禍での海外交流》

コロナ禍において海外交流は、すべてオンラインに変更している。台湾研修旅行は、本来訪問予定の高校の生徒とのオンラインでの交流を行った。マニラ研修では現地の NGO スタッフによる貧困家庭へのインタビュー中継を実施した。ボストン研修では、現地大学の教授とライブセッションを行い、プレゼンテーションの指導を受けた。

■大学教育の先取り履修等、大学との連携

大学教育の先取り履修として、長野県立大学の夏期特別集中講義「コミュニティデザイン(まちづくり)」の各論 I に、上田高校の一部生徒が聴講生として受講している。

また、信州大学は、令和 4 年度後期の授業より、WWL の AL ネットワーク校に関わらず県内すべての高校生に対して、科目等履修生としてオンデマンド受講できる取組を行っており、上田高校の希望者生徒も受講している。

■高校生国際会議等

高校生国際会議を、オンラインと対面との併用で、令和 4 年度 6 月 11 日に実施した。県内からは 16 校、県外 6 校、海外 19 校の生徒(総勢約 190 名)が参加した。

当日はエシカル消費・教育・人権・貧困・環境・水・衛生の分科会に分かれて、問題提起とそれに対する討論を行った。最終的に、分科会ごとの提言をまとめ、最後の全体会でアクションプランを提言し、実行委員長がそれらを総括する共同宣言文を発表している。

生徒実行委員会(拠点校を中心とした、複数校の生徒からなる実行委員会)を立ち上げ、生徒自身がどのようなことをやりたいか企画し、準備・運営を行った。

《生徒の声》

～探究型学習について～

- ・自分が 1 年生のときだったら、全校にアンケートを取るなんて大それたことはできなかった。研究を通し、判断力・行動力みたいなものが自然に上がったと思う。(2 年生男子)
- ・中間報告会では、研究していくと自分は「こうなって当たり前」という感じでやっちゃっている部分が、詳しくない人から「どうしてそうなるの?」といった意見をもらおうと、「そうか、そこも考えなきゃいけないんだ」と発見できる。それぞれが自分の興味のあることを深堀りして研究しているから、その立場から意見をもらえるというのは良いなと思った。(2 年生女子)

京都府立鳥羽高等学校 (管理機関:京都府教育委員会)

グローバル科と普通科のある鳥羽高等学校では、グローバル科でカリキュラムの柱を作り、それを普通科へと広げている。

■探究型学習

鳥羽高校では、生徒に身に付けさせたい力として「伝統・文化」、「イノベーション」、「ソリューション」の3項目を立て、さらに2つずつに細分化した6つの資質・能力を掲げている。6つの資質・能力を育成すべく授業設計・教育活動を行っている。

6つの資質・能力

伝統・文化	①歴史をとおりて世界を俯瞰する力
	②多様な文化的背景を持つ人々と協働する力
イノベーション	③科学的に思考・吟味する力
	④新たな価値を創造する力
ソリューション	⑤課題解決の枠組みをデザインする力
	⑥困難な状況を突破する力

《イノベーション探究》

同校のグローバル科では総合的な探究の時間を「イノベーション探究」と名付けて実施している。

3～5名程度のグループで探究に取り組んでおり、1年生は地域発見プログラムとして「京の智の再発見」をテーマに探究活動を行う。また、事業協働機関を中心とした外部講師による講義及びワークショップや、フィールドワークを通して、探究学習を効果的に進める基本的な研究手法＝「作法」を獲得し、協働的に学ぶ姿勢を獲得することをねらいとしている。

2年生では、課題意識を世界に広げ、伝統・文化、サイエンス、エリアスタディの3領域に分かれ、グローバル・イシューに取り組んでいく。

3年生では、2年生で行った探究の結果を英語で発信することを柱に、探究の成果について留学生とディスカッションなどの活動を行う。

探究の成果については、2年次と3年次に、個人で論文にまとめる(2年生は日本語、3年生は英語で執筆)。



イノベーション探究Ⅲ 英語プレゼンテーション
[出所] 同校HP「イノベーション探究Ⅲ 英語プレゼンテーション」(URL: https://www.kyoto-be.ne.jp/toba-hs/mt/Super_global/2022/07/post-282.html)

■外国語や文理の教科を融合した教科・科目

「グローバル・コミュニケーションⅠ・Ⅱ・Ⅲ」や「英語理解」では、ある考え方に対して自分はどのように感じているかを英語でアウトプットする活動を取り入れたり、「イノベーション探究」での活動に生かせるようなディベートを取り入れたりしている。

そのほか1年生では「ソーシャル・インテリジェンス」という学校設定科目において、探究活動で活用するデータ分析や統計的手法の扱い方について、情報と総合的な探究の時間をつなげて横断的に学習している。

■海外フィールドワーク・留学

《海外インターンシップ》

鳥羽高校では、京都府の株式会社片岡製作所と連携し、上海、韓国、台湾の3か所の現地の海外事業所・工場に生徒が訪問する海外インターンシップを実施していた。

WWL事業では、これを共同実施校等にも広げる予定だったが、新型コロナウイルスの影響で中止となった。そのため、国内の工場見学を行った後、「海外オンラインインターンシップ」として、オンラインで現地従業員から事業や生活を学ぶとともに、探究活動に関する質問等を行っている。



海外オンラインインターンシップ
[出所] 同校HP「【WWL】海外オンラインインターンシップ」(URL: https://www.kyoto-be.ne.jp/toba-hs/mt/Super_global/2022/07/post-283.html)

《シンガポール研修》

2 年次に 4 泊 5 日のシンガポール研修を行っていたが、新型コロナのため令和元年度は中止、令和 2 年度は九州、令和 3 年度は山梨県に行き先を変更して実施した。九州での研修では、立命館アジア太平洋大学の留学生との交流機会を設けるなど、コロナ禍の中でも可能な範囲で海外交流を行った。

■大学教育の先取り履修等、大学との連携

《大学授業の先取り履修》

令和 4 年 4 月から、京都府立大学と福知山公立大学の授業科目を、鳥羽高校と共同実施校である福知山高校の希望者が履修できる取組を行っている。令和 4 年度は試行期間（2 年間）のため大学の単位としては認められないが、修了した生徒には教育委員会から修了証を発行し、在籍校の学校の単位として認めることとしている。

《スマート AP》

京都府では、大学教員によるリレー講義（スマート AP）を毎月 1 回土曜日に実施している。これはオンラインを中心に、在籍校の垣根を超えて探究に関わるリサーチスキルを学べるという取組であり、拠点校の鳥羽高校を中心として京都府全域の全 6 校の生徒が受講している。オーストラリアのクイーンズランド工科大学の講義のほか、鳥羽高校の「イノベーション探究」に関わった大学教員が講義を担当している（全 7 回）。

鳥羽高校からは、2 年生の普通科、グローバル科の希望者が参加している。令和 3 年度は 11 名、令和 4 年度は 9 名が参加した。参加した生徒は 1 年間各プログラムをやり切ったことで、自己肯定感を非常に高めている。スマート AP 参加者は、「総合的な探究の時間」においても積極的にグループの中心として活動している。

■高校生国際会議等

《高校生国際会議（京都府 WWL 高校生サミット）》

京都府 WWL 高校生サミットでは、拠点校・共同実施校・府内外の連携校の生徒がオンラインでつながり、グループでの協働学習をとおして社会課題の解決に向けた提言を行う。令和 4 年度で 3 回目を迎える。令和 3 年度からは、英語のディスカッションを本格的に導入し、全体 67 名の参加、英語のディスカッションは 27 名が参加した。令和 4 年度は京都府が協定を結んでいるオーストラリアのクイーンズランド州から 6 名の高校生が遠隔でディスカッションに参加することとなり、本格的に海外ともつながって英語でディスカッションする機会を設けた。

英語のディスカッションには、京都府や大阪府に留学している大学生・大学院生にファシリテーターとして 1 グループ 1 名が参加する。これにより、円滑なディスカッションが行われる。ファシリテーターの学生の出身国は、令和 4 年度はブータン、カナダ、香港、中国であった。

《京都府 WWL フォーラム》

鳥羽高校の成果を同校教職員や大学教員等に普及する目的で、京都府 WWL フォーラムを開催している。

《生徒の声》

～探究型学習について～

- ・「イノベーション探究」で、食品加工会社・工場に足を運び、工場見学とインタビューを行い、「商品にならないから」という理由で一日何十キロも食品廃棄が出ている場面を目の当たりにした。自分たちが住んでいる地域、自分たちが手にしているものは、表面上はきれいなものだが、裏では実は色々なものが捨てられていると知り、衝撃を受けた。普段私たちはそういったことを気にせず、少しでも賞味期限が切れたりカビが生えたらすぐ捨ててしまっているので、賞味期限が切れる前に食べきる、もっと保存環境を考える等、せめて自分たちが手元に得られるものは 1 ミリも捨てないという覚悟で接しようという意識が変わった。（3 年生女子）

～スマート AP について～

- ・高校で体験できないような大学の講義を先取って受講できることに魅力を感じ受講した。実際の講義では、世界ではどのように服が作られているかの問題について一本の映画を見た。そこで自分たちが着ている服は非常に貴重であると知ることができ、非常に印象的で衝撃的であった。（3 年生女子）
- ・スマート AP を通じて、どうしたらうまく発表できるか、プレゼンテーションの仕方、研究の仕方等を学んだことで、発表する際には「学んだことを発揮するぞ」という前向きな気持ちで挑むことができるようになり、大きく成長できた。（3 年生女子）

同志社国際高等学校 (管理機関:学校法人 同志社)

「まちづくり」を大きなテーマに、探究学習のカリキュラムを開発。「SDGs」「政策」「シビックプライド」などまちづくりに関する基本的な知識についての学習、プレゼンテーションなどのアカデミックスキルの習得などからはじめ、学校所在地である京田辺市市長による講演や、大学教授や海外研究者による講義、国内外の政策のグッドプラクティスについて学び、最終的には、生徒自身が政策の提言を行うことを目指す。

■探究型学習、外国語や文理の教科を融合した教科・科目、海外フィールドワーク

同志社国際高等学校では、「まちづくり」をテーマとし、探究学習のカリキュラムを開発している。「まちづくり」をテーマに採用した理由として、SGH での経験があげられる。SGH 期における探究学習では、「環境問題」をテーマとし、ドイツや北欧の環境政策について学んだ。その中で、ドイツと日本では環境政策だけではなく、それを実施するまちのあり方、作り方やまちで暮らす市民の意識の違いが大きく、ドイツの環境政策をそのまま日本に持ってきて解決にはつながらない、探究学習のテーマとして「環境問題」を扱う難しさを感じた。そこで、WWL 事業では、より間口を広げ、また多くの教員が関わりやすい「まちづくり」をテーマとすることで、探究学習の可能性を広げていくこととした。

探究学習のカリキュラムは1年生時の必修科目と、2年生・3年生の選択科目からなる。1年生の探究学習の学びを通じて、まちづくりの探究学習を続けたい生徒が2年生・3年生時に科目を選択する。3年間の授業での学習を通じて、京田辺市への政策提言を行うことを目標としている。

同志社国際高校のカリキュラムデザイン

1年生	SSS(Sustainable Society Study) 必修科目
2年生	SSR(Sustainable Society Research) 選択科目
3年生	SSD(Sustainable Society Design) 選択科目

《1年生 SSS(Sustainable Society Study)》

SSSでは、同校のWWLカリキュラムの目標である京田辺市への政策提言にむけて、「SDGsとは」「政策とは」「シビックプライドとは」といった基本的な知識に関する学習を行う。京田辺市長を招き、市長自身による政策についての講演も実施している。1年間の最後には、生徒自身で政策立案を行い、学年全体での政策コンペティションも行なっている。

また、同校には海外からの帰国生徒が多数在籍し、生徒の日本語・英語のスキルや学んできた知識にばらつきがあることから、すべての生徒がレポートの書き方、スライドの作り方等、アカデミック・スキルを習得するための授業も行っている。

2022年度のSSSは、6教科(情報・家庭科・美術・理科・社会・聖書)の教員が担当している。様々な教科の教員が担当することで、生徒は、一つの問題に対して様々なアプローチがあることを学ぶことができる。スライドの作り方など基本的な事項でも、教科が異なると共通点もあれば異なる手法、アプローチを取ることもあり、教員の専門分野による視点の違いを生徒が感じる機会となっている。

SSSでは、教員が共通教材「SSSワークシート」を作成し、毎年授業で使いながら、リニューアルをしていく。

《2年生 SSR(Sustainable Society Research)、3年生 SSD(Sustainable Society Design)》

2年生のSSRは、京田辺市への政策提言に向けて、海外の都市の政策やフィールドワーク先について実際にリサーチをしながら、リサーチの方法論を学んでいく。また、リサーチを通じて得られた成果を取りまとめたリサーチブックを作成し、現地の領事館や大学教授、ジャーナリスト等に見ていただく機会を作っている。

3年生のSSDは、SDGs・まちづくり・政策についての学習を、より実践に落とす授業である。例えば、SSRで得た知識やフィールドワークで見たものから着想を得て、政策案をクリエイティブに構築していくことを目指す。

また、3年生は並行して、各自のリサーチテーマを設定し、そのテーマについての卒業論文を作成する。



京田辺市長による講演の様子

【出所】読売新聞「【特集】国際校の多様性生かして展開する「WWL」の学び…同志社国際」(URL:

<https://www.yomiuri.co.jp/kyoiku/support/information/CO036623/20220203-OYT8T50014/>)

《フィールドワークについて》

同志社国際高校のフィールドワークは、1年生のSSSの授業と関連付けて国内フィールドワークを実施、2年生のSSRでは海外フィールドワークを行う（コロナ禍の影響もあり実施できていない年もある）。

訪問先は、授業の最初の段階では決めずに、探究学習を行いながら決めていく。例えば、SSRでまちづくりの先進的な海外の都市についてリサーチし、事例として取り上げた都市をフィールドワークの候補とする。冬休みの時期に教員が現地の下見を行った上でフィールドワーク先を決定し、春休みに生徒が実際にフィールドワークを行う。

■大学教育の先取り履修等、大学との連携

同じ学校法人である同志社大学とは、大学学部の講義の聴講・研究室の見学・大学入学準備講座・簿記講座等の開催等を行っている（単位認定は行われていない）。

同校は内部進学を選択する生徒も多いため、今後は夏休み期間中の講義への参加等も検討している。

《生徒の声》

～探究型学習について～

- ・SSSを学ぶまでは、自分の身の回りにある家やスーパーマーケットは普通にあるものだと思っていた。まちづくりの過程では、住民の需要を満たすため、まちにある施設も一つ一つ考えられて作られていることに驚いた。適当にこの町は構成されているわけではないと思った。2年生になってももっと学びたいと思い、SSRを取った。（2年生男子生徒（帰国生））
- ・市長の話聞いて京田辺市はすごいと思った。京田辺市の変遷を語っていただいて、京田辺を知って、もっと知りたいという意欲が湧いて、好きになった。京田辺で行われているお祭りの由来や開催時期の意味を知り、どんどん知っていく上で、京田辺はあたたかくて住みやすい街だと知れてより好きになった。（2年生男子生徒（一般生））
- ・SSSの授業を通して、まちづくりについて最初に聞いたとき、私たちは普段すでに作られているまちの住民として、住んでいる側としてしか、まちを見てなかったが、この授業を通して、まちをつくっていく側として、基礎的な、地道な作業から出来ていると知った。ただ住んでいるだけの場所がこんなに考えられて作られていると知り、勉強になった。自分は帰国生徒であるが、帰国子女は地元と呼べる場所がない。ディスカッションのときは、地元がある人や一般生の意見だと、土地に住んでいる人の意見や、街の政策・良いところ・ポテンシャルをすごく理解している。帰国生は入っていく側なので、どうしても批判的なものの見方をしている。ディスカッションを通して、そういうところが強いのかなと、違いは感じている。（2年生女子生徒（帰国生））
- ・自分はSDGsもまちづくりも何も知らない状態でSSSを受けた。SSSを通して、シビックプライド（まちへの「誇り」「愛着」「共感」をもち、「まちのために自ら関わっていこうとする気持ち」）を自分も持っていると感じ、シビックプライドを大切にしていきたい、仕事などに繋がりたい、活用方法がわかると感じてSSRを取った。（2年生女子生徒（一般生））

大阪教育大学附属高等学校平野校舎

(管理機関:国立大学法人 大阪教育大学)

「学びの共同体」というキーワードをテーマとして掲げて活動を行う。探究活動の教育手法を「平野メソッド」として冊子に取りまとめ、ノウハウを共有している。

■探究型学習

「総合的な探究の時間」のかわりに設定された「グローバル探究」(必修科目)では、文系・理系の枠にとらわれず、生徒が興味・関心あるグローバル課題について探究する。さらに、希望者は「海外の高校生との共同研究」や「大学の教員から指導を受ける研究」など、より高度な探究学習にも参加できる。

グローバル探究は、1、2年生がグループ活動、3年生が1、2年次の活動の成果を個人でまとめる。

同校の探究活動のカリキュラム

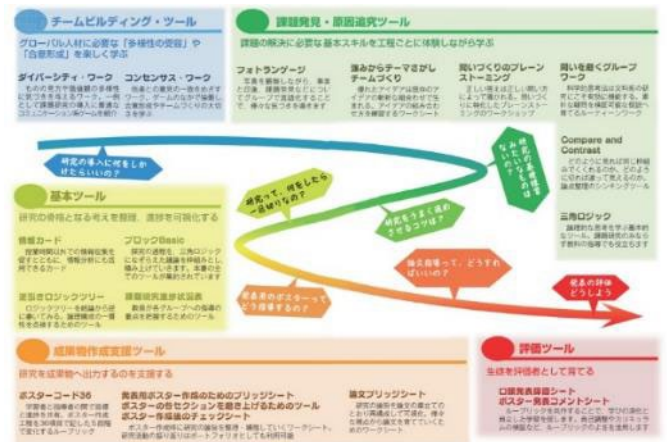
1年生	グローバル探究Ⅰ:グループ学習	主に探究活動の手法・思考ツール(*平野メソッド)を学ぶ。学校設定科目「データサイエンス基礎」の学習内容を探究活動に活かしながら取り組んでいる。最終的にはポスターとパワーポイントで発表する。
2年生	グローバル探究Ⅱ:グループ学習	グローバルな課題に関して探究的な学習をする。学校で設定しているテーマや範囲はない。分かりやすい指標としてSDGsを活用。生徒それぞれが「SDGsの何番なのか」を考えながら、取り組みたいトピックを考え、同じトピックの生徒同士でグループをつくる。
3年生	グローバル探究Ⅲ:個人学習	グループで活動した探究的な学習を、個人の視点で論文に仕上げる。論理的に説明出来るようになり小論文を書く力がつく。

《平野メソッド》

総合的な探究の時間に、平野校舎で実践した内容をカリキュラムとして冊子にまとめたもの。現在HPに無料公開しており、ダウンロードが可能。

「つくりこまない」というコンセプトで、次の学年が使いやすいよう汎用性の高い内容で作成。過去の学年のツールは全てデジタルで残っているが、そのまま使用せずに自分の学年が使いやすいようにアレンジして活用する。

グローバル探究Ⅰ、Ⅱ、Ⅲは「平野メソッド」を使用しており、WWLの中心となるカリキュラムである。



平野メソッド 【全体の構成図】

【出所】同校HP「課題研究ツール『平野メソッド』」(URL: <http://hirano-h.cc.osaka-kyoiku.ac.jp/method2/>)

■海外フィールドワーク・留学

同校ではタイ(全員参加)、カンボジア、ニュージーランド(希望者)の海外研修を実施しているが、コロナ禍の影響により、オンラインを活用した代替プログラム(台湾の連携校等とのオンライン意見交換、大学の留学生との交流等)で代替している。

	1学期	3学期(1月)	3学期(3月)
計画	タイ バンコク 6日間 全員参加(2年生)	カンボジア 6日間 希望者(1、2年生)	ニュージーランド 8日間 希望者(1年生)
コロナ禍における代替プログラム	オンラインスタディツアー カンボジア、ニュージーランド、フィリピン、インド、オーストラリア 全員参加 10月、2月、3月	講演会(対面及びオンライン) カンボジア 全員参加 9月、1月	オンライン講義と外国人講師等とのワークショップ ニュージーランド 全員参加 3月

■外国語や文理の教科を融合した教科・科目

《生命の倫理（1年生）》

5つの論題を立てて、調査研究とディベートを行う。（論題例：受精卵の遺伝子診断・代理母・脳死は人の死か・臓器移植法の是非・安楽死の是非）

1学期は基本的な知識と理解を進め、2学期にはグループを組んで肯定・否定に分かれディベートする。根拠と論拠を持って主張する力が求められ、探究学習や課題研究に繋がっている。3学期は2学期と同じテーマ、同じチームのまま、肯定・否定を入れ替える。クリティカルシンキングや論理的な思考が深まる。

《データサイエンス基礎（1年生）》

データに基づく論理的・科学的な考え方を、日常生活と関連づけながら学ぶ（コンピュータソフトやエクセルの使い方、統計の基礎、プログラミング、AIの学習等）。平野校舎と共同実施校の池田校舎、両校で実施している。この科目の中でデータの見方・考え方、それらを基に客観的に探究を進めていくべきであるという考え方を学ぶ。

《イノベティブシンキング（2年生）》

テーマに沿って、新しい取組をしている企業の方や大学の先生を講師に招き、チームティーチングの形で授業づくりを行う。また、実際の経緯や発想などを生徒と一緒に考え、社会で行われている取組の事例として学びながら、ワークショップを行う。（テーマ例：前半「画像認識とアプリの開発」／後半「言語分析とAIの活用」）

《グローバル探究英語（2年生）》

SGH時から、即興型英語ディベートを年間12～13回実施。外国人の外部講師とチームティーチングで指導している。パラグラフライティングやリーディング、プレゼンテーションなど、外国人講師の指導の下、全員が学んでいる。

■大学教育の先取り履修等、大学との連携

大阪教育大学（高校生向け授業）、大阪大学（大学の授業聴講）を希望者が受講。受講者には同校平野校舎及び池田校舎が開講する学校設定科目「大学アドバンスセミナー」の授業単位として認定している（高校：1単位）。

学校設定科目：「大学アドバンスセミナー」

	大阪大学	大阪教育大学
内容	「グローバルヘルス」 大学生対象の国際医療に関わる授業の録画を聴講。	「教師にまっすぐ」 高校生対象に実施される授業。教職に関わる講義・実習・課題研究など。
受講者	希望者（2年生中心） 例年10～20名程	希望者 例年10～20名程
単位	1単位（高校）	1単位（高校）

■高校生国際会議等

生徒が実行委員会を組織し、連携校の生徒と一緒に2日間活動する。令和2～3年度はオンラインで開催した。高校生国際会議終了後、グループで振り返りを行った上で、さらに個人の視点で各自の研究をまとめていく。

《生徒の声》

～探究型学習について～

- ・外国人の方と交流する機会が多かったので、英語を話す機会が格段に増えた。それまでは決まった英語を覚えて話すとか、簡単な会話をする等だった。しかし、日本語でも難しいと思うようなディベートのテーマに対して、英語で自分の意見を伝えて、相手の意見を聞き取る能力は非常に伸びたと思う。（3年生女子）
- ・正直、「環境」自体に興味はなかったが、化粧品廃棄の問題と組み合わせて考えていくことで環境問題に対して興味を持つようになり、大学の学部選択に影響した。自分たちが研究したことを海外の高校生や大学の先生方に発表する機会があり、そこで色々な意見をもらい、多様な価値観を知るきっかけにもなった。（3年生女子）
- ・日本全国の高校生と交流する機会があり、自分では思いつかなかった見方を得られた。海外の政策や取組と比較し、なぜあまり日本に導入できないのか、その背景を調べていく中で、国によって考え方や価値観が違うということを知った。現地に行って実際に自分で体験して、違いを理解することの大切さを学んだ。（3年生女子）

岡山県立岡山操山中学校・高等学校 (管理機関:岡山県教育委員会)

岡山操山中学校・高等学校は、SGH の時から、3年間で生徒に身に付けさせたい6つの資質・能力を定めており、それを育成する土台として様々な取組を行っている。

■探究型学習、海外フィールドワーク・留学

医療・福祉・教育やESD・SDGs先進県である岡山県の特徴を生かし、SDGsの「目標3 すべての人に健康と福祉を」と関連付けた学びを充実させながら、「すべての人が身体的、精神的、社会的に幸福”Well-being”な社会の実現」を目指し、自ら考え、主体的に行動し、責任をもって社会変革を実現していく力を備えたグローバル・リーダーを育成することを目指している。

本構想ではイノベティブなグローバル人材に求められる資質・能力や心構え等を多面的に捉え、OKAYAMA Agencyとして6つの資質・能力を設定している。

OKAYAMA Agency

認知的スキル	幅広く深い教養	グローバルな課題を理解できる国際的な素養がある
	課題発見・開発能力	グローバルな視点で課題を発見し、論理的に解決策を考え、発信することができる
	新たな価値を創造する力	既存の価値を融合し、自由な発想で新しい価値軸を創ることができる
非認知的 (社会情動的) スキル	主体的に行動する力	目標に向かって自主的に考え、自立的に判断し、決断したことに積極的かつ誠実に実行し続けることができる
	他者と協働する力	自己を理解し、自立した人間として、他者とともに心を通じあわせてよりよい社会の実現を目指すことができる
	自他を尊重する力	社会における自己を認識し、自他の存在意義を認めることができる

6つの資質・能力の育成のため、以下のような取組を行っている。

《未来航路》

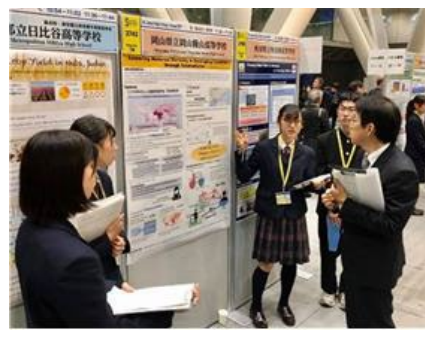
未来航路は、総合的な探究の時間の校内名称であり、1年生で課題研究の基礎となる取組を行い、課題研究を2年生の一年間でグループ(各グループ4~6名)で行う。テーマはSDGsの17のゴールから選ぶ。年間3回程度、大学の先生に来ていただき、課題研究について指摘・指導を受けている。最終的には、研究の発表会に向けてまとめを行う。

1年生では、RESAS(経済産業省)のオンライン講演会(3回)や、大学の教員の講義(課題研究とはどういうものかを学ぶ)などにより探究学習の基礎を学んだあと、簡単な課題研究を行う。1年生の最後には、SDGsの17の分野別に興味のあるものを選びグループを決める。そのテーマに沿って、2年生から具体的な課題研究を行う。

なお、3年生も選択科目で探究を継続することが可能である。

《SOZAN 国際塾》

意欲の高い生徒は、SOZAN 国際塾(課題研究等を極めたい生徒の集まりで放課後等に活動)に参加でき、探究活動において海外交流などの機会がより多くなる。世界的な視野でものを見ることを意識しており、英語で発表をさせることもある。各種のコンペティションや外部の発表会にも参加している。また、オンラインでの留学生との交流機会などもある。



SOZAN 国際塾

[出所] 同校 HP 「SOZAN 国際塾」(URL: <https://www.sozan.okayama-c.ed.jp/wordpress/schoollife/club/%e5%9b%bd%e9%9a%9b%e5%a1%be/>)

国際塾に参加することで、課題研究をより深められることと、オンラインで留学生との交流を頻繁に行うことができる。さらにネイティブスピーカーの先生から、スピーチの仕方や原稿作成について教わる「グローバルスキルトレーニング」も定期的に開催される。

■外国語や文理の教科を融合した教科・科目

◀SOZAN STEAM▶

1年生後半の必修科目「SOZAN STEAM」は、15時間行われる教科横断型の授業である。複数の教科の教員が担当し、課題解決に取り組む。全部で7講座あり、生徒からも好評である。

1年生において、未来航路とSOZAN STEAMで探究活動の基礎をにつけ、2年生で実践的な課題研究を行うことを想定している。

■大学教育の先取り履修等、大学との連携

未来航路において岡山大学の教員が指導を行うなど、大学と連携して探究学習が行われている。また、まだ単位化には至っていないが、岡山大学の公開講座を受講できる。

■高校生国際会議等

高校生国際会議は、令和5年度に完全実施を計画している。

高校生国際会議のプレイベントとして、本事業のテーマである"well-being"について理解を深め、「"Well-being"な社会の実現」のための方策について探究する「Well-being フォーラム」を実施している。

令和3年度のフォーラムはコロナ禍のためオンライン開催に変更した。各校の代表生徒が参加することとなり、岡山操山高校は国際塾の生徒を中心にしながら希望した生徒が参加した。フォーラム本番の事前セミナーとして、国際人道支援を行っている連携機関のAMDA理事であり、医師として国内外の様々な地域で医療活動、人道支援を携わってきた佐藤拓史氏の講演、座談会をオンラインにて実施した。

フォーラムの午前の部は、各拠点校と9つの連携校の代表グループで課題研究の成果発表を行った。午後の部は、AMDA代表 菅波茂氏に基調講演をしていただき、午前の発表や基調講演を下敷きにしたグループ協議を行い、「Well-being とは何か」「Well-being な社会を実現するためには何が必要なのか」について協議した。その成果は「おかやま高校生"Well-being"宣言」としてまとめた。

令和5年度に開催する国際会議では、3年間かけて作った"well-being"宣言を、海外の機関等につなげ、発信していく構想を考えている。

◀生徒の声▶

～SOZAN 国際塾について～

- ・国際塾に入ってよかったと思っている。現在、高校生フォーラムに向けて英語のスライドでプレゼンすることを最終目標にグループで取り組んでいる。また研究課程で、論文・英論文を読んだり、インタビューをしたりするコツを得られたのは、国際塾に入ったからこそだと思う。学校にとどまらず、自分からいろんな所にチャンスを掴みに行き、発表会等で成長を感じられることが、やりがいだなと思った。(2年生女子)

～SOZAN STEAMについて～

- ・教科をまたいだ学習は普段はしない特別なことという意識があったが、この授業を通して自分の中の知識の使い方の練習になった。国語の授業の時は自分の中にある国語の知識を出してというように別個に勉強してきたものが、自分の中に知識という大きなひとまとまりがあって、そこから色々な知識を出してきて、つなげて勉強するのだという発見があった。教科をまたいで勉強するということが、勉強の基本なのかと感じた。(2年生女子)

広島大学附属福山中学校・高等学校 (管理機関:国立大学法人 広島大学)

中高一貫校であることを活かし、合計6年間の探究学習カリキュラムを設計。社会問題の複合要因の理解を高められるよう、関連科目も新たに開発している。

■探究型学習

広島大学附属福山中学校・高等学校は、中高一貫校であることを活かし、中学1年生より探究学習の授業を実施。中学生のうちに探究学習の方法を学び、実際にグループでの探究学習を行うことで、高校1年生までに研究の下地を作り、高校2年生からの個人での探究学習につなげるカリキュラムの構造となっている。

《中学校3年間～4年生(高校1年生)までの探究学習》

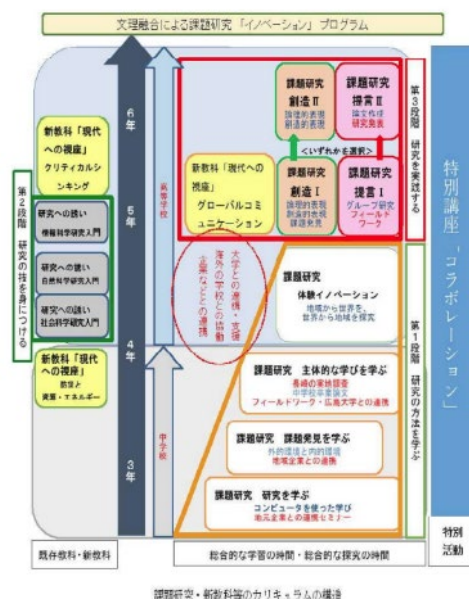
中学校3年間および4年生(高校1年生)までは、5年生(高校2年生)からの個人での探究学習に向けた基礎作りを行う。ICT機器に慣れ、自分の考えをまとめた制作物を作る内容としている。中学2年生からグループで探究学習を行い、授業科目(学問分野)ごとに視点が違うことを体得する。中学3年生では国内(九州)フィールドワークを実施する。

《5年生・6年生(高校2・3年生)の探究学習「提言」「創造」》

5年生(高校2年生)以降は、これまでの学習を踏まえ、個人で探究学習を実施する。

探究学習は、社会問題の解決に向け研究を行い、最後に社会へ向けた提言を行う「提言」と、人に伝える・訴えるといったアウトプット手法の習得に重点を置いた「創造」の2種類に分かれる。

「創造」は探究学習の様々な在り方を試す実験的な科目である。探究するテーマが見つけれない生徒へのアプローチとして、アウトプットを作る過程から学ぶカリキュラムとなっている。「クリエイティビティとは何か」「表現するとは何か」といった理論から始まり、美術(キュビズム等)・書道(フォント)・音楽(サウンドロゴ)・文章表現(小論文)の4通りの表現方法を学び、伝えたいテーマの成果物を作成する。



課題研究・新教科等のカリキュラムの構造

中高一貫での探究学習カリキュラムデザイン
[出所] 同校発行「研究開発 課題研究指導事例集」

■外国語や文理を融合した教科・科目

《「研究への誘い」「現代への視座」》

5年生・6年生(高校2・3年生)での探究学習において、社会科学・自然科学の視点で分析し、社会問題の複合要因を理解し、それを人に伝えるための科目として、「研究への誘い」「現代への視座」の2種類(内容ごとにさらに各3種類に分かれ、計6種類)の開発している。

「研究への誘い」	4年生「研究への誘い 社会科学研究入門」「研究への誘い 自然科学入門」 5年生「研究への誘い 情報科学研入門」 …科学的な知識の習得し、実際に分析を行う。
「現代への視座」	3年生「現代への視座 防災と資源・エネルギー」 …3年生の理科で探究した学習内容を、人に伝えるために整理する。 5年生「クリティカルシンキング」…国語での伝え方・対話の方法を学ぶ。 5年生「グローバルコミュニケーション」…英語での伝え方・議論の方法を学ぶ。

■フィールドワークの実施

コロナ禍におけるフィールドワークは、生徒が探究のテーマを設定しフィールドワークを行うことを重視し、日本国内でのフィールドワークを実施した。同校に近い岡山県真庭市を訪問し、真庭市で盛んなバイオマス発電、ならび林業について学ぶ「真庭研修」を実施。生徒は普段触れることのない林業や循環型社会を実際に体験する。

真庭研修には4年生約20～30人の生徒が参加している。参加した生徒は5年生で「提言」を選択し、真庭研修で学んだ内容を元に探究学習を行った。



「真庭研修」の様子

[出所] 同校 HP (URL: <https://fukuyama.hiroshima-u.ac.jp/blog/cafe/art/01277.html>)

■高校生国際会議等

広島大学附属福山高等学校では、高校生国際会議においても探究学習を取り入れている。同校ならび連携校の生徒より参加者を集め、学校側で「新型コロナウイルス対策について考える」という大きなテーマを設定し、生徒自身が調査したいコロナに関するテーマを募集した。

最終的には「経済」「医療従事者」「コロナ禍における教育」の3つのテーマに絞り、WEB会議ツールや Google Jamboard 等を活用し、オンライン上で探究学習を実施している。

《探究学習を取り入れたねらい》

高校生国際会議に探究学習を取り入れたのは、他校生と人間関係を作ることで、社会問題と一緒にアプローチする仲間づくりの経験ができると考えたためである。また、仲間の中で自分は一体何ができるのか、生徒自身が考えるためのプログラムとして、高校生国際会議を設定している。

《留学生との交流》

コロナ禍においても海外との交流を行うため、広島大学の留学生に協力を依頼し、高校生国際会議のディスカッションにコメンテーターとして参加してもらった。

留学生の参加は、海外からの視野を取り入れること、また、国費留学生などの「自分の国を良くしたい」といった思いに触れることで、生徒が圧倒され当事者意識が育まれることもねらった。

■大学教育の先取り履修等、大学との連携

管理機関である広島大学の AP（科目等履修生）として、一部の生徒が授業に参加している。AP では単位取得ができ、広島大学に入学した際は単位が認定される。

そのほか、広島大学のオンデマンド授業「名講義 100 選」を利用し、生徒の探究学習のテーマに近い動画を視聴している。また、その動画で講義をする大学教員に、オンラインにて探究学習のアドバイスを受けている。

《生徒の声》

～探究学習について～

- ・自分は5年生で「提言」を選択した。「提言」では論文の形式で発表した。実際の学校生活ではあまりやらないことであるため、とても新鮮で、いろいろ初めてのことで手間取りはしたが、どうやればいいのか、こういう文章を書けばいいのかとある程度理解できるようになったかと思う。(6年生男子)
- ・4年生の「体験イノベーション」で、商店街の活性化について調べたが、シャッター街を見るとこうすればいいのにと興味が沸くようになった。(6年生男子)
- ・成長したことは2つある。1つは発表する側の成長。どのくらいのスピードを話せばいいか、スライドの説明をどう作れば相手わかりやすいのか、成長したなと感じている。聞く側目線で成長したのは、質問をよくするようになった。どういう質問をしたらいいか、考えながら聞く体制が取れるようになった。(5年生女子)

～フィールドワーク（真庭研修）について～

- ・真庭は魅力的な都市だと思い、全国の皆さんに知ってもらいたいと、アニメを使って地域振興できないかと考えて、真庭のいいところを集めたアニメ制作をしようと計画中である。(5年生女子)

～高校生国際会議について～

- ・高校生国際会議では、コロナ禍における教育について探究した。二年前の一斉休校に教育を受けられなかった人がいる現状を踏まえ、今後はオンラインを活用し、その格差を埋められないか、今後そういったことが起きたときに対処していけないか、提案した。格差を埋めるには国の主導で、Wi-Fi 設備など基本的なインフラをもっと取り入れていくこと、基礎インフラを整えることを提言した。
ただ、オンラインでの他校生との探究学習は、対面で会う時よりも意見が出し辛かったり、相手の顔やしぐさが伝わりにくかったりということがあると思うが、その影響で活発に議論をする環境にはなりにくい状況だった。一回対面で会った時は意見が出たり、これをやりたいという提案があったりしたが、オンラインだと進みが遅い印象があった。(6年生男子)

愛媛大学附属高等学校 (管理機関: 国立大学法人 愛媛大学)

SDGs(持続可能な開発目標)が掲げるテーマを中心課題に位置づけ、新しい価値を創造し、自律した自覚を持って世界の架け橋となることができるグローバル人材の育成を目指した高大接続モデルを開発。

■探究型学習

2年生で課題研究Ⅰを、3年生で課題研究Ⅱ(選択制)を行う。課題研究Ⅰ(2年次必修)をすべての生徒の探究活動の中心に置いており、グループで探究活動を行い、愛媛大学の教員から指導を受けながら進めている。

SGH期の5年間において、課題研究を高校3年生の1年間で実施していた。海外に目を向けるのはもっと早い方がよいという意見を踏まえ、WWL事業ではカリキュラムを変更、課題研究をⅠとⅡに分けて、課題研究Ⅰを2年生に移行した。

課題研究の開始が以前より1年早まったことで、高校3年次で課題研究をより進めたい生徒もいると想定し、選択科目として課題研究Ⅱを新設した。3年生では、課題研究Ⅱか同じく新設されたグローバル・スタディーズⅡのどちらかを選択する。

《成果発表会》

成果発表の場として、大学の教員が審査員となり、かつ保護者や地域の方々にも公開する成果発表会を実施している。生徒は、成果発表会に向けポスター制作と動画撮影を行う。発表は、ライブ配信とオンデマンド配信という2種類で行っている。加えて、「課題研究成果発表集」(日本語に加え英訳の要旨を含む)も作成、配布している。

■外国語や文理の教科を融合した教科・科目

探究活動の準部段階として、1年生では、SDGs探究、SDGs伊豫学をおこなっている。

《SDGs探究(履修:1年生(必修))》

1学年約120名を4つの分野(草花、果樹、野菜、作物・畜産)に分けてフィールドワークを中心に活動している。愛媛大学の留学生にも協力を得て一緒に活動している。

《SDGs伊豫学(履修:1年生(必修))》

SDGsをテーマに、主に国内のことについて愛媛大学の教員から指導を受ける授業であり、2年生から課題研究を始めるうえでの下準備として機能している。

株式会社マイナビと提携していて、SDGsとは何か、課題設定するとはどういうことか、というテーマでSDGs伊豫学の中で半年に1回程度、指導いただく機会がある。

《グローバル・スタディーズ(履修:2~3年生)》

グローバル・スタディーズⅠ(2年生必修)は、グローバルな観点で愛媛大学の教員から指導を受ける。また異文化理解の観点で、生徒の希望を取り、5か国(今年度はフィリピン、ルーマニア、アメリカ、オーストラリア、モザンビーク)に分かれて探究活動、調べ学習等をしている。オンライン指導や留学生による講演等も行う。

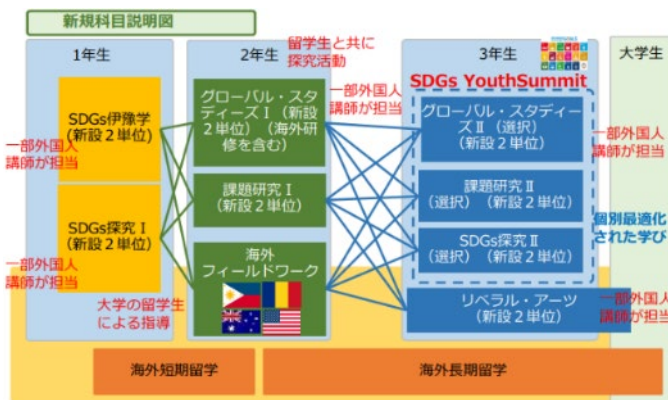
グローバル・スタディーズⅡ(3年生選択科目)は、令和4年度から始まった科目である。愛媛大学協力の下、連携大学にも入ってもらい、主に海外の先生方に指導いただいている(国内外約10名)。

■海外フィールドワーク・留学

《海外との交流》

コロナ禍においては、海外研修の代わりにオンラインで海外の生徒との交流を行っている。

また、ルーマニアの生徒2名・教員1名を短期(1週間)招致した。学校内で直接交流を行った。



新規科目説明図

《E カフェ（イングリッシュカフェ）の取組》

生徒の語学力・コミュニケーション能力を向上させ、日本にいながら海外の文化に触れ、国際感覚を養うことを目標に、教育課程以外で英語や海外の文化に触れる機会として E カフェ（イングリッシュカフェ）を開設した。様々な背景を持った出身国の留学生を雇用し、ネイティブではない様々な国の英語の発音を聞くことができる機会となっている。校内に色々な国々の方がいて、授業という決められた枠の中ではない日常の時間の中で留学生との交流を増やしている。生徒は積極的に留学生に質問することができ、活発な意見交換が行われている。

E カフェの取組概要

日時	毎週、火、木曜日の昼食時
目的	「生徒の語学力・コミュニケーション能力の向上」「国際感覚の育成」
形式	・対面式 ・オンライン（zoom を活用）←他校が参加
言語	英語
内容	留学生がテーマに沿って英語で発表し、それについて生徒が質問したり自身の経験話すなどして交流を図る。



第 19 回 E カフェの様子

[出所] 同校 HP 「第 19 回「E カフェ」」(URL:<http://hi.ehime-u.ac.jp/www/news/?p=4952>)

■大学教育の先取り履修等、大学との連携

《愛媛大学の 6 講座をオンライン受講》

平成 28 年度から愛媛大学と連携して、高大接続科目として指定された講座を愛媛大学附属高校 3 年生が大学生とともに受講している（コロナ禍のため、基本的に非同期型の遠隔授業で実施）。

「法学入門：憲法を考える」「経済学入門：市場の原理と市場の失敗」「数学入門：データリテラシー入門」「物理学入門：宇宙の構造とその進化」「化学入門：高分子化学入門」「化学入門：現代社会を支える有機化学」の 6 講座を受講している。高校の単位になるとともに、愛媛大学進学後は大学の単位にもなる。

■高校生国際会議

令和 4 年 10 月に、開催 3 年目で初めてオンライン・オフラインの共同開催となる高校生国際会議を行った。参加は 3 か国 12 校計 108 名の生徒、留学生 5 か国 5 名、大学生 8 名であった。フィリピンの生徒はオンラインで参加し、前述のルーマニアの生徒も現地参加し司会を担当した。

《生徒の声》

～探究等学習について～

- ・まず今の自分の住んでいる町や日本、そして国際情勢といった現状を知ることで、今この町や日本に求められている力、どのようにしたらもっといい暮らしになるのか、どういった課題があるのかといったことを考えるきっかけになり、そこから色々調べて新しい知識を得ることができた。日本にはこういった魅力があって、こういう力が優れているというような客観的な意見も色々聞くことができたので、自分の住んでいる地域や日本という国に誇りを持つことができた。(3 年生男子)
- ・今までニュース等を見ている、他国や日本の他の地域で起こっている問題等について他人事として捉えてしまうところがあった。探究学習を通じて色々な学校の高校生等がそういった問題に立ち向かっている姿を見ることで、今ではそれらを自分事として考えるようになった。普通だと思っていた愛媛の日常にも、「これはちょっとおかしいんじゃないか」と疑問に思ったり、新しく自分で課題を見つける力、課題を解決していこうと前向きになれる力も付いてきた。(2 年生女子)

～E カフェについて～

- ・E カフェでは昼休みに愛媛大学の留学生や青年海外協力隊の方が、講義室で色々なテーマについて英語で話してくれる。参加していたら英語と触れ合う機会が増えて、技術だけではなくニュアンスや、コミュニケーションの気持ちの部分学ぶことができた。私は英語があまり得意でないのが難しいと感じる部分はあったが、英語に触れる機会は他の高校よりは確実に多いと思う。(3 年生男子)

中村学園女子高等学校 (管理機関:学校法人中村学園)

同校は栄養科学や、食の流通といった「食」についての分野を専門としている中村学園大学の併設校であり、その強みを生かして大学との連携を強めている。「食」を切り口とした探究活動を通じて内容を深めることを目指し、様々な取組を実践している。

■探究型学習

探究学習として「GI 探究」を開設している。食をテーマに 1 年はゼミ形式、2 年はグループ、3 年は個人で論文作成を行う。

令和 3 年度までは「グローバルイノベータークラス (GI クラス)」のみが対象であったが、令和 4 年度より全校生徒を対しようとするようになった。

中村学園女子高等学校 探究活動のカリキュラム		
	昨年度まで (現 2、3 年生)	今年度から (現 1 年生)
対象	GI クラスのみ (必修科目)	全クラス (必修科目)
内容	1 年生 : GI 探究 ゼミ形式 2 年生 : GI 探究 グループ学習 3 年生 : GI 探究 個人学習	1 年生 : G 探究 ゼミ形式

《GI 探究》

1 年生では、食分野を中心として生徒の興味・関心を深めていく探究をゼミ形式で行う。「文化」・「栄養」・「経済」・「環境」の 4 つの切り口で「食」の研究をする。生徒それぞれが、タームごとにテーマ設定をし、調べ物をして発表する。

2 年生では、前半は修学旅行の班でグループ学習を行う。「食」に関わる知識を深め、課題研究を通じて“食物を作ることによって環境破壊が起きていること”、“経済活動することで環境に負荷がかかっていること”等を学ぶ。この学習を踏まえ、修学旅行として海外へフィールドワークに行く。1 年時に行った「食」にちなんだ課題探究を、実際に海外で体験する。

2 年生後半から徐々に個人学習へ移行する。個々人でテーマを決めて課題に取り組む。後述する高校生国際会議「食」のサミットで、海外の生徒とも協議をして、解決策やアイデアについて話し合う。

3 年生では、これまでの活動の集大成として夏頃までに論文を作成する。

《G 探究 (現 1 年生から)》

GI クラスだけではなく、全クラス (10 クラス) を対象に「食」の切り口から自分が興味のあるものを学んでいく、という探究活動に取り組んでいる。令和 4 年度は「食物廃棄を無くそう」というテーマで、食堂で出るごみをコンポストで再生肥料にする取組等をしている。

■海外フィールドワーク・留学

全員参加の研修は、コロナ禍であった令和 3 年度までは近隣県へのフィールドワークで代替した。令和 4 年度の 2 年生 (GI クラス) は、9 月に 4 泊 6 日のマレーシア・シンガポール研修を再開した。プランテーションの農園や食品廃棄物で作った農園を見学した。また、マレーシアの大学に訪問し、大学生にプレゼンテーションを行い、大学生から意見をもらった。



海外研修の様子 [出所]同校 HP「G12 年生海外フィールドワーク 2 日目(9 月 11 日)」(URL:<https://www.nakamura-njh.ed.jp/news/10640/>)

■外国語や文理の教科を融合した教科・科目

≪英語探究≫

英語探究では、SDGs をテーマに、自分が関心のある SDGs のトピックについて英語で話して伝えたり、英語でディスカッションをしたりする。ALT からプレゼンテーションやディスカッションの技術も学ぶ。令和4年度は、英語でのポスター作成と、そのポスターを他の生徒に紹介するプレゼンテーションを行った。

≪アントレプレナーシップ講座≫

アントレプレナーシップ講座では、福岡など九州近郊の新しいベンチャー企業の方々の講演や、グループワークを行う。自分のコンプレックスを切り口に新しい事業をされた方や、レンタル自転車のサービスをしている会社の方など、他の人が思いつかなかった便利なものをビジネスに変えた方々にご協力いただいた。

■大学教育の先取り履修等、大学との連携

希望者（例年 20～40 名程度）に対し、中村学園大学・短期大学部の「現代社会と教育」、「日本文学」、「ボランティア論」、「数学の考え方」等、食品関係に加え教育学や経済学等含め 7 講座を放課後に課外授業として実施した。同大学・短期大学部に進学した場合は、大学の単位となる。

■高校生国際会議等

高校生国際会議として、同校では SGH 時から「食」のサミットを開催している。令和3年度は3月に同校が拠点となり、オンラインで開催。拠点校以外の国内の学校から 10 名、海外 3 ヶ国から 15 名の高校生が参加。令和4年度は国内の提携校は対面参加、海外の提携校はオンライン参加とした。

GI クラス以外のクラスに対しては、希望する生徒を集めて「サテライト会議」という場を設け話し合いをして、国際会議の意見に反映させている。



「食」のサミット 2021 の様子 [出所]同校 HP「3/12 「食」のサミット 2021 を開催しました」
(URL:<https://www.nakamura-njh.ed.jp/news/7974/>)

≪生徒の声≫

～探究型学習について～

・中学時までは、まだ SDGs が広く知られておらず、世界のことにについて何も知らなかった。探究を通じて、世界のことについて知るためにニュースを見るようになったり、インターネットで海外の記事にも関心を持つようになった。どうしたら人に「伝える」ではなく「伝わる」のか、試行錯誤しながらその方法が身に付いた。私は SDGs の解決に少しでも貢献できるようになりたいと考えている。そのために、リーダーシップを身に付け、自分だけで行動するのではなく多くの人と共に解決に向けて取り組んでいきたい。「21 世紀リーダーシップ」というものが、自分が目指すリーダーシップと重なっている部分がある。そういった力を身に付けて、SDGs の貢献に近付きたい。(3 年生女子)

～GI クラスについて～

・一般クラスと比べると、海外交流の機会が多い。日本人・外国人問わず、相手とコミュニケーションを取る力、明るく話す力が身に付いた。(1 年生女子)

・勉強との両立が大変なこともあるが、満足度は充分にある。WWL の活動を通して、社会問題のトピックについて話し合う、現地にも実際に行く、といった機会を通して、自分がこれから調べたいことやもっと知りたいことなどを、視野を広げて考えることができるようになった。学校に留学生が来た際、コミュニケーションを通して母国のことを知ることができたり、SNS などで気軽に話し合えたりするので、身近に社会問題に触れる機会が多いと思う。(2 年生女子)

《探究ベーシック》

高校1年次に、「探究ベーシック」と題し、授業の中で探究との関連性を持たせた授業を実施している。各教科・科目の特色や学習内容に応じて、SDGsや探究的な学びにつながる学習を計画し、学年全体で各教科と連携、年間シラバスを作成する。今ある授業を、どう探究的な学びへつなげていくかを中心に考え、系統的、計画的に実施している。

探究ベーシック（探究と教科の関連）

教科	内容	SDGs
国語	『羅生門』（芥川龍之介）＋『貧困は自己責任なのか』（湯浅誠）を読み、登場人物の状況を分析、救済策を考察	1・2・3・4・10・16
数学	数学Ⅰ（論理と集合、2次関数）の中で、協働して目標を達成するプロセスを経験	17
化学基礎	化学反応の量的関係と環境問題の考察（日本の天然ガス消費による二酸化炭素の排出量、海の生物に与える影響）	13・14
歴史総合	近代化・大衆化・グローバル化をテーマに、国家の形成や帝国主義に対する民衆の行動について俯瞰して捉える	1・10・16
家庭	エコクッキングを取り入れた弁当献立を考える	2・3・13
保健	感染症について学ぶ（種類、予防、性感染症、エイズ）	3
英語	GROWN Communication English I Lesson5 Food Bank	2

■大学教育の先取り履修等、大学との連携

長崎大学とWWL事業の前から高大連携事業を実施しており、夏休み期間に同大学で受けた授業を単位認定している。令和4年度は4日間の集中講義で「数学の世界を楽しもう」の授業を受講した。授業に参加すると後日評価が届き、単位については、高校の単位か大学の単位（入学後）かを生徒が選択できる。

■高校生国際会議等

令和5年7月に開催予定。国内外の連携校との共同研究や、「高校生平和共同宣言」に向けた取組を推進する。国際会議実行委員会は生徒の希望により組織され、現在2年生88人が在籍しており、運営の中心となっている17人のメンバーをリーダーとして、組織的に活動している。他校との連携や、海外協働先の開拓について、管理機関や学校による開拓のみならず、自身の手で広げられるようにしている。カナダ、スペイン、ウクライナ等、生徒たち自身で友人を開拓して参加者を募っている。

《生徒の声》

～探究型学習等について～

- ・探究活動において海外の高校生との交流を通して幅広い、現地ならではの視点を得ることができた。私は国際活動を軸に行ってきたので、主に英語を使って日本人だけでなく様々な人々と交流することも好きになった。中学までは英語を使って発表したり、英語で誰かと話すことは多少緊張することもあった。しかし、探究活動の発表を英語で行ったり、海外の人と交流する機会を通して、英語で話すこと、コミュニケーションをとること、自分の言いたいことを言うことも前より簡単になり、その交流の中で多くの学びを得られた。（3年生男子）
- ・フィールドワークで島に行く場合、一泊しないととても大変なので、自分たちだけで土日を使ってまで行く人は少ないと思う。本校ではフィールドワークに行く機会を数人だけでなく学年全体にもらえているので非常に良かった。（3年生女子）

～外国語や文理の教科を融合した教科・科目について～

- ・探究ベーシックの中でも、国語の羅生門の授業が印象に残っている。貧しい老婆が死体置き場で髪を取る作品中のシーンの行為の是非について皆で考えたが、自分たちは日本で恵まれた環境で育っているから「いけないことだ」と考えるが、もし自分たちも極度の貧困状態にあつたら同じような行動に出るかもしれない、と授業を通じて気づいた。日本の恵まれた環境から見てしまうと問題の解決は難しく、現地に行つて現地の目線・視点から問題をとらえることも必要だと感じた。（3年生男子）
- ・IGRで外部の団体、大学や企業の話聞く機会があった。私たち学生は「こうしたらいいのではないかと考えることしかできないが、大人の方々から、例えば海水を水にする装置を作ったという実践的な話を聞くことで、今までSDGsは自分たちとは遠いものだと思っていたが、「もっとこういう方と連携したい、話を聞きたい」と外部の存在に興味を持つ、外部の存在を頼るのも自分にとって大きなメリットになる、と考えるきっかけとなった。（3年生女子）

熊本県立熊本高等学校 (管理機関:熊本県教育委員会)

3年間を掛けた探究学習カリキュラム「探究の交響楽」を実施。1年生時にプレ的な探究学習を行うことで、2～3年生時に課題解決に向け実際に行動できる生徒を育てている。また、武蔵野美術大学との連携による授業など、多彩なプログラムを実施。

■探究型学習

熊本県立熊本高等学校では、3年間の探究学習カリキュラム「探究の交響楽」を実施。1年生は個人・グループで探究学習のプレ体験を行ったあと、2年生より本格的な探究学習を行う流れとなっている。

熊本高等学校の探究学習カリキュラム「探究の交響楽」の構成

第1楽章	1年生の10月まで実施。 SDGsに紐づけたテーマ設定の下、個人で探究学習を行う(調べ学習に近い)。
第2楽章	1年生の11～翌年2月まで実施。 グループでの探究学習。活動範囲は第1楽章より広がり、調査だけでなく実際に行動するグループもある。
第3楽章	2年生進級後～3年生前半まで実施。 グループまたは個人のどちらでも可。 ①地域に関するSDGs、②科学的な研究のどちらかに分かれ、探究学習を行う。

《第1楽章・第2楽章について》

第1楽章は、個人で調べ学習の探究学習を行い、その成果をポスターにまとめ発表を行う。調査テーマはSDGsに紐付けながら、生徒が自由に設定している。

第2楽章は、グループで探究学習を行いながら、調べるだけでなく実際に課題解決に向けた行動を起こすことを目指す。

《第3楽章について》

第3楽章は、2年生～3年生前半までに渡り、グループまたは個人で、①地域に関するSDGs、②科学的な研究、のどちらかに分かれ、探究学習を行う。グループでの探究学習を選択する生徒、SDGsを選択する生徒が多い。

第3楽章でも引き続き、探究を通し実際に行動を起こすことを目指す。事例では、地元企業と地域の名産品の商品開発を行い、売上を県内の豪雨災害の復興に寄付したグループがある。

《WWL 成果発表会の実施》

第3楽章では、7月と3月に成果発表会を実施している。特に7月の成果発表会は全校生徒が参加し、1年生にとっては、上級生の探究学習の内容や実際に行動した事例を知る機会であり、第1楽章・第2楽章に取り組む上での刺激になっている。

■海外フィールドワーク・留学

熊本高校では、本来は台湾研修(全員参加)、イギリス・イートン校研修、ボストン研修を予定していたが、コロナ禍の影響により中止。代替研修として「留学デザイン Program」と、台湾研修で訪問予定だった姉妹校提携による国立中科実験高級中学とのオンライン交流を実施している。

《留学デザイン Program について》

「留学デザイン Program」は、海外日本人研究者ネットワーク、一般社団法人慶應反分野的サイエンス会、熊本高校卒業生で海外大学へ進学した学生などに協力を仰ぎ、世界各地の日本人留学生・現地学生等とオンラインディスカッションを行う取組である。



同校生徒が出展するクラウドファンディングサイト【出所】(URL: <https://camp-fire.jp/projects/view/389968>)



「留学デザイン Program」でのオンラインディスカッションの様子【出所】福岡工業大学社会環境学部HP (URL: <http://www.ses.fit.ac.jp/topics/archives/4022>)

日本からは同校のほか、駒場東邦高等学校、灘高等学校、福岡工業高等学校等から、各校約 20 名の生徒が参加している。海外からはアルゼンチン・イタリア・マレーシアと、幅広い地域へ留学中の日本人学生や海外出身の学生、社会人が参加する。

《台湾国立中科実験高級中学とのオンライン交流について》

国立中科実験高級中学とのオンライン交流は、熊本高校・国立中科実験高級中学から希望者を募り、Google classroom にて全員で交流した後、ブレイクアウトルームにて 1 対 1 のコミュニケーションを行っている。

実際に訪問していた場合は、両校 5~6 人によるグループでの交流を予定していたため、オンライン交流にしたことでコミュニケーションの密度は高まっている。また、実際の訪問では一度きりで、楽しむだけで終わってしまうが、オンラインであればフォローアップの交流を再度行うこともできるため、同校では、コロナ禍の収束後も、オンラインと実際の訪問を組み合わせた交流方法を検討している。

■大学教育の先取り履修等、大学との連携

熊本高校の卒業生である武蔵野美術大学教授 若杉浩一氏との縁もあり、武蔵野美術大学と連携協定を結んでいる。

熊本高校の生徒は、教育課程外での位置付けで、武蔵野美術大学大学院 クリエイティブ学科の授業のオンライン受講が可能である。授業の内容ごとに生徒へ参加募集を掛けており、一回あたり 5 名~10 名の生徒が参加している。

また、武蔵野美術大学が熊本県天草市と連携協力に関する協定を結んでいることもあり、天草市での活動に熊本高校の生徒が参加することもある。



《展示イベントの開催》

武蔵野美術大学の授業参加を通じ、熊本高校では展示イベントを開催している。武蔵野美術大学より教示を受けた「フォト・オブザベーション (デザインを行う上で、日常で何気なく見逃している景色から、美しさ・違和感・人の行動を観察するリサーチ作業)」を、同校の 1 年生 250 名が実施し、写真と自身の考察を展示する「おもいこみデザイン展」を開催した。

同展では、展示だけでなく来場者との交流も図るため、有志の生徒によって、来場者が感想を投稿する VR アプリの開発も行っている。



「おもいこみデザイン展」の様子
[出所] (URL:
<https://www.uchida.co.jp/company/news/topics/220513.html>)

《生徒の声》

~探究型学習について~

- ・学校全体で取り組むような活動に参加する前から、自分なりに趣味の範囲として、いろいろな探究活動のようなものに参加したことはあった。学校全体でやることで、個人の範囲でしかできなかったことが、学校の助けも借りて、どんどん広げていけることにたいへん満足感を得ている。(3 年生男子 A)
- ・WWL の活動を始める前にも、自分の趣味の範囲内でプログラムを作っていたが、それはどれも実用的ではなく、自分の趣味で作っているだけだった。こういった探究活動を通すことで、自分だけの世界に有ったものが、他の人のために役立てられる、そんな風に思いもよらない方法で自分の力が活用できるとわかって嬉しい。(3 年生男子 B)

~大学との連携について~

- ・よく協力してくださる武蔵野美術大学の若杉先生が、熊本高校で講演して下さった際に、「デザインというのは美術作品を作るのではなく、人の心に寄り添ってプロダクトを作ることだ」とお聞きした。自分もこんな風に、デザインするものの見方で、製品とかサービスを開発していけばいいなと思った。(3 年生男子 B)

■大学教育の先取り履修等、大学との連携

宮崎大学農学部 の講義「植物の栽培と管理」や基礎教育部の講義「データサイエンス入門Ⅰ・Ⅱ（令和4年度より開始）」を、それぞれオンデマンドにて夏・冬休みに集中的に受講できる。宮崎大宮高校だけでなく同校のALネットワークに所属する連携校にも広く参加を呼びかけている。修了後は、宮崎大宮高校では高校の単位となり、連携校では高校の単位にはならないが、宮崎県教育委員会から履修を終えた生徒たちに履修証明書を発行している。大学での単位認定を目指して宮崎大学と協議をしている。

令和4年度は、講義の受講修了後にオンラインで大学教員と座談会を開いた。これまで学んできた中で疑問に思ったことや、将来的に自分のやりたいことと学んできたことを関連付けて将来の農業について大学教員と建設的な議論をすることができた。

■高校生国際会議

高校生国際会議では、オンラインによる英語でのプレゼンテーションを文科情報科の3年生全員が行っている。今年度は海外連携校と共同チームで発表した。

令和4年度から高校生国際会議にてグローバルディスカッションを開始した。ここでは「食」に関するテーマを設け、宮崎大宮高校、県内連携校（3校）、海外連携校（3校）の希望者がそれぞれのチームでディスカッションに参加した。



■グローバル国際フォーラム in HINARA 2022■

[出所]同校HP「2022 文科情報科通信 VOL.1」(URL:<https://miyazakiohmiya-h.ed.jp/news/2022%e3%80%80%e6%96%87%e7%a7%91%e6%83%85%e5%a0%b1%e7%a7%91%e9%80%9a%e4%bf%a1-vol-%ef%bc%91>)

≪生徒の声≫

～探究型学習について～

- ・今までは自分の周りの狭い範囲、自分の生活圏内のことしか気にならなかったが、WWLで計画を立てて研究することによって、自分の周り、宮崎県内だけでなく日本や世界のこと等、幅広いニュースや出来事に関心が深まった。(3年生男子)
- ・海外の連携校との英語でのコミュニケーションが、私にとって一番大きな変化だった。英語を通してこまめにコミュニケーションをとることで、それまでは「海外の人だからよくわからない」と気持ち的に疎遠になっていた部分があったが、もっと世界に目を向けてみることも大切だなという考え方に変化した。この高校で探究の授業がないと絶対に経験できなかったことだと思うので、参加できて本当によかったと感じている。(3年生女子)
- ・例えば日本は魚がたくさん取れる国だと聞いて育ってきたが、実際は枯渇状態にあるなど、聞いていたことと実際は違うという気づきがあり、自分の目で確かめてみることはとても面白く発見があり、問題についてより考えるようになった。(2年生男子)
- ・1年生の時はあまり研究自体が進まず、大きな原因がメンバーの中にリーダー的存在が誰もいないことであると気づいた。そこで私とメンバーの一人が積極的に動き始めてから少しずつ状況が変わってきた。私は今まで人前に立つことがあまりなかったが、このグローバル協創という教科を通して、人前で率先して何かするという事について、今も継続して学びを得てきている。(2年生女子)

6-2 カリキュラム開発・実施のポイント

WWL 事業における実施されているカリキュラムは、カリキュラム開発拠点校によって様々な方法がとられていた。各プログラムについて、どのような実施方法があるのかを整理する。

6-2-1 探究型学習

いずれのカリキュラム開発拠点校においても WWL 事業のカリキュラムにおいて中心的な役割を果たしている探究型学習の実施方法として、以下のようなパターンがある。

(1) 全体の流れ

- ・複数年かけて1つのテーマについて探究学習を行う。
- ・1年次に練習的なプロジェクトを行う、2年次以降に本格的な探究を行う

探究型学習は、大きく「複数年（2年、あるいは3年）かけて、1つの探究テーマを設定し探究学習を行う」パターンと、「1年次に練習的なプロジェクトを行った後、2年次以降に本格的な探究を行う」パターンがみられる。

前者については、探究活動のテーマ設定に時間をかけるケースが多く、1年次の活動はテーマ設定に重きをおくことが多い。例えば「1年生ではSDGsを学ぶことから始め、学年の最後に2年次での探究学習のテーマ設定を行っている」学校や、「3年間の授業での学習を通じ学校が設置されている市への政策提言を行うことを最終目標としている」学校もみられた。また、「3年間かけて探究学習に取り組むにあたり、各学年で途中段階の発表を行う機会を挟み、3年生で全生徒参加の公開研究会を行う」ケースもあった。

後者の方法では、1年目に比較的簡単な探究型プロジェクトを行い、探究型学習の流れを生徒に経験させる。その上で、2年次から生徒自身がテーマを設定し、本格的な探究活動を行う。例えば「個人研究として、1年で地域課題研究、2年でグローバル課題研究、3年でグローバルキャリアパス（自己の振り返り）を行い「地域」→「グローバル」→「自己」という流れを意識している」学校や、「1年次に社会的な課題について現場調査を経験した後、2・3年次の課題研究活動に向かうカリキュラムデザインを組んでいる」学校もみられた。

(2)活動単位

- ・グループ活動
- ・個人活動

探究型学習の活動単位は、グループで行うケース、個人で行うケースがあった。また、生徒の希望で、グループ、個人のどちらかを選べるようにしている学校もある。

例えば「1、2年生がグループ活動、3年生で、1～2年生の活動について個人で成果をまとめる」ケースもみられた。またグループ構成については、「1年生はクラス内のグループで探究活動を行い、2年生ではクラスや文・理系、学科の枠を超え、探究テーマ別に生徒たちで自由にチームを作り本格的な探究学習に取り組んでいる」学校もあった。

(3)指導者

- ・特定の教員が指導
- ・教員全員が指導
- ・大学教員に指導を依頼

探究型学習は、特定の教員が行う学校もあるが、教科の枠を超えて学校全ての教員が行う（担当する学生を決め、大学のゼミ・研究室のように指導を行う）学校も多い。例えば「校長・副校長を含めた全教員が関わり、担当生徒の研究テーマの設定についての助言や進行状況の管理をする等、学校全体で探究学習を進めている」学校もみられた。

大学と連携し、大学教員の専門性を生かした指導をしてもらう学校もある。選んだテーマにあった大学教授に課題研究の指導を受けている学校もある。また、「事業協働機関を中心とした外部講師による講義及びワークショップや、フィールドワーク」等の取組も行われていた。

(4)海外研修等との連動

WWL 事業の申請要件として、「海外の連携校等への短期・長期留学や海外研修等を、カリキュラムの中に体系的に位置づけて対象となる生徒が必ず経験するようにすること」が定められているが、この海外研修を探究型学習と連動させて行う学校もある。

探究のテーマに関するフィールドワーク・体験を海外で行うケースや、探究の成果を海外の連携等で行うケースもある。例えば「選択科目として1年生を対象とした「海外研修」を設置し現地の研修だけでなく事前事後研修も含めて週1単位の授業を実施している」学校もあった。

6-2-2 文理外国語融合科目

- ・英語の授業に、探究学習や他の授業の要素を加えた科目
- ・複数の既存科目の要素を融合させた科目
- ・既存科目の中に探究学習でのテーマや手法を扱った科目
- ・探究型学習に従来の科目の要素を加える

WWL 事業の申請要件には、「カリキュラムの研究開発・実践において、外国語や文理両方の複数の教科を融合し、テーマと関連した「グローバル探究」等の新たな教科・科目を設定すること」が定められている。カリキュラム開発拠点校では、以下のような融合科目が設定されていた。

(1)英語の授業に、探究学習や他の授業の要素を加えた科目

英語の授業を活用し、自分の考えについて英語でアウトプットすることで、今後の探究学習で役立つライティングやリーディング、プレゼンテーションの技術等を学んでいく。例えば「ある課題に対して、どう感じているかを英語で表現する活動」「外国人講師の指導の下、即興型英語ディベートを行う」「自分が関心のある SDGs のトピックについて英語で話したり、ディスカッションしたりする」などの取組がみられた。

(2)複数の既存科目の要素を融合させた科目

理数系科目の融合では、データ解析、統計処理科目といった課題探究に役立つ内容を中心に実施する等、探究学習を行っていく基礎として、複数の教科の教員が担当し、課題解決に取り組むべく実施されている。

例えば「理科科目である「科学と人間生活」を、人の身近にある様々な科学の現象や人間生活に関係ある科学の実証を生徒たち自身が考え探究することで分離融合の視点から実施する」「情報、理科、数学科の教員によるチームティーチングによりデータ解析、統計処理を行う（物理の実験データを用いた統計処理など）」などの事例がみられた。

(3)既存科目の中に探究学習でのテーマや手法を扱った科目

既存の科目の中で探究との関連性を持たせた授業を行う。例えば、「国語で『羅生門』を読み、登場人物の状況を分析、救済策を考察」「数学で、グループ学習を行い、協働して課

題を解くプロセスを経験」「現代社会で SDGs と国連の役割や機構などを学ぶ」「地理で気候変動、家庭科で子供の児童福祉・人権をテーマとした授業を行い、SDGs との関連を学ぶ」などの取組がみられた。

(4) 探究型学習に従来の科目の要素を加える

課題探究で取り扱う問題には複合要因があることを理解し、これまで従来の科目で学んできたことを活かせるよう取り組んでいる学校も多い。例えば、探究学習のある課題について、社会科学・自然科学の両方の視点で分析する訓練をする学校があった。

6-2-3 高大連携・先取り履修

- ・大学の授業の履修（通常授業、集中講義）
- ・大学教授等による単発の講演やイベントの実施

WWL 事業の申請要件には、「大学教育の先取り履修を可能する取組を事業終了までに行うこと」が定められている。また、「より高度な内容（例えば、微分方程式、線形代数、データマイニングや国際法等）を学びたい高校生が学習できる環境整備をすること」もさだめられている。

カリキュラム開発拠点校は、管理法人と連携しながら「大学の授業の履修」や「大学教授等による単発の講演やイベント」を行っていた。

(1)大学の授業の履修

管理法人の大学、あるいは地域の大学と連携し、大学の通常授業、あるいは長期休暇におこなわれる集中講義を、高校生が受講できるようにしていた。例えば「大学のオンデマンド授業を利用し生徒の探究学習のテーマに近い動画を視聴し、その動画で講義をする大学教員に、オンラインにて探究学習のアドバイスを受けられる」取組など、高校生が受講するための工夫をおこなっているケースもあった。

それらの取組の一部では、単位化（高校における単位化、大学における単位化（その大学に入学した際に単位が付与））も進められている。高校の単位とするか大学の単位とするかを生徒が選択できるケースもある。

管理法人が教育委員会の場合は、教育委員会が主催し大学の教員による講義を行い、拠点校をはじめ地元の学校の希望者が受講できるようにしている（履修を終えた生徒たちに教育委員会から履修証明書を発行する）地域もみられた。例えば「オンラインを中心に月に一回、WWL 事業に関わっている複数の大学教員（海外の大学を含む）によるリレー講義を開催し、探究に関わるリサーチスキルを学ぶ」という取組も行われていた。

また「講義の受講修了後にはオンラインで大学教員との座談会を開催し、教員と生徒で議論を交わした」ケースもあった。

(2)大学教授等による単発の講演やイベントの実施

AL ネットワークを活用し各大学と連携し、大学教員を招いた講演や特別授業を開催する

ほか、各種イベントを実施している学校もある。例えば「複数の大学と高大接続の覚書を交わし連携を取っており、論文指導や各大学による出前講座」などが行われている学校もある。また、「大学教員指導の下サマースクールを開講し、全編英語で、観光と経済、ディスティネーション・マネジメントを学ぶ」ケース、「大学側から附属高校・連携校等に向けた取組としてコンテストを開催している」ケース等もみられた。

6-2-4 海外研修・交流

(1)海外研修等

- ・海外現地の見学
- ・現地の高校・大学との交流
- ・現地大学や現地の高校生に向けての発表

WWL 事業の申請要件には、「海外の連携校等への短期・長期留学や海外研修等を、カリキュラムの中に体系的に位置づけて対象となる生徒が必ず経験するようにすること」と定められている。カリキュラム開発拠点校では、海外短期・長期留学や海外研修を、前述のように「探究学習の一環として実施」するケースと、探究活動とは別に「単発の海外留学・海外研修を実施」するケースがみられた。なお、前者は生徒全員が参加、後者は希望者が参加、とする場合が多い。

海外研修等では、例えば、以下のような活動が行われている。

①海外現地の見学

実際に海外現地に赴きフィールドワーク・見学等を行うことで、生徒たちは自らの探究テーマへの学びをより深めている。現地の農園や日本企業の海外事業所を訪問するほか、「観光地化されていない現地の街においてフィールドワークを行い貧困問題・健康問題等の社会問題について実際に触れる機会を設けた」といった取組が行われていた。

②現地の高校・大学との交流

多くの学校では海外研修において、現地の高校・大学との交流を行っていた。大学の見学や講義を受講するケースをはじめ、「現地の高校生との交流、大学や学術機関の訪問、現地の大学生と訪問期間中ともに行動しフィールドワークを行った」「現地の高校生と英語でディスカッションした」などの取組もみられた。

③現地大学や現地の高校生に向けての発表

現地の高校・大学との交流に加え、探究学習の内容について発表する機会を設けているケースもある。例えば「現地大学の教授に対してプレゼンテーションを行う機会を設けており、教授からアドバイスや指導を受けることができる」学校や、「探究テーマに関する調査、デ

ィスカッション、探究テーマに関する調査、ディスカッション、プレゼンテーションを現地の学校と一緒にを行う」事例もみられた。

(2)代替活動

- ・国内フィールドワーク
- ・海外リモート交流
- ・国内の留学生との交流

令和 2 年からの新型コロナウイルス感染症流行により、WWL 事業で予定されていた海外研修・交流の多くが中止となっている。

中止となった海外研修等の代替として、カリキュラム開発拠点校では、以下のような代替活動が行われていた。

①国内フィールドワーク

海外研修の代わりに、テーマに応じた国内フィールドワークを実施するにより学びを深めている。設定した探究テーマに基づき調査し、企業等を訪問するほか、「社会的な課題について、現場を訪問し聞き取り調査を実施する」「連携校を訪問し互いの課題研究の報告・意見交換会を行う」などの取組も行われていた。

②海外リモート交流

多くの学校で代替活動として海外とのリモート交流を活用していた。現地訪問と比べ複数回実施しやすい、参加人数も増やしやすい等、リモートならではのメリットもあり、活用の幅を広げている。例えば第二外国語で選択している国と交流し、現地の高校生と互いの歴史や文化を紹介する取組や、海外連携校に事前に課題研究のプレゼンテーションを視聴してもらい、そのトピックやプレゼンテーションの内容について意見交換を行うという取組もみられた。

③国内の留学生との交流

留学生との交流の機会を設け英語でやり取りすることで、コロナ禍であってもできるだけ生徒に海外交流の機会を与えている。また研修以外でも、「様々な出身国の留学生を雇用

し、校内で週に数回、授業以外の時間で日常的に留学生と交流、意見交換の場を設けている」といった取組も行われていた。

6-2-5 高校生国際会議

- ・複数の高校によるディスカッション
- ・探究型学習の発表
- ・基調講演
- ・宣言
- ・生徒自身による企画・運営

WWL 事業の申請要件には、「国内外の大学、企業、国際機関等と協働し、国内外の高等学校等との連携によるテーマと関連した高校生国際会議等を事業終了までに行うこと」と定められている。

カリキュラム開発拠点校では、高校生国際会議において、以下のような取組を行っていた。なお新型コロナウイルス感染症流行の影響で、リモート開催への切り替えや、対面とリモートのハイブリッド等で開催している事例も多くみられた。

(1)複数の高校によるディスカッション

高校生国際会議では、拠点校と連携校とで、テーマに沿ってディスカッションや意見交換会を行うケースが多い。また、海外校が参加し英語でディスカッションを行う場合、スムーズな進行のために留学生に協力してもらっており、例えば「英語のディスカッションには1グループにつき1名、様々な出身国の留学生（大学生・大学院生）がファシリテーターとして参加する」といった事例もみられた。

(2)探究型学習の発表

高校生国際会議は日頃の探究型学習の成果発表の場でもある。会議の場でプレゼンテーションやポスターセッションなどを行い、参加している他校や有識者からの意見を得てプロジェクトをブラッシュアップすることができる。例えば「分科会に分かれ、テーマごとのワークショップや日頃の課題研究活動について成果発表する」「海外連携校と共同チームで発表しており、その後成果を論文として取りまとめる」といった取組も行われていた。

(3)基調講演

テーマについてより理解を深めるため、連携機関（大学、団体等）の関係者による基調講

演を実施している。「高校生国際会議の事前セミナーとして有識者による講演、座談会を実施しており、高校生国際会議本番では拠点校と連携校の代表グループの課題研究成果発表後に基調講演を実施し、発表や基調講演をもとにグループ協議を行う」事例もみられた。

(4)宣言

高校生国際会議で実施した発表、基調講演、協議等の結果を総括し宣言としてまとめている。例えば「分科会に分かれて問題提起とそれに対する討論を行い、最終的に分科会ごとの提言をまとめ、最後の全体会でアクションプランを提言し、それを総括する宣言文を発表する」ケースもみられた。

(5)生徒自身による企画・運営

高校生国際会議の開催にあたっては、実行委員会を組織し生徒が企画・運営から携わっている学校も多い。企画力や調整力、英語力等も必要となり、やり遂げた結果生徒たちの達成感、自信へとつながっていく。例えば「スタッフを集めるところから企画まで生徒自身に任せている」「海外協働先についても生徒たち自身で開拓していく」「拠点校を中心に複数校の生徒からなる実行委員会を立ち上げ、生徒自身でやりたいことを企画し、準備・運営を複数校の生徒で進めていく」といった取組もみられた。

第7章 まとめ

これまでの分析結果から得られた知見は、下記のとおり。

7-1 WWLコンソーシアム構築支援事業の各取組の実施状況

カリキュラム開発拠点校においては、探究型学習を中心にカリキュラムを設定するケースが多い。8～9割の学校が「グループ活動を含んだ内容」「ICT等を活用した内容」「文理両方の複数の教科を融合した内容」「外国語の学習や外国語での活動を含んだ内容」など高度な探究型学習が行われていた。また、半数以上の学校が「生徒自らによる探究課題設定」に特に力を入れて実施している。これに対し多くの生徒が、「課題探究の授業・活動」「グループワークへの参加」「プレゼンテーションでの発表」に取り組み、熱心に実施している。

外国語や文理両方の複数教科を融合した教科・科目は、カリキュラム開発拠点校30校で56科目が設定されている。生徒の参加率も高く、熱心度・満足度も高い。

コロナ禍の影響で中止が続いていた短期・長期留学及び海外研修等については、令和4年度は30校中16校が再開、参加生徒数は合計683名となっている。

高大連携による大学教育の先取り履修は、23拠点校・ネットワークが実施している。連携大学数35校、授業数87であった。87授業のうち、「大学・高校両方の単位」になる授業が13.8%、「大学の単位」になる授業が41.4%、「高校の単位」になる授業が19.5%であり、計434名が単位を取得している。

高校生国際会議は、令和4年度は、30ネットワーク合計で17回開催し、延べ286校、拠点校生徒1,801名、拠点校以外の国内生徒1,135名、海外生徒539名が参加した。

これらの活動を通じて、6割近くの生徒がWWL事業に熱心に取組み、満足している。

7-2 WWLコンソーシアム構築支援事業を通じた生徒の成長度

WWL事業の実施により8割以上の学校が「生徒の社会的課題の知識や関心が高まった」「他校との交流が促進した」「生徒の課題探究に関する力が向上した」「生徒の国際的な知識や海外への関心が高まった」と認識している。

生徒アンケートからも、WWL事業を通じた生徒の成長が確認できた。WWL事業の成果目標である「グローバルなマインドセット（他文化の人々の尊重、グローバル思考）」「グ

ローバル・コンピテンシー（異文化対応コンピテンシー、外国語リテラシー）」「PPDAC」の育成について2年間の成長度をみると、いずれの項目も1年生と比較して2年生後半の点数が高く、2年間での成長がみられる。特に「外国語リテラシー」については4回の調査で着実に上昇している。また、「PPDAC スキル」については、1年から2年生にかけて点数が上昇している。

この他、4割以上の生徒が「海外や国際的な課題に対して関心を持った」「社会問題や社会的課題に対して関心を持った」「さまざまな視点からものを考えられるようになった」「自分の弱点や成長させたい事柄がわかった」と回答している。

さらに、WWL 事業を通じて身に付けた力は、大学生活等、その後のキャリア形成にも影響を及ぼしていた。WWL 事業で力を身に付けた学生ほど、その力を活かした進路選択をしていた。また将来のキャリアビジョンにも、WWL 事業で身に付けた力の影響がみられた。

7-3 生徒の成長を促す要因

WWL 事業の熱心度により、生徒の成長に大きな差があることがわかった。熱心度が高いほど WWL 事業の成果目標の能力項目の点数が高く、また2年間に大きく成長していた。特に、熱心に活動した生徒は、2年生の後半での伸びが大きい。

また、取り組みにより成長の差も見られた。「外国語リテラシー」は、「外国語に関する取組」を熱心に取り組むと、「PPDAC スキル」は、「アクティブラーニングに関する取組」を熱心に取り組んでいると、それぞれ伸びている。

一方で、「グローバル思考」は、「外国語に関する取組」「アクティブラーニングに関する取組」の両方を熱心に取り組むことで大きな成長につながっている。また、「グローバル・リーダーとして活躍・貢献したい」というキャリアビジョンをもつ生徒（卒業生）も、「外国語リテラシー」「PPDAC スキル」の両方を身に付けていた。WWL 事業の目的である「将来、新たな社会を牽引し、世界で活躍できるビジョンや資質・能力を有したイノベーターなグローバル人材」の育成には、外国語に関する取組、アクティブラーニングに関する取組の両輪に力をいれることが重要だと明らかになった。

また、「海外訪問」の効果も示された。海外訪問を行った生徒は、特に「グローバル思考」「外国語リテラシー」が大きく伸びていた。

なお、WWL 事業で育成を目指している「イノベーターなグローバル人材」に求められる能力は、語学リテラシーなどで共通項はあるものの、いわゆる教科教育で学び育む認知能

力とは、別の軸で育成・評価される能力だということが明らかになった。これまでの学校教育に加えて WWL 事業を行うことが、本事業の目的であるイノベーティブなグローバル人材の育成につながるといえる。

7-4 課題等

WWL 事業に深く熱心に取り組むことが生徒の成長につながるということが明らかになったが、どのようにすれば生徒が熱心に WWL 事業に取り組むようになるかについて引き続き分析が必要といえる。今年度の調査からは、WWL 事業への熱心度を高める方法として、活動テーマ（社会課題）への関心を高めること、教師への信頼度を高めること、がきっかけとなる可能性があることが示唆された。引き続き、熱心度が高まるきっかけについて分析を行う。

また、2割の生徒が「英語に苦手意識がある」と回答しており、WWL 事業に取り組む際の障壁となっている可能性がある。数としては少数であるが、「英語に苦手意識」「海外の人と触れ合うのに苦手意識」「英語の成績が低い」生徒において、2年生の後半において、自信を失ってしまうケースもあった。英語への障壁意識を軽減するための工夫点についてもみていく必要がある。

この他、英語、芸術、国語社会などの科目と比べて、理系科目と WWL 事業による成長度の関係の小ささも示唆された。探究型学習等においても社会系の課題設定が多い傾向がみられるが、理数系と関係を持たせることのできるテーマ設定のあり方も検討事項といえる。

また、WWL 事業を行うには、教員には「課題探究に関する指導力」に加え、学校外のネットワーク構築力が重要な要素となっていることが明らかになった。高校において、どのようにして学校外の機関とのネットワークを構築していくかについてもさらなる分析が必要といえる。加えて、担当教員の忙しさも課題といえる。働き方改革を意識しつつ WWL 事業を行う方法の検討が必要といえる。